

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（3）

東九州自動車道建設（鹿屋申良JCT～曾於弥五郎IC間）に伴う
埋蔵文化財発掘調査報告書

てん じん だん い せき
天神段遺跡 1

（曾於郡大崎町）

弥生時代～近世編

2015年2月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

（公財）埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書（3）

天神段遺跡 1

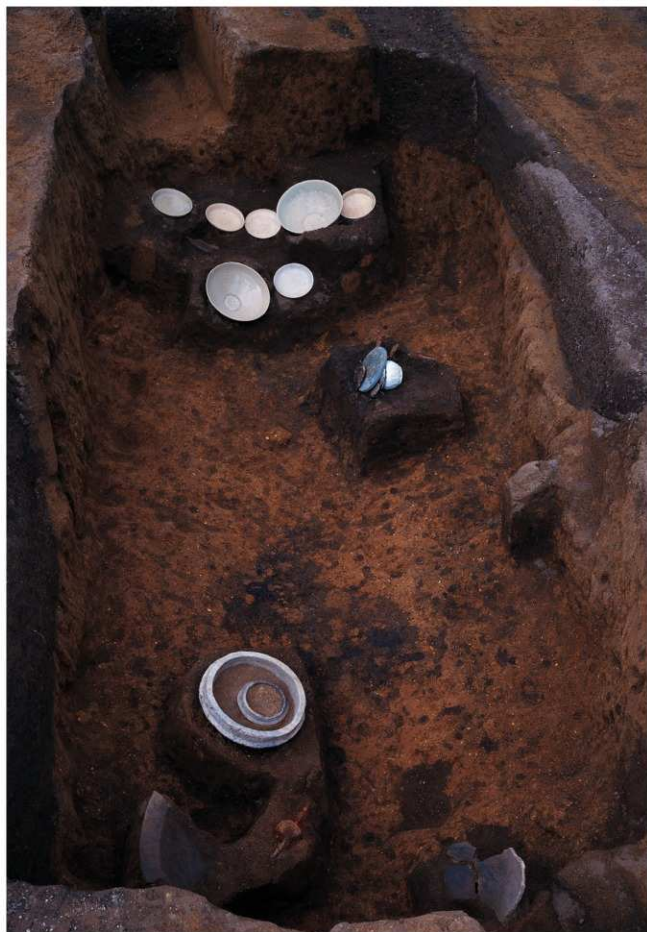
（弥生時代～近世編）

二〇一五年二月

鹿児島県教育委員会
公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター



遺跡全景



土坑墓 1号内遺物出土状況



土坑墓内出土金遺物

序 文

この報告書は、東九州自動車道（鹿屋申良JCT～曾於弥五郎IC間）の建設に伴って、平成19年度から平成25年度にかけて実施した曾於郡大崎町野方に所在する天神段遺跡の発掘調査の記録（弥生時代～近世編）です。

7年に及ぶ調査で、旧石器時代・縄文時代・弥生時代・古代・中世・近世といった複数の時代の遺構・遺物が数多く発見されており、当時の人々の生活及び地域の歴史を知る上で貴重な資料となるものと考えます。

本報告書では、弥生時代～近世までの調査成果を報告していますが、特筆すべきは、中世初頭に該当する土坑墓が8基確認されたことで、土坑墓の中には、完形の鏡、青磁の碗や青白磁の小壺、鉄製のやじり等豊富な副葬品が発見されたものもあります。さらに、掘立柱建物跡や土坑等も多く確認されており、当時の集落の様相が窺える貴重な資料であると考えます。

本報告書が、県民の皆様をはじめとする多くの方々に活用され、埋蔵文化財に対する正しい理解と認識を深めていただくとともに文化財保護の普及・啓発や研究などの一助となれば幸いです。

最後になりましたが、発掘から報告書刊行までの一連の調査にあたり、御協力いただきました国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所、鹿児島県立埋蔵文化財センター、大崎町教育委員会及び志布志市教育委員会等の各関係機関並びに調査において御指導いただいた先生方や発掘作業、整理事業に従事された方々に対し、厚くお礼申し上げます。

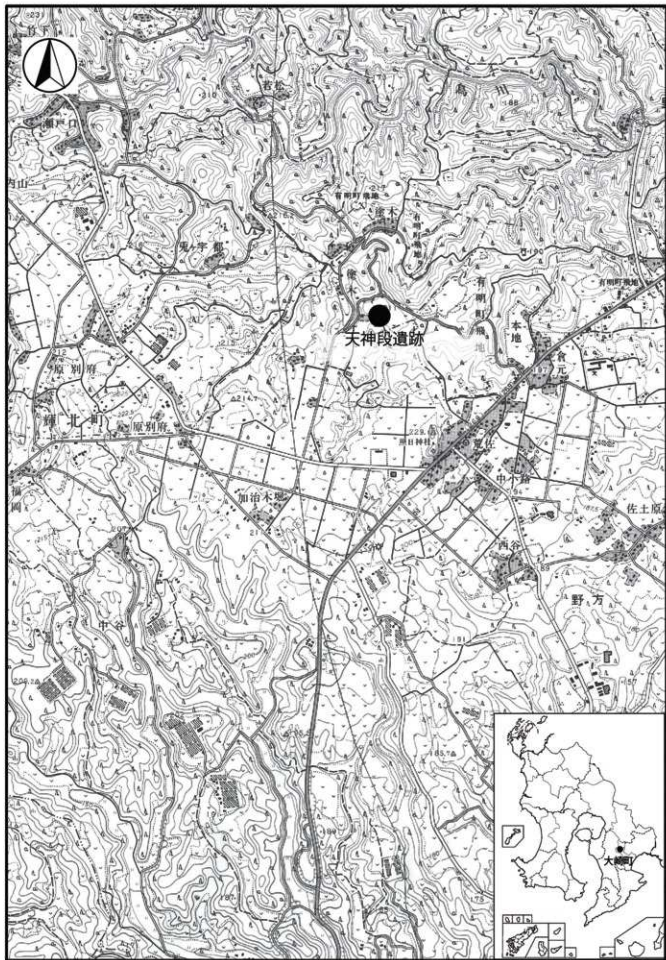
平成27年2月

公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター
センター長 堂 込 秀 人

報告書抄録

ふりがな	てんじんだんいせきいち やよいじだいからきんせいへん							
書名	天神段遺跡1 弥生時代～近世編							
副書名	東九州自動車道建設(鹿屋申良JCT～曾於弥五部IC間)に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書							
シリーズ名	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター発掘調査報告書							
シリーズ番号	第3集							
編集者名	平木場秀男 田畑哲治 松下建生 井手上馨弘 花園友美 岩元康成 花田寛典 江神めぐみ 深川祐子							
編集機関	公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター							
所在地	〒899-4318 鹿児島県霧島市国分上野原縄文の森2番1号 TEL 0995-70-0574 FAX 0995-70-0576							
発行年月	西暦2015年2月							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 (㎡)	調査起因
てんじんだんいせきいち 天神段遺跡	鹿児島県 曾於郡 大崎町	46468	25-62	31° 30' 18"	130° 55' 48"	確認調査 2007.05.16～ 2007.07.13 本調査 ①2007.07.16～ 2008.03.19 ②2008.05.22～ 2009.03.19 ③2009.05.08～ 2010.03.19 ④2010.05.10～ 2011.03.11 ⑤2011.05.09～ 2012.03.09 ⑥2012.05.08～ 2013.03.08 ⑦2013.04.22～ 2013.10.25	19,042	東九州自動車道建設(鹿屋申良JCT～曾於弥五部IC間)に伴う発掘調査
所収遺跡名	種別	時代	主な遺構		主な遺物		特記事項	
天神段遺跡	散布地	弥生時代 (Ⅲ・Ⅳ層)	竪穴住居跡2軒		刻目突帯文土器、入来式土器		Ⅲ・Ⅳ層出土の石蔵、砥石、磨石、敲石、石皿、軽石製品等の石器は、一部を除き、詳細な時期判別が困難であったためまとめて掲載している。	
	散布地	古代 (Ⅲ層)	掘立柱建物跡7棟、竪穴状遺構2基、土坑90基、ピット660基、炉跡1か所、焼土跡1か所、土器集中2か所		土師器(甕、坏、埴)、墨書土器、刻書土器、須恵器、黒色土器、焼塩土器、紡錘車、鍛造剥片			
	集落跡	中世 (Ⅲ層)	掘立柱建物跡49棟、土坑墓8基、土坑113基、ピット765基、溝・古道66条、鍛冶関連遺構1基		青磁、白磁、青白磁、土師器、東播系須恵器、黒色土器、陶器、瓦器、滑石製石鍋、滑石製品、鏡、鉄製品、鉄片、古銭			
	散布地	近世 (Ⅱ層)	土坑7基、ピット1基、畝状遺構1か所		陶器、磁器、煙管(キセル)			
遺跡の概要	本遺跡は、古墳時代を除く旧石器時代～近世の複合遺跡で、各時代とも貴重な遺構や遺物が確認されている。 今回報告する弥生時代～近世においては、特に、中世の遺構や遺物が注目できる。中でも、中世初頭の湖州鏡や松吹鶴鏡などの鏡、古銭、鉄鏃や和鉄などの鉄製品、青磁、白磁、滑石製石鍋や小壺等質・量とも豊富な副葬品をもつ土坑墓や掘立柱建物跡は、ある程度高位の一族を中心とした集落の様相が窺え、当時の地域及びその周辺の歴史を紐解く上で貴重な注目される資料である。							

※調査面積は、弥生時代～近世該当層の調査面積である。



天神段遺跡位置図 (S=1/25,000)

例 言

- 1 本編は、東九州自動車道建設（鹿屋半島JCT～曾於弥五郎IC間）に伴う天神段遺跡発掘調査報告書弥生時代～近世編である。
- 2 天神段遺跡は、鹿児島県曾於郡大崎町野方と一部、志布志市有明町に所在する。
- 3 発掘調査は、平成19年度から平成24年度まで国土交通省九州地方備局大隅河川国道事務所から鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という。）が受託し、鹿児島県立埋蔵文化財センター（以下「埋文センター」という。）が実施した。平成25年度から県教委が公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター（以下「埋文調査センター」という。）へ調査委託し、埋文調査センターが実施した。
- 4 発掘調査事業は、平成19年度から平成24年度まで埋文センターが、平成25年度は埋文調査センターが実施し、発掘調査事業のすべてを終了した。
- 5 整理・報告書作成事業は、平成22年度から平成24年度まで埋文センターで、平成25年度・平成26年度は埋文調査センターで実施した。
- 6 掲載遺物番号は通し番号であり、本文・挿図・表・図版の遺物番号は一致する。掲載遺構番号は、時代及び遺構の種類ごとに番号を付し、本文・挿図・表・図版の遺構番号は一致する。
- 7 遺物注記等で用いた遺跡記号は「T」である。
- 8 挿図の縮尺は、挿図ごとに示した。
- 9 本書で用いたレベル数値は、海抜絶対高である。
- 10 本書で使用した方位はすべて磁北である。
- 11 発掘調査における実測図作成及び写真撮影は、主として調査担当者が行った。また、空中写真の撮影は、(有)スカイサーベイ九州、ふじた航空写真、九州航空株式会社へ委託した。
- 12 遺構実測図の作成及びトレースは、平成23年度は田畑哲治・永濱功治が、平成24年度は平木場秀男・花園友美が、平成25年度は花田寛典が整理作業員とともに行った。また、本編に係る遺物出土状況図の作成は松下建生が整理作業員とともに行った。
- 13 本編に係る出土遺物の実測・トレースは、土器を岡明恵・松下建生・岩元康成・江神めぐみ・深川祐子が

- 担当し、石器を黒川忠広・花園友美が担当し、鉄器等鉄製品を平木場秀男・新屋敷久美子が担当し、整理作業員とともに行った。また、遺物実測（石器）の一部を（株）九州文化財研究所、株式会社バスコに委託し、富田逸郎・黒川忠広・橋口卓也・花園友美が監修した。
- 14 出土遺物の写真撮影は、吉岡康弘・辻明啓が行った。
 - 15 本報告書に係る自然科学分析は、種実同定・放射性炭素年代測定をパレオ・ラボAMS年代測定グループ、（株）加速器分析研究所、バリノサーヴェイ（株）、植物珪酸体分析を（株）古環境研究所に委託した。
 - 16 本編の執筆は次のように分担し、編集は松下建生が行った。
第Ⅰ章～第Ⅲ章 平木場秀男、松下建生
第Ⅳ章第1節（弥生時代）
遺構：松下建生
遺物：花園友美、江神めぐみ
＊ 第2節（古代）
遺構：松下建生、井手上馨弘、深川祐子
遺物：花園友美、深川祐子
＊ 第3節（中世）
遺構：平木場秀男、田畑哲治、岩元康成、江神めぐみ
遺物：岩元康成、中村和美
＊ 第4節（近世）
遺構・遺物とも田畑哲治
第Ⅴ章 深川祐子
第Ⅵ章
弥生時代：江神めぐみ
古 代：深川祐子
中 世：岩元康成
近 世：田畑哲治
付論：橋口高武
写真図版：平木場秀男、田畑哲治、花園友美、岩元康成、江神めぐみ、深川祐子
 - 17 本報告書に係る出土遺物及び実測図・写真等の記録は鹿児島県立埋蔵文化財センターで保管し、展示・活用を図ることにしている。

本文目次

巻頭図版		第1節 弥生時代の調査成果	51
序文		1 調査の概要	51
報告書抄録		2 遺構	51
遺跡位置図		3 遺物	55
例言		第2節 古代の調査成果	75
目次		1 調査の概要	75
第I章 発掘調査の経過	1	2 遺構	75
第1節 調査に至るまでの経緯	1	3 遺物	109
第2節 事前調査	2	第3節 中世の調査成果	129
1 分布調査	2	1 調査の概要	129
2 詳細分布調査・試掘調査	2	2 遺構	129
3 確認調査	2	3 遺物	223
第3節 本調査	4	第4節 近世の調査成果	241
第4節 整理・報告書作成作業	15	1 調査の概要	241
第II章 遺跡の位置と環境	17	2 遺構	241
第1節 地理的環境	17	3 遺物	241
第2節 歴史的環境	17	第V章 自然化学分析	247
第3節 鹿屋半良JCT～曾於弥五郎IC間の遺跡	23	第1節 自然化学分析の概要	247
第III章 調査の方法と順序	25	第2節 放射性炭素年代測定	247
第1節 調査の方法	25	第3節 種実同定	269
1 発掘調査の方法	25	第4節 植物珪酸体分析	278
2 遺構の認定と検出方法	27	第VI章 総括	283
3 整理・報告書作成作業の方法及び内容	27	付論 松喰鏡と和鏡の中の鶴・亀の展開	291
第2節 順序	28	写真図版	297
第IV章 発掘調査の成果	51		

挿図目次

第1図 確認トレンチ配置図	3	第28図 土層断面図15	43
第2図 平成19年度調査範囲図	4	第29図 土層断面図16	44
第3図 平成20年度調査範囲図	5	第30図 土層断面図17	45
第4図 平成21年度調査範囲図	7	第31図 土層断面図18	46
第5図 平成22年度調査範囲図	8	第32図 土層断面図19	47
第6図 平成23年度調査範囲図	10	第33図 土層断面図20	48
第7図 平成24年度調査範囲図	12	第34図 土層断面図21	49
第8図 平成25年度調査範囲図	14	第35図 土層断面図22	50
第9図 遺跡周辺地形写真	18	第36図 弥生時代の遺構配置図	51
第10図 遺跡周辺地形図	19	第37図 弥生時代の竪穴住居跡1号	52
第11図 周辺遺跡位置図	22	第38図 弥生時代の竪穴住居跡1号内出土遺物	53
第12図 鹿屋半良JCT～曾於弥五郎IC間の遺跡位置図	24	第39図 弥生時代の竪穴住居跡2号	54
第13図 天神段遺跡グリッド配置図	26	第40図 弥生時代の竪穴住居跡2号内出土遺物	55
第14図 土層断面図1	29	第41図 弥生時代の土器全出土分布図	56
第15図 土層断面図2	30	第42図 弥生時代の土器出土分布図(掲載分の器種別)	57
第16図 土層断面図3	31	第43図 甕形Ⅰa類土器	58
第17図 土層断面図4	32	第44図 甕形Ⅰb類土器	59
第18図 土層断面図5	33	第45図 甕形Ⅱa類土器	60
第19図 土層断面図6	34	第46図 甕形Ⅱb-1類土器1	61
第20図 土層断面図7	35	第47図 甕形Ⅱb-1類土器2	62
第21図 土層断面図8	36	第48図 甕形Ⅱb-2類土器1	63
第22図 土層断面図9	37	第49図 甕形Ⅱb-2類土器2	64
第23図 土層断面図10	38	第50図 甕形Ⅲ類土器	65
第24図 土層断面図11	39	第51図 壺形土器1	66
第25図 土層断面図12	40	第52図 壺形土器2	67
第26図 土層断面図13	41	第53図 Ⅲ・Ⅳ層出土土器分布図	68
第27図 土層断面図14	42	第54図 Ⅲ・Ⅳ層の土器1(石鏝・石斧)	70

第55図	Ⅲ・Ⅳ層の石器2(磨石・敲石・凹石)……………71	第112図	中世の土坑墓配置図……………130
第56図	Ⅲ・Ⅳ層の石器3(磨石・砥石)……………72	第113図	中世の土坑墓1号①……………131
第57図	Ⅲ・Ⅳ層の石器4(砥石・石皿)……………73	第114図	中世の土坑墓1号②(出土状況・断面図)……………133
第58図	Ⅲ・Ⅳ層の石器5(石皿)……………74	第115図	中世の土坑墓1号内出土遺物①(磁器・土器)……………134
第59図	古代の掘立柱建物跡・ピット配置図……………76	第116図	中世の土坑墓1号内出土遺物②(石器・金属器)……………136
第60図	古代の掘立柱建物跡1号……………77	第117図	中世の土坑墓1号内出土遺物③(和鏡)……………137
第61図	古代の掘立柱建物跡2号……………78	第118図	中世の土坑墓2号(出土状況・出土遺物)……………139
第62図	古代の掘立柱建物跡3号……………79	第119図	中世の土坑墓3号①(出土状況・出土遺物)……………140
第63図	古代の掘立柱建物跡4号……………80	第120図	中世の土坑墓3号②(出土遺物・鉄器)……………141
第64図	古代の掘立柱建物跡5号……………81	第121図	中世の土坑墓4号(出土遺物)……………142
第65図	古代の掘立柱建物跡6・7号……………82	第122図	中世の土坑墓5号(出土状況・出土遺物)……………143
第66図	柱穴内出土遺物……………83	第123図	中世の土坑墓7号①(出土状況・断面図)……………145
第67図	古代の竪穴住居状遺構・土坑・中跡・焼土跡・土器集中の配置図……………84	第124図	中世の土坑墓7号内出土遺物①(磁器・土器・鉄器・古鏡)……………146
第68図	古代の竪穴住居状遺構1号……………85	第125図	中世の土坑墓7号内出土遺物②(歯・土器)……………146
第69図	古代の竪穴住居状遺構1号内出土遺物……………85	第126図	中世の土坑墓7号内出土遺物③(湖州鏡)……………147
第70図	古代の竪穴住居状遺構2号……………86	第127図	中世の土坑墓8号①……………148
第71図	古代の竪穴住居状遺構2号内出土遺物……………86	第128図	中世の土坑墓8号②(出土遺物)……………149
第72図	古代の土坑1(Type1)……………88	第129図	中世の掘立柱建物跡配置図1(A群)……………151
第73図	古代の土坑2(Type1)……………89	第130図	中世の掘立柱建物跡1号……………153
第74図	古代の土坑3(Type1)……………90	第131図	中世の掘立柱建物跡2号……………154
第75図	Type1土坑内出土遺物……………91	第132図	中世の掘立柱建物跡3号……………155
第76図	古代の土坑4(Type2)……………92	第133図	中世の掘立柱建物跡4・5号……………156
第77図	古代の土坑5(Type2)……………93	第134図	中世の掘立柱建物跡6・7号……………157
第78図	古代の土坑6(Type2)……………94	第135図	中世の掘立柱建物跡8・9号……………158
第79図	古代の土坑7(Type2)……………95	第136図	中世の掘立柱建物跡10・11号……………159
第80図	Type2土坑内出土遺物……………96	第137図	中世の掘立柱建物跡12・13号……………160
第81図	古代の土坑8(Type3)……………97	第138図	中世の掘立柱建物跡14号……………161
第82図	古代の土坑9(Type4)……………98	第139図	中世の掘立柱建物跡配置図2(B群)……………162
第83図	古代の土坑10(Type5)……………99	第140図	中世の掘立柱建物跡15・16号……………163
第84図	古代の土坑11(Type5)……………100	第141図	中世の掘立柱建物跡17・18号……………164
第85図	古代の土坑12(Type5)……………101	第142図	中世の掘立柱建物跡19・20号……………165
第86図	古代のピット1……………103	第143図	中世の掘立柱建物跡21～23号……………166
第87図	古代のピット2……………104	第144図	中世の掘立柱建物跡配置図3(C群)……………167
第88図	古代のピット3……………105	第145図	中世の掘立柱建物跡24号……………168
第89図	古代のピット内出土遺物……………106	第146図	中世の掘立柱建物跡25・26号……………169
第90図	古代の伊跡……………106	第147図	中世の掘立柱建物跡27・28号……………170
第91図	古代の焼土跡(1・2号)……………107	第148図	中世の掘立柱建物跡29・30号……………171
第92図	古代の土器集中1号……………107	第149図	中世の掘立柱建物跡31・32号……………172
第93図	古代の土器集中1号内出土遺物……………108	第150図	中世の掘立柱建物跡33・34号……………173
第94図	古代の土器集中2号……………108	第151図	中世の掘立柱建物跡35・36号……………174
第95図	古代の土器集中2号内出土遺物……………109	第152図	中世の掘立柱建物跡配置図4(D群)……………175
第96図	古代の土器集中出土分布図……………110	第153図	中世の掘立柱建物跡37号……………176
第97図	古代の土器器出土分布図(掲載分)……………111	第154図	中世の掘立柱建物跡38・39号……………177
第98図	古代の罌器・黒色土器・須恵器・焼塩土器・紡錘車出土分布図……………112	第155図	中世の掘立柱建物跡配置図5(E群)……………178
第99図	古代の土器器1……………113	第156図	中世の掘立柱建物跡40・41号……………179
第100図	古代の土器器2(坏)……………114	第157図	中世の掘立柱建物跡配置図6(その他)……………180
第101図	古代の土器器3(甕)……………116	第158図	中世の掘立柱建物跡42号……………181
第102図	古代の土器器4(甕)……………117	第159図	中世の掘立柱建物跡43・44号……………182
第103図	古代の罌書土器1……………118	第160図	中世の掘立柱建物跡45号……………183
第104図	古代の罌書土器2……………119	第161図	中世の掘立柱建物跡46・47号……………184
第105図	古代の黒色土器・須恵器・焼塩土器・紡錘車……………120	第162図	中世の掘立柱建物跡48・49号……………185
第106図	軽石加工品出土分布図……………123	第163図	中世の杭列1～3……………186
第107図	軽石加工品1……………124	第164図	中世の溝状遺構配置図1(溝1～20)……………187
第108図	軽石加工品2……………125	第165図	中世の溝1～3……………188
第109図	軽石加工品3……………126	第166図	中世の溝4・5……………188
第110図	軽石加工品4……………127	第167図	中世の溝6～9……………189
第111図	軽石加工品5……………128	第168図	中世の溝10～15……………189

第169図	中世の溝16～20	189
第170図	中世の溝状遺構配置図2(溝21～28)	190
第171図	中世の溝21～26	191
第172図	中世の溝27・28	192
第173図	中世の溝29	193
第174図	中世の溝状遺構配置図3(溝30～33)	194
第175図	中世の溝30～33	194
第176図	中世の溝状遺構配置図4(溝34～37)	195
第177図	中世の溝34～37	196
第178図	中世の溝状遺構配置図5(溝38～46)	197
第179図	中世の溝38～46	198
第180図	中世の溝状遺構配置図6(溝47～58)	199
第181図	中世の溝47～51, 58	199
第182図	中世の溝52～57	200
第183図	中世の溝状遺構配置図7(溝59～66)	201
第184図	中世の溝59～62	201
第185図	中世の溝63～66	202
第186図	中世の鍛冶関連遺構配置図	203
第187図	中世の鍛冶関連遺構土層断面図	203
第188図	鍛冶関連遺構内検出土坑	204
第189図	鍛冶関連遺構内出土遺物	204
第190図	中世の土坑・ピット配置図	206
第191図	中世の土坑(Type 1-①)	209
第192図	中世の土坑(Type 1-②)	210
第193図	中世の土坑(Type 1-③, Type 5-①)	211
第194図	中世の土坑(Type 1-④, Type 2-①, Type 5-②)	213
第195図	中世の土坑(Type 2-②)	214
第196図	中世の土坑(Type 3)	215
第197図	中世の土坑(Type 4)	216
第198図	中世の土坑(Type 5-③)	217
第199図	中世のピット	220

第200図	中世の遺物出土状況図1	221
第201図	中世の遺物出土状況図2	222
第202図	中世の遺物1	223
第203図	中世の遺物2	224
第204図	中世の遺物3	225
第205図	中世の遺物4	226
第206図	中世の遺物5	227
第207図	中世の遺物6	228
第208図	中世の遺物7	229
第209図	中世の遺物8	230
第210図	中世の遺物出土状況図(滑石・金属器)	236
第211図	中世の遺物(滑石1)	237
第212図	中世の遺物(滑石2)	238
第213図	中世の遺物(金属器1)	239
第214図	中世の遺物(金属器2)	240
第215図	近世の遺構配置図・出土状況図	242
第216図	近世の土坑・ピット	243
第217図	近世の畝状遺構	244
第218図	近世の遺物	245

付録の挿入

図1	県内出土の松喰鏡	291
図2	県内神社所蔵の大型松喰鏡	292
図3	蓬萊山がある法隆寺の袈裟箱	292
図4	蓬萊鏡の変遷	294
図5	室町時代の和鏡の変遷	294
図6	都城市尾崎第1遺跡出土柄鏡	295
図7	松竹柄鏡	295
図8	18世紀の蓬萊鏡(入来郷土館所蔵)	296
図9	松竹梅柄鏡(西之表市資料館所蔵)	296

表目次

第1表	周辺遺跡一覧表	21
第2表	鹿屋申良JCT～曾於弥五郎IC間の遺跡	23
第3表	天神段遺跡の基本土層	28
第4表	竪穴住居跡1号内出土土器観察表	53
第5表	竪穴住居跡1号内出土土器観察表	53
第6表	竪穴住居跡2号内出土土器観察表	55
第7表	竪穴住居跡2号内出土土器観察表	55
第8表	甕形Ⅰ類土器観察表	59
第9表	甕形Ⅱa類土器観察表	60
第10表	甕形Ⅱb-1類土器観察表	62
第11表	甕形Ⅱb-2類土器観察表	64
第12表	甕形Ⅲ類土器観察表	65
第13表	壺形土器観察表	67
第14表	Ⅲ・Ⅳ層出土土器観察表	74
第15表	掘立柱建物跡1号計測表	77
第16表	掘立柱建物跡2号計測表	78
第17表	掘立柱建物跡3号計測表	79
第18表	掘立柱建物跡4号計測表	80
第19表	掘立柱建物跡5号計測表	81
第20表	掘立柱建物跡6号計測表	82
第21表	掘立柱建物跡7号計測表	82
第22表	柱穴内出土遺物観察表	83
第23表	竪穴住居状遺構1号内出土遺物観察表	85

第24表	竪穴住居状遺構2号内出土遺物観察表	86
第25表	Type 1土坑内出土遺物観察表	91
第26表	Type 2土坑内出土遺物観察表	96
第27表	古代の土坑計測表	102
第28表	古代のピット計測表	105
第29表	古代のピット内出土遺物観察表	106
第30表	土器集中1号内出土遺物観察表	108
第31表	土器集中2号内出土遺物観察表	109
第32表	古代の土師器観察表1	121
第33表	古代の土師器観察表2	122
第34表	古代の墨書土器観察表	122
第35表	古代の黒色土器・須臾器・焼土器・紡錘車観察表	122
第36表	軽石加工品観察表	128
第37表	土坑墓内出土遺物観察表1(磁器)	149
第38表	土坑墓内出土遺物観察表2(石器)	149
第39表	土坑墓内出土遺物観察表3(土器)	150
第40表	土坑墓内出土遺物観察表4(金属器)	150
第41表	掘立柱建物跡1号計測表	154
第42表	掘立柱建物跡2号計測表	154
第43表	掘立柱建物跡3号計測表	155
第44表	掘立柱建物跡4号計測表	156
第45表	掘立柱建物跡5号計測表	156
第46表	掘立柱建物跡6号計測表	157

第47表	掘立柱建物跡7号計測表	157
第48表	掘立柱建物跡8号計測表	158
第49表	掘立柱建物跡9号計測表	158
第50表	掘立柱建物跡10号計測表	161
第51表	掘立柱建物跡11号計測表	161
第52表	掘立柱建物跡12号計測表	161
第53表	掘立柱建物跡13号計測表	161
第54表	掘立柱建物跡14号計測表	161
第55表	掘立柱建物跡15号計測表	163
第56表	掘立柱建物跡16号計測表	163
第57表	掘立柱建物跡17号計測表	164
第58表	掘立柱建物跡18号計測表	164
第59表	掘立柱建物跡19号計測表	165
第60表	掘立柱建物跡20号計測表	165
第61表	掘立柱建物跡21号計測表	166
第62表	掘立柱建物跡22号計測表	166
第63表	掘立柱建物跡23号計測表	166
第64表	掘立柱建物跡24号計測表	168
第65表	掘立柱建物跡25号計測表	169
第66表	掘立柱建物跡26号計測表	169
第67表	掘立柱建物跡27号計測表	170
第68表	掘立柱建物跡28号計測表	170
第69表	掘立柱建物跡29号計測表	172
第70表	掘立柱建物跡30号計測表	172
第71表	掘立柱建物跡31号計測表	172
第72表	掘立柱建物跡32号計測表	172
第73表	掘立柱建物跡33号計測表	173
第74表	掘立柱建物跡34号計測表	173

第75表	掘立柱建物跡35号計測表	174
第76表	掘立柱建物跡36号計測表	174
第77表	掘立柱建物跡37号計測表	178
第78表	掘立柱建物跡38号計測表	178
第79表	掘立柱建物跡39号計測表	178
第80表	掘立柱建物跡40号計測表	179
第81表	掘立柱建物跡41号計測表	179
第82表	掘立柱建物跡42号計測表	181
第83表	掘立柱建物跡43号計測表	182
第84表	掘立柱建物跡44号計測表	182
第85表	掘立柱建物跡45号計測表	183
第86表	掘立柱建物跡46号計測表	184
第87表	掘立柱建物跡47号計測表	184
第88表	掘立柱建物跡48号計測表	185
第89表	掘立柱建物跡49号計測表	185
第90表	穀治関連遺構内出土遺物観察表	204
第91表	中世の土坑計測表	218
第92表	中世のピット計測表	220
第93表	中世の遺物観察表1	231
第94表	中世の遺物観察表2	232
第95表	中世の遺物観察表3	233
第96表	中世の遺物観察表4	234
第97表	中世の遺物観察表5	235
第98表	中世の遺物観察表(滑石)	238
第99表	中世の遺物観察表(金属器)	240
第100表	中世の土坑計測表	243
第101表	近世のピット計測表	243
第102表	近世の遺物観察表	246

図版目次

巻頭図版

巻頭図版1	遺跡全景
巻頭図版2	土坑墓1号内遺物出土状況
巻頭図版3	土坑墓内出土全遺物

本文中写真

土坑墓1号内出土青磁碗	135
土坑墓1号内出土古銭(開元通宝)	136
土坑墓1号内出土古銭(X線写真)	136
土坑墓1号内出土古銭(繊維に包まれた状態)	136
土坑墓5号内出土青磁碗	144
土坑墓7号内出土和鉄(繊維付着)	146
土坑墓7号内出土古銭(政和通宝)	146
土坑墓7号内出土古銭(X線写真)	146
土坑墓7号内出土湖州鏡(和紙付着)	147
土坑墓7号内出土湖州鏡(X線写真)	147
土坑墓7号内出土湖州鏡(紐状繊維付着)	147
紡錘車(X線写真)	239

巻末図版

図版1	遺跡遠景	297
図版2	土層断面・発掘作業風景	298
図版3	①～④弥生堅穴住居跡1号 ⑤・⑥・⑧弥生堅穴住居跡2号 ⑦弥生堅穴住居跡2号内焼土跡	299

図版4	弥生時代の土器1	300
図版5	弥生時代の土器2	301
図版6	弥生時代の土器3	302
図版7	弥生時代の土器4	303
図版8	弥生時代の土器5 遺構内石器 Ⅲ・Ⅳ層の石器1	304
図版9	Ⅲ・Ⅳ層の石器2	305
図版10	①～④古代堅穴住居状遺構1号 ⑤～⑧古代堅穴住居状遺構2号	306
図版11	①～③古代土坑6号 ④・⑤古代土坑3号・8号 ⑥・⑦古代土坑10号 ⑧古代土坑11号	307
図版12	①古代土坑11号 ②・③古代土坑14号 ④・⑤古代土坑15号	308

⑥～⑧古代土坑20号	
図版13	309
①・②古代土坑22号	
③・④古代土坑24号	
⑤古代土坑4・25・40・46・84号	
⑥・⑦古代土坑25号	
⑧古代土坑26号	
図版14	310
①・②古代土坑26号	
③～⑤古代土坑28号	
⑥・⑦古代土坑40号	
⑧古代土坑41号	
図版15	311
①・②古代土坑41号	
③・④古代土坑43号	
⑤・⑥古代土坑50号	
⑦・⑧古代土坑51号	
図版16	312
①古代土坑52～59号	
②・③古代土坑50号	
④～⑥古代土坑64号	
⑦・⑧古代土坑84号	
図版17	313
①古代の炉跡	
②～⑤古代の焼土跡	
図版18	314
古代の土器1	
図版19	315
古代の土器2	
図版20	316
古代の土器3	
図版21	317
古代の土器4	
図版22	318
古代の土器5	
図版23	319
古代の土器6	
図版24	320
古代の土器7	
図版25	321
軽石加工品1	
図版26	322
軽石加工品2	
図版27	323
土坑墓1号内遺物出土状況1	
図版28	324
土坑墓1号内遺物出土状況2	
図版29	325
①～③土坑墓2号内遺物出土状況	
④土坑墓3号内遺物出土状況	
図版30	326
①土坑墓3号検出状況	
②～⑤土坑墓3号内遺物出土状況	
⑥土坑墓4号完掘	
⑦土坑墓6号検出状況	
図版31	327
①・②土坑墓5号内遺物出土状況	
③土坑墓5号内出土遺物	
④・⑤土坑墓8号内遺物出土状況	
⑥土坑墓8号内出土遺物	
図版32	328
①・③～⑤土坑墓7号内遺物出土状況	
②土坑墓7号検出状況	
図版33	329
①掘立柱建物跡1号	
②掘立柱建物跡1・2号	
③掘立柱建物跡3号	
④掘立柱建物跡6号	
⑤掘立柱建物跡7号	
⑥・⑦掘立柱建物跡8号	
⑧掘立柱建物跡9号	
図版34	330
①・②掘立柱建物跡10号	
③掘立柱建物跡11号	
④掘立柱建物跡12号	
⑤掘立柱建物跡13号	
⑥掘立柱建物跡14号	
⑦・⑧掘立柱建物跡15号	
図版35	331
①・②掘立柱建物跡16号	
③・④掘立柱建物跡19号	
⑤・⑥掘立柱建物跡20号	
⑦・⑧掘立柱建物跡21号	
図版36	332
①・②掘立柱建物跡22号	
③・④掘立柱建物跡27号	
⑤・⑥掘立柱建物跡28号	
⑦・⑧掘立柱建物跡32号	
図版37	333
①・②掘立柱建物跡33号	
③・④掘立柱建物跡34号	
⑤・⑥掘立柱建物跡35号	
⑦・⑧掘立柱建物跡37号	
図版38	334
①・②掘立柱建物跡38号	
③・④掘立柱建物跡39号	
⑤・⑥掘立柱建物跡40号	
⑦掘立柱建物跡41号	
⑧掘立柱建物跡49号	
図版39	335
①溝状遺構2号	
②溝状遺構4号	
③溝状遺構5号	
④溝状遺構7号	
⑤溝状遺構6・7・9号	
⑥溝状遺構14・15号	
図版40	336
①・②溝状遺構22・23号	
③溝状遺構29号	
④溝状遺構24・27号	
⑤溝状遺構27号	
⑥・⑦溝状遺構28号	
図版41	337
①～⑥溝状遺構29号	

図版42	338	図版54	350
①・②・④・⑥溝状遺構34号		①土坑墓1号内出土遺物4	
③溝状遺構35・36号		②～④土坑墓2号内出土遺物	
⑤溝状遺構35号		⑤土坑墓3号内出土遺物1	
⑦溝状遺構36号		図版55	351
図版43	339	土坑墓3号内出土遺物2	
①溝状遺構40号		図版56	352
②溝状遺構41号		①土坑墓3号内出土遺物3	
③・⑤・⑦溝状遺構38号		②土坑墓5号内出土遺物	
④溝状遺構43号		図版57	353
⑥・⑧溝状遺構44号		土坑墓7号内出土遺物1	
図版44	340	図版58	354
①溝状遺構47号		①土坑墓7号内出土遺物2	
②・④溝状遺構49号		②～⑦土坑墓8号内出土遺物	
③・⑥溝状遺構48号		図版59	355
⑤溝状遺構58号		中世の遺物1	
図版45	341	図版60	356
①溝状遺構52・54・55・56・57号、古道53号		中世の遺物2(外面)	
②溝状遺構30・31号		図版61	357
③溝状遺構55号		中世の遺物2(内面)	
④溝状遺構54号		図版62	358
⑤溝状遺構56号		中世の遺物3	
⑥溝状遺構52号 古道53号		図版63	359
図版46	342	中世の遺物4	
①溝状遺構59号		図版64	360
②古道60号		中世の遺物5	
③古道61号		図版65	361
④溝状遺構63号		中世の遺物6	
⑤溝状遺構65・66号		図版66	362
⑥溝状遺構64号		中世の遺物7	
図版47	343	図版67	363
①～⑤鉄滓と出土状況及び土の変色部分		中世の遺物8	
⑥変色部分の土の採取の様子		図版68	364
⑦・⑧鍛冶関連遺構内検出土坑		中世の遺物9	
図版48	344	図版69	365
①～③中世の土坑27号		中世の遺物10	
④・⑤中世の土坑32号		図版70	366
⑥～⑧中世の土坑40号		中世の遺物11	
図版49	345	図版71	367
①～③中世の土坑46号		中世の遺物12	
④・⑤中世の土坑48号		図版72	368
⑥～⑧中世の土坑52号		中世の遺物13	
図版50	346	図版73	369
①・②中世の土坑81号		中世の遺物14	
③中世の土坑81・99号		図版74	370
④・⑤中世の土坑94号		中世の遺物15	
⑥・⑦中世の土坑102号		図版75	371
⑧中世の土坑113号		①～④近世の畝状遺構	
図版51	347	⑤近世の土坑5号(手前)	
土坑墓1号内出土遺物1		図版76	372
図版52	348	近世の遺物	
土坑墓1号内出土遺物2			
図版53	349		
土坑墓1号内出土遺物3			

第 I 章 発掘調査の経過

第 1 節 調査に至るまでの経緯

鹿児島県教育委員会（以下「県教委」という。）は、文化財の保護・活用を図るため、各関係機関との間で、事業区域内における文化財の有無及びその取り扱いについて協議し、諸関係との調整を図ってきた。この事前協議制に基づき、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所は、東九州自動車道の建設を計画し、志布志 I C～末吉財部 I C 区間の事業に先立って、事業地内における埋蔵文化財の有無について鹿児島県教育庁文化財課（以下「文化財課」という。）に照会した。

この計画に伴い文化財課は、平成11年1月に鹿屋串良 J C T～末吉財部 I C 間を、平成12年2月には志布志 I C～鹿屋串良 J C T 間の埋蔵文化財の分布調査を実施し、50か所の遺跡が確認することが明らかとなった。

この結果をもとに、事業区間内の埋蔵文化財の取扱いについて、日本道路公団九州支社鹿児島工事事務所、鹿児島県土木部道路建設課高速道対策室、文化財課、県立埋蔵文化財センターの4者で協議を重ね対応を検討している最中に日本道路公団民営化の政府方針が提起され、事業の見直しと建設コストの削減も検討することとなった。

このような社会情勢の変化に伴い、遺跡の徹底的な把握が要求されることとなり、埋蔵文化財の詳細分布調査、試掘調査、確認調査が実施されることとなった。

そこで、県教委は、まず、平成13年1月29日～平成13年2月6日に調査の利便性や面積等を考慮して宮ヶ原遺跡、加治木堀遺跡、石籠遺跡、十三塚遺跡の試掘調査を実施した。さらに、平成13年7月10日～7月26日に鹿屋串良 J C T～末吉財部 I C 間の工事計画図をもとに33の遺跡について詳細分布調査と、平成13年9月17日～10月26日、平成13年12月3日～12月25日の2期間にわたり各遺跡の調査範囲及び遺物包含層の層数を把握するための試掘調査を実施した。

これらの詳細分布調査や試掘調査に加えて、既に合意されていた本線工用道路及び側道部分の確認調査も実施することとなり、関山西遺跡、関山遺跡、狩保遺跡の3遺跡を対象に平成13年10月1日～平成14年3月22日にかけて確認調査を実施した。

平成14年4月には、志布志 I C～鹿屋串良 J C T 間の遺跡について再度分布調査を実施した。

その後、日本道路公団民営化（現在の西日本高速道路株式会社）の閣議決定と新直轄方式に基づく道路建設の確定、平成15年11月に暫定2車線施行に伴う議事確認書締結、同年12月に大隅 I C（平成21年4月28日、「曾於

弥五郎 I C」へ名称変更）から末吉財部 I C 間の発掘調査協定書締結、平成16年3月に国土交通省九州地方整備局長、日本道路公団九州支社長、鹿児島県知事の間で新直轄方式施行に伴う確認書締結が行われ、工事は日本道路公団が国土交通省から受託し、発掘調査は日本道路公団が鹿児島県に委託することとなり、これまでの確認書、協定書はそのまま生きていることになった。ただし、日本道路公団からの委託は曾於弥五郎 I C までで終了し、曾於弥五郎 I C からの先線部は国土交通省からの受託事業となった。

平成24年度、国土交通省は、平成25年度から東九州自動車道（志布志 I C～鹿屋串良 J C T 間）の建設工事をさらに推進する意向を示し、発掘調査期間の短縮を要請してきた。

このような状況に対応するため、県は関係機関で協議を重ね、職員確保や予算運用が柔軟にでき、発掘調査を効率かつ効果的に実施できる財団の設置を決定した。

これを受けて、平成25年4月に公益財団法人鹿児島県文化振興財団に埋蔵文化財調査センター（以下「〔公財〕埋蔵文化財調査センター」という。）が設置された。そして、文化財課は、国事業に関する業務を（公財）埋蔵文化財調査センターへ委託し、（公財）埋蔵文化財調査センターが県立埋蔵文化財センターから業務を引き継ぎ実施することとなった。

天神段遺跡の調査経過は、以下のとおりである。

発掘調査

- 1 分布調査：平成11年1月
- 2 詳細分布調査：平成13年7月
- 3 試掘調査：平成13年12月
- 4 確認調査：平成19年5月～7月
- 5 本調査：平成19年12月～平成25年10月

整理・報告書作成作業

整理・報告書作成作業は、平成22年度から実施しており、今年度、弥生時代～近世編を刊行する運びとなった。

縄文時代・旧石器時代の報告書については、次年度以降刊行する予定である。

なお、各調査の調査期間、調査体制等詳細については次節以降で報告することとする。

第2節 事前調査

1 分布調査

天神段遺跡に関する分布調査は、日本道路公団（現在の西日本高速道路株式会社）から東九州自動車道第13次区間のうち、鹿屋串良JCT～末吉財部IC間の分布調査依頼を受け、平成11年1月に実施した。調査体制は次のとおりである。

調査体制（分布調査：平成10年度）

事業主体 日本道路公団九州支社鹿児島事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

2 詳細分布調査・試掘調査

天神段遺跡の試掘調査は、平成10年度の分布調査の結果を受けて、平成13年7月に再度詳細な分布調査を行った後、調査の利便性や面積等を考慮し、包含層等の状況を確認するため、平成13年12月3日～12月25日の17日間実施した。

調査方法は、遺跡内の3か所にトレンチを設定し、重機を使用しながら掘り下げを行った。地層、遺構・遺物の有無の確認を行いながら、約1.5mまで掘り下げた。調査の結果、2か所で良好な遺物包含層が確認された。試掘調査の調査体制は次のとおりである。

調査体制（詳細分布調査・試掘調査：平成13年度）

事業主体 日本道路公団九州支社鹿児島事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

	所	長	井上明文
調査企画	＊	次長兼総務課長	黒木友幸
	＊	主任文化財主事兼	
	＊	調査課長	新東晃一
	＊	課長補佐	立神次郎
	＊	主任文化財主事兼	
	＊	第二調査係長	彌榮久志
調査担当	＊	主任文化財主事	長野真一
	＊	文化財研究員	桑波田武志
事務担当	＊	総務係長	前田昭信
	＊	主査	栗山和巳
	＊	主事	池珠美

3 確認調査

確認調査は、平成19年5月16日から平成19年7月13日まで実施した（実働30日）。調査は、5×4mを基本とした確認トレンチを18箇所設定し、重機で表土を削いだ後、人力で掘り下げた。

調査の結果、表土下は耕作による擾乱がわずかに見られるものの、大規模な圃場整備を受けておらず、全トレンチで遺物包含層が確認された。包含層の残存が確認されたので、引き続き本調査を行うこととした。

調査体制

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

	所	長	宮原景信
調査企画	＊	次長兼総務課長	平山章
	＊	次長兼南の縄文調査室長	新東晃一
	＊	調査第二課長	立神次郎
	＊	主任文化財主事兼	
	＊	調査第二課	
	＊	第一調査係長	彌榮久志
調査担当	＊	文化財主事	平木場秀男
	＊	＊	木内敏生
	＊	文化財調査員	佐藤真人
事務担当	＊	総務係長	寄井田正秀
	＊	主事	五百路真

調査の詳細（調査日誌より）

調査の詳細を調査日誌より月単位で記す。本調査の詳細も同様に月単位で記すこととする。なお、数字の後の「T」はトレンチのことである。

【5月】

現場開始に向けての準備（調査範囲確認、現場内の危険箇所点検、駐車場整備、遺跡案内板設置、重機による表土剥ぎ等）。調査に関する作業員向けのオリエンテーション。調査区内外の環境整備（発掘機材等の搬入・分配・整理、除草作業等）。グリッド及び確認トレンチ設定（1～13T）。確認トレンチ調査（Ⅲ～Ⅵ層の掘り下げ、遺構配置や遺物取上に係る平板実測、遺構実測、平板実測を基に遺構配置図作成、写真撮影等）。図面・遺物整理（図面台帳作成、土器・石器の仕分け、出土区及び出土層による仕分け等）

【6月】

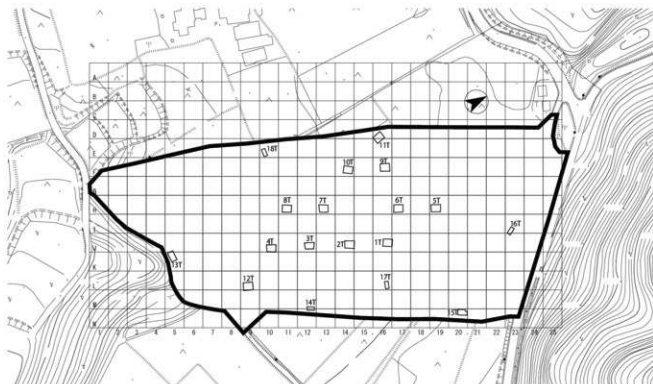
グリッド設定。H・I-3～6区の重機による表土剥ぎ。確認トレンチ調査（1T：Ⅳ～Ⅵ層の掘り下げ、

遺物取上、土層断面実測、写真撮影。2 T：Ⅳ層の掘り下げ、堅穴状遺構検出のためトレンチ拡張、遺物取上、写真撮影。3 T：Ⅵ・Ⅶ層の掘り下げ、遺物取上。4 T：Ⅳ～ⅩⅥ層の掘り下げ、遺物取上、土層断面実測、写真撮影。5 T：Ⅲ層の掘り下げ、Ⅲ b層で土坑・ピット・溝状遺構検出、遺物取上、写真撮影。6 T：Ⅲ・Ⅳ層の掘り下げ、Ⅲ a層で土坑検出、遺物取上、写真撮影。7 T：Ⅲ・Ⅳ層の掘り下げ、Ⅲ a層でピット検出、遺物取上、写真撮影。8 T：Ⅵ・Ⅶ層の掘り下げ、遺物取上。9 T：Ⅳ～ⅩⅡ層の掘り下げ、Ⅶ層で集石遺構検出、遺物取上、土層断面実測、写真撮影。10 T：Ⅵ～Ⅶ層の掘り下げ、Ⅵ層で土坑検出、遺物取上、土層断面実測、写真撮影。11 T：Ⅴ～Ⅶ層の掘り下げ、Ⅵ層で土坑検出、

遺物取上、写真撮影。12 T：Ⅳ～Ⅶ層の掘り下げ、遺物取上、土層断面実測、写真撮影。13 T：Ⅲ・Ⅳ層の掘り下げ、土層断面実測、写真撮影。地形及び安全面を考慮し、Ⅳ層で調査終了)。トレンチ配置図作成。図面・写真整理。現場内危険箇所点検及び養生。崩落部分の養生。駐車場の入口整地、安全・雨水対策、階段部分養生

【7月】

3 T：Ⅶ層掘り下げ、遺物取上。9 T：ⅩⅢ～ⅩⅥ層掘り下げ、土層断面実測、写真撮影。10 T：掘り下げ、遺物取上。新たに14 Tを設定し調査。14 T：Ⅰ～Ⅲ層の掘り下げ、遺物取上、写真撮影。Ⅵ層出土状況図作成。遺物・図面・写真整理。現場内危険箇所点検及び台風養生。環境整備（周辺清掃、現場内除草作業等）



第1図 確認トレンチ配置図

第3節 本調査

本調査を平成19～25年度の7か年にわたり実施した。各年度の調査期間は以下のとおりであるが、平成19年度は確認調査実施後引き続き本調査を実施した。

平成19年度：平成19年7月16日～平成20年3月19日

平成20年度：平成20年5月22日～平成21年3月19日

平成21年度：平成21年5月8日～平成22年3月19日

平成22年度：平成22年5月10日～平成23年3月11日

平成23年度：平成23年5月9日～平成24年3月9日

平成24年度：平成24年5月8日～平成25年3月8日

平成25年度：平成25年4月22日～平成25年10月25日

また、各年度の調査体制及び調査の詳細（日誌抄より）については次のとおりである。

調査体制（平成19年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所 長 宮原景信

調査企画 ＊ 次長兼総務課長 平山 章

＊ 次長兼南の郷文調査室長 新東晃一

＊ 調査第二課長 立神次郎

＊ 主任文化財主事兼

調査第二課

第一調査係長 彌榮久志

調査担当 ＊ 文化財主事 平木場秀男

＊ ＊ 木内敏生

＊ 文化財調査員(9月まで) 佐藤真人

＊ 文化財調査員(10月から) 岩永勇亮

事務担当 ＊ 総務係長 寄井田正秀

＊ 主 事 五百路真

現地指導者 鹿児島大学 理学部 教授 小林哲夫

＊ 法文学部 准教授 本田道輝

＊ 埋蔵文化財調査室准教授 中村直子

調査の詳細（日誌抄より）※T=トレンチ

【7月】

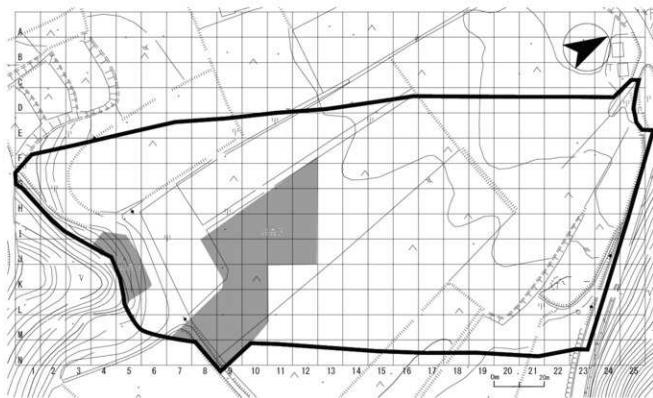
確認調査から本調査へ移行して実施。14Tは調査継続。新たに15・16Tを設定し調査（掘り下げ、遺物取上、土層断面実測等）

【8月】

14～16T調査継続（掘り下げ、遺構確認作業、遺構の調査、遺物取上、土層断面実測、トレンチ配置図作成、写真撮影等）

【9月】

遺構調査。土器溜り実測。重機による埋め戻し。下層確認。小林哲夫教授（鹿児島大学理学部）による調査指導。野方前段遺跡の先行調査のため、調査を一時中断



第2図 平成19年度調査範囲図

【12月】

調査再開。J～L-4～6区：遺構実測、コンター図作成、写真撮影を実施し、調査終了。I～N-8～10区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構確認作業、写真撮影等）。G～J-11・12区：重機による表土剥ぎ

【1月】

I～M-8～10区：12月に引き続き調査を実施。G～J-11・12区：Ⅱ・Ⅲ層の調査（掘り下げ、遺構確認作業）。本田道輝准教授（鹿児島大学法文学部）による調査指導。大崎町教育長来跡。空中写真撮影の実施

【2月】

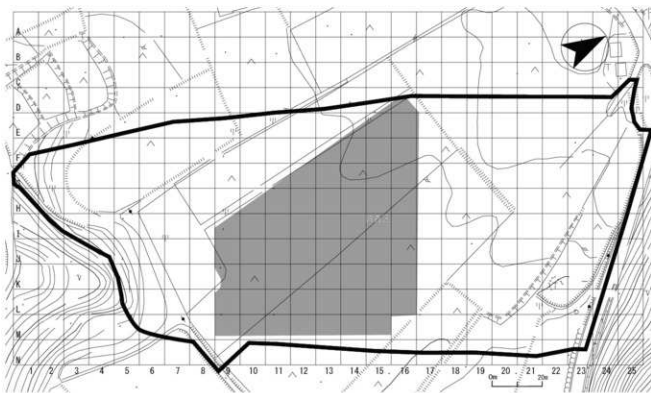
I・J-9・10区：掘立柱建物跡、土坑墓の調査（実測、写真撮影）。G～M-8～12区：Ⅳ・Ⅴ層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構確認作業、遺構の調査（掘り下げ、実測等）、写真撮影、コンター図作成）。中村直子准教授（鹿児島大学埋蔵文化財調査室）による調査指導

【3月】

I・J-9～12区：掘立柱建物跡、土坑墓の継続調査。G～M-8～12区：Ⅵ・Ⅶ層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構確認作業、遺構の調査（掘り下げ、実測等）、写真撮影）本年度の調査終了

調査体制（平成20年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所	
調査主体	鹿児島県教育委員会	
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課	
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター	
	所	長 宮原景信
調査企画	＊ 次長兼総務課長	平山 章
	＊ 次長兼南の縄文調査室長	池畑 耕一
	＊ 調査第二課長	彌榮 久志
	＊ 主任文化財主事兼 調査第二課	
調査担当	＊ 第一調査係長	中村 耕治
	＊ 文化財主事	大久保浩二
	＊ *	堅山 貴理
	＊ 文化財調査員(10月まで)	岩永 勇亮
事務担当	＊ 文化財調査員(11月から)	森 幸一郎
	＊ 総務係長	紙屋 伸一
	＊ 主 査	五百路 真
	＊ *	五味 克夫
現地指導者	鹿児島大学 名誉教授 元興寺文化財研究所	



第3図 平成20年度調査範囲図

調査の詳細（日誌抄より）

【5月】

環境整備。K・L-11・12区：表土剥ぎ。Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構確認作業）。K・L-9・10区：Ⅵ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。M・N-8・9区：Ⅳa層の調査（掘り下げ、遺構確認作業、遺物取上、写真撮影）

【6月】

K・L-11・12区：土坑墓の調査。E・F-13・14区及びK・L-9・10区：Ⅶ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。M・N-8・9区：溝状遺構（Ⅳa層検出）の調査、埋め戻し。E・L-13・14区：表土剥ぎ、Ⅳa層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構確認作業）

【7月】

E・G-13・14区：Ⅳa～Ⅴa層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構実測等）。E・L-15・16区：表土剥ぎ

【8月】

F・G-13・14区：Ⅳa～Ⅵ層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構実測）。E・G-15・16区：Ⅳ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。大崎町の小学生発掘体験。教職員（初任者）及び専門職員（新任者）の現地研修

【9月】

E・F-15・16区：Ⅴa～Ⅴc層の調査（掘り下げ、遺物取上）。F・G-13・14区：Ⅶ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。現地説明会開催

【10月】

E・H-13～16区：Ⅳa層～Ⅶ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。K～M-11・12区：Ⅳa層の調査（掘り下げ、遺物取上）。I・J-9～12区：柱穴群の検討。H-12区：下層先行トレンチ調査（掘り下げ、確群検出及び実測）。穿孔のある磨製石鏃出土。空中写真撮影。大崎町立野方小学校6年生地層見学

【11月】

D～F-15・16区：Ⅵ・Ⅶ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。G・H-14～16区：Ⅳa～Ⅴ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。K～M-11・12区：Ⅵ・Ⅶ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。I・J-16及びH-13区：掘立柱建物跡の調査。J-16区：土坑墓5号の調査。鹿児島大学名誉教授五味克夫先生による調査指導。野方小学校及び大崎小学校の6年生による地層見学・発掘体験

【12月】

D～H-14～16区：Ⅵ・Ⅶ層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構の調査（掘り下げ、実測等）、写真撮影）。I～K-13・14区：Ⅳa層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構の調査（掘り下げ、実測等）、写真撮影）。H・I-13及びI・J-16区：掘立柱建物跡の調査。J-16区：土坑墓5号の調査。旧石器先行トレンチ調査（E-16区、F-14・16区、L-11・12区）。狭川真一先生（元興寺

文化財研究所）による調査指導

【1月】

F-16区：Ⅶ層上面検出の遺構調査（掘り下げ、実測等）。G・H-14～16区：Ⅶ層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構の調査（掘り下げ、実測等）。I～L-13～16区：Ⅳa～Ⅴ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。J・K-14・15及びM-13～16区：古代・中世の遺構の調査（掘り下げ、実測）。J-16区：土坑墓5号の調査。旧石器先行トレンチ調査（E-16区、F-14・16区、K-11区、L-11・12区）

【2月】

I～M-13～16区：Ⅳa～Ⅴ層の調査（掘り下げ、遺物取上、古代の遺構の調査（I・J-15・16区）、集石遺構（H-15区）、晩期土坑（L-13区）、早期土坑（G・H-15・16区）、連穴土坑（G-16区）等の掘り下げ、実測、写真撮影等）。旧石器確認トレンチ調査（E-16区、K-11区、L-11・12区）

【3月】

I～L-13～16区：Ⅶ層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構（集石、土坑等）の調査。K-13区：晩期土坑の調査（掘り下げ、実測、写真撮影）。I・J-15・16区：古代の遺構調査（掘り下げ、実測、写真撮影）。F-16区：連穴土坑の調査（掘り下げ、実測、写真撮影）。旧石器先行トレンチ調査（F-14・16区は調査終了。H-12・13区：ⅩI層まで調査、ⅩⅧから細石刃等出土）。19日で調査終了

調査体制（平成21年度）

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
	所	長	山下吉美
調査企画	＊	次長兼総務課長	齋藤守重
	＊	次長兼南の縄文調査室長	青崎和志
	＊	調査第二課長	編榮久志
	＊	主任文化財主事兼調査第二課	
		第一調査係長	長野真一
調査担当	＊	文化財主事	新保朋久 (10月～3月)
	＊	＊	堅山貴理
	＊	＊	西園勝彦
	＊	文化財研究員	藤島伸一郎 (11月～3月)
	＊	文化財調査員	岩下直樹
事務担当	＊	総務係長	紙屋伸一

調査の詳細（日誌抄より）

【5月】

K～M-8～12区：Ⅸ層（細石器文化期）の調査。
I～M-13～16区：Ⅵ・Ⅶ層の調査（掘り下げ、遺物
取上、遺構の調査（掘り下げ、実測等）、写真撮影）。I・
J-15・16区：Ⅲc・Ⅳ層の調査（掘り下げ、遺物取上、
遺構の調査（掘り下げ、実測等）、写真撮影）

【6月】

K～M-8～12区：Ⅸ層（細石器文化期）の調査終了。
I～M-13～16区：Ⅵ・Ⅶ層の調査（掘り下げ、遺物取上、
遺構の調査（掘り下げ、実測等）、写真撮影）。I・J-
15・16区：Ⅲc～Ⅴ層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺
構の調査（掘り下げ、実測等）、写真撮影）。K-12区：Ⅳ・
Ⅴ層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構の調査（掘り下
げ、実測等）、写真撮影）

【7月】

I・J-9～12、15・16区：Ⅳ・Ⅴ層の調査（掘り下げ、
遺物取上、遺構調査（掘り下げ、実測）、写真撮影）及びⅡ・
Ⅲ層検出の掘立柱建物跡の調査。K-12区：Ⅵ・Ⅶ層の
調査（掘り下げ、遺物取上、集石遺構の調査（掘り下げ、
実測）、写真撮影）

【8月】

I・J-9～12、15・16区：Ⅳ・Ⅴ層の調査（掘り下げ、

遺物取上、集石遺構の調査（掘り下げ、実測）、写真撮影）

【9月】

I・J-9～12、15・16区：Ⅳ・Ⅴ層の調査（掘り下げ、
遺物取上、集石遺構の調査（掘り下げ、実測）、写真撮
影）。E～L-17～20区：Ⅲa～Ⅲc層検出の掘立柱建
物跡の調査

【10月】

E～L-17～20区：Ⅲ～Ⅴ層の調査（掘り下げ、遺
物取上、掘立柱建物跡の調査）。G～J-11～14区：Ⅹ
～ⅩⅡ層の調査（掘り下げ、遺物取上）

【11月】

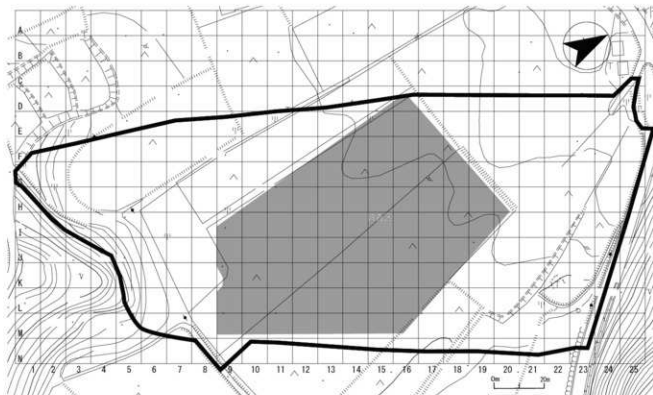
E～L-17～20区：Ⅲ～Ⅴ層の調査（掘り下げ、遺
物取上、掘立柱建物跡の調査）。H～L-11～14区：Ⅹ
～ⅩⅠ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。大崎町立中沖
小学校及び菱田小学校6年生理科学習で遺跡見学

【12月】

E～L-17～20区：Ⅲ～Ⅶ層の調査（掘り下げ、遺
物取上、縄文時代早期の落とし穴状遺構や連穴土坑の調
査）。H～L-11～14区：Ⅹ～ⅩⅠ層の調査（掘り下げ、
遺物取上）。大崎町立大崎小学校6年生理科学習で遺跡
見学

【1月】

E～L-17～20区：Ⅲ～Ⅶ層の調査（掘り下げ、遺
物取上、縄文時代早期の連穴土坑や土坑、集石遺構の調
査）。



第4図 平成21年度調査範囲図

G～L-11～14区：IX～XVI層の調査（掘り下げ、遺物取上）

【2月】

E～L-17～20区：Ⅲ～Ⅷ層の調査（掘り下げ、遺物取上、縄文時代早期の連穴土坑や土坑、集石遺構の調査）。G～L-11～14区：IX～XVI層の調査（掘り下げ、遺物取上、礫群検出）。手向山式土器完形品出土。空撮実施

【3月】

E～L-17～20区：Ⅲ～Ⅷ層の調査（掘り下げ、遺物取上、縄文時代早期の連穴土坑や土坑、集石遺構の調査）。G～L-11～14区：IX～XVI層の調査（掘り下げ、遺物取上、礫群調査）。岡山理科大学小林博昭教授現地見学

調査体制（平成22年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

所長 山下吉美

調査企画 ＊ 次長兼総務課長 田中明成

＊ 次長兼南の縄文調査室長 中村耕治

＊ 調査第二課長 井ノ上秀文
 ＊ 文化財主事兼
 調査第二課
 第一調査係長 前迫亮一
 調査担当 ＊ 文化財主事 平木場秀男
 ＊ ＊ 馬龍亮道
 ＊ 文化財調査員 岩下直樹
 事務担当 ＊ 総務係長 大園祥子
 ＊ 主 事 高崎智博

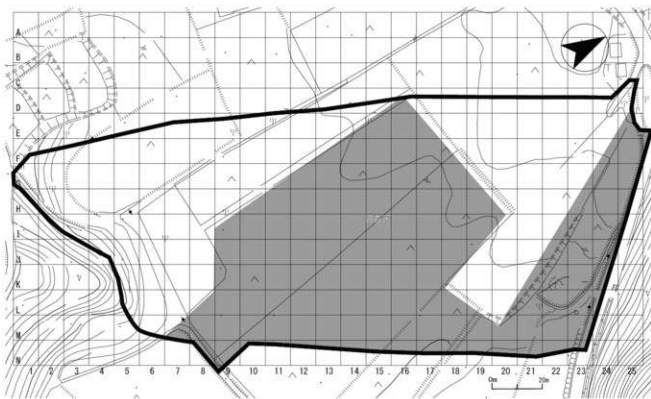
調査の詳細（日誌抄より）

【5月】

G・H-11・12区、E～H-15～18区、K・L-15・16区：IX～XI層の調査（掘り下げ、遺物取上）。I～L-17～20区：Ⅶ～Ⅷ層の調査（掘り下げ、遺物取上、土坑・落とし穴状遺構等の調査（掘り下げ、実測）、写真撮影）。L・M-16～20区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ、遺物取上、土坑の調査）

【6月】

G～H-11・12区：XⅢ～XⅤ層の調査（掘り下げ）。E～H-15～18区、I～L-15・16区：IX～XI層の調査（掘り下げ、遺物取上）。I～L-17～20区：Ⅶ～Ⅷ層の調査（掘り下げ、遺物取上、土坑・落とし穴状遺構等の調査（掘り下げ、実測）、写真撮影）。L・M-16



第5図 平成22年度調査範囲図

～19区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ、遺物取上、掘立柱建物跡・ピットの調査）。I～L-20～24区：表土剥ぎ、Ⅲ層の調査（掘り下げ、遺物取上、溝状遺構の調査）。志布志市教育委員会による口蹄疫対策状況視察

【7月】

G・H-11・12区：XⅢ～XⅤ層の調査（掘り下げ）。E～H-15～18区、I～L-15・16区：Ⅸ～XⅠ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。I～L-17～20区：Ⅶ・Ⅷ層の調査（掘り下げ、遺物取上、土坑・落とし穴状遺構等の調査（掘り下げ、実測）、写真撮影）。L・M-17～19区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。I～L-20～24区：表土剥ぎ、Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ、遺物取上、溝状遺構の調査）。口蹄疫対策

【8月】

G・H-11・12、15・16区：XⅤ層の調査（掘り下げ、遺物取上、蝶群の調査）。E～G-16・17区：Ⅸ～XⅠ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。I～L-17～20区：Ⅶ・Ⅷ層の調査（掘り下げ、遺物取上、土坑・落とし穴状遺構等の調査（掘り下げ、実測）、写真撮影）。L・M-17～19区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。I～L-20～24区：Ⅲ～Ⅵ層の調査（掘り下げ、遺物取上、溝状遺構の調査）。口蹄疫対策

【9月】

G・H-11・12、15・16区：XⅤ層の調査（掘り下げ、遺物取上、蝶群の調査）。E～G-16・17区：Ⅸ～XⅠ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。I～L-17～20区：Ⅶ・Ⅷ層の調査（掘り下げ、遺物取上、土坑・落とし穴状遺構・集石遺構等の調査（掘り下げ、実測）、写真撮影）。L・M-17～19区：Ⅳ・Ⅴ層の調査（掘り下げ、遺物取上、集石遺構の調査）。I～L-20～24区：Ⅵ・Ⅷ層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構の調査）。M・N-7～14区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。L・M-17～19区：Ⅳ・Ⅴ層の調査（掘り下げ、遺物取上）

【10月】

G・H-11・12、15・16区、J～N-22・23区：旧石器時代（Ⅸ～XⅤ層）の調査終了。E～G-16・17区：Ⅸ～XⅠ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。M・N-7～14区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。L・M-17～19区：Ⅳ・Ⅴ層の調査（掘り下げ、遺物取上、集石遺構の調査）。L・M-20・21区：Ⅷ層の調査（掘り下げ、遺物取上、土坑・落とし穴状遺構・集石遺構等の調査（掘り下げ、実測）

【11月】

M・N-10～14区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ、遺物取上、土坑墓の調査）。L・M-17～19区：Ⅳ・Ⅴ層の調査（掘り下げ、遺物取上、集石遺構の調査）。M・N-8・9区、I・J-23・24区、L・M-20・21区：Ⅵ・Ⅷ層の調査（掘り下げ、遺物取上、土坑・落とし穴状遺

構・集石遺構等の調査（掘り下げ、実測）、写真撮影）。I～J-17・18区：Ⅸ～XⅠ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。E～G-16・17区：旧石器時代（Ⅸ～XⅤ層）の調査終了

【12月】

G・H-23・24区、M・N-10～14・17・18区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ、遺物取上、土坑墓の調査）。I・J-22・23区：Ⅳ・Ⅴ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。M・N-8・9区、K・M-17～22区：Ⅵ・Ⅷ層の調査（掘り下げ、遺物取上、土坑・落とし穴状遺構・集石遺構等の調査（掘り下げ、実測）、写真撮影）。I・J-23・24区：Ⅸ～XⅠ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。竹中正己教授（鹿児島女子短期大学）道跡見学

【1月】

G・H-23・24区、M・N-10～14・17・18区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。I・J-22・23区：Ⅳ・Ⅴ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。M・N-8・9区、I・J-23・24区、K・M-17～22区：Ⅵ・Ⅷ層の調査（掘り下げ、遺物取上、土坑・落とし穴状遺構・集石遺構等の調査（掘り下げ、実測）、写真撮影）。I～J-17・18区：Ⅸ～XⅠ層の調査（掘り下げ、遺物取上）

【2月】

M・N-10～14・17・18区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。I・J-22・23区：Ⅳ・Ⅴ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。G・H-23・24区、M・N-8・9区、I・J-23・24区、L・M-17～22区：Ⅵ・Ⅷ層の調査（掘り下げ、遺物取上、土坑・落とし穴状遺構・集石遺構等の調査（掘り下げ、実測）、写真撮影）。I・J-17・18区、I～N-21～24区：Ⅸ～XⅠ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。空撮実施

【3月】

M・N-10～14・17・18区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。C～E-25・26区：Ⅳ～XⅠ層の調査（掘り下げ、遺物取上、集石遺構等の調査）。G・H-23・24区：Ⅵ～XⅠ層の調査（掘り下げ、遺物取上、集石遺構等の調査）。M・N-8・9区、L・M-17～22区：Ⅵ・Ⅷ層の調査（掘り下げ、遺物取上、土坑・落とし穴状遺構・集石遺構等の調査（掘り下げ、実測）、写真撮影）。I・J-17・18区、I～N-21～24区：Ⅸ～XⅠ層の調査（掘り下げ、遺物取上、蝶群の調査）及びXⅢ層確認調査。11日で平成22年度の調査終了

調査体制（平成23年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

	所 長	寺田仁志
調査企画	次長兼総務課長	田中明成
	次長兼南の郷文調査室長	井ノ上秀文
	調査第二課長	富田逸郎
	文化財主事兼	
	調査第二課	
調査担当	第一調査係長	八木澤一郎
	文化財主事	平木場秀男
		國師洋之 (10月～3月)
		藤山賢一郎 (5月～9月)
		黒川忠広
		湯場崎辰巳
		益山郁恵
	文化財研究員	今村結記
事務担当	総務係長	大園祥子
	主 査	高崎智博

調査の詳細（日誌抄より）

【5月】

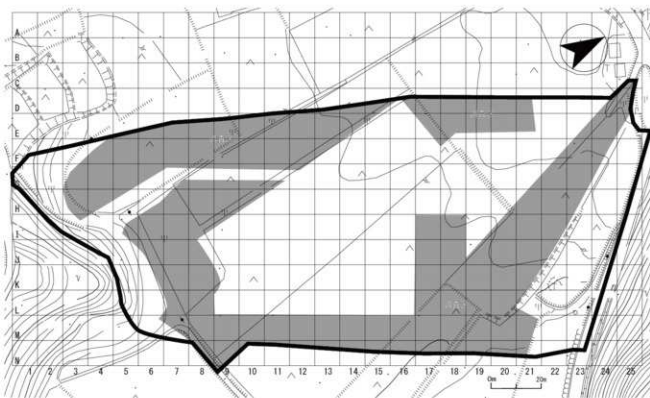
重機による表土剥ぎ。オリエンテーション、環境整備、道具搬入。C・D-25区、J～L-18～22区、M・N-16～20区：Ⅲ・Ⅳ層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構確認作業）。L～N-17～21区：Ⅵ・Ⅶ層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構確認作業）。M・N-7・8区：Ⅸ層以下旧石器時代の調査（遺構・遺物なし）。文化財課長現場視察

【6月】

I～L-18～22区、M・N-12～18区：Ⅲ～Ⅳ層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構確認作業、掘立柱建物跡・ピット・土坑・溝状遺構・古道の調査）。L～N-17～21区：Ⅵ・Ⅶ層の調査（掘り下げ、遺物取上の調査）。C・D-25区：Ⅴ～Ⅶ層の調査（掘り下げ、遺物取上、竪穴状遺構・連穴土坑・集石遺構の調査）及び旧石器時代（Ⅸ～ⅩⅦ層）の調査（遺構・遺物は確認できず調査を終了）。I・J-17・18区：ⅩⅡ～ⅩⅦ層の調査（掘り下げ、遺物取上）。調査が終了したC・D-25区及びN-22・23区を引き渡し。

【7月】

D～F-11～16区：重機による表土剥ぎ。E～N-12～25区：Ⅳb層の調査（掘り下げ、遺物取上、遺構確認作業、土坑墓の調査）。L～N-16～21区：Ⅷ層（薩



第6図 平成23年度調査範囲図

摩火山灰層)上面での遺構確認作業で堅穴状遺構・土坑・集石遺構等検出。K-17・18区、M・N-10・11区:IX～XII層の調査(掘り下げ、遺物取上、礫群の調査)。M・N-10・11区は調査終了。I・J-17・18区: XVI層まで調査を行ったが遺構・遺物は確認できず調査終了。大崎町母子暮居会遺跡見学。産業界の遺跡訪問

【8月】

D-H-9～16区: III層で遺構確認作業。E-L-18～24区、M・N-15・16区: IV層の調査(掘り下げ、遺物取上、弥生時代堅穴住居跡及び縄文時代晩期土坑の調査)。M・N-12～14・16～18区: VII層(薩摩火山灰層)上面での遺構確認作業。落し穴・集石遺構の検出・調査。M・N-19～21区: X III～XVI層の調査。NHK鹿児島象予報士今村氏の取材。聖徳大学学生の職場見学。大崎町みのり福祉作業所作業員の遺跡見学

【9月】

E-H-3～7区: 表土剥ぎ。D-F-10～16区: III a層検出の遺構調査(掘り下げ、実測、写真撮影、遺構内埋土フローテーション)。M・N-16～18区: 縄文時代早期の堅穴住居跡・集石遺構の調査及び旧石器時代の調査。E-L-21～25区: IV b層掘り下げ。縄文時代晩期～近世までの遺構実測。I-L-18～20区: V層の調査(掘り下げ、縄文時代晩期土坑検出)。テフラ分析・植物珪酸体分析・放射性炭素年代測定等科学分析委託

【10月】

E-H-3～7区: 表土剥ぎ。D-F-10～16区: III a層検出の遺構調査(掘り下げ、実測、写真撮影、遺構内埋土フローテーション)。M・N-16～18区: 縄文時代早期の堅穴住居跡・集石遺構の調査及び旧石器時代の調査(調査終了)。E-L-21～25区: IV b層掘り下げ。縄文時代晩期～近世までの遺構実測。I-L-18～20区: V層の調査(掘り下げ、縄文時代晩期土坑検出)。M・N-7～19区: 引渡し

【11月】

D-H-3～16区: 古代・中世の掘立柱建物跡・土坑等の調査(掘り下げ、実測、写真撮影)。G-J-7～11区: 中世の掘立柱建物跡・土坑等の調査(掘り下げ、実測、写真撮影、遺構内埋土フローテーション)。I-M-18～23区: VI・VII層の調査(掘り下げ、遺物取上、縄文時代早期集石遺構の実測等)。D-I-20～24区: V～VI層の調査(掘り下げ、遺物取上、縄文時代晩期及び早期の土坑・集石遺構の実測等)。放射性年代測定の委託。大崎町立栗田小学校6年生遺跡見学

【12月】

D-H-3～16区: 古代・中世の掘立柱建物跡・土坑等の調査(掘り下げ、実測、写真撮影)。G-J-7～11区: 中世の掘立柱建物跡・土坑等の調査(掘り下げ、実測、写真撮影、遺構内埋土フローテーション)。D-

E-16～18区、H-M-5～8区: 重機による表土剥ぎ。D-M-18～24区: V～VII層の調査(掘り下げ、遺物取上、縄文時代早期土坑・集石遺構の実測等)。集石遺構実測委託。長崎県埋蔵文化財センター職員遺跡視察

【1月】

D-H-3～16区: 古代・中世の掘立柱建物跡・土坑等の調査(掘り下げ、実測、写真撮影)。D-M-5～11区: 中世の掘立柱建物跡・土坑等の調査(掘り下げ、実測、写真撮影、遺構内埋土フローテーション)。I-M-18～20区: VII層及びIX層(旧石器時代該当層)の調査。F-L-21～24区: VI・VII層の調査(掘り下げ、遺物取上、土坑・集石遺構・石斧デボの実測等)。D-E-23～25区: IX～XII層の調査(遺構・遺物なし)。E-F-16～19区: 重機による表土剥ぎ

【2月】

D-H-3～16区、D-M-5～11区: 遺構確認のための精査。D-E-23～25区、I-M-18～23区: IX～XVI層の調査(掘り下げ、遺物取上、礫群実測等を実施し、調査終了)。D-H-16～24区: 重機による表土剥ぎ及びIII層の調査。空中写真撮影実施

【3月】

F-H-21～24区: IX～XVI層の調査及び調査終了。土坑・住居埋土フローテーション実施。D-H-16～24区: 重機による表土剥ぎ及びIII層の調査。9日で平成23年度の調査終了

調査体制(平成24年度)

事業主体	国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所		
調査主体	鹿児島県教育委員会		
企画・調整	鹿児島県教育庁文化財課		
調査統括	鹿児島県立埋蔵文化財センター		
	所	長	寺田仁志
調査企画	次長兼総務課長	田中明成	
	次長兼南の縄文調査室長	井ノ上秀文	
	調査第二課長	富田逸郎	
	文化財主事兼調査第二課		
	第一調査係長	八木澤一郎	
調査担当	文化財主事	平木場秀男	
		(10月～3月)	
		松下建生	
		(5月～9月)	
		黒川忠広	
		光永誠	
		湯崎崎辰巳	
	文化財調査員	岩元康成	
		花田寛典	

査)及びⅨ～ⅩⅥ(旧石器時代)の確認調査(遺構・遺物確認できず調査終了)。D～F-9～12区:Ⅵ層の調査(掘り下げ、遺物取上)。D～F-13～16区:ⅩⅤ・ⅩⅥ層(旧石器時代)の調査(遺構・遺物確認できず調査終了)。D～H-16～20区:Ⅸ～ⅩⅡ層の調査(掘り下げ、遺物取上)。D～H-21～24区:Ⅶ層上面の調査(遺物取上、堅穴住居跡・連穴土坑・土坑・集石遺構の調査)。作業員の健康診断。空中写真撮影。森脇広教授(鹿児島大学法文学部)調査指導

【11月】

J～M-4～8区:埋め戻し。D～F-9～12区:Ⅵ層の調査(掘り下げ、遺物取上)。D～F-13～16区:土層断面実測。D～H-16～24区:Ⅶ層上面検出の堅穴住居跡・連穴土坑・土坑・集石遺構の調査及び旧石器時代の調査を実施し調査終了。釜木自治会遺跡見学(国交省職員随行)。大崎町立釜木小学校6年生遺跡見学。いきいき木曜クラブ遺跡見学

【12月】

E～G-7・8区:Ⅳ層の調査(掘り下げ、遺物取上)。G～J-7～12区:Ⅲ層の調査(掘り下げ、遺物取上、土坑・柱穴の検出・調査)。D～G-Ⅸ～ⅩⅡ層(旧石器時代)の調査(掘り下げ、遺物取上)。火山灰の放射性炭素年代測定委託。大崎町立大崎第一中学校生徒による遺跡見学

【1月】

E～J-6～9区:Ⅳ～Ⅵ層の調査(掘り下げ、遺物取上)。G～I-9～11区:Ⅳ層の調査(掘り下げ、遺物取上、掘立柱建物跡の調査)。D～G-10～12区:ⅩⅠ～ⅩⅥ層(旧石器時代)の調査(遺構・遺物は確認できず調査終了)。G・H-11・12区:Ⅴ層の調査(掘り下げ、遺物取上)。大崎町立野方小学校児童による遺跡見学

【2月】

E～J-6～9区:Ⅸ～ⅩⅡ層の調査(遺構・遺物なし)。G～I-9～11区:Ⅴ～Ⅶ層の調査(掘り下げ、遺物取上、集石遺構の調査)及び掘立柱建物跡の調査。G・H-11・12区:Ⅵ～ⅩⅥ層の調査(遺構・遺物は確認できず掘り下げのみ)

【3月】

E～J-6～9区:Ⅸ～ⅩⅥ層の調査(遺構・遺物は確認できず調査終了)。次年度調査区の一部にトレンチを4か所設定し先行調査(掘り下げのみ)。土層断面剥ぎ取り実施。埋め戻し、安全対策等の措置。8日で平成24年度の調査終了

調査体制(平成25年度)

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

調査主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

調査統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
埋蔵文化財調査センター

	センター長	富田逸郎
調査企画	総務課長兼総務係長	山方直幸
	調査課長	鶴田静彦
	調査第一係長	八木澤一郎
調査担当	文化財専門員	平木場秀男
		田畑哲治
	文化財調査員	岩元康成
		深川祐子
事務担当	総務課長兼総務係長	山方直幸
	主査	岡村信吾

調査の詳細(日誌抄り)

【4月】

重機による表土剥ぎ。オリエンテーション、環境整備、道具搬入。E～G-3～6区:Ⅲ・Ⅳ層の調査(掘り下げ、遺物取上、検出した土坑・ピットの調査)

【5月】

E～G-5区:Ⅲ・Ⅳ層の調査(掘り下げ、遺物取上、土坑・ピットの調査)。E～H-2～6区:Ⅲ～Ⅴ層の調査(掘り下げ、遺物取上、土坑・ピット・集石遺構の調査)。M-6～8区:Ⅲ～Ⅶ層の調査(掘り下げ、遺物取上、集石遺構の調査)。大崎町立野方小学校の児童33人遺跡見学

【6月】

E～G-5区:Ⅲ・Ⅳ層の調査(掘り下げ、遺物取上、土坑・ピットの調査)。E～H-2～6区:Ⅲ～Ⅴ層の調査(掘り下げ、遺物取上、土坑・集石遺構・石器集積遺構の調査)。M-6～8区:Ⅳ層以下旧石器時代の調査、遺構・遺物は確認されず調査終了

【7月】

E～G-6区:Ⅳ層以下旧石器時代の調査、遺構・遺物は確認されず調査終了。E～G-5区:Ⅳ・Ⅴ層の調査(掘り下げ、遺物取上、土坑の調査)。F・G-4区:Ⅶ層の調査(掘り下げ、遺物取上、土坑の調査)。F・H-3～6区:Ⅸ～ⅩⅡ層(掘り下げ、遺物取上)。I-2～6区:重機による表土剥ぎ。Ⅲ層の調査(掘り下げ、遺物取上、ピットの調査)。大崎町野方いきいき講座受講者による遺跡見学

【8月】

E～G-5区:Ⅵ・Ⅶ層の調査(掘り下げ、遺物取上、連穴土坑の調査)。F・G-4区:Ⅸ～ⅩⅡ層の調査(掘

り下げ、遺物取上)。I-2~6区:Ⅲ・Ⅳ層の調査(掘り下げ、遺物取上、土坑・ピット・溝状遺構の調査)。F・H-3~6区:ⅩⅡ~ⅩⅤ層の調査(掘り下げ、遺物取上)、ⅩⅤ層までで調査終了。小能いきいきサロン受講者遺跡見学

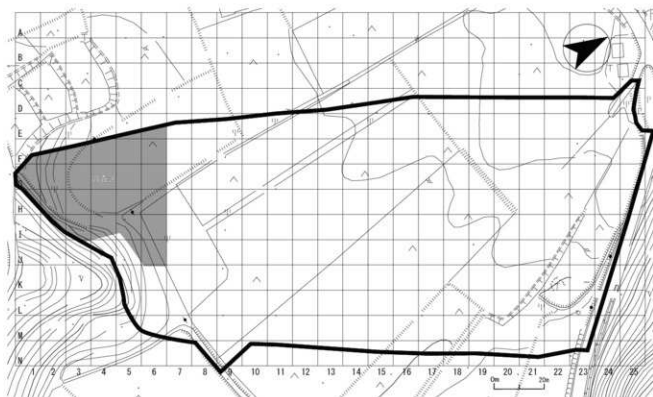
【9月】

E~G-5区:Ⅷ層~ⅩⅤ層の調査(掘り下げ、遺物取上)、ⅩⅤ層までで調査終了。F・G-4区:ⅩⅢ~ⅩⅤ層の調査、遺構・遺物は確認できず調査終了。I-2~6区:Ⅳ~Ⅴ層の調査(掘り下げ、遺物取上、土坑

の調査)。J-5・6区:重機による表土剥ぎ。Ⅲ・Ⅳ層の調査(掘り下げ、遺物取上、土坑・溝状遺構・古道の調査)。公益財団法人鹿児島県文化振興財団橋口和弘専務理事発掘調査現場視察。空中写真撮影

【10月】

I・J-2~6区:Ⅳ~ⅩⅤ層の調査(掘り下げ、遺物取上、土坑・集石遺構の調査)、ⅩⅤ層までで調査終了。重機による埋め戻し。現地引渡により天神段遺跡における本調査のすべてを終了。国交省九州整備局会計課長発掘現場視察



第8図 平成25年度調査範囲図

第4節 整理・報告書作成作業

本報告書刊行に伴う整理・報告書作成作業は、平成22年度から発掘調査作業と並行して実施した。

平成22年度から平成24年度までは鹿児島県立埋蔵文化財センター東九州整理作業所で、平成25年度・平成26年度は公益財団法人鹿児島県文化振興財団埋蔵文化財調査センター第一整理作業所で実施した。

作業内容は、以下のとおりである。

1 整理作業

(1) 遺構

実測図と図面台帳との照合、遺構別・時代別に実測図の仕分け等

(2) 遺物

ア 土器・石器共通

水洗い、遺構内出土遺物と包含層出土遺物との仕分け、遺物と遺物台帳や遺構実測図との照合

イ 土器

注記、分類、実測する土器の選別

ウ 石器と一般裸の仕分け、分類、実測する石器の選別

2 報告書作成作業

(1) 遺構図のペントレースやデジタルトレース、遺構配置図の作成、報告書掲載用写真選別

(2) 土器の実測、拓本、トレース、レイアウト、観察表作成、原稿執筆、報告書掲載用写真撮影

(3) 石器の実測及び実測委託、トレース、レイアウト、観察表作成、原稿執筆、報告書掲載用写真撮影

(4) 土器・石器以外の遺物の実測、トレース、観察表作成、原稿執筆、報告書掲載用写真撮影

また、大学共同利用機関法人人間文化研究機構理事の小野正敏先生に中世の集落に関する指導を、日本考古学協会並びに鹿児島県考古学会会員の橋口高武先生に和鑑に関する指導をいただいた。

整理・報告書作成作業に関する調査体制は以下のとおりである。

作成体制（平成22年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

作成主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

	所	長	山下吉美
作成企画	〆	次長兼総務課長	田中明成
	〆	次長兼南の縄文調査室長	中村耕治
	〆	調査第二課長	井ノ上秀文
	〆	文化財主事兼	
		調査第二課	

	第一調査係長	前迫亮一	
作成担当	〆	調査第二課長	長崎慎太郎
	〆	文化財調査員	岩永勇亮
事務担当	〆	総務係長	大園祥子
	〆	主事	高崎智博

作成体制（平成23年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

作成主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

	所	長	寺田仁志
作成企画	〆	次長兼総務課長	田中明成
	〆	次長兼南の縄文調査室長	井ノ上秀文
	〆	調査第二課長	富田逸郎
	〆	文化財主事兼	
		調査第二課	
		第一調査係長	八木澤一郎
作成担当	〆	調査第二課長	富田逸郎
	〆	文化財主事	國師洋之
			(5月～9月)
	〆		田畑哲治
	〆		永濱功治
	〆		藤山賢一郎
			(10月～3月)
	〆		市村哲二
事務担当	〆	総務係長	大園祥子
	〆	主査	高崎智博

作成体制（平成24年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

作成主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

作成統括 鹿児島県立埋蔵文化財センター

	所	長	寺田仁志
作成企画	〆	次長兼総務課長	田中明成
	〆	次長兼南の縄文調査室長	井ノ上秀文
	〆	調査第二課長	富田逸郎
	〆	文化財主事兼	
		調査第二課	
		第一調査係長	八木澤一郎
作成担当	〆	文化財主事	平木場秀男
			(5月～9月)
	〆		松下建生
			(10月～3月)
		文化財調査員	橋口拓也

事務担当 ＊ 花 園 友 美
 ＊ 総 務 係 長 大 園 祥 子
 ＊ 主 査 岡 村 信 吾

作成体制（平成25年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

作成主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

作成統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
 埋蔵文化財調査センター

作成企画 ＊ センター長 富田逸郎
 ＊ 総務課長兼総務係長 山方直幸

＊ 調査課長 鶴田静彦
 ＊ 調査第一係長 八木澤一郎

作成担当 ＊ 文化財専門員 平木場秀男
 (10月～3月)

＊ ＊ 田畑哲治
 (10月～3月)

＊ ＊ 松下建生
 ＊ ＊ 井手上馨弘

＊ 文化財調査員 花園友美
 ＊ ＊ 岩元康成
 (10月～3月)

＊ ＊ 花田寛典
 ＊ ＊ 江神めぐみ

＊ 文化財調査員 深川祐子
 (10月～3月)

事務担当 ＊ 総務課長兼総務係長 山方直幸
 ＊ 主 査 岡 村 信 吾

作成指導 大学共同利用機関法人人間文化研究機構
 理 事 小野正敏

日本考古学協会並びに鹿児島県考古学会
 会 員 橋口尚武

作成体制（平成26年度）

事業主体 国土交通省九州地方整備局大隅河川国道事務所

作成主体 鹿児島県教育委員会

企画・調整 鹿児島県教育庁文化財課

作成統括 公益財団法人鹿児島県文化振興財団
 埋蔵文化財調査センター

作成企画 ＊ センター長 堂込秀人
 ＊ 総務課長兼総務係長 山方直幸

＊ 調査課長 八木澤一郎
 ＊ 調査第二係長 寺原 徹

作成担当 ＊ 文化財専門員 長野真一
 ＊ ＊ 松下建生

＊ ＊ 平木場秀男
 ＊ ＊ 田畑哲治

＊ ＊ 井手上馨弘
 ＊ 文化財調査員 花園友美

＊ ＊ 江神めぐみ
 ＊ ＊ 深川祐子

事務担当 ＊ 総務課長兼総務係長 山方直幸
 ＊ 主 査 岡 村 信 吾

第二章 遺跡の位置と環境

第1節 地理的環境

天神段遺跡は、曾於郡大崎町野方に所在する。大崎町は、鹿児島県の東部を形成する大隅半島の中央部東側に位置し、東西に約8km、南北に約18km、総面積は100.82km²である。東側に志布志市、西側に鹿屋市、南側に肝属郡東串良町、北側は曾於市と接し、南部では黒潮の流れる志布志湾に面している。

大隅半島の地形は、九州山地の延長をなす東西の山地と、その間の丘陵、台地及び低地などの低地帯から形成されている。東側の山地は、志布志湾北部から宮崎県に突出した形で北から南へ延びている鰐塚山地（南那珂山地ともいう）である。主峰は宮崎県内の鰐塚山(1,119m)で中生層の地質からなっている。西側の山地は、北部の霧島火山の分脈から湧奥に形成された始良カルデラのカルデラ壁を含み南部の高隈連山へと連なっている。高隈山地は、北部の白鹿岳・荒磯岳など500～600m級の山々と、南部の大麓柄岳(1,236.8m)を主峰に横岳・御岳など1,000m級の山から成る山地で、山容は急峻で深い森林に覆われている。

地質は、高隈山周辺に分布している新生代古第3紀の日南層群によって大隅半島の基盤をなしている。山間地を埋めるような形で、洪積世の火山活動による火砕流が堆積し、丘陵や台地が広く分布した典型的なシラス地形となっている。この火砕流は、南西部の鹿児島湾口に形成された阿多カルデラの火砕流や、湧奥に形成された始良カルデラの入戸火砕流である。火砕流堆積物は、堆積後現在に至るまで大小多くの河川で開析され、断片的な台地を残すだけの丘陵地形や原面はほとんど浸食されず残った広大な台地となっている。一方、低地は、高隈山地や鰐塚山地などに水源を持つ大小の河川が走り志布志湾、鹿児島湾などに注いでいる。この河川は、上・中流域で狭い谷底平野を形成し、また何段かの河岸段丘も認められる。

大崎町の地形は、志布志湾に面した大崎地区と、内陸部に位置する野方地区の二つの地区が南北に連結する瓢箪状を呈する。南部は海岸線に向かい緩やかな傾斜をなす起伏の少ない平坦な地形である。北部は、標高150mから200mの丘陵地帯であり、北端部では谷間の多い起伏の激しい地形である。高隈山系などに端を発する菱田川、田原川、持留川の三つの川が南流し、志布志湾に注いでいる。南部は、この3河川によってシラス台地を開析された水田地帯がひろがっている。北部は、台地上に畑地が形成されている。地質は、シラス台地上に形成された黒色火山灰土壌が多く、低地部に位置する水田の一部

では泥炭層をなしているところがある。

遺跡が所在する野方地区は、標高200mのシラス台地を菱田川の支流である大鳥川が浸食し、小台地群に分断された起伏の多い地形である。台地上は、畜産や畑作地として利用されており、天神段遺跡はこの台地の縁辺部に位置している。(第9図・第10図)

第2節 歴史的環境

天神段遺跡の所在する大崎町では、主に田原川、持留川、菱田川、大鳥川を臨む台地の縁辺部に沿って遺跡の分布がみられる。本遺跡の周辺は、これまで本格的な発掘調査がなされていないため詳細は不明であったが、近年、大崎町や東九州自動車道建設に伴う発掘調査成果等から、次第に様相が明らかになりつつある。

旧石器時代

天神段遺跡から、ナイフ形石器文化期と細石刃文化期の石器製作跡及び石器類が検出・出土している。

縄文時代

近年、町内において、縄文時代の遺跡の発掘調査が増えつつある。金丸城跡で石版式土器・石鏃・凹石、二子塚入遺跡からは壱ノ神式土器・落とし穴状遺構2基、下堀遺跡からは土器・集石遺構13基、天神段遺跡からは前平式土器・桑ノ丸式土器・石版式土器・壱ノ神式土器・苦浜式土器・石鏃・打製石斧・多数の集石遺構・連穴土坑・落とし穴状遺構といった縄文時代早期の遺構・遺物の発見が報じられている。

天神段遺跡と同じ野方地区にある立山B遺跡では、前期の曾畑式土器、中期の阿高式土器、晩期の黒川式土器が出土している。下堀遺跡では後期の指宿式土器、細山田遺跡からは後期の西平式土器が出土している。

弥生時代

名勝「くにの松原」の砂丘後背地に立地する沢目遺跡は、砂丘に埋没した中期から終末期にかけての遺跡である。平成11年の町による発掘調査では、53軒の住居跡・約20基の土坑・約180基の柱穴が発見され、入来Ⅰ式土器、入来Ⅱ式土器、山ノ口Ⅰ式土器、山ノ口Ⅱ式土器、須玖式土器・鉄製品・軽石製加工品が出土している。内陸部の標高約50mの台地に立地する下堀遺跡からは、山ノ口式土器の他、須玖式土器を伴い直径8mの円形大型住居2軒・掘立柱建物跡5棟が検出されている。桜迫遺跡からは山ノ口式土器が出土している。田原川・持留川沿いには弥生土器片の散布地としての遺跡が多く点在し、特に河口付近に当たる横瀬地域では甕棺破片が採集されている。



第9图 退耕路边地形写真



图 10-1 地形图与等高线图

古墳時代

大崎町とその周辺の志布志湾沿いは、南九州では数少ない前方後円墳をはじめとした古墳群を有し、畿内との関連をうかがわせる。

横瀬古墳は古墳時代中期（5世紀後半頃）の大型前方後円墳で、隣接する肝属郡東牟婁郡仁太塚古墳について県内第2の規模を誇る。平成2年の鹿児島大学と琉球大学の測量調査では、全長160m、墳長132m、前方部幅72m、前方部長68m、後円部径64m、くびれ部幅48mを測り、墳丘からは円筒埴輪片、象形埴輪片が出土している。昭和53年の大隅地区埋蔵文化財分布調査で実施した範囲確認調査では周濠跡も確認され、周濠跡からは伽耶系陶質土器及び大阪府陶邑産の須恵器も出土している。なお、濠の幅は12～23m、深さは約15mである。墳丘の高さについては、後円部が10.5m、前方部が11.5mであるが、後円部の頂上部に石室が露呈していることから、もともとの後円部は現在より高かったと考えられる。被葬者については明らかにされていないが、明治35年に盗掘を受け、その際に腐食した直刀や鍔、勾玉類が出土し、石室内は朱塗りであったと伝えられ、被葬者の実力をうかがわせる。

神領古墳群では、前方後円墳4基、円墳8基で構成され、また、地下式横穴墓7基の存在が知られている。特に6号墳は全長43m、後円部径19m、高さ3m、前方部幅16m、高さ2mの前方後円墳で、後円部に堅穴石室がある。昭和37年に日光鏡・仿製獣帯鏡各1面が採集され、昭和43年の調査では、石室は花崗岩質板石6枚を使用した組合せ石棺で、鉄剣・鉄刀・鏡等の副葬品が確認された。神領古墳群の地下式横穴1号は、昭和35年に調査され、長方形で家形の玄室、妻入りの羨道部取り付け、鉄剣・イモガイ製貝鏡・内向花文鏡などの副葬品が確認された。地下式横穴3・4号は、昭和55年に調査された。地下式横穴5号は、昭和62年に調査され、イモガイ製貝鏡が出土した。地下式横穴6号は、平成2年に調査され、玄室内には南側に歯が数本、北側に大腿骨が残存しており、副葬品は確認できなかった。

町内では他に、高塚古墳として飯隈遺跡群・田中古墳群・後迫古墳群が知られ、地下式横穴墓として飯隈地下式横穴墓群・鷲塚地下式横穴墓群が知られている。

その他、二子塚遺跡Aで住居跡・土師器・成川式土器、沢目遺跡で古墳時代初頭の住居跡や布留式土器をまわって作られた土師器、下堀遺跡で住居跡・溝状遺構・地下式横穴墓・鉄剣・鉄鏡が確認されている。

古代・中世

古代の遺跡としては、天神段遺跡で古代の掘立柱建物跡が確認されている。また、下堀遺跡では土師器と土坑が確認されている。

中世の遺跡はほとんどが山城であり、大崎城跡・胡摩ヶ

崎城跡・野郎城跡・竜相城跡・金丸城跡・椿谷城・遠見ヶ丘があげられる。金丸城跡は、平成11～12年に調査され、溝状遺構・土坑・龍泉窯系及び同安窯系の青磁・東播系須恵器・白磁・青花・瓦質土器・備前焼埴鉢・天目碗などが確認されている。

また、近年の発掘調査から、下堀遺跡では、溝状遺構・鉄跡・青磁・青花・中国陶器などが確認されている。天神段遺跡では、掘立柱建物跡・溝状遺構・土坑墓・土坑・土師器・須恵器・青磁・白磁・天目碗・鉄製品・青銅製品・鉄滓・砥石・滑石製石鍋片などが確認されている。中でも土坑墓1号からは、同安窯系青磁6点・青磁1点・青白磁1点・銅鏡1点・滑石製石鍋2点・鉄製品・木製品・土師器などの副葬品が確認されている。

近世

金丸城跡では、掘立柱建物跡・焼土を伴う土坑・軽石集積区・肥前系染付・龍門司窯および苗代川窯産の薩摩焼・鉄製品・鉄滓などが確認されている。天神段遺跡では、安永ボラ（1779年）を埋土とする畝状遺構・薩摩焼などが確認されている。

近世の野方地区は、寛永年間（1624～1643）に薩摩藩の私領主（一門家）である加治木島津家の領地（持切在）として開墾された。一方、荒佐野の照日神社には、大坂幕の陣後の元禄2年（1689）に撰津・河内・和泉から薩摩藩へ移住し、荒佐野を開拓した人々の記念碑がある。荒佐野の氏神として移住の際に勧進された伊勢神社は、明治期に旧野方村の村社であった照日神社に合祀され、現在の照日神社となった。字名の加治木瀬の由来については、荒佐業と加治木業の領地境界を示す堀があったことから、名付けられたと言われている。

（参考・引用文献）

- 教仁郷断二 1951 「大崎町史」
- 大崎町 1975 「大崎町史（明治百年）」
- 大崎町教育委員会 2001 「立山B遺跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（3）
- 大崎町教育委員会 2005 「金丸城跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（4）
- 大崎町教育委員会 2005 「下堀遺跡・大崎細山田段遺跡」大崎町埋蔵文化財発掘調査報告書（5）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2010 「加治木堀遺跡・宮ノ本遺跡・椿山遺跡・柿木段遺跡・野方前段遺跡A地点」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（154）
- 鹿児島県立埋蔵文化財センター 2012 「宮ヶ原遺跡・野方前段遺跡B地点・柿木段遺跡2」鹿児島県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書（173）

第1表 周辺遺跡一覧表

番号	遺跡台帳番号	遺跡名	所在地	種類	現状	時代	地形	遺物等	備考
1	70	62	天神段	鹿児島県曾於郡大崎町野方天神段	散布地		台地	貝殻・灰土・ 前平式・土師 器・白磁	本報告書
2	70	63	野方前段	鹿児島県曾於郡大崎町野方前段	散布地		台地	塞ノ神式・黒 川式・吉ヶ崎 式・土師器	H21年度、 H23年度、 刊行
3	70	64	内ヶ追	鹿児島県曾於郡大崎町野方内ヶ追	散布地		台地	成川式	H9年農政分布
4	70	45	倉元	鹿児島県曾於郡大崎町野方倉元	散布地		台地	土器片	H3年農政分布
5	70	14	荒佐野	鹿児島県曾於郡大崎町野方荒佐野	散布地	畑地	弥生(中)	土器片・磨製 石斧	
6	70	91	宮ノ本	鹿児島県曾於郡大崎町野方	散布地		台地		H19年発掘調査
7	70	108	亀形	鹿児島県曾於郡大崎町野方2622-1外	散布地		台地	土器	H12年農政分布
8	70	107	岩井場	鹿児島県曾於郡大崎町野方2572-2外	散布地		台地	土器	H12年農政分布
9	70	10	原別府	鹿児島県曾於郡大崎町野方	散布地	畑地	縄文(後)	土器片・打製 石斧	
10	70	7	加治木堀	鹿児島県曾於郡大崎町野方加治木堀	散布地	畑地	縄文、 弥生、中世	土器片・山之 口式・鉄鏃	H19年発掘調査
11	70	109	椿山	鹿児島県曾於郡大崎町野方3179-5	散布地		台地	岩崎式・吉ヶ 崎式	H19～20年発 掘調査
12	70	118	椿山	鹿児島県曾於郡大崎町野方	散布地		台地		
13	70	54	岩井場段	鹿児島県曾於郡大崎町野方中段	散布地		台地		H8年農政分布
14	70	65	瀬ノ堰A	鹿児島県曾於郡大崎町野方瀬ノ堰・ 椿山・又合流	散布地		台地	敲石・土器片・ 成川式	H9年農政分布
15	70	66	瀬ノ堰B	鹿児島県曾於郡大崎町野方瀬ノ堰	散布地		台地		H9年農政分布
16	70	39	二松	鹿児島県曾於郡大崎町野方瀬ノ堰	散布地		台地		
17	25	139	柿木段	鹿児島県曾於郡大崎町立小野柿木段	散布地		低地	入佐式・石斧・ 土師器・須恵 器・鉄鏃	H21年度、 H23年度、 刊行
18	70	43	透見ヶ丘	鹿児島県曾於郡大崎町野方立小野	散布地		台地		
19	64	2	徳光ヶ丘	鹿児島県鹿屋市輝北町下百引東原 別府	散布地		台地	春日式・岩崎 式・草野式・ 敲石・夜臼式	S56年度 分布調査
20	12	151	大牧	鹿児島県鹿屋市上高隈町	散布地				H19年分布調査
21	12	152	樋ノ口I	鹿児島県鹿屋市上高隈町	散布地				H19年分布調査
22	12	153	樋ノ口II	鹿児島県鹿屋市上高隈町	散布地				H19年分布調査
23	71	2.3	立小野A、B	鹿児島県鹿屋市申良町細山田立小野	散布地	畑地	縄文	市来式・指宿 式・石器	
24	71	8	立小野	鹿児島県鹿屋市申良町細山田立小野	散布地	畑地	縄文(後)、 弥生	弥生土器	

第3節 鹿屋申良JCT～曾於弥五郎IC間の遺跡

東九州自動車道の鹿屋申良JCT～曾於弥五郎IC間には、第2表に示すとおり13の遺跡が存在する。報告書が刊行されている遺跡もあるが、ここでは各遺跡の概要だけを記載するので、詳細については報告書を参照していただきたい。

第2表 鹿屋申良JCT～曾於弥五郎IC間の遺跡

遺跡名	発掘調査	報告書刊行
1 十三塚遺跡	終了	H 22年度刊行
2 石楨遺跡 (鹿屋申良JCT)	終了	
3 樋ノ口遺跡	終了	概要報告のみ
4 大牧遺跡	試掘調査のみ実施	
5 柿木段遺跡	終了	H 21・H 23年度刊行
6 椿山遺跡		
7 加治木堀遺跡	終了	H 21年度刊行(合本)
8 宮ノ本遺跡		
9 野方前段遺跡	終了	A地点はH 21年度、 B地点はH 23年度、 合本で刊行
10 天神段遺跡	終了	一部、H 26年度刊行
11 宮ヶ原遺跡	終了	H 23年度刊行(合本)
12 チシャノ木遺跡	終了	H 19年度刊行
13 鳥居川遺跡 (曾於弥五郎IC)		

1 **十三塚遺跡** 鹿屋市申良町細山田字十三塚に所在し、標高約140mの台地上に立地している。調査の結果、遺構は弥生時代中期の竪穴住居跡・掘立柱建物跡・土坑・古道路、近世以降の溝状遺構等が検出された。遺物は縄文時代早期・後期・晩期の土器、弥生時代中期の土器、勾玉・石器・鉄器・鉄製品、近世の古銭等が出土した。

弥生時代中期の竪穴住居跡は遺跡に比較的近い王子遺跡(鹿屋市王子町)や益畑遺跡(鹿屋市申良町)でも確認されており、当時の南九州の集落形成の在り方を解明する上で貴重な資料となると考える。

2 **石楨遺跡** 鹿屋市申良町細山田字石楨に所在し、標高約140mの台地の縁部に立地している。また、十三塚遺跡とは隣接しており、十三塚遺跡とともに鹿屋申良JCTに立地している。調査の結果、遺構は縄文時代早期の集石遺構・土坑が検出された。遺物は縄文時代早期と弥生時代の土器や石器が出土した。

3 **樋ノ口遺跡** 鹿屋市下高隈町樋ノ口に所在し、標高約110mの台地上に立地している。確認調査の結果、遺物包含層の残存が少なく、遺構・遺物は確認されなかったため本調査は行わず調査を終了した。

4 **大牧遺跡** 鹿屋市下高隈町大牧に所在し、標高約130mの台地上に立地している。試掘調査の結果、対象地には包含層の残存は確認できなかった。

5 **柿木段遺跡** 曾於郡大崎町立小野字柿木段に所在

し、標高約150mの小さな谷の窪地とその下部にある標高145mの広い谷の平坦部に立地している。

平成19・20・22年度に発掘調査が行われ、平成19・20年度の調査終了箇所については平成21年度に報告書が刊行された。平成19・20年度の調査の結果、遺構は縄文時代晩期の落とし穴・石芥埋納遺構・土坑、古代のカマド跡・溝状遺構・古道が検出された。遺物は縄文時代晩期の土器や石器、弥生時代の土器、古墳時代の土器や鉄器、古代の土師器や須恵器、中世～近世の青磁・白磁・染付・薩摩焼等が出土した。平成22年度の調査の結果、遺構は古代及び中世～近世の溝状遺構・道路・土坑が検出された。遺物は縄文時代晩期の土器や石器、古代の土師器、近世の陶器・染付・石楨・鉄製品等が出土した。

6 **椿山遺跡** 曾於郡大崎町野方字椿山に所在し、標高約200mの台地縁部に立地している。調査の結果、遺構は縄文時代の落とし穴、古代～中世の溝状遺構や古道跡等が検出された。遺物は縄文時代中期・後期の土器や石器、弥生時代中期の土器が出土した。

7 **加治木堀遺跡** 曾於郡大崎町野方字加治木堀に所在し、標高約200mの台地中央部に立地している。調査の結果、遺構は縄文時代中期の落とし穴、古代～中世の溝状遺構・古道跡・畝状遺構・土坑等が検出された。遺物は縄文時代中期の土器や石器、弥生時代中期の土器、古墳時代の土器や鉄器、古代～中世の青磁・白磁・軽石製品等が出土した。

8 **宮ノ本遺跡** 曾於郡大崎町野方字宮ノ本に所在し、標高約200mの台地縁部に立地している。加治木堀遺跡とは原道72号線を挟んで隣接している。調査の結果、遺構・遺物は確認されなかった。

9 **野方前段遺跡** 曾於郡大崎町野方字野方前段に所在し、標高約200mの台地縁部に立地している。調査区をA・Bの2地点に分けて調査し、A地点は平成21年度に報告書が刊行された。A地点の調査の結果、遺構は縄文時代の集石遺構・落とし穴・土坑、弥生時代の土坑、古代～中世の溝状遺構・古道跡・土坑、近世の土坑が検出された。遺物は縄文時代早期・後期・晩期の土器や石器、弥生時代中期の土器、古代～中世の須恵器、近世の染付や薩摩焼等が出土した。B地点の調査の結果、遺構は縄文時代早期の集石遺構・土坑や縄文時代中・後期の落とし穴・土坑が検出された。遺物は、縄文時代早期の土器や石器、弥生時代の土器が出土した。

10 **天神段遺跡** 曾於郡大崎町野方及び志布志市有明町に所在し、標高200mの台地縁部に立地している。調査の結果、遺構は旧石器時代の礫群、縄文時代早期・前期・晩期の集石遺構・落とし穴・連穴土坑・土坑、古代の掘立柱建物跡・竪穴状遺構・土坑・ピット・炉跡・焼土跡、中世の土坑墓・掘立柱建物跡・土坑・溝状遺構・ピット、近世の畝状遺構、土坑等が検出された。遺物は

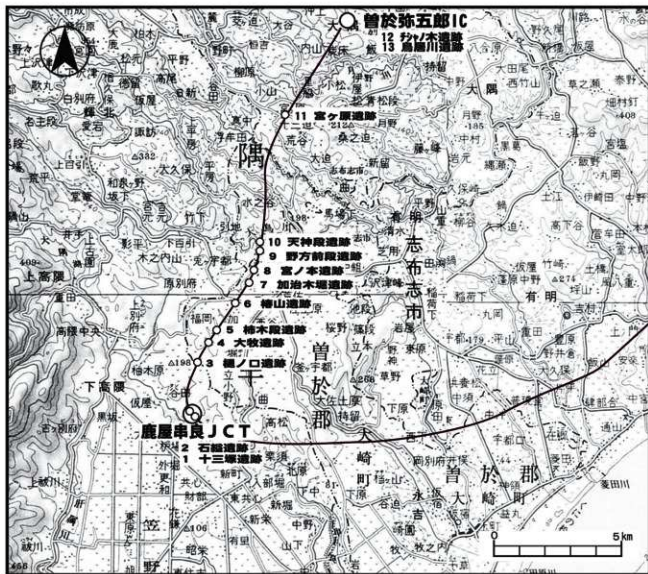
旧石器時代の石器、縄文時代早期～晩期の土器や西日本最古級の石剣をはじめとする石器、古代の土師壺や墨書土器・刻書土器、中世の土坑墓内から青磁や白磁の碗や皿などの陶磁器・銅鏡・和鉄。完形品で入れ子状態で出土した滑石製石鍋、近世の陶磁器等が出土した。各時代とも遺構・遺物の数が多く、遺跡内外における人々の生活の変遷を知る上で貴重な資料となると考える。

11 宮ヶ原遺跡 曾於市大隅町荒谷及び大谷に所在し、標高約230mの台地上に立地している。調査の結果、遺構は旧石器時代の礫群、縄文時代早期の集石遺構・石皿集積遺構・落とし穴、縄文時代前期の落とし穴、縄文時代中期～後期の集石遺構、落とし穴、縄文時代後期～晩期の集石遺構、近世以降の硬化面を伴う遺跡及び溝状遺構等が検出された。遺物は旧石器時代の遺物、縄文時代早期の土器や石器、縄文時代前期の土器、縄文時代中期～後期の土器、弥生時代中期の土器、硬化面を伴う遺跡

から近世の煙管や薩摩焼等が出土した。

12 チシャノ木遺跡 曾於市大隅町岩川字チシャノ木に所在し、標高約220mの台地上に立地している。また、鳥居川遺跡とは谷を挟んで隣接しており、鳥居川遺跡とともに曾於弥生ⅠC内に立地している。調査の結果、遺構は縄文時代早期の集石遺構・土坑、古代～中世の落とし穴、近世の溝状遺構が検出された。遺物は旧石器時代の遺物、縄文時代早期・後期・晩期の土器（組織痕土器を含む）や石器が出土した。その他、火打ち石、寛永通宝、軽石製品等も出土した。

13 鳥居川遺跡 曾於市大隅町岩川字鳥居川に所在し、標高約220mの台地上に立地している。調査の結果、縄文時代後期・晩期の遺跡であることが判明した。遺構は確認されず、遺物は土器では縄文時代早期の押型文土器・塞ノ神式土器、縄文時代晩期の組織痕土器が、石器では石鏡が出土した。



第12図 鹿屋串良JCT～曾於弥生IIC間の遺跡位置図

第三章 調査の方法と層序

第1節 調査の方法

本節では、発掘調査の方法、遺構の認定と検出方法、整理報告書作成作業について簡単に述べる。

1 発掘調査の方法

天神段遺跡の発掘調査は、平成19年度から平成25年度まで7年に渡り実施した。調査対象表面積は19,042㎡、調査対象延面積は97,240㎡である。

調査区割り(グリッド)は、センターライン上の「STA76+60」と「STA76+80」の延長線を中心に、南側から北側に向かって10m間隔に、1、2、3・・・、西側から東側に向かってA、B、C・・・と設定した。

このグリッドを基にして、遺構・遺物の測量作業を行うこととした。また、トータルステーションで測量作業を行う場合、測量座標はN-1区の左下を原点(0,0)とし、縦軸をX、横軸をYとした。

発掘調査は、基本的に重機で表土を除去した後、確認調査の結果に基づき、遺物包含層については人力で掘り下げを行った。無遺物層、火山灰の硬化層については、一部重機を用いて慎重に掘り下げた。遺構については、移植ごて等の遺構に適した道具を用いて慎重に調査し、実測、写真撮影等を行い、遺物については、平板実測、またはトータルステーションで取り上げを行った。

各年度の発掘調査の方法及び概要(詳細については、第1章に掲載)は、以下のとおりである。

平成19年度

確認調査と本調査を隣接する野方前段遺跡と並行して実施し、調査延面積は5,400㎡であった。

確認調査は、平成19年5月16日から7月13日までの約2か月間、調査対象地域にグリッドに沿ってトレンチを18箇所設定し、調査区全体の包含層の有無について調査した。トレンチの形状は5×4mの長方形を基本とした。表面を覆う雑草の除去・雑木の伐採を人力で行った後、重機で表土を除去し、トレンチ内の掘り下げを人力で行った。検出した遺構については、写真撮影、平板実測のみを行った。出土遺物については、平板実測で取り上げを行った後、掘り下げを続けた。いくつかのトレンチでは、遺構に影響のない部分について、安全対策を施しながら下層確認トレンチを設定し、XVI層上面まで確認調査を実施した。しかしながら、未買収地が調査対象区の半分近くを占め、かつ、多くのトレンチから遺構も検出されたため、旧石器時代の全体把握は不十分であった。

本調査は、平成19年12月から本格的に実施し、平成20年3月19日まで行った。調査区は、南東側の谷地形の斜面にあたるJ~L-4~6区、台地上に広がるG~N-

7~12区の平坦面である。J~L-4~6区は谷地形のため、表土下の黒色土が傾斜しながら厚く堆積していた。しかも、下層に掘り進むに従って傾斜が険しくなったため、安全対策上、V層上面で調査を終了した。G~N-7~12区は、III層で多くの溝状遺構、土坑、ピット等が検出されたため、大部分はIV層上面で調査を終了した。その後、安全対策として、立入禁止柵の設置や一部埋め戻しを行った。

平成20年度

隣接する野方前段遺跡と並行して調査を実施した。調査期間は平成20年5月22日~平成21年3月19日で、調査延面積は10,800㎡であった。調査区は、前年度からの引き続きとなるG~N-7~12区と隣接するD~M-13~16区の平坦面であった。主に、G~N-7~12区はIV~VIII層上面まで、D~M-13~16区はI~VIII層上面までの調査を実施した。VIII層上面までの調査終了後、2×5mを基本としたトレンチを設定し、旧石器時代の確認調査を行った。

平成21年度

調査期間は平成21年5月8日~平成22年3月19日、調査延面積は14,800㎡であった。調査区は、前年度からの引き続きとなるD~M-9~16区と隣接するE~M-17~20区の平坦面である。D~M-9~16区はIX~XVI層上面まで調査を行い、一部を除き調査を終了した。E~M-17~20区はI~VIII層上面までの調査を実施した。

平成22年度

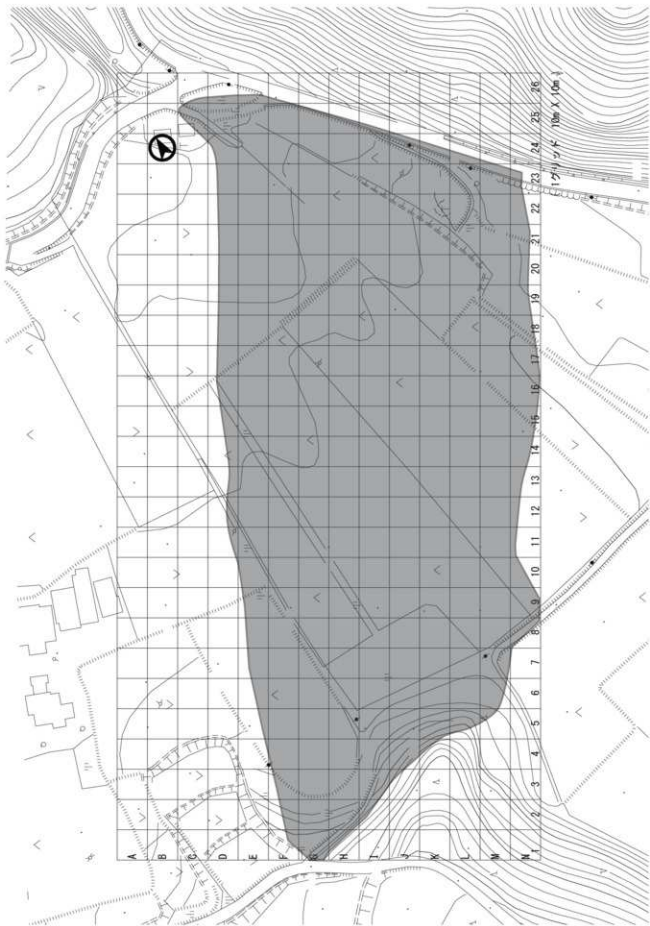
調査期間は平成22年5月10日~平成23年3月9日、調査延面積は13,720㎡であった。調査は、前年度からの引き続きとなるD~L-15~20区のIX~XVI層、林道迂回路用地となるC~N-21~25区のI~XVI層、東側側道予定地のL~N-8~21区のI~IV層上面まで行った。C~N-21~25区は調査終了後部分的に引き渡しを行い、D~L-15~20区は、一部を除き調査を終了した。

平成23年度

調査期間は平成23年5月9日~平成24年3月9日、調査延面積は27,000㎡であった。調査は、前年度からの引き続きとなるL~N-8~21区のIV~XVI層上面と新たに林道迂回路用地となったC~M-18~25区のI~XVI層、さらにD~M-3~24区で未調査部分をIII層途中まで行った。東側側道予定地は10月に、林道迂回路用地は3月に、それ以外の調査終了箇所は次年度以降の調査に支障がない範囲で引き渡しを行った。

平成24年度

調査期間は平成24年5月8日~平成25年3月8日、調



第13図 天神段遺跡グリッド配置図

査延面積は17,520㎡であった。調査区は、営繕用地の1～6区を除き、7～25区の未調査部分であった。調査は、Ⅲ～XVI層上面まで行ったが、工事の関係上、14～25区の調査を先行して行い、11月末に引き渡しを行った。その後残りの箇所を調査を行い、3月に次年度の調査に支障のない範囲で引き渡しを行った。

平成25年度

調査期間は平成25年4月22日～平成25年10月25日、調査延面積は8,000㎡であった。調査区は前年度の営繕用地であったE～J-1～6区で、そのうちE～G-3～6はⅢ～XVI層上面、それ以外は1～XVI層上面まで調査を行い調査を終了した。その後、引き渡しを行い、7年に及ぶ本遺跡の本調査のすべてを終了した。

2 遺構の認定と検出方法

本遺跡では、多く検出された遺構の認定と検出方法については、以下のとおりである。

(1) 遺構の認定

検出面、埋土状況、規模等を総合的に判断し、担当職員で検討したうえで遺構の認定を行った。本編掲載の主な遺構の認定は以下のとおりである。

竪穴住居状遺構は、埋土や形状、床面の有無、遺物の出土など総合的に判断し住居跡というには根拠の薄い遺構を竪穴住居状遺構とした。溝状遺構は、底面に硬化面を有するものが多く、古道としての役割も兼ねていたと想定されるため、溝・古道という呼称で統一して掲載した。土坑及びピットについては、検出面や埋土の状況で大まかな時期の判断はできたが、色調の違いや時期の違いが混在するものについては、詳細な時期判定ができなかった。また、掘立柱建物跡については発掘調査担当で検討し、判断したものを基本的に掲載した。

(2) 遺構の検出方法

遺構の検出については、各年度とも共通の調査方法として、当時の掘り込み面に限りなく近い位置での検出を目指して調査を進めたが、判別のしやすい地層上面での検出が多くなったのは否めない。特に、黒色土に掘り込まれた黒色系埋土の中世の遺構については、掘りすぎのこともあり「検出面からの深さ」にばらつきがあったので、調査のあり方を再検討し、今後の調査に生かしたい。

また、ゴボウ畑や雑木林があった箇所では、攪乱を受けている箇所があり、遺構の検出をはじめ調査が難しかった。この場合、ミニトレンチの設定、攪乱部分の埋土除去等最善の調査方法を担当職員で検討し、遺構の推定ラインも含め残存部の記録保存に努めた。

3 整理・報告書作成作業の方法及び内容

第1章第4節で概要を報告したが、平成22年度から平成25年度までは発掘調査作業と同時並行で行われていた

ため、基本的には整理作業の方法及び内容は変わらない。そのため、本項では整理・報告書作成作業が開始された平成22年度の作業方法及び内容を中心に述べ、平成23年度以降は簡潔に述べることにする。

平成22年度

平成19～21年度までの発掘調査成果品の整理を行った。図面整理は、遺構実測図、遺物出土分布図、土層断面図等に仕分けし、台帳や遺物との照合を行った。

水洗いは、未洗い遺物や発掘現場で行った水洗いが不十分な遺物について行った。その際、遺物に付着している重要な情報を除去することがないように洗ったり、細石刃等微細な剥片石器については、超音波洗浄機を使用したりした。

注記は、水洗い終了後順次行った。注記を行う際、薬品を使用するため換気に注意しながら手作業で進めた。これまで刊行された遺跡の記号と重複しないようにデータを管理している南の縄文調査室に確認をとり、遺跡名を表す記号を「TJ」とした。

分類・接合は、遺構内遺物と包含層遺物に分けた後、包含層出土土器については、土器の胎土や文様等で分類し、さらにグリッドごとに分けた後接合を行い、その後エリアを広げて接合する方法をとった。石器については、剥片石器と礫石器に分けた後、器種及び石材別に分類した。出土石器については、作業の効率化を図るため、予算の範囲内で石器実測委託を行った。

遺物出土分布図は、平板実測で取り上げた情報はデジタルタイザーを用いてデータ化し、トータルステーションで取り上げたデータと統合し、図化ソフトを使用して作成した。

遺構の認定・分類は、実測図や写真等を用いて、各年度の発掘調査担当者や連携を取りながら再検討し、確定した。

土層断面や遺構のトレースは、鉛筆トレースで下図を作り、点検・修正後、ペントレース及びデジタルトレースを行った。

平成23年度～平成25年度

各年度とも前年度の発掘調査成果品の整理作業を行った。方法及び内容は「平成22年度」と基本的に同じである。特に、平成23年度には注記作業の効率化を図るためジェットマーカーを使用し、原稿執筆も開始した。また、平成25年度は年度途中で調査がすべて終了することになったため、整理作業だけでなく、本編（弥生時代～近世編）の報告書作成作業も同時に行った。

平成26年度

本編の印刷・製本、縄文時代晩期編の印刷・製本以外の報告書作成作業、縄文時代前期～後期編の整理作業を行った。

第2節 層序

天神段遺跡の基本土層は隣接する野方前段遺跡B地点(2012年3月報告書刊行済)と同じで、包含層や遺構や遺物の年代を把握する手掛かりの1つとなる火山灰等の詳細については、以下のとおりである。

I層は表土(旧耕作土)である。

II層はP2(安永ボラ、1779年の桜島起源の噴出物)が点在する層である。耕地改良等でボラ抜きが行われており、集めたボラを使った畦状の「ボラ塚」もみられた。

III層は黒色系の色調をもつ層である。色調の違いで3層に分層した。

III a層: 黒色土で、中・近世の遺物包含層である。

III b層: 暗茶褐色土で、弥生時代～古代の遺物包含層である。

III c層: オリーブ褐色土で、III b層と同じく、弥生～古代の遺物包含層である。

IV層は黄褐色バミス(P7、約5,000年? 前の桜島起源の噴出物)を含む層で、色調の違いで2層に分層した。

IV a層: 茶褐色土で、P7の腐植土層である。縄文時代晩期～弥生時代の遺物包含層である。

IV b層: 黄褐色土(P7を含む。)で、縄文時代晩期の遺物包含層である。

第3表 天神段遺跡の基本土層

層位	色調等	平均厚
I層	表土	20cm
II層	明黄色バミス(P2)	3cm
III a層	黒色土	5cm
III b層	暗茶褐色土	5cm
III c層	オリーブ褐色土	5cm
IV a層	茶褐色土	10cm
IV b層	黄褐色土(P7混)	20cm
V a層	褐色土	20cm
V b層	赤褐色土	30cm
V c層	明赤褐色バミス層(アカホヤ一次)	10cm
VI層	明黄褐色土	20cm
VII層	黒褐色土(P12混)	50cm
VIII層	黄白色火山灰(P14)層	25cm
IX層	黒褐色粘質土	10cm
X層	茶褐色粘質土	20cm
X I層	黒褐色粘質土	5cm
X II層	茶褐色硬質土(P16混)	20cm
X III層	暗茶褐色硬質土(P16混)	40cm
X IV層	黄茶褐色硬質土(P17混)	20cm
X V層	暗黄褐色土	5cm
X VI層	明黄白色砂質土	20cm
X VII層	黄白色砂質土(AT=シラス) ※シラス上面で調査終了	-

V層はアカホヤ火山灰関連の層である。色調の違いで3層に分層した。

V a層: 褐色土で、アカホヤ火山灰の腐植土層である。縄文時代前期～中期の遺物包含層である。

V b層: 赤褐色土で、アカホヤ火山灰一次の軽石が点在するアカホヤ二次堆積層である。縄文時代前期～中期の遺物包含層である。

V c層: アカホヤ火山灰一次の軽石(約7,300年前、鬼界カルデラ起源の噴出物)層。無遺物層である。

VI層は明黄褐色土で、縄文時代早期後葉を主体とする遺物包含層である。

VII層は黒褐色土で、縄文時代早期前葉～中葉の遺物包含層である。P12を含む層である。

VIII層は薩摩火山灰層(P14、約12,800年前の桜島起源の噴出物)である。無遺物層である。

IX層は黒褐色粘質土である。この層から下位の層は旧石器時代該当層となり、細石刃文化期の遺物包含層である。

X層は茶褐色粘質土である。IX層と同じく細石刃文化期の遺物包含層である。

X I層は黒褐色粘質土で、IX層よりも粘質が弱い。ナイフ形石器文化期の遺物包含層である。

X II層は茶褐色硬質土で、P16(桜島起源の噴出物で、詳細な年代は不詳)と呼ばれるバミスを含む層である。

X III層は暗茶褐色硬質土で、P16(桜島起源の噴出物で、詳細な年代は不詳)と呼ばれるバミスを含む層である。

X IV層は黄茶褐色硬質土で、P17(約28,000年前の桜島起源の噴出物)と呼ばれるバミスを含む層である。

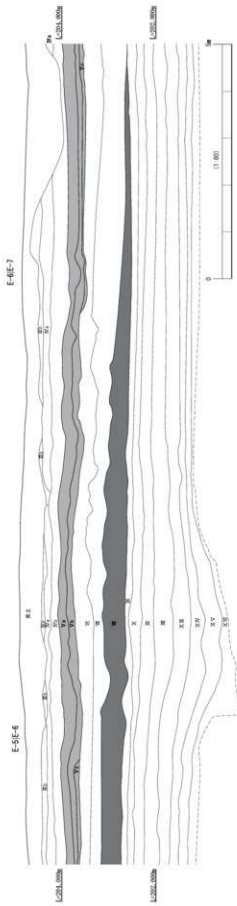
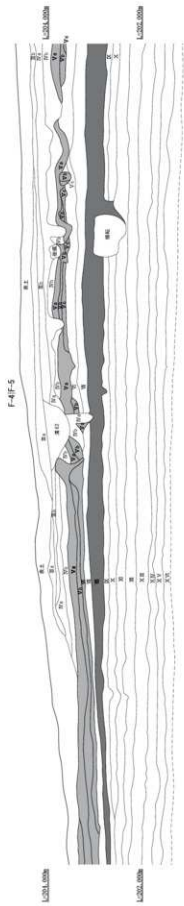
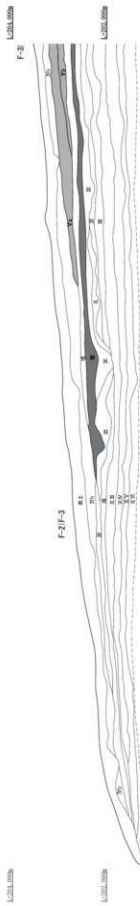
X V層は暗黄褐色土で、ナイフ形石器文化期の遺物包含層である。

X VI層は明黄白色砂質土である。

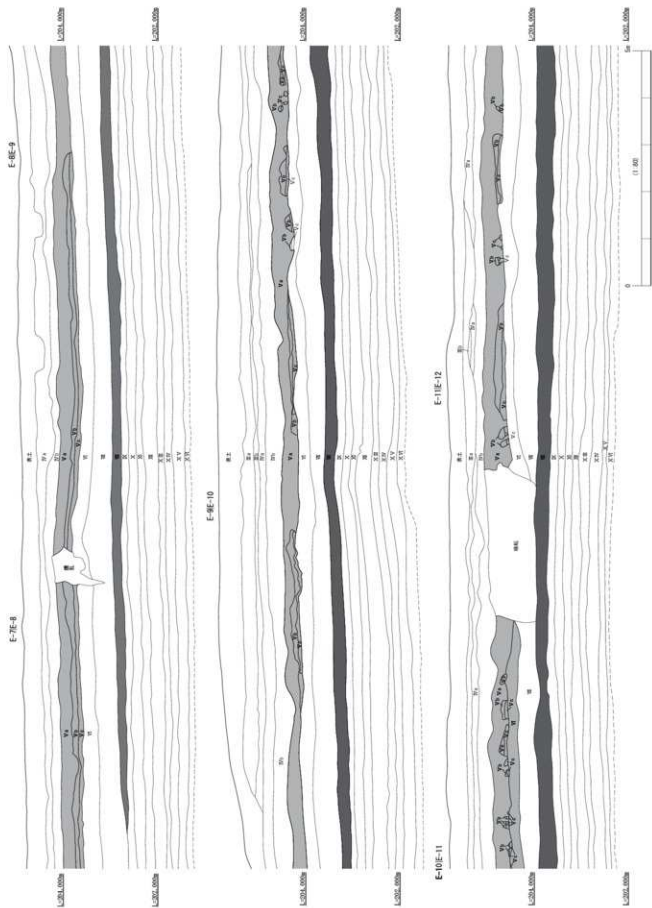
X VII層は黄白色砂質土で、この層からAT(シラス)と呼ばれる約26,000～29,000年前の始良カルデラ起源の火山灰層となる。

この層は無遺物層で、南九州本土では厚く堆積していることが、これまでの調査や火山の研究等で周知されている。そのため必然的に掘削深度が深くなるので、安全面や調査の効率化を図るという観点から、このシラス上面で調査を終了した。

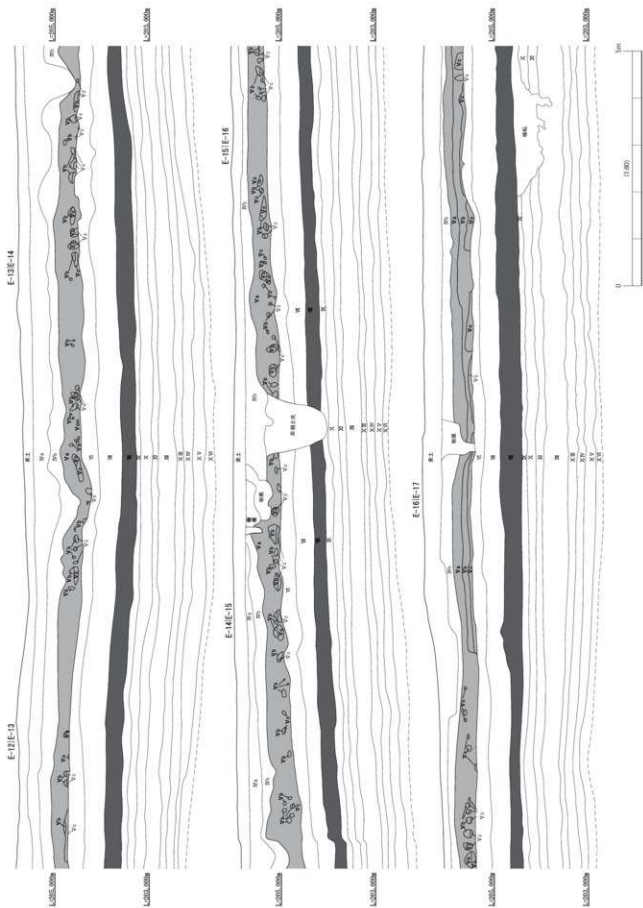
※火山灰の年代については、2003 町田洋 新井房夫著 東京大学出版会 『新編火山灰アトラス-日本列島とその周辺-』(p 108～110) から引用した。なお、年代は放射性炭素年代測定法で算出され、暦年較正した年代である。

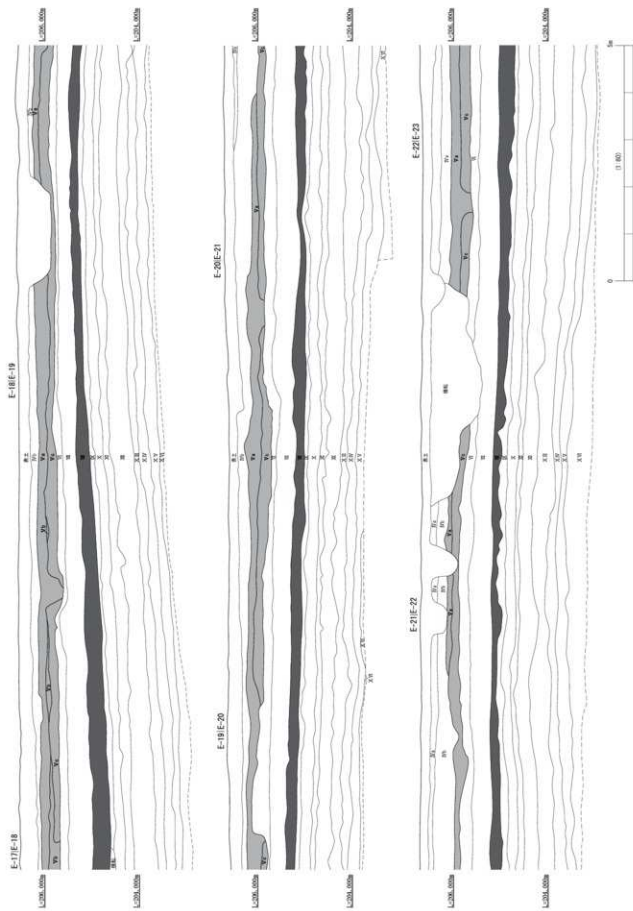


第14図 土層断面図1 (E・F-2~24区①)

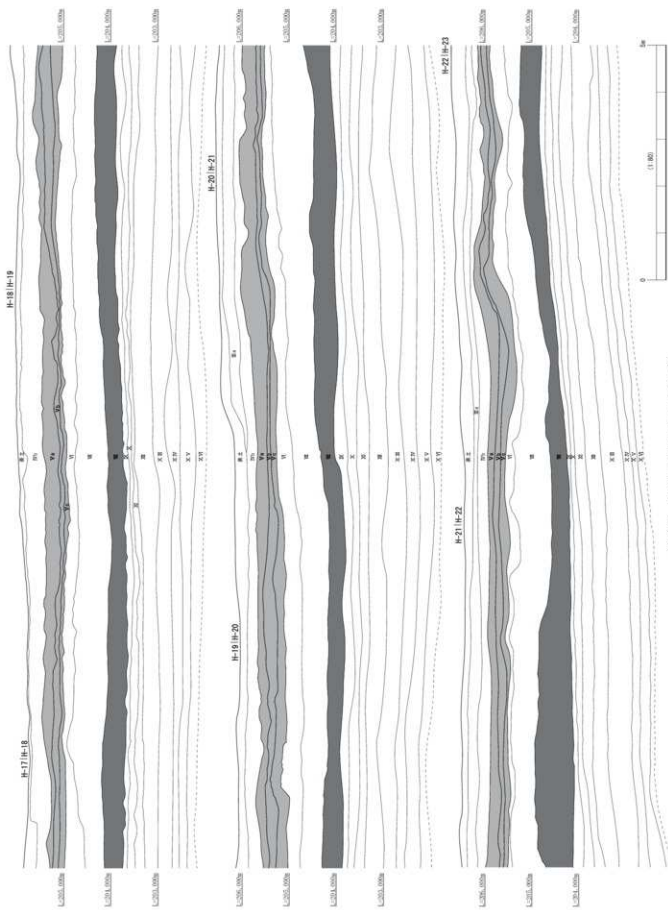


第15図 土層断面図2 (E・F・G~24区②)

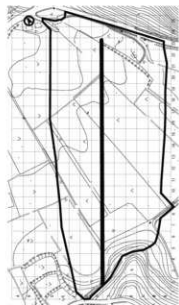
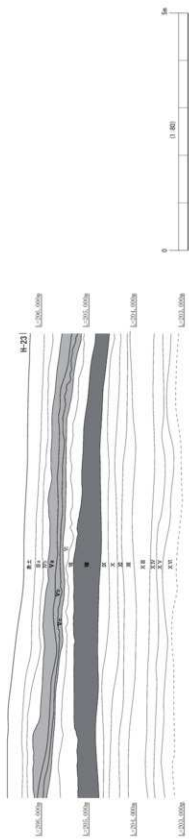




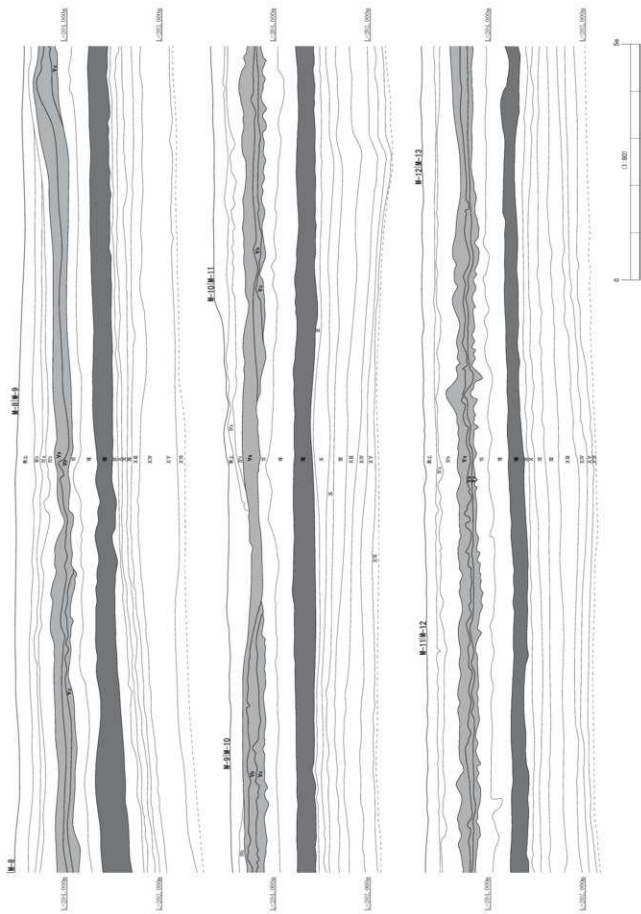
第17図 土層断面図4 (E・F・G~24区④)



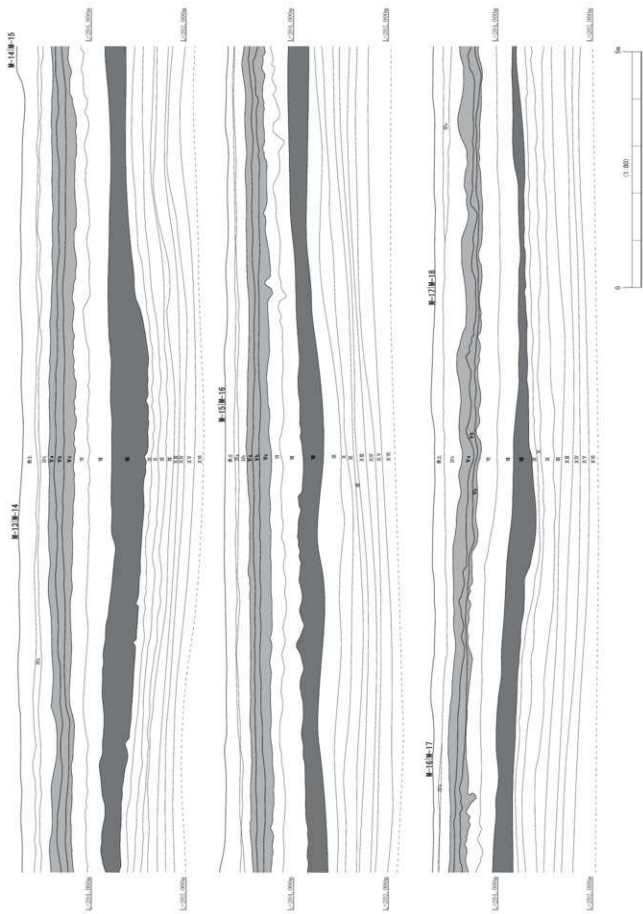
第22图 土層断面图9 (H-2~23区④)



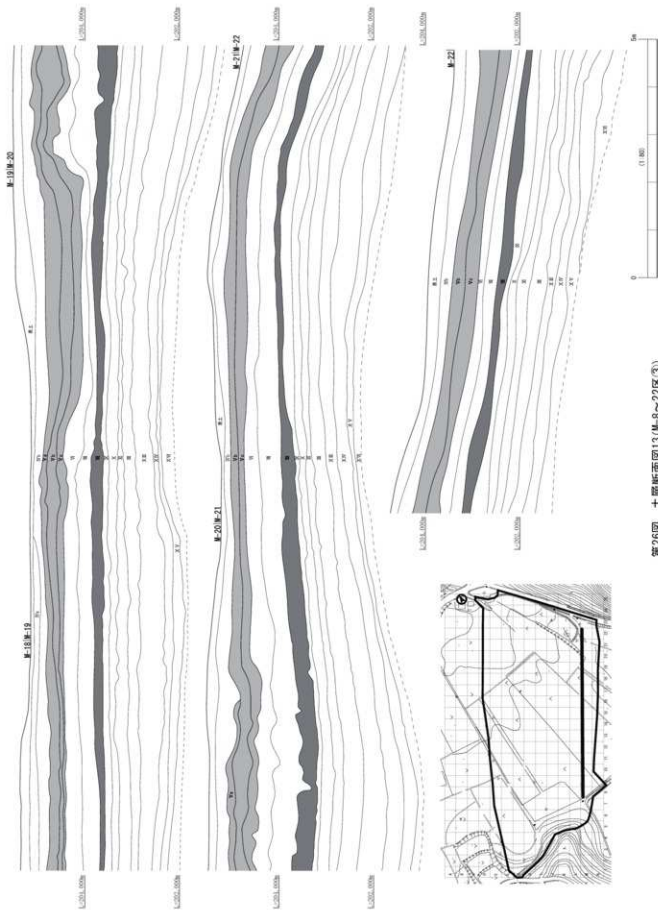
第23図 土層断面図10(H-2~23区⑤)



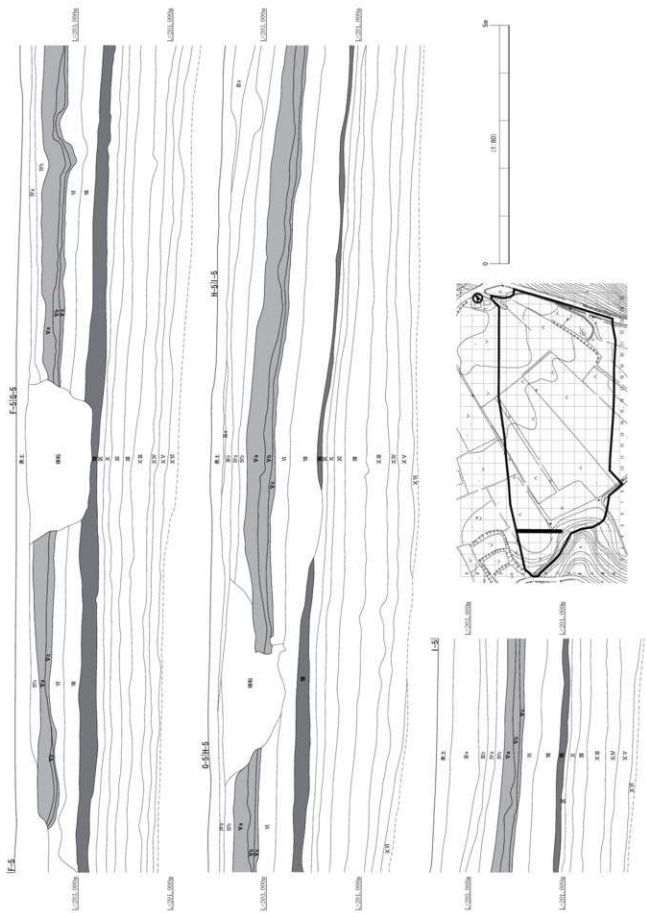
第24図 土層断面図11(M-8~22区①)



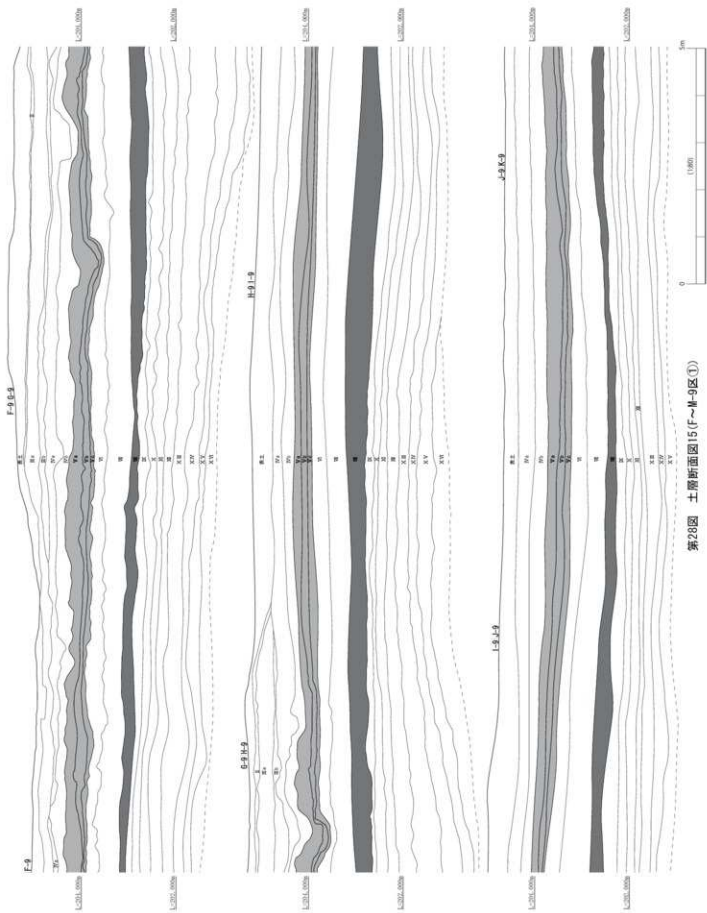
第25図 土層断面図12(M-8~22区②)



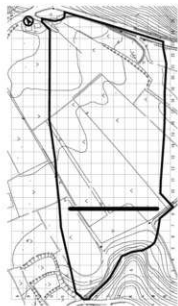
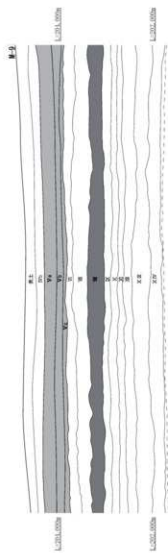
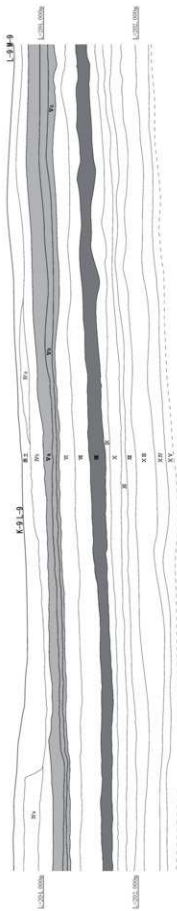
第26図 土層断面図13(M-8~22区③)



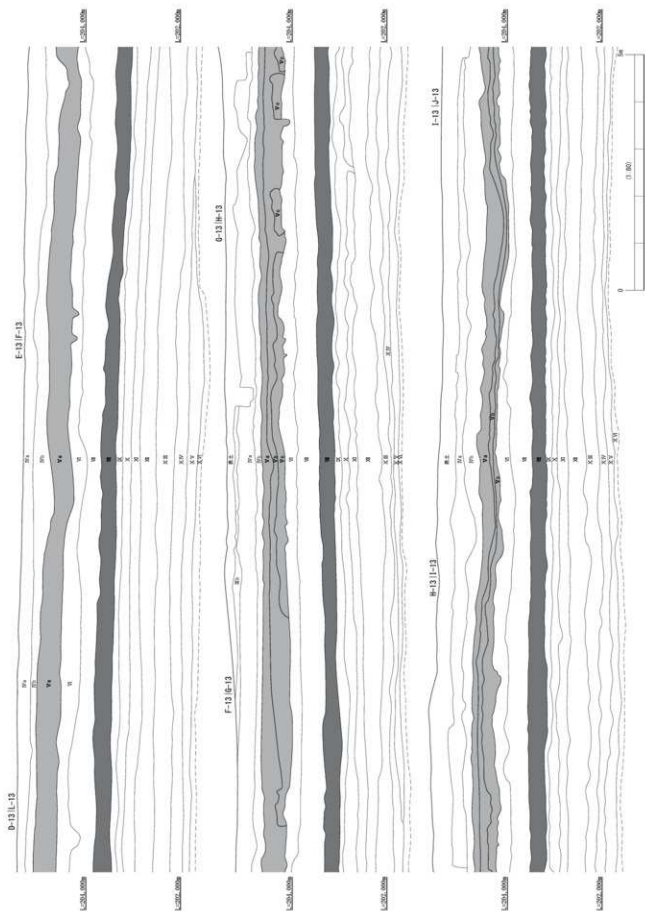
第27区 土層断面図14(F-1~5区)



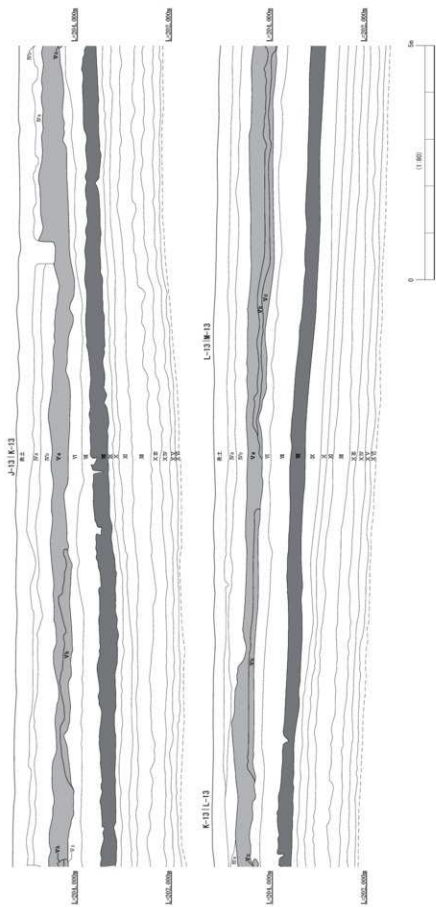
第28図 土層断面図15 (F~W-9区①)



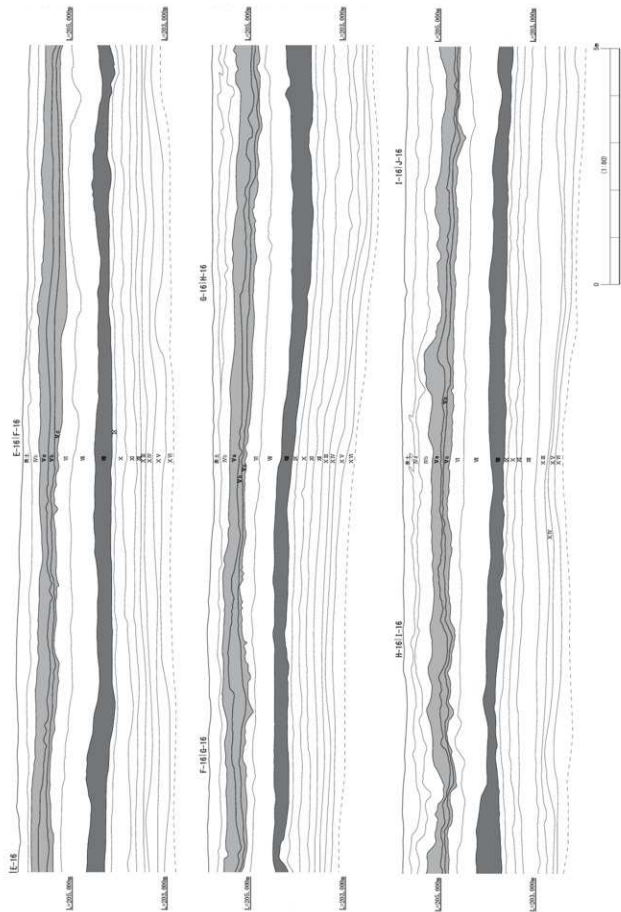
第29図 土層断面図(F~N-9区②)



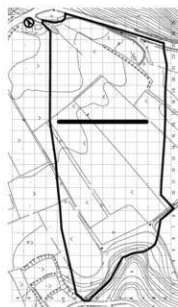
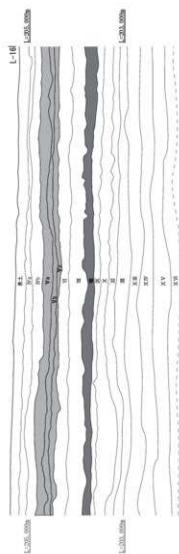
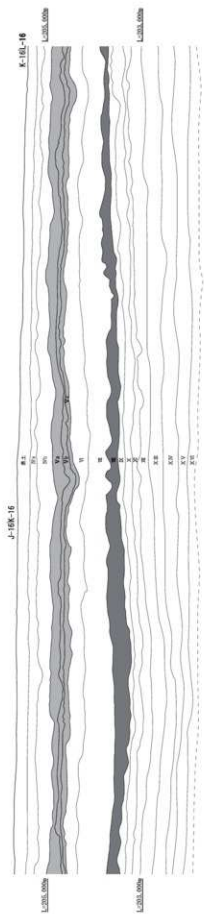
第30図 土層断面図17(D~M-13区①)



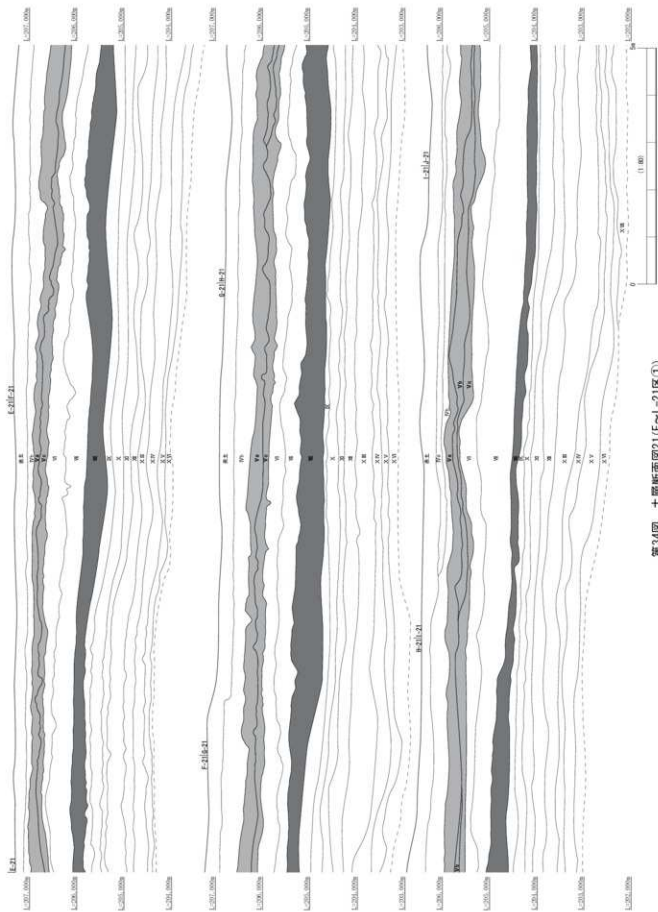
第31图 土層断面図(D~M-13区②)



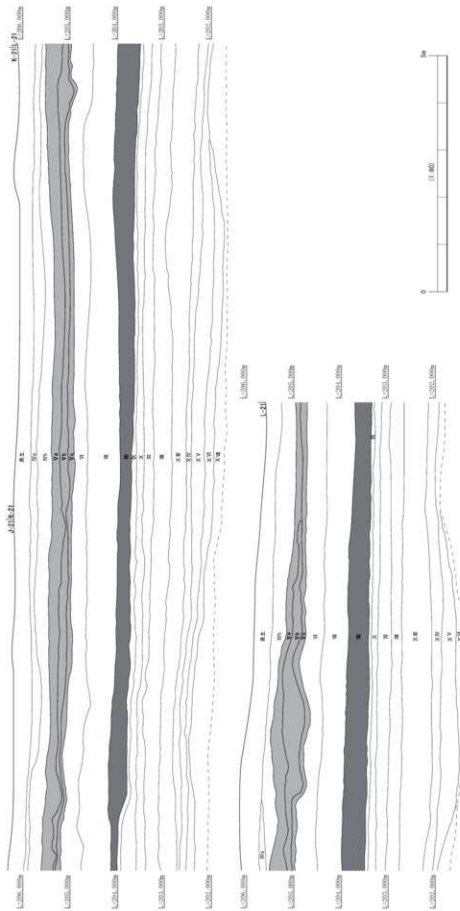
第32図 土層断面図(E~L-16区①)



第33图 土層断面図20(E~L16区②)



第34図 土層断面図21(E-L-21区①)



第35图 土層断面図22(E-L-21区②)

第IV章 発掘調査の成果

第1節 弥生時代の調査成果

1 調査の概要

本遺跡の弥生時代の該当層はⅢb～Ⅳa層であるが、Ⅲc層は遺跡全体に残存していたわけではなく、部分的に残存していた。

そのため、調査は、人力による掘り下げで進められたが、遺構や遺物を当時の生活面であるⅢc層でできるだけ確認しようと慎重に調査を進めた。

調査の結果、遺構については、Ⅲc層で検出することはできなかったが、Ⅳb層上面で竪穴住居跡を2軒検出することができた。

遺物については、Ⅲc層での出土量は少なく、Ⅳa層・Ⅳb層で多く出土し、特に、Ⅳa層での出土量が多かった。また、竪穴住居跡内からも41点出土している。

2 遺構

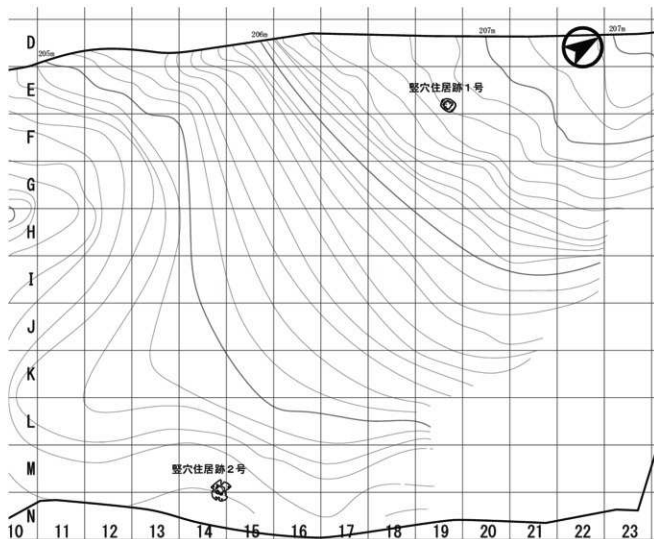
E-19区及びM・N-14・15区のⅣb層上面で竪穴住居跡が2軒検出された。(第36図)

竪穴住居跡1号(第37図)

検出状況 E-19区で検出され、検出面はⅣb層であった。2号住居跡と同様、当時の生活面であるⅢb・Ⅲc層では検出できなかった。

形状と規模 基本となる平面プランは隅丸長方形で、長軸約270cm、短軸約220cmを測る。検出面からの深さは、約40cmを測る。2号住居跡と同様やや浅く感じるが、掘り込み面は、検出面より上位の層であるので実際はもう少し深さがあつたと考える。

検出面から埋土を除去していくと、検出面から深さ約30cmのところまで、1辺が約140cmを測る方形の硬化面が



第36図 弥生時代の遺構配置図

検出され、その厚さは約10cmであった。この硬化面は貼床と考えられる。また、東西の壁近くの底面で小ピットが2基検出された。ピットの検出面からの深さは1基が約20cm、残りの1基が約40cmとやや浅いが建物の構造上位置的に柱穴の可能性がある。

埋土 バミスを含む茶褐色土を主とし、バミスを含むにぶい茶褐色土や明茶褐色土等が堆積していた。バミスは茶褐色土の方が多く含む。貼床は茶褐色土と黒褐色土が混在した硬質土であった。

出土遺物 住居内から出土した遺物は14点で、そのうち埋土中から9点、貼床直上から5点出土した。種類別では土器片13点、軽石1点であった。14点のうち5点を図化した。(第38図 1～5)

1～4は壺形土器である。弥生時代中期前半の在地系土器が3点と、弥生時代前期末から中期初頭のもの1点である。

1は口縁部断面が台形状を呈し、口唇部に凹みをもつ。胴部上面に断面三角形の突帯を2条施している。一部ススが付着しており、外面はナデ調整を施し、内面はハ

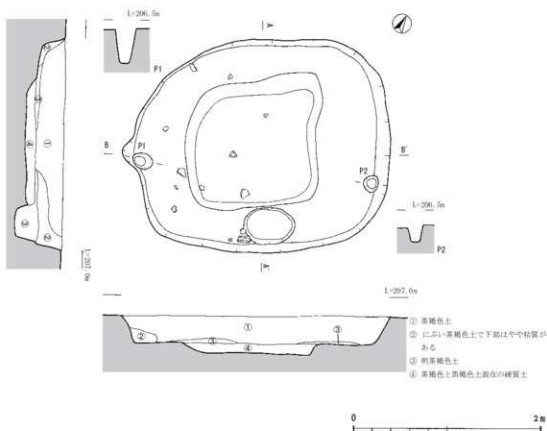
ケメ調整である。雲母を多く含んでいる。入来Ⅱ式に比定できる。

2・3は口縁部が逆L字状を呈し、やや細長い印象を受ける。2は口唇部の凹みも明瞭で、器壁が薄く整形されている。外面には、小さな工具によるハケメ調整がみられ、内面もナデ調整である。口縁部形態から入来Ⅱ式と思われるが、外來系の影響を受けていると考えられる。

3は突帯貼付け後の丁寧なナデ消しがみられる。内面も丁寧なハケメ調整が施されている。また、口縁部上面にナデ調整時の布の痕跡がみられた。胎土には雲母が含まれている。

4は口縁部が断面三角形を呈している。口縁部のみで、判断が難しいが、口縁部先端に刻目、あるいは胴部突帯に刻目を施すものと同時期のものと思われる。弥生時代中期初頭に相当する。

5は幅が約2cm、深さが約0.3cmを測る溝を有する(有溝)軽石製品で、最大長が5.5cm、最大幅が6.5cm、最大厚が1.9cmを測る。溝の部分から外側にかけて加工の痕跡がみられるが、欠損部が多いのが特徴である。



第37図 弥生時代の竪穴住居跡1号

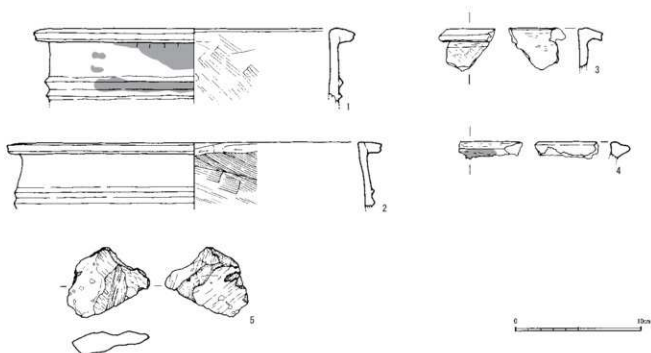
竪穴住居跡2号（第39図）

検出状況 M・N-14・15区で検出され、検出面はIV b層であった。調査の概要でも述べたとおり、当時の生活面であるⅢ b・Ⅲ c層では検出できなかった。

形状と規模 基本となる平面プランは、隅丸方形を主体部とし、4箇所の張り出しをもつ花弁型であると考えられる。主体部である隅丸方形の規模は、一辺が約180cmである。張り出し部の規模は、幅が約180cm～260cm、主

体部からの奥行きが約80cm～130cmで統一性がみられない。検出面からの深さは、主体部の最深部が約45cm、張り出し部の最深部は約10cmとやや浅く感じるが、掘り込み面は、検出面より上位の層であるので実際はもう少し深さがあつたと考える。

検出面から埋土を除去していくと、主体部において検出面から深さ約40cmのところで貼床と思われる半径約60cmを測る円形の硬化面が検出され、その厚さは約5cmで



第38図 弥生時代の竪穴住居跡1号内出土遺物

第4表 竪穴住居跡1号内出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	部位	口径(cm)		底径(cm)	器高(cm)	色調		文様・調整		胎土				備考	
				外径	内径			外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母		
38	1	甕	口縁部	25.6	21.4	-	-	橙	暗灰黄	ナデ	ハケメ・ナデ					○	スス付着
	2	甕	口縁部	29.8	26	-	-	明赤褐	明赤褐～橙	ナデ	ハケメ・ナデ		○			○	
	3	甕	口縁部	-	-	-	-	暗褐	明赤褐	ハケメ	ナデ					○	
	4	甕	口縁部	-	-	-	-	オリーブ黒	橙	ナデ	ナデ		○		○	○	スス付着

第5表 竪穴住居1号内出土土器観察表

挿図番号	掲載番号	器種	出土区	層	最大長(cm)	最大幅(cm)	最大厚(cm)	重量(g)	取上番号	備考
38	5	軽石製品	-	-	5.5	6.5	1.9	1323	-	

あった。また硬化面上部の一部で焼土が検出された。

また、小ピットが主体部で2基、張り出し部で5基検出された。主体部内の2基は建物の構造を考えたときに位置的に主柱穴と考えることもできるが、小ピットの断面を見ると深さが浅いため主柱穴であったかどうかは判断しがたい。ただし、張り出し部で検出された5基も含め建物を支えるための柱穴であったのではないかと考えている。

埋土 主体部の埋土は黄色バミス少量含み、しまりが良くくて粘性のない暗褐色土を主とし、黒褐色土が堆積していた。貼床は黄色バミス（P7）とアカホヤの二次堆積層が混在した硬質の暗褐色土であった。

出土遺物 住居内から出土した遺物は27点で、そのうち埋土中から24点、床面直上から3点（主体部1点、張り出し部2点）出土した。種類別では土器片23点、磨石1点、剥片3点であった。

また、土器片23点のうち19点が接合できたため、全体としては大きく分けて12点となり、そのうちの5点（土

器4点、磨石1点）を図化した。（第40図 6～10）

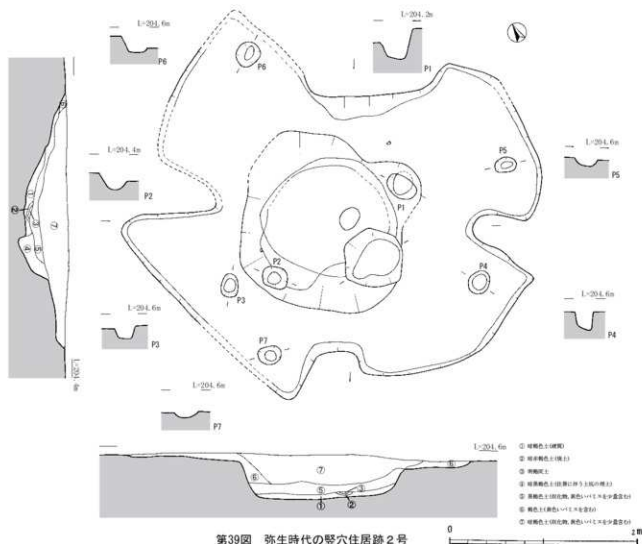
6～9は壺形土器で、6～8は肩部、9は底部である。これらは、本遺跡の包含層遺物の出土状況や土器の形態的特徴から入来式土器に比定できる土器である。

6は浅い突帯を3条施している。胴部の張りが目立ち、外面・内面ともにミガキ調整が施されている。外面にはススが付着しており、雲母も含まれている。

7・8は外面がミガキ調整が施され、内面がナデ調整が施されている。どちらも胎土は良精である。

9は器形が安定しており、外面はミガキ調整が施され、ススが付着している。雲母が多く含まれており、在地的な胎土である。

10は安山岩の磨石である。最大長が5cm程度と小型で小判状の形態を持つものである。表面から側部にかけて敲打痕がみられ、特に中央部に集中している。裏面には擦痕があり、特に裏面上部にかけて集中して使用された痕跡がみられる。



第39図 弥生時代の竪穴住居跡2号

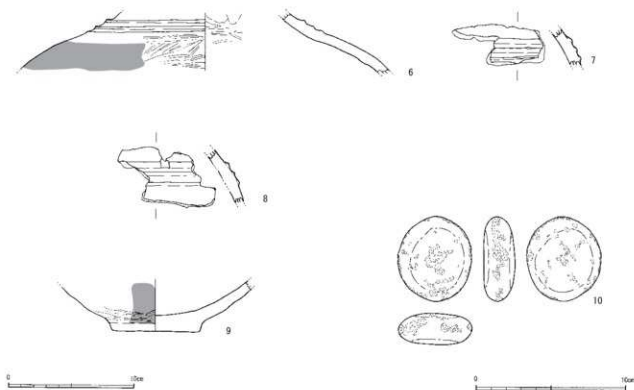
3 遺物

(1) 土器

弥生時代の遺物は、IV a層を主体とし、III層及びIV b層からも出土している。主に甕形土器と壺形土器が出土している。時期は、弥生時代前期末から中期初頭、中期

前半のものが出土している。ほとんどが在地で製作されたものであるが、一部に他地域の影響を受けているものもみられる。

本報告書では、器形・口縁部の形態・突帯や刻目等の装飾の違いから甕形土器を大きく3つに分類した。



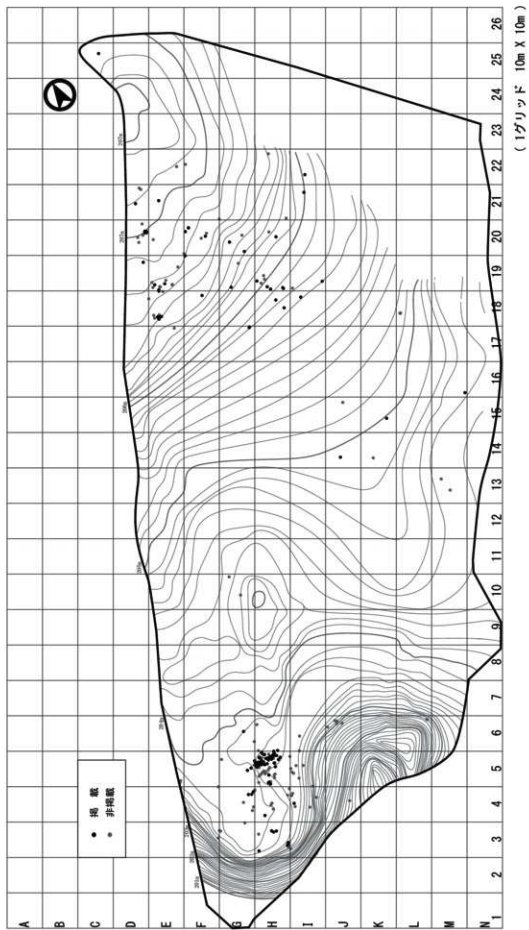
第40図 弥生時代の竪穴住居跡2号内出土遺物

第6表 竪穴住居跡2号内出土土器観察表

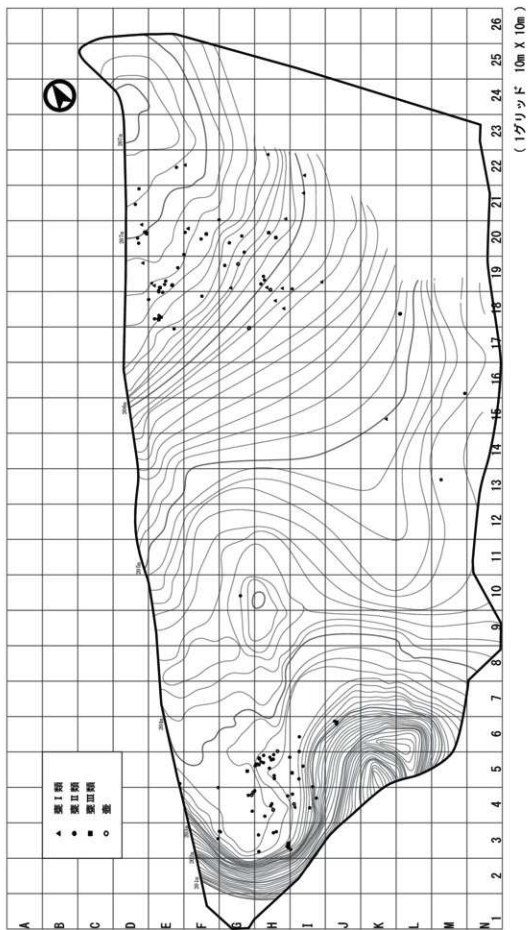
挿図 番号	掲載 番号	器種	部位	口径 (cm)		底径 (cm)	器高 (cm)	色調		文様・調整		胎土				備考	
				外径	内径			外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母		
40	6	壺	肩部	-	-	-	-	にぶい赤褐	灰黄褐	ミガキ	ミガキ	○				○	スス付着
	7	壺	肩部	-	-	-	-	黒褐	灰黄褐	ミガキ	ナデ	○				○	
	8	壺	肩部	-	-	-	-	黒褐	灰黄褐	ミガキ	ナデ	○				○	
	9	壺	底部	-	-	6.8	-	にぶい橙	褐灰	ナデ	ミガキ・ナデ	○				○	スス付着

第7表 竪穴住居跡2号内出土石器観察表

挿図 番号	掲載 番号	器種	出土区	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	取上 番号	石材	備考
40	10	磨石	M-14	IV b	5.6	4.9	2.1	76	一括	安山岩	



第41図 弥生時代の土器全出土分布図



第42図 弥生時代の土器出土分布図(掲載分の器種別)

壺形 I 類土器

口縁部や突帯が短く、断面形がやや丸みを帯びた三角形を呈する土器を I 類土器とした。

さらに、口縁部や口唇部及び突帯等に刻目の有無により I a 類と I b 類に分類した。

I a 類土器 (第43図 11~18)

口縁部や突帯が短く、断面形がやや丸みを帯びた三角形を呈し、口縁部や口唇部及び突帯に刻目が施されている土器を I a 類とした。

この特徴から、I a 類土器は、弥生時代前期の「亀の甲系統」の口縁部を呈する刻目突帯文土器や高橋式土器に比定できる土器である。

11・12は口縁部に刻目を施し、口縁部の接合痕がみられる。口縁部の長さは短い。

11は内面に一部ナデ調整が施されている。12は縦にやや長めの刻目が施され、内面・外面ともに工具による小さなナデ調整が施されている。

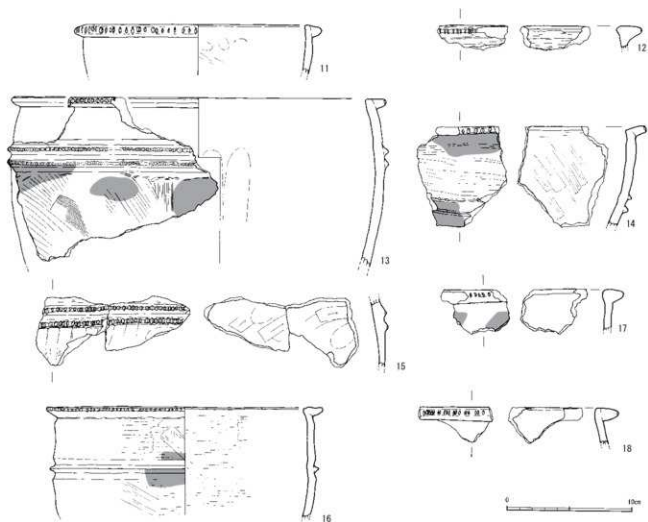
13・14は口縁部断面三角形を呈し、胴部に2条の突帯を施すものである。口唇部・突帯ともに細かい刻目を施し、胴部外面はハケメ・ナデ調整を施している。内面には指圧痕が残る。13は突帯上面、14は口縁部内面までススが附着している。

15も13と同様に胴部突帯に刻目を施す。若干のゆがみが見られるが、全体の器形としては13と同様の器形を呈すると思われる。

16は口縁部が立ち上がり、口唇部平坦面に浅く刻目が施されている。胴部突帯は貼付け後のナデ調整により、突帯下の凹みが目立つ。外面にハケメ調整を施している。

17の口縁部は小さな膨らみを持ち、短い口唇部平坦面には浅い刻目を施している。口縁部はナデ調整を施している。

18は口縁部が断面三角形を呈し、口唇部の平坦面に刻目を施している。口縁部は横に延び、やや長い印象を受ける。



第43図 壺形 I a 類土器

I b 類土器 (第44図 19~23)

口縁部や突帯が短く、断面形がやや丸みを帯びた三角形形状を呈し、口縁部や口唇部及び突帯に刻目が施されていない土器をI b 類土器とした。

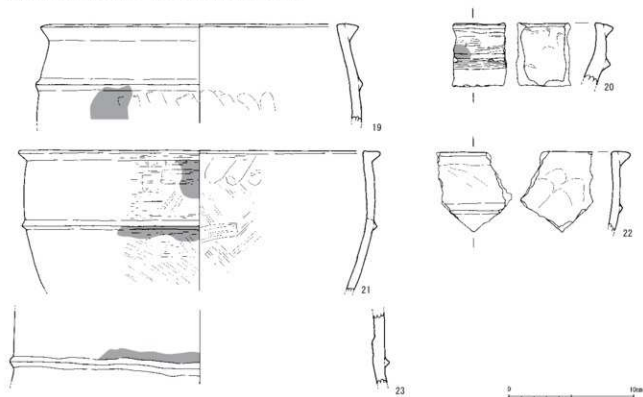
19は雲母を含み、在地性の強い胎土である。口縁部の接合痕が明瞭である。調整はあまり目立たず、特徴がみられないが、口縁部断面の三角形が大きく目立つ傾向がある。突帯の貼付けはやや浅く、内外面ともに指圧痕が残る。

20の口縁部は突帯の厚みと等しく、胴部の器壁の厚みよりも小さい。口縁部下に一部ミガキ調整を施している。

21は突帯付近の粘土帯の輪積みが認められる。輪積みされた箇所にかかるように断面三角形形状の突帯が施されている。内外面ともにハケメ調整が施されている。全体の器形における厚みが小さく、断面三角形形状の口縁部と突帯の大きさがほぼ等しい。

22は突帯が胴部に施され、口縁部もやや横に延びている。

23は突帯を1条施している胴部片である。突帯は浅くゆるやかな印象をうける。胴部にゆがみがあり、突帯の貼付けも適当である。



第44図 変形I b 類土器

第8表 変形I 類土器観察表

挿入番号	掲載番号	部位	出土区	層	取上番号	口径 (cm)		底径 (cm)	色調		文様・調整		胎土				備考
						外径	内径		外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	
43	11	口縁部	I-21	IV b	75226	19.6	17	-	口縁部-黒	黒褐	ナデ	ナデ	○		○		
	12	口縁部	E-F-17・18	表土	-	-	-	-	明黄褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○		○		
	13	口縁部	G-19	IV a	121062	29.8	26.4	-	にぶい黄褐	赤褐	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	○	○		スス付着	
	14	口縁部	H-18	V a	29910	-	-	-	橙	褐-黒褐	ハケメ	ナデ	○		○	スス付着	
	15	胴部	K-15	IV a	6409	-	-	-	にぶい黄褐	赤-にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○	○	○		
	16	口縁部	H-18	III a	25492	22	18.8	-	にぶい褐	橙	ハケメ	ナデ	○	○	○	スス付着	
	17	口縁部	J-19	III b	2970	-	-	-	黒褐	明褐	ナデ・ミガキ	ナデ	○		○	スス付着	
18	口縁部	E-19	IV b	111831	-	-	-	黄灰	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○		○			
44	19	口縁部	I-21	IV b	-	25.4	21.8	-	にぶい橙	にぶい褐	ナデ	ナデ	○		○	スス付着	
	20	口縁部	I-22	IV b	75209	-	-	-	橙	褐灰	ナデ	ナデ・指圧痕	○		○		
	21	口縁部	H-19	IV a	30713 他	28.8	26	-	橙	橙	ナデ	ナデ	○			スス付着	
	22	口縁部	D-19	V b	120446	-	-	-	にぶい黄褐	にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○		○		
	23	胴部	F-20	V a	119462 他	-	-	-	黒褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	○		○	スス付着	

変形Ⅱ類土器

口縁部や口唇部及び突帯の刻目がなくなり、口縁部や突帯の断面形がⅠ類土器と違って明瞭な形状を呈する土器をⅡ類土器とした。

さらに、口縁部形態及び突帯や沈線等の装飾、口唇部に凹みの有無等によりⅡa類とⅡb類に分類した。

Ⅱa類土器 (第45図 24~26)

口縁部が短く、口縁部や突帯の断面形が三角形を呈し、口唇部平坦面に凹みを施していない土器をⅡa類とした。

この特徴から、Ⅱa類土器は、弥生時代中期初頭から中期前半の到来Ⅰ式土器に比定できる土器である。

24は口縁部がやや横に延びている。外面に一部ナデ調整を施しており、細かな雲母を多く含む在地性の強い胎土である。

25・26は口縁部や胴部にゆがみがなく安定しており、丁寧に製作されている。口縁部直下にススが付着しているため、煮炊きに使用された可能性が考えられる。また、26は断面の接合痕や貼付け後のナデ調整がみられる。

Ⅱb類土器 (第46図~第49図 27~48)

口縁部や突帯の断面形が三角形や台形状を呈し、口唇部平坦面に凹みをもち、胴部に突帯及び沈線を施す土器をⅡb類土器とした。

この特徴から、Ⅱb類土器は、弥生時代中期前半の到来Ⅱ式土器に比定できる土器である。

さらに、口縁部や口唇部及び胴部の形状からⅡb-1類土器とⅡb-2類土器に分類した。

Ⅱb-1類土器 (第46図 27~36・第47図 37~39)

Ⅱa類土器と同様、口縁部は短い、口唇部平坦面に浅い凹みをもち、胴部に張り弱い土器をⅡb-1類土器とした。

27は口縁部が影らみをもち、丸みを帯びている。口唇部に浅い凹みがみられる。28も同様に口唇部に浅い凹みがみられる。口縁部は横に水平に延びており、外面はナ

デ調整が施されている。29は口唇部の平坦面に浅い凹みを施している。口縁部の長さは短い、口縁部上面の影らみが認められる。

30は口縁部が水平に伸び、口唇部の平坦面に浅い凹みがみられる。口縁部の内面に小さな工具によるハケメ調整が施されている。

31は口縁部断面が台形状を呈している。口唇部の平坦面に浅い凹みを施している。口縁部先端に向けて先細りになっている。32は口縁部断面が台形状を呈し、口唇部の平坦面に浅い凹みがみられる。胴部に3条の沈線が施されている。外面はススが付着しており、胴部沈線下までハケメ調整が施されている。内面は横位のハケメ調整、口縁部下の指圧痕が残る。

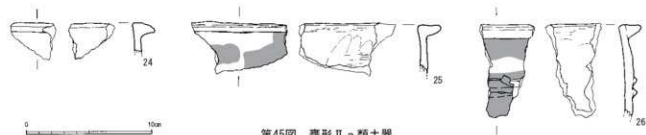
33は口縁部下に断面三角形の突帯が3条施されている。口縁部には明瞭な接合痕がみられる。胴部外面は丁寧な縦位の3カキ調整が施されており、突帯付近は横位のナデ調整がみられる。内面は工具による横位のハケメ調整と指圧痕が残る。器形は安定している。

34は胴部に突帯を3条施しており、内面は丁寧な横位のハケメ調整を施している。35も口縁部先端が先細りになっている。

36は口唇部上面の影らみが目立ち、口縁部や突帯の接合痕が明瞭である。胴部に突帯を3条施し、外面の口縁部下や胴部のハケメ調整がみられる。内面はナデ調整や指圧痕が残る。口縁部下から胴部にかけてススが付着している。口唇部の凹みや突帯の凹凸が同類の他の土器よりは明瞭であるのが特徴的である。

37は厚みがある口縁部が水平に伸び、胴部上面に突帯を施している。内面に工具による横位のハケメ調整を施している。

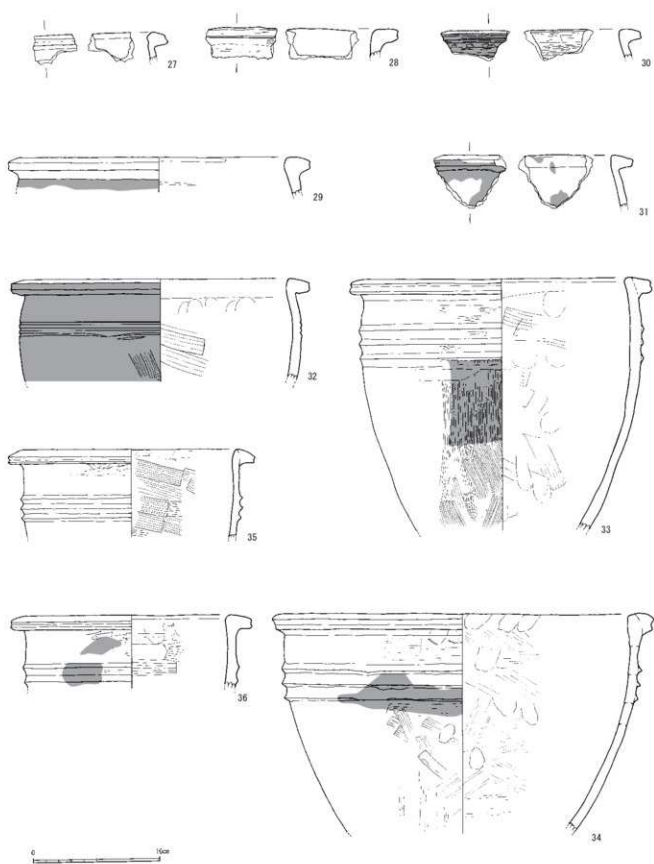
38も口縁部上面が影らみ、口縁部が水平にのびる。胎土・技法ともに在地性が強い。34~38は突帯が薄く貼付けが明瞭でないことからⅡb類に含めることにした。また、39は38と同一個体と思われる胴部片である。



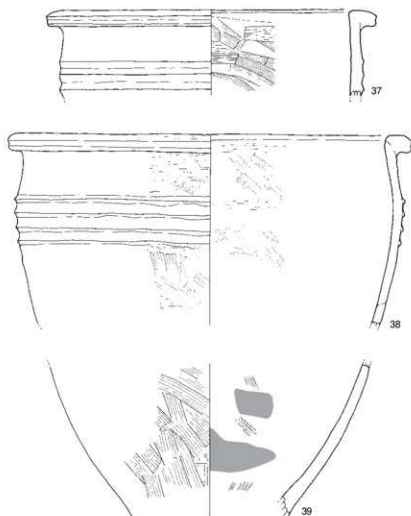
第45図 変形Ⅱa類土器

第9表 変形Ⅱa類土器観察表

挿図番号	掲載番号	部位	出土区	層	取上番号	口径(cm)			色調		文様・調整		胎土				備考	
						外径	内径	底径	外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母		
45	24	口縁部	G-20	Ⅳa	113080	-	-	-	褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○				○	
	25	口縁部	E-18	横転	-	-	-	-	黒褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○	○			○	スス付着
	26	口縁部	E-18	Ⅳb	110972	-	-	-	黒褐	暗褐	ハケメ	ナデ	○				○	スス付着



第46圖 臺形Ⅱb-1類土器1



第47図 変形Ⅱb-1類土器2



第10表 変形Ⅱb-1類土器観察表

挿図 番号	掲載 番号	部位	出土区	層	取上 番号	口径 (cm)		底径 (cm)	色調		文様・調整		胎土				備考
						外径	内径		外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	
46	27	口縁部	H-3	Ⅳ a	142398	-	-	-	外面 明褐	内面 褐~黒褐	ナデ	ナデ					
	28	口縁部	G-4	Ⅳ a	87497	-	-	-	橙	橙	ナデ	ナデ					○
	29	口縁部	H-4	Ⅳ a	87528	38	20	-	赤褐	赤褐	ナデ	ナデ					○
	30	口縁部	E-18	Ⅳ b	110968	-	-	-	黒	橙	ナデ	ナデ	○		○		○
	31	口縁部	E-19	Ⅳ a	113511	-	-	-	明赤褐	明赤褐	ナデ	ナデ	○				○
	32	口縁部	G-20	Ⅳ a	112991	23.6	20	-	黒	明赤褐	ハケメ	ハケメ・ナデ	○				○
	33	口縁 ~ 胴部	H-3	Ⅳ a	87525 他	23.5	19.4	-	赤褐	明赤褐	ハナメ・ナデ	ハケメ・ナデ					○
	34	口縁 ~ 胴部	H-5	Ⅳ a	142200 他	30	26	-	橙	明赤褐	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	○				○
	35	口縁部	E-18	Ⅳ b	-	19.4	16	-	黒褐	橙	ハケメ	ハケメ	○	○			○
	36	口縁部	H-3	Ⅳ	143866	19	14.8	-	赤褐	明赤褐	ナデ	ハケメ・ナデ	○		○	○	○
47	37	口縁部	H-3	Ⅳ	143870	26.2	21.8	-	明赤褐	橙	ナデ	ハケメ・ナデ	○		○	○	
	38	口縁部	H-5	Ⅳ a	142123 他	32	27.4	-	明赤褐	明赤褐	ハケメ	ハケメ・ナデ	○				○
	39	胴部	H-5	Ⅳ a	142066 他	-	-	-	明赤褐	橙	ハケメ	ハケメ・ナデ					○

Ⅱb-2類土器 (第48図 40~42・第49図 43~48)

Ⅱb-1類土器と比べて、口縁部が長く逆し字に近い形状を呈し、口唇部平坦面に明瞭な凹みを持ち、胴部の張りがみられる土器をⅡb-2類土器とした。

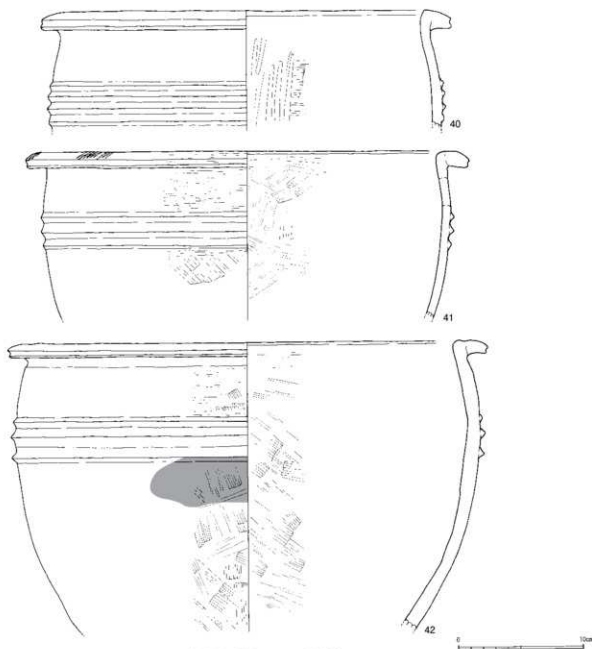
40は口縁部がやや下がり、胴部に突帯を4条施している。内面は一部に横位のハケメ調整が施された後、縦位のミガキが施されている。胎土には雲母が多く含まれている。

41は口縁部がやや長く垂れ下がり、胴部突帯も断面三角形形状を呈している。また、口縁部上面に横位の浅い沈線が施されており、間隔を開けて4か所に施されている。一定の間隔で裝飾されているとすれば、6か所程施され

ていると想定される。この類例は金峰町の上水道跡でも確認されている。外来系の影響があると考えられる。

42は大型の甕である。口縁部先端がやや垂れ下がり、口唇部の凹みが明瞭である。口縁部下の胴部の張りが目立ち、器壁の厚みも大きい。器形全体に重みがあり、特徴的である。胴部最大径に突帯を3条施している。外面のハケメ調整や内面のハケメ調整がみられ、雲母を多く含む在地的な胎土である。

43は逆し字状に近い口縁を呈し、胴部に突帯を3条施している。口縁部がやや長く、頸部に縦位の浅い沈線が施されている点が注目できる。内面に一部ハケメ調整がみられる。口縁部がやや下方に垂れ下がることや頸部の



第48図 壺形Ⅱb-2類土器1

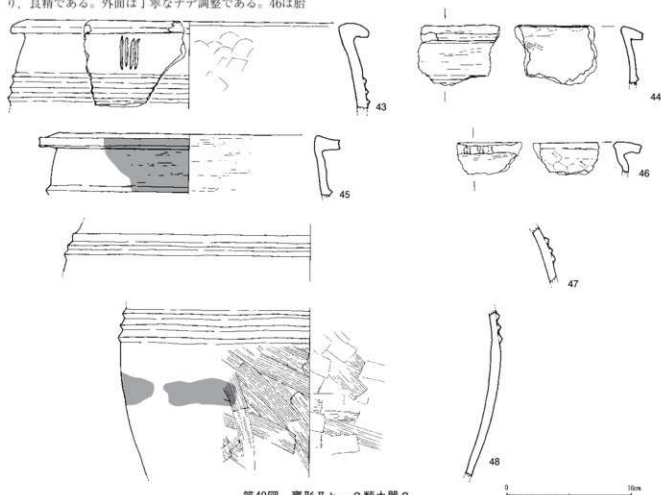
沈線から、外来系の影響を受けているものと考えられるが、胎土や技法は在地のものである。須玖式の丹塗堯にみられるような頸部に暗文を施すものを模倣したものかと思われる。

44は器壁の厚みが小さく、断面三角状の突帯も小さい。口唇部の凹みはそれほど目立たないが、口縁部の垂れ下がりが顕著である。

45・46は口縁部がやや細長い。いわゆる鰐先状に近い口縁を呈している。45の胎土は細かい雲母を含んでおり、良精である。外面は丁寧なナデ調整である。46は胎

土に赤みがあり、口唇部に刻目が施されるのが特徴的である。口縁部形態から外来系の影響を受けているとおもわれる。47は夔の胴部片である。3条の断面三角突帯は胴部最大径より上位に施されている。

48は器壁が非常に薄く、良精な胎土である。胴部外面には明瞭なハケメ調整が目立ち、内面もハケメ調整が施されている。胴部突帯も丁寧に貼付けされており、器形も安定している。外面・内面ともにススが附着しているため、火熱を受けた可能性がある。



第49図 変形Ⅱb-2類土器2

第11表 変形Ⅱb-2類土器観察表

挿図番号	掲載番号	部位	出土区	層	取上番号	口径 (cm)		底径 (cm)	色調		文様・調整		胎土				備考
						外径	内径		外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	
48	40	口縁部	D-21	Ⅳ b	111170	32.6	28.4	-	明赤褐	明赤褐	ナデ	ハケメ・ナデ	○			○	
	41	口縁部	H-5	Ⅳ a	142160 他	35.4	30	-	明褐	明赤褐	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	○			○	
	42	口縁 ～ 胴部	D-20	Ⅳ a	113556 他	38.4	33	-	橙	黄褐～ にふい 黄褐	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	○			○	スス付着
49	43	口縁部	E-19	Ⅳ a	113506	28.5	23.8	-	明黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○			○	
	44	口縁部	E-19	Ⅳ b	115524	-	-	-	黒褐	橙	ナデ	ナデ	○			○	
	45	口縁部	E-18	Ⅳ b	110330 他	24	20	-	黒	にふい黄褐	ハケメ	ナデ	○			○	スス付着
	46	口縁部	F-18	Ⅳ b	110979	-	-	-	橙	橙	ナデ	ナデ	○				
	47	胴部	M-16	Ⅲ b	76603	-	-	-	赤褐	灰黄褐	ナデ	ナデ	○				
48	胴部	G-19・20	V a	119483	-	-	-	にふい赤褐	明赤褐	ハケメ・ナデ	ハケメ・ナデ	○			○	スス付着	

菱形Ⅲ類土器 (第50図 49~54)

出土数が少なく、細分できなかつた菱形土器をⅢ類土器とした。

49は口縁部先端が丸みを帯び、胴部文様をもたない土器である。口縁部下に粗いハケメ調整を施し、胴部に若干ゆがみが生じている。内面の指圧痕も残る。口縁部に少し立ち上がりが見られる。

50は壺の底部かと思われたが、把手から外側に大きく外反していることや内側の反り具合から菱形土器の蓋と判断した。外面は一部ミガキ調整がみられる。外面・内面ともにススが附着している。器形は鈎の部分がさらに横にのびていくものと想定される。蓋と確認できたものは1点のみである。

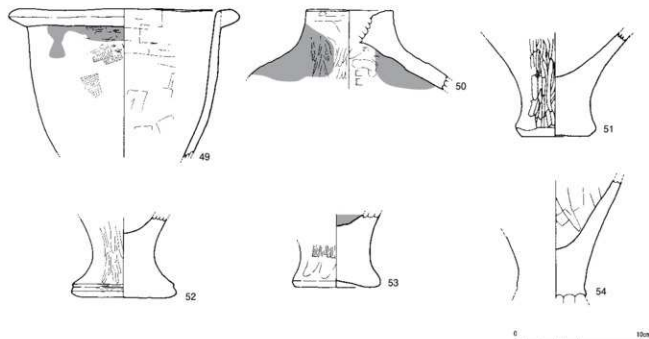
51~54は菱形土器の底部である。また、51・52は入来式土器の様相が窺えるが明瞭な根拠がないため、ここではⅢ類として掲載した。

51の底部の器形は安定しており、胴部は大きく外反するものである。外面は縦方向の丁寧なミガキ調整がみられる。胎土も在地的な様相を示す。

52は底部に明瞭な凹みを持ち、外面はミガキ調整を施している。底部下から胴部にかかるくびれが目立つ。

53は上げ底きみで、外面にハケメ調整を施している。

54は器壁の厚みが大きく、底部から胴部まで直線的に外反する。内面は工具によるナデ調整を施している。



第50図 菱形Ⅲ類土器

第12表 菱形Ⅲ類土器観察表

挿図 番号	掲載 番号	部位	出土区	層	取上 番号	口径 (cm)		底径 (cm)	色調		文様・調整		胎土				備考
						外径	内径		外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母	
50	49	口縁 ~胴部	H-5	IV a	142061 他	18.4	14.8	-	橙	明赤褐	ナデ・ハケメ	ナデ	○			○	スス附着
	50	蓋	E-19	オウテン	-	6.8	-	-	にぶい褐	橙	ミガキ・ナデ	ナデ・顔直	○				スス附着
	51	底部	H-20	IV a	108745 他	-	-	5.4	赤褐	黒褐	ハケメ	ナデ	○			○	
	52	底部	J-5	III	一括	-	-	6.8	明赤褐	黒褐	ナデ	ナデ	○				
	53	底部	F・G-10	-	-	-	-	6.3	にぶい褐	黒	ナデ	ナデ・顔直				○	スス附着
54	底部	G-5	IV a	87439	-	-	-	にぶい黄褐	暗褐	ナデ	ナデ	○			○		

壺形土器 (第51図 55~58・第52図 59~61)

壺形土器は、弥生時代前期から中期前半と弥生時代後期と思われるものが7点出土している。

55・56は弥生時代前期の壺である。55は壺の肩部である。2条の沈線が施されている。外面にはミガキ調整がみられる。

56は口縁部が欠損しているが、高さ26cm、胴部最大径23.4cmを呈する。肩部に2条の沈線を施し、胴部最大径より上に同様の浅い沈線を施している。胴部外面は工具によるナデ調整の後、横位のミガキ調整を施している。調整は器面全面に施されており、器形は安定している。ススが付着しており、火熱を受けた可能性がある。

57~60は口縁部断面が台形状を呈し、口唇部平坦面に凹みをもつものである。これらは弥生時代中期前半のものである。

57・58は口縁部が台形状を呈し、口唇部の平坦面に凹みがみられる。調整が粗いが、在地的な胎土である。

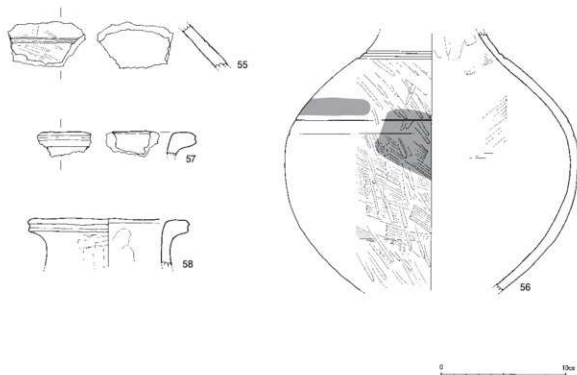
59・60は入来Ⅱ式の壺に比定できるものである。59の口縁部は垂れ下がり、口唇部に凹みがみられる。外面頸

部に縦位のハケメ調整が施されている。雲母が含まれており、在地性の強い胎土である。

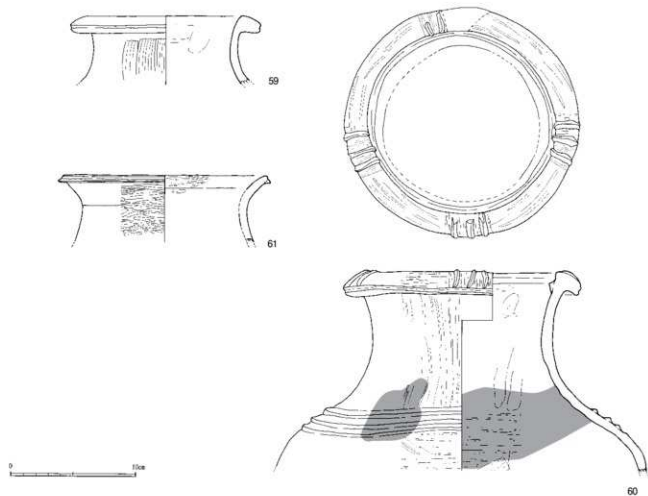
60は大型の壺である。口縁部外径19.4cm、口縁部内径14.2cm、胴部最大径30cmを呈する。肩部に断面三角形の突帯を3条施している。口縁部上面には、粘土帯の貼付けがみられる。この装飾は、間隔をおいて3条のものが4か所に施されている。装飾間には横位のミガキ調整が施されている。頸部は縦位のミガキ調整、突帯下は横位のミガキ調整が施されている。

また、口縁部内面には断面三角形の突帯を1条施し、胴部内面も工具によるナデ調整後ミガキ調整が施されている。器形が安定しており、丁寧に製作されている。外面・内面ともに突帯上までススが付着しており、煮炊に使用された可能性が考えられる。鹿屋市の西ノ丸遺跡でも類例があり、同様の装飾を施す壺が出土している。

61の口縁部が大きく外反し、先端に細い粘土帯を貼付け、ナデ消し調整されている。外面・内面ともに横位のミガキ調整が施され、器形は安定している。弥生時代後期のものかと思われる。



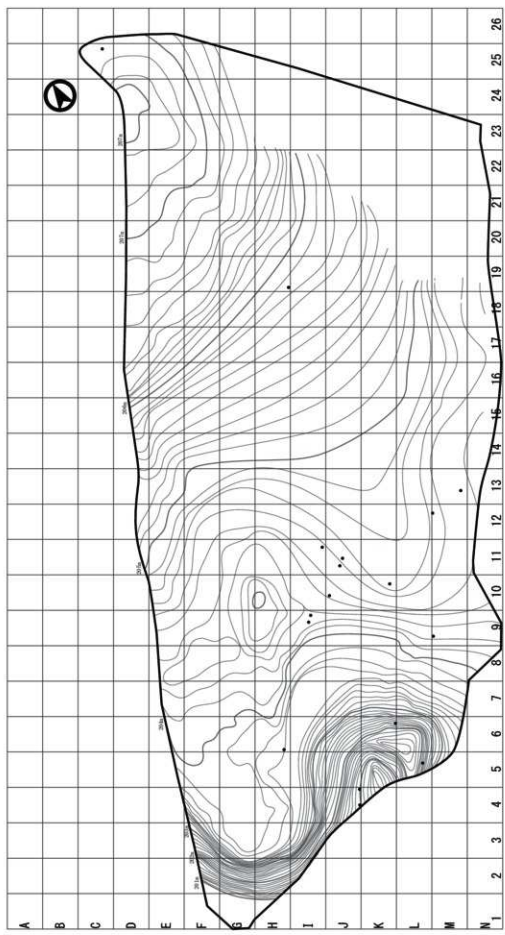
第51図 壺形土器 1



第52図 壺形土器2

第13表 壺形土器観察表

挿図 番号	掲載 番号	部位	出土区	層	取上 番号	口径 (cm)		底径 (cm)	色調		文様・調整		胎土				備考	
						外径	内径		外面	内面	外面	内面	石英	長石	角閃石	雲母		
51	55	肩部	G-4	IV a	87499	-	-	-	外面 赤褐	内面 明赤褐	ナデ・ミガキ	ナデ	○					
	56	肩～ 胴部	H-19	IV a	3251	-	-	-	明褐～ にぶい赤褐	黄褐	ミガキ	ナデ・調整	○					スズ付着
	57	口縁部	I-4	IV a	143835	-	-	-	明黄褐	明黄褐	ナデ	ナデ	○	○				
	58	口縁部	G-4	IV a	87500	12.8	9	-	にぶい褐	明赤褐～ にぶい黄褐	ナデ	ナデ	○					
52	59	口縁部	D-20	IV a	113548	15.2	11.2	-	橙～褐	にぶい褐～ にぶい黄褐	ハケメ	ナデ	○					
	60	口縁～ 胴部	H-5	IV a	142128 他	19.4	14.2	-	明赤褐～ 褐	明赤褐～ 褐	ハケメ・ミガキ	ナデ・ミガキ	○		○	○		スズ付着
	61	口縁部	G-17・18	IV a	28426 他	16.8	15.8	-	暗褐	褐	ミガキ	ナデ	○					



(1グリッド 10m X 10m)

第53図 Ⅲ・Ⅳ層出土石分布図

(2) III・IV層の石器 (第54図～第58図)

III・IV層の出土の石器は一部の磨礫石を除き、供伴する土器も少なく時期判断が難しかったため一括して報告する。

打製石礫 (第54図 62)

62は安山岩製の打製石礫である。二等辺三角形形状を呈し、基部に浅い袈が入る。脚部に比べ先端部に細かい加工が見られる。

磨製石礫 (第54図 63)

63は頁岩製の磨製石礫である。上部を欠損しているが、二等辺三角形形状である。器面には長軸方向の擦痕が溝状に凹み、その両側に横軸方向へ擦痕が入る。わずかではあるが、刃部に2mm程度の成形痕が見られる。

打製石斧 (第54図 64～67)

64と65はともに頁岩製の打製石斧である。刃部に敲打剥離加工がされており、さらに先端部にかけて摩耗のような擦痕が見られる。それらに対し、66・67には擦痕は見られない。

66は安山岩製であり、表面に自然面を残している。

67は頁岩製で、表裏の周囲に活発な剥離が見られる。遺物の状態からこれら2点はももとの石斧からの破損、もしくは再加工ではないかと考えられる。

磨製石斧 (第54図 68・69)

68と69は頁岩製の磨製石斧である。摩耗の痕に剥離が見られたり、稜線が滑らかになるように擦痕が残っている。これにより擦りによる加工と剥離を繰り返しながら形成し、使用したと考えられる。

磨石・敲石・凹石 (第55図・第56図 70～83)

16点中14点を図化した。この14点を形態によってI～VIII類に分けて掲載した。

I類…直径5センチ未満の小型のもので、5点を図化した。それぞれ小型で有りながら一部に敲打の痕も見られる。使用は多岐にわたったのではないと思われる。

70と71は共に安山岩の磨石である。共に楕円形状で一部にそれぞれ敲打の痕が見られる。

72は安山岩製である。楕円形を為しているが上部がツマミ状になっており集中的な使用が伺える。

73と74も同様に安山岩製であり、表面にかけて集中的な敲打の痕が見られる事から磨礫石としての使用が主として考えられる。

II類…直径5cm以上の玉状・楕円形状をなすもので、6

点を図化した。

75は安山岩の磨礫石で大部分を欠損している。表面中心部に集中的な敲打痕が見られ、側面に滑らかな擦痕が残る。

76は縦長の楕円形で表裏に擦痕が残る。上下に敲打と剥離が見られる。

77と78は楕円形状を呈し、目立った敲打の痕は見られない。77に対し、78は擦痕は見られないが、上下側面に敲打痕が残る。

79は安山岩製の凹石である。表裏中心部と側面に敲打が見られ、表面ススの付着や若干の赤化などの被熱の痕が見られる。

80は砂岩製で全体に赤く、被熱痕が見られる。表裏面に擦痕が見られ、特に右側面にかけて活発な使用の痕が見られる。

III類…形状が石蝕型をなすもので、3点を図化した。

81は安山岩製で側面に使用の際についたと思われる摩耗痕が見られる。中央部から下部にかけて斜めに盛り上がる一方で表面は平坦である。

82は安山岩製で正方形に近い形状を為し、81と同様に側面に使用の際についたと思われる摩耗痕が周囲の側面に見られる。また、中心部に小さな敲打痕と表面に擦痕が見られる。

83も安山岩製で前述の二つのように側面に使用の際にできた摩耗の痕が見られる。表裏に擦痕が見られ、下部一帯に集中的な敲打の痕が見られる。

砥石 (第56図・第57図 84～88)

7点中5点を図化した。

84および85は穿孔が見られる砥石であり、ひもを通して携帯していたと考えられる。84は砂岩製である。方柱状を為し表裏だけでなく側面にかけて磨面が形成されている。

85は泥岩製の板状砥石である。上部が欠損しているが穿孔の加工の痕が見られ加工途中で欠損した物と思われる。表面に横方向、裏面に縦方向の荒い擦痕が見られる。

86～88は砂岩製の砥石である。

86は表面に砥石特有の光沢の磨面が見られ、端部が丸みを帯びている。欠損により全体像が不明であり、石皿に使用された可能性も否定できない。

87は全体が赤化し、被熱痕が見られる。表面に光沢をもつ擦痕を持ち表面・側面にも擦痕が見られる。

88は比較的大型で扁平な形状に多面にかけて磨面が展開される。端部に元の大きさが残り、中央付近は極端な差が出るほど使用されている。

石皿（第57図・第58図 89～92）

5点中、4点を図化した。

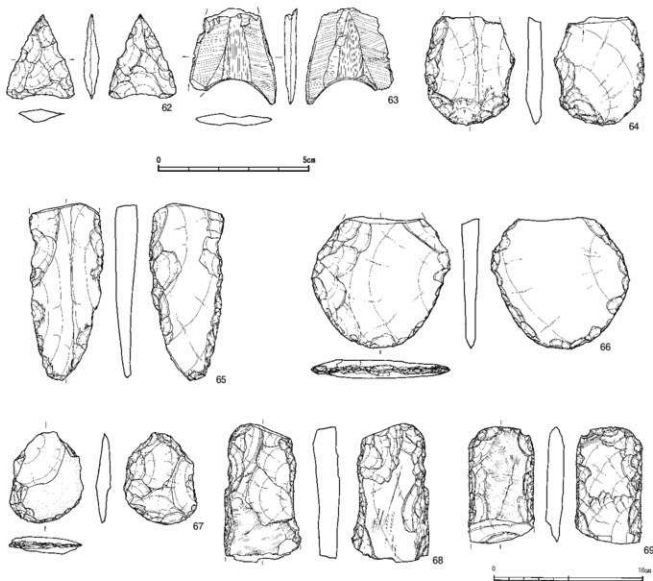
89も同じく安山岩製である。大部分を欠損しているが、表面は平坦で滑らかである。また、一部側面部に光沢を持つ擦痕が見られることから砥石として使われていた可能性も考えられる。

90は全体が滑らかに台座になっている。大部分を欠損してしまっているため全体像は不明であるが、側面部に擦痕が見られる。全体は滑らかで日常的な利用が想定される。

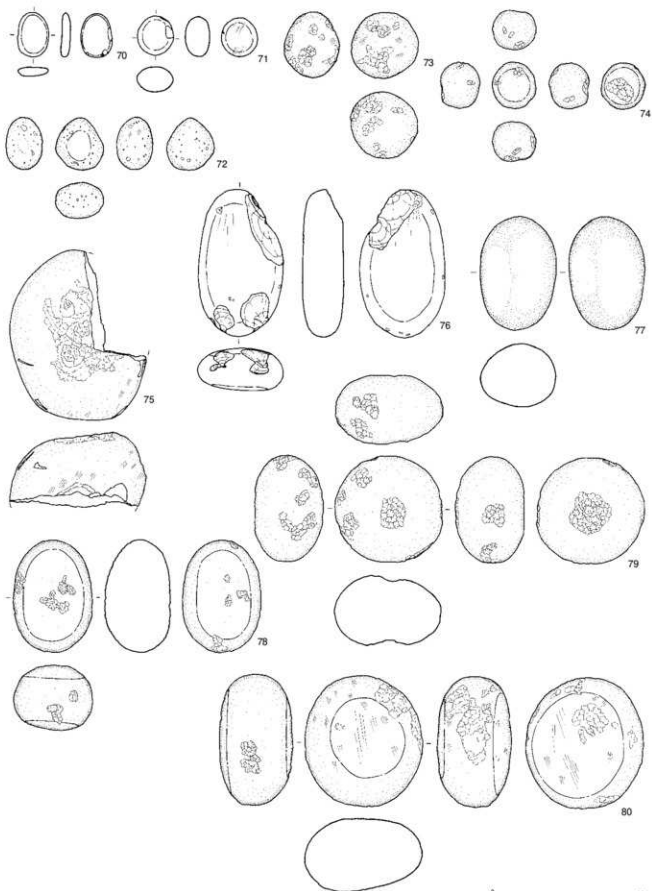
91は安山岩製の石皿である。楕円に近い形状で全体に

敲打が見られ横断面は凸レンズ状に変形している。下部と表面左側に集中的な敲打の痕が見られるため別の遺物の可能性も考えられる。皿として食材をすりつぶしたりなどして加工に利用していた可能性は低い。

92は凝灰岩製で、欠損が激しく全体の形状は不明である。全体に被熱痕を持ち表面に敲打による大きな挟りが見られ、挟りに沿って擦痕が残る。所々に鉄片が残っているものの、擦痕が表裏両面に見られる。金床石かと思われるが台石などの別の用途での使用も考えられるためここで取り上げた。



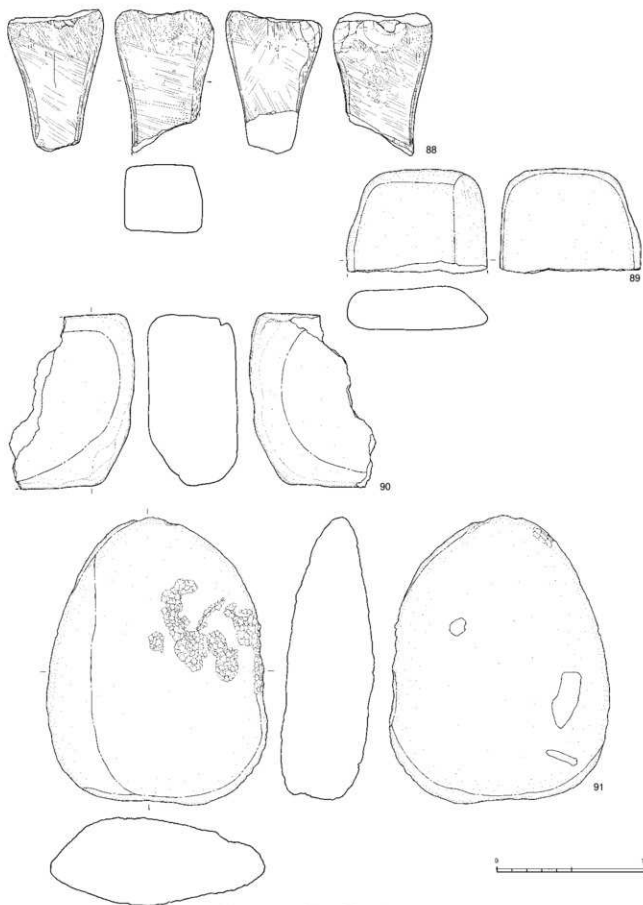
第54図 III・IV層の石器1（石鉄・石斧）



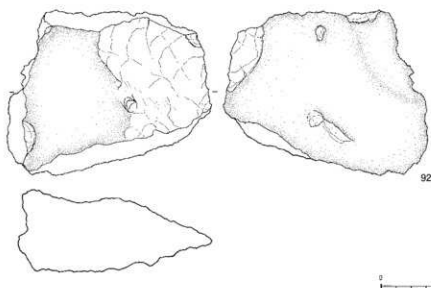
第55図 III・IV層の石器2 (磨石・敲石・凹石)



第56図 III・IV層の石器3(磨石・砥石)



第57図 III・IV層の石器4 (砥石・石皿)



第58図 III・IV層の石皿5(石皿)

第14表 III・IV層出土石器観察表

挿入 番号	掲載 番号	器種	出土区	層	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	取上 番号	石材	備考
54	62	打製石鏃	H-6	Ⅲa	28	23	0.5	4.1	142152	安山岩	
	63	磨製石鏃	K-7	Ⅲa	3.16	2.88	0.41	3.63	110067	頁岩	
	64	打製石斧	I-11	Ⅲb	7.2	6	1.2	61.96	2669	頁岩	
	65	打製石斧	L-9	Ⅲb	11.7	4.9	1.5	8.96	291	頁岩	
	66	打製石斧	-	-	8.7	9.2	1.2	110	①	安山岩	溝35
	67	打製石斧	-	-	6.1	4.4	1	33	一括	頁岩	溝29
	68	磨製石斧	J-4	Ⅲa	9.2	5.2	1.8	105.9	1550	頁岩	
	69	磨製石斧	K-10	Ⅲb	7.7	4.4	1.2	64.7	2431	頁岩	
	70	磨石	J-10	Ⅲa	2.9	2.1	0.6	6.37	2304	安山岩	
	71	磨石	J-11	Ⅲb	2.6	3.1	1.6	14.2	2473	安山岩	
55	72	磨石	I-7・8	Ⅳa	3.5	3.1	2.5	38.6	-	安山岩	溝29
	73	磨石	E-7	Ⅳa	4.5	4.4	4.5	97	一括	安山岩	古代土坑26
	74	磨石	-	-	3	2.9	2.9	30	-	安山岩	
	75	磨石	J-11	Ⅲa	11.2	8.7	4.45	547	2737	安山岩	
	76	磨石	K-6	Ⅲa	9.5	5.6	2.6	208	110003	砂岩	
	77	磨石	M-14	Ⅳd	7.7	5.1	5	210	47765	砂岩	
	78	磨石	C-25	Ⅲ	7.5	5.2	4.5	251	65415	砂岩	
	79	凹石	N-14	-	7.1	7.2	4.7	341	-	安山岩	P-1070-①
	80	磨石	-	-	8.7	7.9	4.8	458	一括	砂岩	
	81	磨石	-	-	11	6.15	2.9	271	一括	安山岩	溝29
56	82	磨石	D-17・18	Ⅳa	8.4	6.8	4.1	392	一括	安山岩	溝34
	83	磨石	I-9	Ⅲ	6.4	6.15	3.05	189	2240	安山岩	
	84	砥石	I-9	Ⅲa	7.7	3.2	1.9	78.5	2220	砂岩	
	85	砥石	L-5	Ⅲ	6.3	3.4	0.8	20.5	1774	泥岩	
	86	砥石	-	-	5.4	5.5	4.1	225	一括	砂岩	溝29
	87	砥石	-	-	13.7	10	5.3	1124	-	砂岩	
	88	砥石	H-18	Ⅲa	9.4	6.5	6.3	480	33195	砂岩	
57	89	石皿	L-12	Ⅲb	6.9	9.4	2.9	369	-	安山岩	古代ビット22
	90	石皿	D-17・18	Ⅳa	11.4	6.6	5.9	926	一括	安山岩	溝34
	91	石皿	K-4	Ⅲb	18.9	14.4	5.8	1826	1792	安山岩	
58	92	石皿	-	-	10.9	12.7	5.4	824	-	凝灰岩	

第2節 古代の調査成果

1 調査の概要

古代該当の遺物包含層はⅢb層・Ⅲc層である。一部、畑地等の利用などでⅣa層上面まで削平を受けていたが、D～N-3～23区で包含層が残存しており調査を行った。

遺構を当時の生活面であるⅢb層・Ⅲc層で検出しようとして慎重に調査を行ったが、当時の生活面より下のⅣa層・Ⅳb層上面で遺構を検出することができた。

調査の方法は、遺構については検出状況の記録写真を撮影した後、各遺構の調査を進めた。特に、本遺跡ではピットが多数検出されたため、位置を記録し、それを基に調査軸の設定や埋土の確認等調査の方法を検討し、調査を進めた。また、古代の土師器等の集中出土箇所を2か所検出したため、調査の効率化を図り、民間会社に実測を委託した。

遺物については、遺構内遺物以外の比較的大型の破片はトータルステーションで取り上げを行った。小破片はグリッド毎に一括で取り上げを行った。

2 遺構

古代該当の遺構は、掘立柱建物跡7棟、竪穴住居状遺構2基、土坑90基、ピット660基、土器集中2か所が確認された。

(1) 掘立柱建物跡

掘立柱建物跡は7棟検出された。柱穴の形状に共通性は見られないが、規模が2間×3間の建物が大半を占める。

掘立柱建物跡1号(第60図)

検出状況 I-15・16区、Ⅳa層上面で検出された。

規模 規模は2間×3間で、主軸はN16°Eを示す。柱間は、桁行が1間159～195cm、梁行が1間175～192cmである。

柱穴の形状・埋土 柱穴の平面形は円形を基本とする。規模は直径29～55cm、検出面からの深さ34～66cmで、P2、P7以外の柱穴には直径15～20cm、深さ23～45cm程度の柱痕跡がみられる。埋土はオリーブ黒色で、しまりがよい。

遺物 P7から土師器が1点出土したが、図化には至らなかった。

掘立柱建物跡2号(第61図)

検出状況 I-16区、Ⅳb層で検出された。

規模 規模は2間×3間で、主軸はN80°Eを示す。柱間は、桁行が1間172～185cm、梁行が1間165～200cmである。

柱穴の形状・埋土 柱穴の平面形は円形を基本とする。規模は直径21～52cm、検出面からの深さ18～64cmで、柱痕跡はみられなかった。埋土は暗黄褐色で、やや粘性がある。遺物はみられなかった。

掘立柱建物跡3号(第62図)

検出状況 J・K-17区、Ⅳb層で検出された。

規模 規格は2間×3間で、主軸はN71°Wを示す。柱間は、桁行が1間117～230cm、梁行が1間173～224cmである。

柱穴の形状・埋土 柱穴の平面形は円形を基本とする。規模は直径12～37cm、検出面からの深さ11～78cmで、P1には直径20cm、深さ50cmの柱痕跡がみられる。埋土は暗茶褐色で、P3は下部にやや粘性がある。

遺物 P1・P4・P5・P8から土師器等が合計8点出土したが、図化には至らなかった。

掘立柱建物跡4号(第63図)

検出状況 M・N-12区、Ⅳa層で検出された。

規模 規格は2間×3間で、主軸はN24°Eを示す。柱間は、桁行が1間145～180cm、梁行が1間156～186cmである。

柱穴の形状・埋土 柱穴の平面形は円形を基本とする。規模は直径26～56cm、検出面からの深さ30～72cmで、P4・P6・P7の床面には直径14～16cm、深さ8～12cm程度の柱痕跡がみられる。埋土は暗褐色である。P10の埋土内の炭化物については放射性炭素年代測定を実施し、1270±20yrBPという値を示されている。

遺物 P8から1点出土したが、図化には至らなかった。

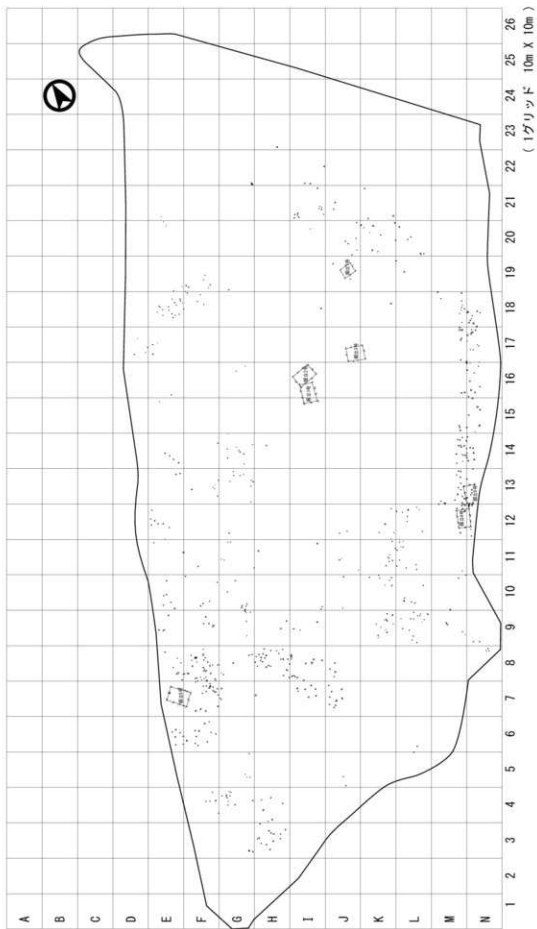
掘立柱建物跡5号(第64図)

検出状況 E・F-7区、Ⅳa層で検出された。

規模 規格は3間×2間で、主軸はN40°Wを示す。柱間は桁行が1間181～215cm、梁行が190～210cmである。建物跡内に土坑2基と焼土2基がみられるが、建物との関連は不明である。

柱穴の形状・埋土 柱穴の平面形は円形を基本とする。規模は直径21～45cm、検出面からの深さ50～150cmで規格にばらつきがみられる。埋土は暗黄褐色である。P8の埋土内の炭化物について放射性炭素年代測定を実施し、1220±30yrBPという値を示している。

遺物 P1・P2・P5・P6・P9から土師器が合計5点出土し、P5出土の墨書土器1点を図化した(第66図 93)。



第59図 古代の掘立柱建物跡・ピット配置図

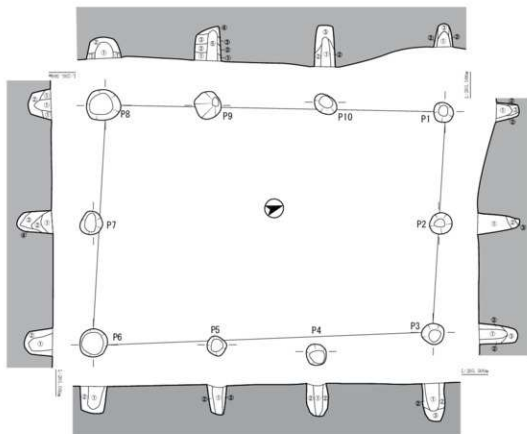
掘立柱建物跡 6号 (第65図)

検出状況 M・N-12・13区, IVa層で検出された。

規模 東側が調査区外に延びているため正確な全体像は不明であるが、規模は2間×3間の可能性が高い。主軸はN20°Eを示す。柱間は、桁行が1間142～174cm、梁行が1間148～176cmである。建物内に土坑が数基みられるが、建物との関連は不明である。

柱穴の形状・埋土 柱穴の平面形は円形を基本とする。規模は直径30～46cm。検出面からの深さ37～85cmである。埋土は暗黄褐色で、P1・P3・P7には直径14～17cm、深さ14～25cm程度の柱痕跡がみられる。

遺物 P1・P5・P6から土師器片等が合計4点出土し、P1出土の土師器片1点を図化した(第66図94)。



第15表 掘立柱建物跡1号計測表

番号	柱式(cm)	長さ	幅	深さ	主軸	柱穴間距離	N16°E
P1	34	31	37		P1～P8	545	
P2	36	33	66		P2～P10	188	
P3	35	34	62		P3～P9	190	
P4	36	33	54		P4～P8	167	
P5	33	32	49		P5～P6	338	
P6	47	45	44		P3～P4	188	
P7	37	36	55		P4～P5	159	
P8	55	49	34		P5～P6	195	
P9	45	44	56		P1～P2	352	
P10	40	29	66		P1～P2	176	
					P2～P3	175	
					P8～P6	278	
					P8～P7	187	
					P7～P6	192	

- P1 ①灰色 ②オリーブ黒色 ③オリーブ黒色
 P2 ①オリーブ黒色 ②灰色鉄分が沈着 ③灰オリーブ
 P3 ①オリーブ黒色 ②黒褐色 ③暗オリーブ褐色
 P4 ①オリーブ黒色 ②暗灰黄色
 P5 ①オリーブ黒色 ②暗オリーブ色
 P6 ①オリーブ黒色 ②灰オリーブ色
 P7 ①灰色 ②暗灰黄色 ③オリーブ褐色 ④黄褐色
 P8 ①暗褐色 ②褐色
 P9 ①暗オリーブ色 ②黒褐色 ③暗灰黄色
 ④オリーブ褐色 ⑤オリーブ黒色
 P10 ①オリーブ黒色 ②灰色 ③暗オリーブ褐色



第60図 古代の掘立柱建物跡1号

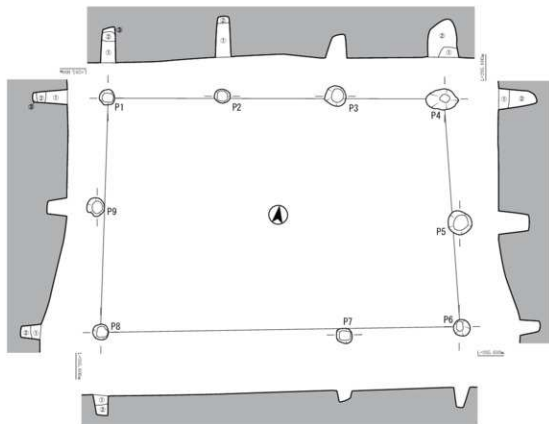
掘立柱建物跡 7号 (第65図)

検出状況 丁-19区, IVa層で検出された。

規模 規格は2間×2間で、主軸はN86°Eを示す。柱間は、桁行が1間161～191cm、梁行が1間124～163cm

である。

柱穴の形状・埋土 柱穴の平面形は円形を基本とする。規模は直径18～27cm、検出面からの深さ14～24cmである。埋土は黒色で、P4の底面は硬化している。遺物はみられなかった。



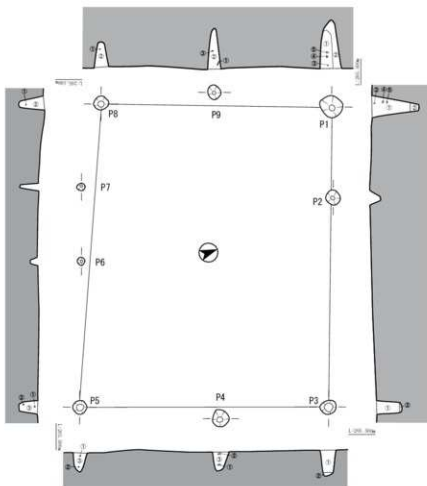
第16表 掘立柱建物跡2号計測表

柱穴(cm)				主軸	N80°E
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離
P1	26	24	57		P1 - P4 540
P2	25	21	64		P1 - P2 184
P3	34	33	36		P2 - P3 184
P4	52	32	60	桁行	P3 - P4 172
P5	39	36	46	(cm)	P8 - P6 575
P6	28	26	30		P8 - P7 392
P7	28	24	18		P7 - P6 185
P8	26	25	33		P1 - P8 374
P9	29	28	31	梁行	P1 - P9 175
				(cm)	P9 - P8 200
					P1 - P6 364
					P1 - P5 199
					P5 - P6 165

- P1 ①粘性のある褐色土。細砂・砂粒を含む。
②濃い褐色土
- P2 ①粘性のある褐色土。細砂・砂粒を含む。
②褐色土+灰色土。粘性があり①より砂粒を多く含む。
- P4 ①硬底
②粘性のある褐色土。細砂・砂粒を含む。
- P8 ①褐色土+灰色土。粘性があり砂粒を多く含む。
②褐色土+やや濃い褐色土。粘性があり砂粒を少し含む。



第61図 古代の掘立柱建物跡2号



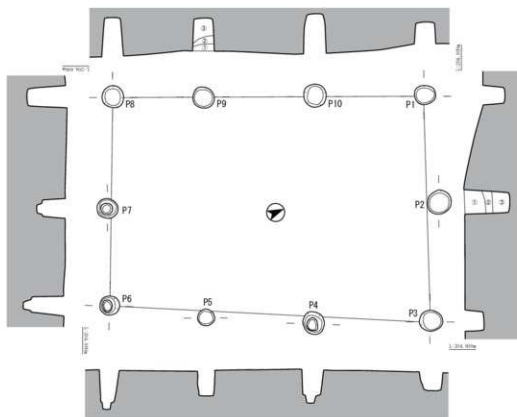
第17表 掘立柱建物跡3号計測表

柱穴(cm)			手軸		N71°W	
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離	
P1	37	34	78	縦行 (cm)	P1 - P3	477
P2	24	23	17		P1 - P2	145
P3	26	22	42		P2 - P3	332
P4	27	26	31		P8 - P5	483
P5	23	22	30		P8 - P7	137
P6	13	12	11		P7 - P6	117
P7	13	12	30		P6 - P5	230
P8	24	22	40		P1 - P8	365
P9	24	21	65		P1 - P9	188
					P9 - P8	180
					P3 - P5	285
				P3 - P4	173	
				P4 - P5	224	

- P1 ①オリブ黒 ②暗茶褐色土
③チップ ④土器 ⑤土器
- P3 ①パミスを含んだ暗茶褐色土
②粘質のある少し明るめの暗茶褐色土
- P4 ①土器 ②土器 ③パミスを含んだ暗茶褐色土
- P5 ①土器 ②土器 ③パミスを含んだ暗茶褐色土
- P8 ①土器 ②暗茶褐色土
- P9 ①アカホヤ (V) が入っている
②暗茶褐色土 ③土器



第62図 古代の掘立柱建物跡3号



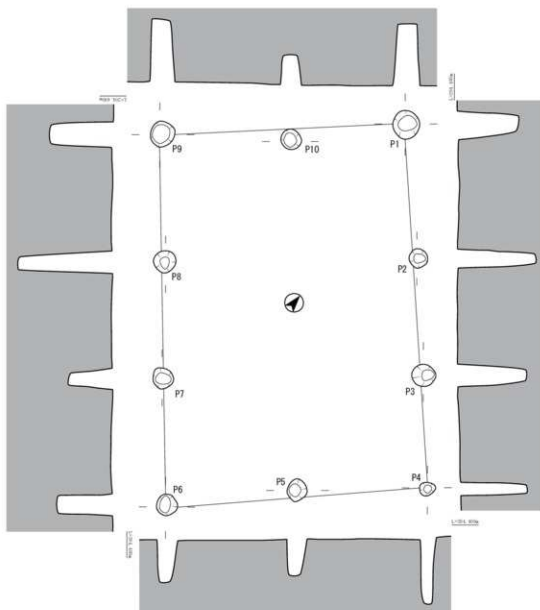
第18表 掘立柱建物跡4号計測表

番号	柱径(cm)			方向	柱穴間距離
	長径	短径	深さ		
P1	35	30	35	N24°E	P1 - P8 500
P2	40	37	72		P1 - P10 180
P3	40	35	30		P10 - P9 176
P4	35	56	55		P9 - P8 143
P5	27	26	41		P3 - P6 510
P6	33	40	62		P3 - P4 180
P7	34	33	45		P4 - P5 177
P8	36	35	61		P5 - P6 150
P9	36	35	54		P1 - P3 355
P10	38	35	63		P1 - P2 170
				並行 (cm)	P2 - P3 186
					P8 - P6 335
					P8 - P7 173
					P7 - P6 156

- P2 ①暗褐色土、砂質、黄色パミルス小皿
 ②褐色土、黄色パミルス小皿
 ③暗茶褐色土、パミルス小皿
- P9 ①暗褐色土、砂質、黄色パミルス小皿
 ②褐色土、黄色パミルス小皿
 ③暗茶褐色土、パミルス小皿



第63図 古代の掘立柱建物跡4号

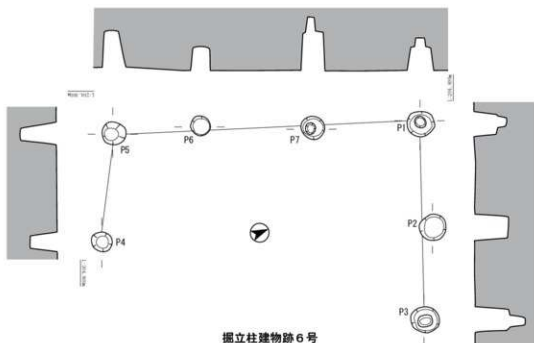


第19表 掘立柱建物跡5号計測表

柱式(cm)			方向		柱穴間距離	
番号	長径	短径	方向	柱穴間距離	N40° W	
P1	45	44	300	P1 - P4	580	
P2	31	29	125	P1 - P2	215	
P3	38	35	110	P2 - P3	185	
P4	26	21	305	P3 - P4	181	
P5	36	32	58	P9 - P6	590	
P6	33	32	87	P9 - P8	305	
P7	34	31	72	P8 - P7	183	
P8	36	36	150	P7 - P6	303	
P9	41	37	110	P1 - P9	390	
P10	33	29	50	P1 - P10	190	
				差行		
				(cm)		
				P10 - P9	205	
				P4 - P6	414	
				P4 - P5	210	
				P5 - P6	207	



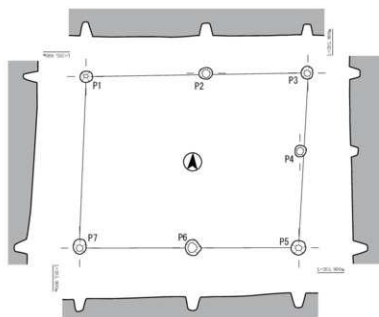
第64図 古代の掘立柱建物跡5号



掘立柱建物跡 6号

第20表 掘立柱建物跡 6号計測表

番号	柱式(cm)			方向	主軸	柱穴裏面深
	長径	短径	深さ			
P1	43	40	24	相行 (cm)	N20° E	P1 ~ P5
P2	44	43	26			P1 ~ P7
P3	46	42	30			P7 ~ P6
P4	32	30	44	縦行 (cm)	N80° E	P6 ~ P5
P5	38	36	44			P1 ~ P3
P6	32	30	37	縦行 (cm)	N80° E	P1 ~ P2
P7	40	36	35			P2 ~ P3
						P5 ~ P4



掘立柱建物跡 7号

第21表 掘立柱建物跡 7号計測表

番号	柱式(cm)			方向	主軸	柱穴裏面深
	長径	短径	深さ			
P1	20	18	23	相行 (cm)	N80° E	P1 ~ P3
P2	22	20	21			P1 ~ P2
P3	21	18	18			P2 ~ P3
P4	19	19	14	縦行 (cm)	N80° E	P7 ~ P5
P5	25	24	24			P7 ~ P6
P6	27	25	23	縦行 (cm)	N80° E	P6 ~ P5
P7	25	23	21			P1 ~ P7
						P3 ~ P5
				縦行 (cm)	N80° E	P3 ~ P4
						P4 ~ P5



第65図 古代の掘立柱建物跡 6・7号

柱穴内出土遺物（第66図）

93は掘立柱建物跡5号のP5から出土した墨書土器である。坯もしくは埴の口縁部下に墨書が観察できるが、書かれている内容については不明である。

94は掘立柱建物跡6号のP1から出土した須恵質の土師器である。高台が0.7cmと低く、底部は1cm以上の厚さがある。焼成は良好で、やや硬質である。見込みが盛り上がり、布目痕が見られる。

(2) 竪穴住居状遺構

竪穴住居状遺構は、中世の土坑に切られる形で2基検出された。規模・形状から竪穴住居跡の可能性もあるが、明確な根拠がないため竪穴住居状遺構として報告する。

竪穴住居状遺構1号（第68図）

検出状況 F-5区で、一部、中世の土坑48号・49号に切られた状態で検出された。検出面はIV a層であった。
形状と規模 2基の土坑によって一部切られているが、基本となる平面プランは隅丸長方形である。規模は、長軸は約400cm、短軸は約300cmを測る。検出面からの深さ

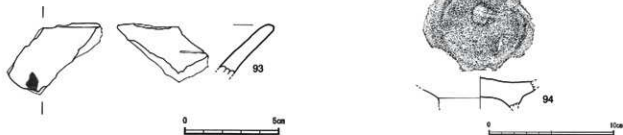
は中央の最深部で約30cmと浅く感じるが、当時の生活面がIII b層であることを考えれば、掘込面も同じIII b層で、実際はもう少し深かったと考える。

また、検出面から約25cmの深さのところ硬化面が確認された。調査の結果、硬化面は地層の横転等の影響を受けていたためか住居の底面の約半分のみ確認できた。
埋土 褐色系の土層が基本となっている。埋土①は砂質の黒褐色土、埋土②は砂質の暗褐色土、埋土③は砂質の褐色土である。埋土④は硬質の灰黄褐色土で、貼床と考えられる。多くの遺物は埋土①から出土した。

出土遺物 遺構内からは土師器を主として、遺物が22点出土し、そのうちの3点を図化した（第69図 95～97）。

なお、文中記載の遺物分類はP109の「3 遺物」の項で述べてあることに準ずる。

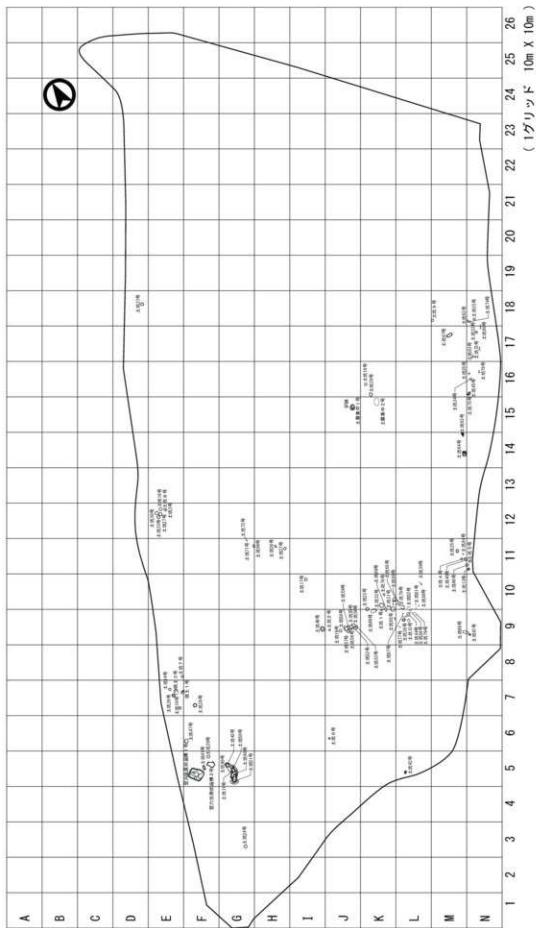
95は堯III b類の口縁部である。強めのナデ調整により口縁端部が玉縁状になる。96は口縁部に近い堯III a類の胴部である。外面は強めのナデ調整が施され、一部ハケメも観察できる。97は埴皿類の口縁部である。内外面ともナデ調整が施され、口縁が内側にやや肥厚する。



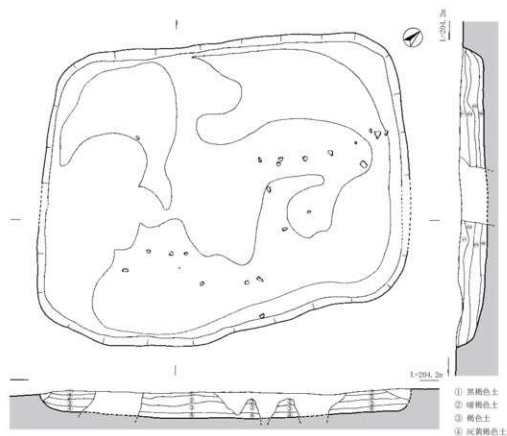
第66図 柱穴内出土遺物

第22表 柱穴内出土遺物観察表

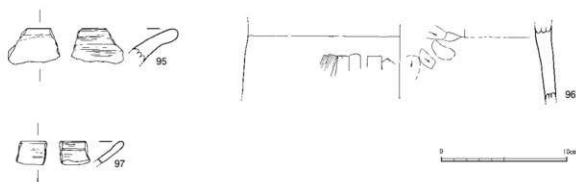
遺物番号	出土区	検出/遺構	取上番号	種類	器種	部位	分類	色調		文様・調整		法量 (cm)			胎土		備考	
								外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	高台高	右表		右裏
66	93	F-7	掘立5 P5	-	土師器	環・埴	口縁部	-	橙色	橙色	ナデ	ナデ	-	-	-	-	-	
	94	M-13	掘立6 P1	-	土師器	埴	底面	-	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	ナデ	布目痕	-	6.8	-	-	○	



第67図 古代の竪穴住居状遺構・土坑・炉跡・竈土跡・土器集中の配置図



第68図 古代の竪穴住居状遺構 1号



第69図 古代の竪穴住居状遺構 1号内出土遺物

第23表 竪穴住居状遺構1号内出土遺物観察表

採集番号	出土区	出土番号	種類	器種	部位	分類	色調		文様・調整		法量 (cm)				胎土		備考	
							外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	高さ	石炭	灰石		赤石
69	95	F-5	6	土師器	変	口縁部	Ⅲb	にぶ・褐色	褐色	ナデ	ナデ	-	-	-	-	-	○	
	96	F-5	5	土師器	変	胴部	Ⅲa	褐色	褐色	ナデハケメ	ヘラケズリ	-	-	-	-	○		
	97	F-5	18	土師器	杯	口縁部	-	褐色	褐色	ナデ	ナデ	-	-	-	-			

竪穴住居状遺構 2号 (第70図)

検出状況 F-5区で、一部、中世の土坑52号に切られたり、攪乱を受けたりした状態で検出された。検出面はIV a層であった。

形状と規模 重複遺構や攪乱の影響で、全形は推定するしかないが、基本となる平面プランは隅丸長方形と考えられる。長軸は約200cm、短軸は推定で約160cmを測る。検出面からの深さは、最深部で約30cmと浅く感じるが、竪穴住居状遺構1号と同様に、当時の生活面がⅢ b層であることを考えれば、掘込面も同じⅢ b層で、実際はもう少し深かったと考える。

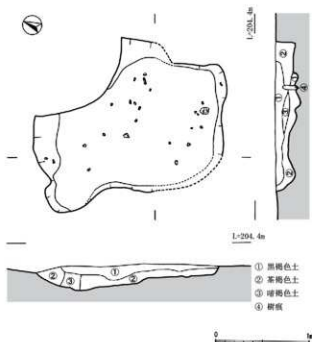
埋土 パミスはほとんど含まない黒褐色土(埋土①)を基本とし、その下位に一部表面が硬化した茶褐色土(埋土②)、やや硬質の暗茶褐色土(埋土③)が堆積していた。硬化面の残存率が低かったため、貼床であったかどうかは不明である。

出土遺物 遺構内からは土師器を主として、遺物が26点出土し、そのうちの3点を図化した(第71図 98~100)。

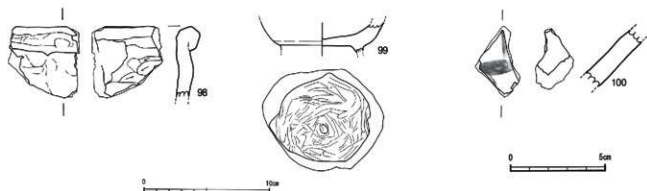
98は土師器の甕もしくは鍋と思われる。胎土と作りが粗雑で、口縁部は外側から内側に折り返して作られ、内外面とも一部にナデ調整が施される。さらに、内面は横方向のケズリによる調整が施される。

99は黒色土器の塊である。内面は丁寧にミガキ調整が施され、見込みが押圧され凹む。外面はナデ調整が施され、高台は端部に向かってやや内湾している。

100は墨書土器である。坏か塊と思われる。線状の墨書が書かれているが、文字の判読には至らなかった。



第70図 古代の竪穴住居状遺構 2号



第71図 古代の竪穴住居状遺構 2号内出土遺物

第24表 竪穴住居状遺構 2号内出土遺物観察表

検出番号	出土区	出土番号	種類	器種	部位	分類	色面		文様・調整		法量 (cm)				胎土		備考		
							外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	高台高	口縁	底台		厚	重
71	98	F-5	12	土師器	甕・鍋	口縁部	-	明水褐色	橙色	ナデ	ヘラケズリ	-	-	-	-	-	-	-	-
	99	F-5	1	黒色土器	塊	底部	-	橙色	黒褐色	ナデヘラ削り (底面) → ナデ(高台)	ミガキ 押圧	-	-	-	-	○	-	-	-
	100	F-5	1	墨書土器	坏・塊	体部	-	にぶい橙色	にぶい橙色	ナデ→墨書	ナデ	-	-	-	-	-	-	-	-

(3) 土坑

古代該当の土坑は、90基検出された。これらの土坑を平面形をもとに以下の5タイプに分類した。

Type 1・・・ほぼ円形を呈する円形タイプ

Type 2・・・楕円形状を呈する楕円形タイプ

Type 3・・・隅丸方形形状を呈する隅丸方形タイプ

Type 4・・・隅丸長方形形状を呈する隅丸長方形タイプ

Type 5・・・その他（不定形や形状が不明なもの）

Type 1（円形タイプ：第72回～第74回）

土坑1号

K-9区、IV a層で、一部、トレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸52cm、短軸40cm、底面までの深さは樹痕の影響もあり起伏があるが最深部で5cmを測る。断面形は皿状を呈するものと想定される。残存部の埋土は、暗茶褐色土の単一埋土であった。埋土中から出土した遺物は無かった。

土坑2号

J-9区、IV a層上面で検出された。規模は長軸58cm、短軸53cm、底面までの深さはやや起伏があるが最深部で11cmを測る。断面形は舟形状を呈する。埋土は、暗褐色土と黄色土ブロックの混在土が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

土坑3号

E-12区、IV a層で古代の土坑8号と中世の溝21に切られる形で検出された。規模は推定で長軸64cm、短軸55cm、底面までの深さは最深部で10cmを測る。断面形は、舟形状を呈する。残存部の埋土は、暗褐色土の単一埋土であった。埋土中から出土した遺物は無かった。

土坑4号

M-11区、IV層で検出された。規模は長軸66cm、短軸62cm、底面までの深さは最深部で9cmを測る。断面形は、舟形状を呈する。埋土は、暗茶褐色土を主体とし、1mm大の白色バミスと黄褐色バミスが混在し堆積していた。埋土中からは2点の遺物が出土したが細片のため図化できなかった。

土坑5号

N-11区、IV b層で検出された。規模は長軸67cm、短軸66cm、底面までの深さは最深部で22cmを測る。断面形は台形状を呈している。埋土は、茶褐色土を主体とし、1mm大の白色及び黄色バミスが混在し堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑6号

J-6区、III c層で検出された。規模は長軸64cm、短軸50cm、底面までの深さは最深部で36cmを測る。断面形は台形状を呈している。埋土は、1～2mm大の橙色バミスを含む暗褐色土（埋土①）を主体とし、1～2mm大の橙色バミスを含む白濁褐色土（埋土②）が堆積していた。

土坑7号

E-8区、IV a層で検出された。規模は長軸68cm、短軸62cm、底面までの深さは最深部で7cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は、黄色バミスを含む暗褐色土が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

土坑8号

E-12区、IV a層で、古代の土坑3号を切る形で検出された。規模は長軸65cm、短軸64cm、底面までの深さは最深部で15cmを測る。断面形は舟形状を呈する。埋土は暗褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑9号

L・M-18区、IV層上面で検出された。平面形が直径69cmの正円形を呈し、底面までの深さは最深部で4cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は、褐色系の土が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

土坑10号

E-7区、IV a層で検出された。規模は長軸73cm、短軸73cm、底面までの深さは最深部で6cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は、黄色バミスを含む暗褐色土が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

土坑11号

G-5区、IV a層で、古代の土坑51号と土坑90号を切る形で検出された。規模は長軸56cm、短軸48cm、底面までの深さは最深部で85cmを測る。断面形はコップ状を呈する。埋土は、炭化物を全体的に含む暗褐色土が堆積していた。底面付近に炭化物の集中が見られた。埋土中から遺物が6点出土したが細片のため図化できなかった。

土坑12号

L-9区、IV a層上面で西側半分と東側一部をトレンチャーにより切られる形で検出された。規模は推定で長軸71cm、短軸70cm、底面までの深さは最深部で7cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は、黒褐色土（埋土①）を主体とし、暗茶褐色土（埋土②）が堆積していた。埋土中から出土した遺物は無かった。

土坑13号

N-11区、IV a層上面で検出された。規模は長軸72cm、短軸68cm、底面までの深さは樹痕の影響を受けているが最深部で18cmを測る。断面形は楕円状を呈する。埋土は、1mm大の白色及び黄色バミスが混ざる茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が1点出土したが細片のため図化できなかった。

土坑14号

E-7区、IV b層で検出された。平面形が直径70cmの正円形を呈し、底面までの深さは最深部で34cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は、1～3mm大の黄バミスを含む褐色土（埋土①）と褐色土（埋土②）が堆積していた。また、黄色バミス（P7）が点在する黄褐色土

のブロック(埋土③)も確認できた。埋土中からは遺物の出土は無かった。

土坑15号

N-18区, IV b層で検出された。規模は北側を掘りすぎて不明の部分があるものの、推定で長軸68cm, 短軸65cm, 底面までの深さは最深部で37cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は、黄色バミス少量含む暗褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑16号

E-12区, IV b層で、一部、中世の土坑51号に切られる形で検出された。規模は推定で長軸95cm, 短軸92cm, 底面までの深さは最深部で28cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は、暗褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑17号

I-10区, IV a層上面で検出された。規模は長軸88

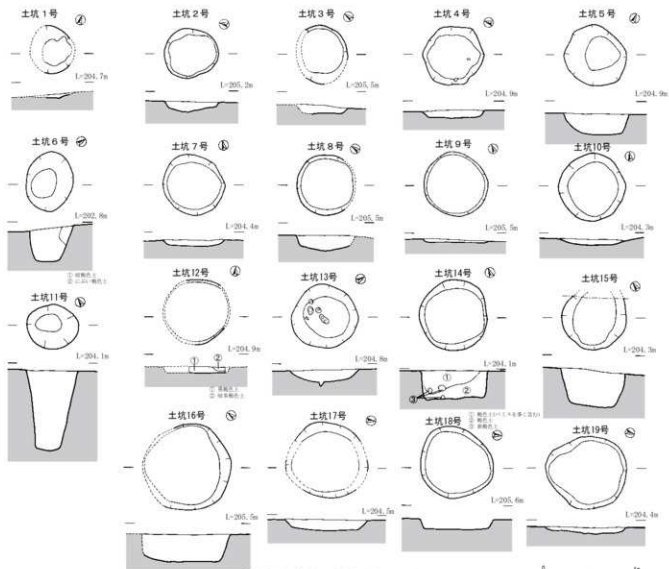
cm, 短軸81cm, 底面までの深さは7cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は、暗褐色土と黄褐色土が混在する暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑18号

K-16区, IV a層において検出された。規模は長軸78cm, 短軸76cm, 底面までの深さは最深部で11cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は、黒褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が2点出土したが細片のため図化できなかった。

土坑19号

J-9区, IV a層上面で検出された。規模は長軸86cm, 短軸78cm, 底面までの深さは最深部で7cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は、暗茶褐色土と黒褐色土のブロックを少量含む暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。



第72図 古代の土坑1 (Type 1)

土坑20号

F-5区, IV a層で、一部、中世の土坑99号に切られる形で検出された。規模は推定で長軸93cm, 短軸80cm, 底面までの深さは最深部で6cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は、2~3mm大の黄色バミスを含む黒褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が10点出土したが、細片のため図化できなかった。

土坑21号

D-18区, IV b層で検出された。規模は長軸100cm, 短軸90cm, 底面までの深さは最深部で8cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は、基本土層のⅢ b層に近いにぶい黄褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑22号

E-12区, IV b層で、一部、中世の溝21に切られる形で検出された。規模は推定で長軸95cm, 短軸84cm, 底面までの深さは26cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は、褐色系の小ブロックが混在する暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑23号

K-9・10区, IV a層上面で、一部、トレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸98cm, 短軸91cm, 底面までの深さは最深部で16cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は単一の暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から東播系土器が出土したが、埋土の堆積及び溝の形成過程で流れ込んだものとする。

土坑24号

G-3区, IV b層で検出された。規模は長軸95cm, 短軸91cm, 底面までの深さは最深部で12cmを測る。断面形は舟形状を呈する。埋土は、1mm大の黄橙色バミスが混ざる黄褐色土が堆積していた。

土坑25号

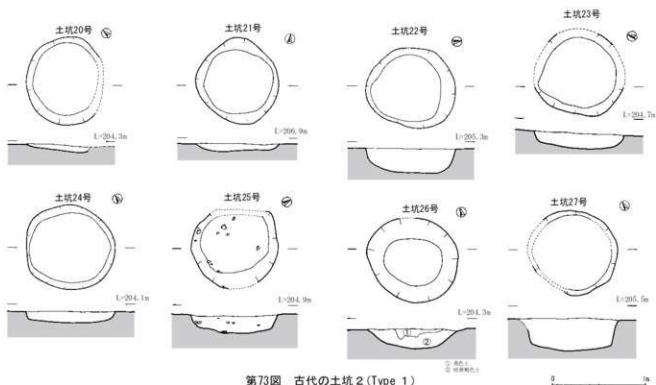
M-11区, IV b層で、一部、イモ穴に切られる形で検出された。規模は推定で長軸94cm, 短軸85cm, 底面までの深さは最深部で18cmを測る。断面形は舟形状を呈する。埋土は、極小粒の白色バミスと1mm大の黄橙色バミスが混ざる暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が12点出土したが、細片や流れ込み等による時期の違う遺物のため今回は図化しなかった。

土坑26号

E-7区, IV a層において検出された。規模は長軸92cm, 短軸90cm, 底面までの深さは最深部で21cmを測る。断面形は楕円状を呈する。埋土は、黒色土(埋土①)、黄色バミスを含む暗黄褐色土(埋土②)が堆積していた。埋土中から遺物が16点出土しており、そのうちの3点を図化した。

土坑27号

E-12区, IV a層で中世の土坑61号と溝21に切られた形で検出された。規模は長軸96cm, 短軸90cm, 底面までの深さは最深部で34cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は、暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。



第73図 古代の土坑 2 (Type 1)

土坑28号

F-7区、IV a層で検出された。平面形が直径104cmの正円形を呈し、底面までの深さは最深部で15cmを測る。断面形は舟形状を呈する。埋土は、黄色バミスを含む暗黄褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が14点出土したが、細片や土坑の該当期と違う遺物のため図化はしなかった。

土坑29号

K-16区、IV a層で検出された。規模は長軸97cm、短軸96cm、底面までの深さは最深部で8cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は、単一の黒褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が2点出土したが、細片のため図化できなかった。

土坑30号

E-12区、IV a層で、一部、中世の土坑67号に切られる形で検出された。規模は推定で長軸99cm、短軸98cm、底面までの深さは最深部で39cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は、暗茶褐色土が堆積していた。埋土中

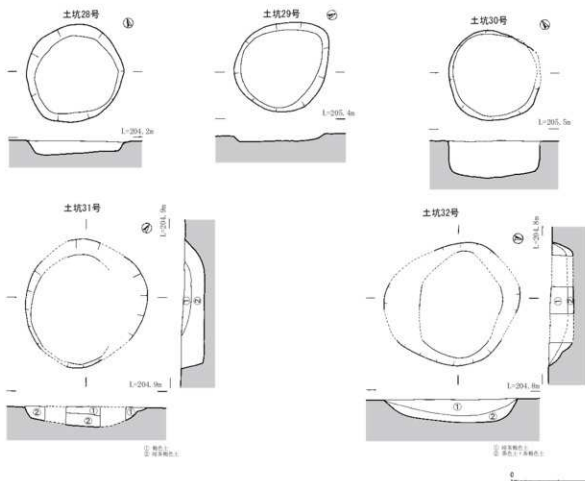
から遺物の出土は無かった。

土坑31号

K-9・10区、IV a層上面で、一部、トレンチャーに切られた形で検出された。規模は推定で長軸137cm、短軸131cm、底面までの深さは最深部で22cmを測る。断面形は台形状を呈する。残存する埋土は、粘性の強い暗茶褐色土（埋土②）を主体とし、その上部の検出面中央部に黒色土（埋土①）がレンズ状に堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑32号

K-10区、IV a層で、一部、トレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸144cm、短軸131cm、底面までの深さは最深部で25cmを測る。断面形は楕円状を呈する。残存する埋土は、暗茶褐色土（埋土①）を主体とし、粘性が強い黒色土と茶褐色土の混土（埋土②）がレンズ状に堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。



第74図 古代の土坑3 (Type 1)

Type 1 土坑内出土遺物 (第75図 101~103)

Type 1 土坑内から出土した遺物3点を図化した。3点とも土坑26号から出土した。

101は土師器甕の口縁である。口径が20cmと最も小さく、胎土が比較的粗い。内面のケズリは斜位へ施され、上端が揃っている。後述する「甕の分類」ではV類に相当する。

102は土錘である。最長が4.5cm、最大幅が1.2cm、内孔の径が0.4cmで、片方欠損している。土錘の出土はこの1点のみである。

103は黒色土器である。外面に一部、墨書が確認できたが文字の判読はできなかった。内面は丁寧なミガキが施されている。

Type 2 (楕円形タイプ: 第76図~第79図)

土坑33号

N-17区, IV b層で検出された。規模は長軸68cm, 短

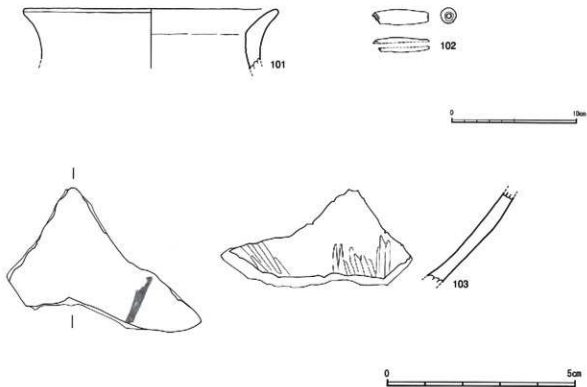
軸54cm, 底面までの深さは最深部で8cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は、黄色バミスを含む褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑34号

N-16区, IV b層で、一部、攪乱を受けた形で検出された。規模は推定で長軸66cm, 短軸53cm, 底面までの深さは最深部で7cmを測る。断面形は楕円状を呈する。埋土は、黄褐色の土塊が混ざる暗褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が1点出土したが、細片のため図化できなかった。

土坑35号

N-16区, IV b層で検出された。規模は長軸53cm, 短軸32cm, 底面までの深さは最深部で14cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は、黄色バミスを含む暗褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が1点出土したが細片のため図化できなかった。



第75図 Type 1 土坑内出土遺物

第25表 Type 1 土坑内出土遺物観察表

調査番号	発掘番号	出土区	遺物名	取上番号	種類	器種	部位	分類	色調		文様・調整		法量 (cm)				胎土		備考	
									外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	高さ	石灰	炭石		角閃石
75	101	E-7	土坑26号	-	土師器	甕	口縁部	V	棕色	にぶい褐色	ナデ	ハラケズリ	20	-	-	-	-	○	○	
	102	E-7	土坑26号	-	土錘	-	-	-	淡黄色	淡黄色	-	-	-	-	-	-	-	-	-	
	103	E-7	土坑26号	-	黒色土器	杯・碗	杯部	-	棕色	黒色	ナデ	ミガキ	-	-	-	-	-	-	-	

土坑36号

H-11区, IV a層上面で、一部、トレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸74cm, 短軸47cm, 底面までの深さは最深部で19cmを測る。断面形は楕円状を呈する。埋土は、茶褐色の土塊が少し混ざった暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が3点出土したが、細片のため図化できなかった。

土坑37号

H-11区, IV a層上面で、一部、トレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸81cm, 短軸70cm, 底面までの深さは最深部で10cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は、茶褐色の土塊が少し混ざった暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑38号

L-9区, IV a層上面で、一部、トレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸94cm, 短軸75cm, 底面までの深さは最深部で19cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は、暗茶褐色土(埋土①)と埋土①より明るい茶褐色土(埋土②)が堆積していた。埋土中から遺物が1点出土したが、細片のため図化できなかった。

土坑39号

L-10区, IV a層で、一部、トレンチャーに切られた形で検出された。規模は推定で長軸95cm, 短軸45cm, 底面までの深さは最深部で14cmを測る。断面形は楕円状を呈する。残存する埋土は暗茶褐色土(埋土③)を主体とし、その上部に黒色土(埋土①)がレンズ状に堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑40号

M・N-11区, IV層で、一部、イモ穴に切られた形で検出された。規模は推定で長軸101cm, 短軸74cm, 底面までの深さは最深部で21cmを測る。断面形は舟形状を呈する。埋土は、1mm大の白色バミス・黄褐色バミスを含む暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が1点出土したが、細片や流れ込みで時期の違う遺物のため図化しなかった。

土坑41号

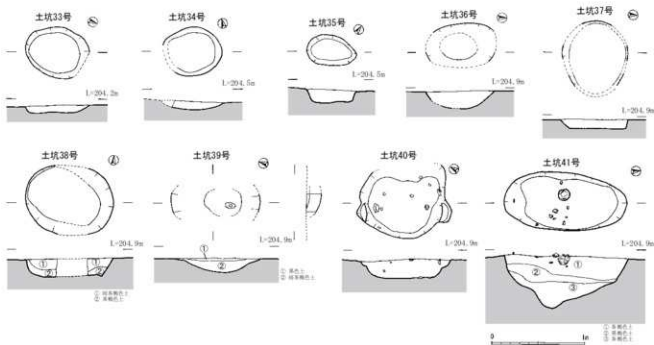
F-5区, IV a層で検出された。規模は長軸136cm, 短軸61cm, 底面までの深さは最深部で51cmを測る。断面形は楕円状を呈する。埋土は、1mm大の黄色バミスを少量含む茶褐色土(埋土①)、1mm大の黄色バミスを含む黒褐色土(埋土②)、2~3mm大の黄色バミスを含む茶褐色土(埋土③)が堆積していた。埋土中から遺物が16点出土したが、そのうちの2点を図化した。

土坑42号

L-5区, IV a層で、北側が調査区外へ延びる形で検出された。規模は推定で長軸89cm, 短軸60cm, 底面までの深さは最深部で30cmを測る。断面形は台形状を呈する。南側壁面に床面から深さ74cmのピットが検出されたが、用途は不明である。埋土は、オリブ褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が2点出土したが、細片のため図化できなかった。

土坑43号

G-5区, IV a層において検出された。規模は長軸114cm, 短軸95cm, 底面までの深さは最深部で32cmを測る。断面形は舟形状を呈する。埋土は、炭化物を多く含む黒褐色土(埋土①)、暗褐色土(埋土②)が堆積していた。



第76図 古代の土坑4 (Type 2)

埋土中から遺物が7点出土した。そのうち、土坑50号の3点、土坑51号の19点、土坑60号の44点と接合できたものをはじめとし、合計2点を図化した。

土坑44号

L-9区、IVa層上面で中央と両端をトレンチャーに切られる形で検出された。規模は長軸114cm、短軸89cm。底面までの深さは最深部で14cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は、暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑45号

N-16区、IVb層で検出された。規模は長軸91cm、短軸70cm。底面までの深さは最深部で30cmを測る。断面形は楕円状を呈する。埋土は、3～10mm大の黄褐色土を含む褐色土（埋土④）、黄色バミスを含む暗褐色土（埋土③）、2～8mm大の黄褐色土を含む暗褐色土（埋土②）、黄色バミスを少量含む暗褐色土（埋土①）が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑46号

M・N-11区、IVa層上面でイモ穴の影響を受ける形で検出された。規模は長軸87cm、短軸73cm。底面までの深さは最深部で17cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は、1mm大の白と黄色のバミスが混ざる茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑47号

F-6区、IVa層で検出された。規模は東側が検出時の掘りすぎで不明な部分（破線で予想範囲を提示）があるものの、長軸120cm、短軸114cm。底面までの深さは最深部で14cmを測る。断面形は、一部ビットで切られているもののは台形状を呈する。埋土は、黄色バミスを含む暗黄褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が6点出土したが、細片のため図化できなかった。

土坑48号

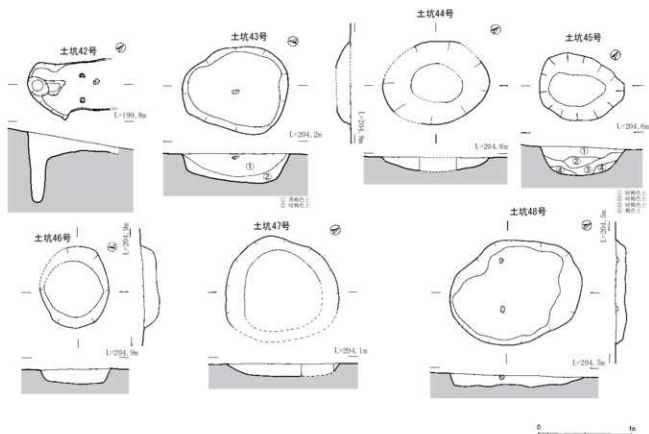
I-9区、IVa層上面で検出された。規模は長軸140cm、短軸112cm。底面までの深さは最深部で13cmを測る。断面形は台形状を呈する。床面は平坦面を形成するものの起伏がある。埋土は、黄褐色土ブロックを少量含むオリブ褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑49号

K-9・10区、IVa層でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は長軸167cm、短軸94cm。底面までの深さは最深部で8cmを測る。断面形は浅い皿状を呈している。残存する箇所埋土は、オリブ褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑50号

G-5区、IVa層において土坑90号を切り、土坑11号・



第77図 古代の土坑5 (Type 2)

土坑60号に切られる形で検出された。規模は長軸180cm、短軸93cm、底面までの深さは最深部で60cmを測る。断面形は深い楕円状を呈する。埋土は、炭化物を含む黒褐色土（埋土①）、黄バミス少量・炭化物大量に含む暗褐色土（埋土②）、炭化物を含む褐色土（埋土③）、黄色バミス少量・褐色土ブロックが混ざる黄褐色土（埋土④）が堆積していた。埋土中に遺物が7点出土し、土坑43号・土坑51号・土坑60号の遺物と接合でき、図化した。

土坑51号

G-5区、IVa層で検出された。規模は長軸224cm、短軸103cm、底面までの深さは最深部で61cmを測る。断面形は楕円状を呈している。埋土は、黒色土（埋土①）、黄白色バミスを少量含む褐色土（埋土②）、黄白色バミス、黄色土ブロックを含む暗褐色土（埋土③）、黄褐色土（埋土④）、灰黄褐色土（埋土⑤）が堆積していた。どの埋土も全体的に炭化物を含み、部分的に集中域も確認された。埋土中に遺物が79点出土した。そのうちの20点は、土坑43号・土坑50号・土坑60号の遺物と接合でき、図化した。

土坑52号

J-9区、IVa層上面でトレンチャーと土坑53号に切られる形で検出された。規模は長軸110cm、短軸75cm、底面までの深さは最深部で19cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は、茶褐色系の土塊が少量混ざる黒褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑53号

J-9区、IVa層上面でトレンチャーと土坑54号に切られる形で検出された。規模は推定で長軸79cm、短軸62cm、底面までの深さは最深部で8cmを測る。断面形は楕円状を呈している。埋土は、茶褐色土が少量ブロック状に混ざる黒褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑54号

J-9区、IVa層上面でトレンチャーと土坑55号に切られる形で検出された。平面形の規模は長軸137cm、短軸86cm、底面までの深さは最深部で18cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は、茶褐色土と黒色土がまだらに混ざる黒褐色の土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑55号

J-9区、IVa層上面でトレンチャーと56号土坑に切られる形で検出された。推定で長軸102cm、短軸95cm、底面までの深さは最深部で21cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は、茶褐色土がごく少量混ざる黒褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑56号

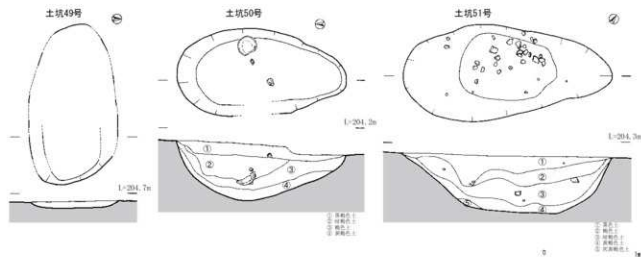
J-9区、IVa層上面でトレンチャーと土坑57号及び土坑58号に切られる形で検出された。規模は推定で長軸140cm、短軸53cm、底面までの深さは最深部で16cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は、茶褐色土が少量まだらに混ざる黒褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑57号

J-9区、IVa層上面でトレンチャーと土坑58号に切られる形で検出された。規模は推定で長軸96cm、短軸90cm、底面までの深さは最深部で25cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は、茶褐色土がまだらに混ざる黒褐色土（埋土①）、下部に茶褐色土が少量ブロック状に混ざる黒褐色土（埋土②）が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑58号

J-9区、IVa層上面でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は長軸147cm、短軸118cm、底面までの深さは最深部で20cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は、茶褐色土がまだらに混ざる黒褐色土が堆積して



第78図 古代の土坑6 (Type 2)

いた。埋土中に遺物が1点出土したが、細片のため図化できなかった。

土坑59号

J-9区、IVa層上面で検出された。規模は推定で長軸53cm、短軸43cm、底面までの深さは最深部で10cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は、暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑60号

G-5区、IVa層において土坑50号を切る形で検出された。規模は長軸208cm、短軸128cm、底面までの深さは最深部で22cmを測る。断面形は皿状を呈する。埋土は、黄色土・黒色土のブロックを少量含む暗褐色土(埋土①)、炭化物を少量含む褐色土(埋土②)が堆積していた。埋土中に遺物が64点出土した。そのうち44点が、土坑43号・土坑50号・土坑51号の遺物と接合でき、図化した。

Type 2 土坑内出土遺物 (第80図 104~110)

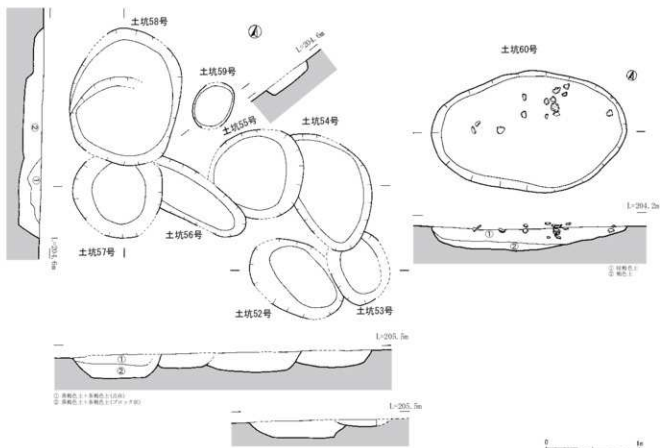
Type 2 土坑内から出土した遺物7点を図化した。

104は土師器の埴である。高台がハの字状に開き、体部はやや内湾して立ち上がる。体部外面はケズリによって凹凸がつき、体部上面にかけて器壁が薄くなる。底部内面はナデにより凹凸が残り、外面にはヘラ切り痕が残

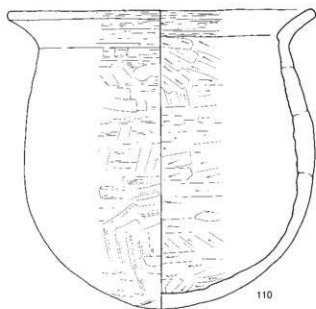
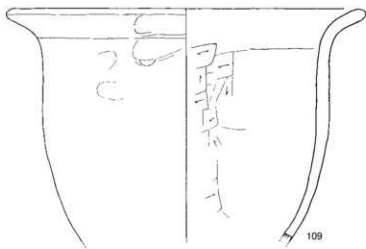
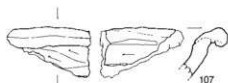
る。高台内面に接合痕が残り、明瞭な稜が入る。

105・106は土師器の坏である。105は口縁がやや外反し、体部はナデにより明確な凹凸がつく。底部端には稜がつき、底部にはヘラ切り痕が残る。内面は体部下にナデによる凹凸がつく。106は142と胎土が類似し、円盤状の底部を有する。底部のヘラ切り痕はナデで消されており、内面は一部にススが付着する。

107は胎土と作りが共に粗く、甕もしくは鍋と思われる。古代の竈穴住居状遺構1号のものと同様である。口縁部は外側から内側に折り返して作られる。外面はわずかにナデしており、内面は口縁部下の胴部に横方向のケズリが施される。108~110は土師器甕である。108は口縁内外に強いナデが施され、やや玉縁状になる。内面のケズリは横位へ丁寧に施される。後述する「甕の分類」ではIVb類に相当する。109は口縁が短く底部に向けて器壁が薄くなる。胴部内面のケズリは上端はそろっているが一部不揃いのため、器壁が厚くなる部分がある。分類ではII類に相当する。110は口縁が短く端部に丸味を帯び、胴部が張る。口縁部内外にはナデを施し、胴部内面はケズリが全面に施される。外面には一部ハケメも見られる。分類ではIIIa類に相当する。



第79図 古代の土坑7 (Type 2)



第80図 Type 2土坑内出土遺物

第26表 Type 2土坑内出土遺物観察表

採掘 年度	発掘 番号	出土区	遺構名	取上 番号	種類	器 種	部 位	分類	色調		文様・調整		法量 (cm)			胎土		備考	
									外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石丸		瓦石
80	104	G-5	土坑60号	7	土師器	碗	器一 底面	VI	橙色	にぶい・橙色	ナナ	ナナ	-	80	-	1.5	○		
	105	F-5	土坑41号	8	土師器	杯	器一 底面	Vb	橙色	橙色	ヘナ切り ナナ	ナナ	124	5.5	4.9	-	○		
	106	F-5	土坑41号	4	土師器	杯	底面	IV	浅黄橙色	浅黄橙色	ナナ	ナナ	-	60	-	-			スズ付着
	107	G-5	土坑43号	-	土師器	羹・粥	器一 底面	その他	にぶい・橙色	にぶい・橙色	ナナ	ヘラケズリ	-	-	-	-	○		
	108	G-5	土坑51号	-	土師器	羹	器一 底面	器b	橙色	橙色	ナナ	ナナ ヘラケズリ	29.4	-	-	-	○		
	109	G-5	土坑51・ 60号	-	土師器	羹	器一 底面	II	にぶい・黄褐色	にぶい・黄褐色	ナナ	ナナ ヘラケズリ	27.5	-	-	-	○	○	スズ付着
	110	G-5	土坑51・ 59・60号	-	土師器	羹	器一 底面	器a	にぶい・橙色	にぶい・橙色	ナナ	ナナ ヘラケズリ	34.2	-	23.7	-		○	

Type 3 (隅丸方形タイプ: 第81図)

土坑61号

N-9区, IVa層でトレンチャーにより切られる形で検出された。長軸53cm, 短軸51cm, 底面までの深さは最深部で49cmを測る。断面形は深い楕円状を呈している。埋土は, 2mm大の黄色バミスと茶褐色土が部分的にブロック状に混ざる暗茶褐色土(埋土①)と, 茶褐色土に暗茶褐色土が混じった色調で茶褐色土が部分的にブロック状に入る土(埋土②)と, 暗茶褐色土(埋土③)が堆積していた。埋土中に遺物が1点出土したが, 細片のため図化できなかった。

土坑62号

N-18区, IVb層ではピットに一部切られる形で検出された。規模は推定で長軸55cm, 短軸53cm, 底面までの深さは最深部で67cmを測る。断面形は袋状を呈し, 下部がやや広くなっている。埋土は, 黄色バミスを含む暗褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑63号

M-14区, IVb層で検出された。規模は長軸70cm, 短軸38cm, 底面までの深さは最深部で14cmを測る。断面形は台形状を呈し, 底部が大きくすぼまる形をしている。埋土は, 2~4cm大のアカホヤブロックを少量含む暗褐色土(埋土①), 黄色バミスを含む褐色土(埋土②), 3~6cm大の茶褐色土ブロックと黄色バミスを少量含む暗褐色土(埋土③), 黄色バミスを微量含む褐色土(埋土④), 1~5cm大の茶褐色土ブロックを微量と黄色バミスを多量に含む黒褐色土(埋土⑤)が堆積していた。埋土内(埋土⑤)には, 炭化材1点が含有される。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑64号

M-14区, IVa層でピットと切り合う形で検出された。規模は長軸134cm, 短軸110cm, 底面までの深さは最深部で27cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は, 黄色

粒・炭化粒を含む暗褐色土(埋土①)を基本に, 1cm程度の黄褐色土ブロックを微量含む暗褐色土(埋土②), 下部には黄色バミスを含む黒褐色土(埋土③), 1~4cm程度の焼土ブロックを含む暗褐色土(埋土④)が堆積していた。埋土中から土器片36点, 軽石製品9点が出土した。土器器残片は細片のため図化できなかった。軽石製品については接合した後, 1点を図化した。

床面付近に焼土や炭化物を含む土がみられること, 埋土中の土器器残と支脚と思われる軽石製品の出土, また, 堀や煙道がないことからカマド状遺構の可能性は低く, 炉状遺構の可能性もある。

土坑65号

K-L-10区, IVa層でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は長軸123cm, 短軸99cm, 底面までの深さは最深部で7cmを測る。断面形は浅い楕円状を呈する。残存する埋土は古代該当の暗茶褐色土であった。埋土中から同一固体と思われる玉縁状口縁の白磁片が2点出土したが, 流れ込みの遺物であると考えられる。2点のうち1点を図化し, 「中世の遺物」の項で報告している。

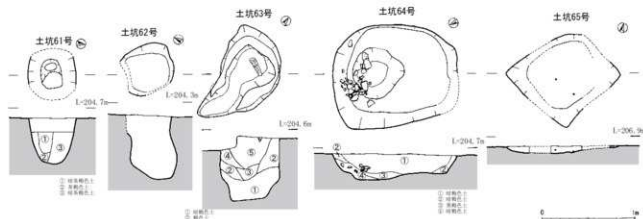
Type 4 (隅丸方形ロングタイプ: 第82図)

土坑66号

G-H-11区, IVa層上面でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸80cm, 短軸55cm, 底面までの深さは最深部で16cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は, 茶褐色土が少量ブロック状に混ざる黒褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑67号

M-17区, IVa層で検出された。規模は長軸172cm, 短軸79cm, 底面までの深さは最深部で8cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は, 茶褐色土がマーブル状に混ざる暗茶褐色土(埋土①), 一部茶褐色土が混ざる暗茶褐色土(埋土②)が堆積していた。埋土中から遺物2点



第81図 古代の土坑8 (Type 3)

が出土したが、細片のため図化できなかった。

土坑68号

M・N-9区、Ⅳa層でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は長軸158cm、短軸70cm、底面までの深さは最深部で28cmを測る。断面形は台形状を呈する。残存する箇所の埋土は、暗茶褐色土と茶褐色土の混合土(埋土①)、暗茶褐色土と茶褐色土の混ざる黒色土(埋土②)が堆積していた。埋土中から遺物が1点出土したが、細片のため図化できなかった。

土坑69号

K・L-10区、Ⅳa層上面でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は長軸160cm、短軸95cm、底面までの深さは最深部で7cmを測る。断面形は浅い舟形状を呈する。残存する箇所の埋土は、黒褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑70号

L-10区、Ⅳa層上面でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は長軸171cm、短軸91cm、底面までの深さは最深部で5cmを測る。断面形は浅い舟形状を呈する。残存する箇所の埋土は暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

Type 5 (その他、不確定なもの等: 第83図~第85図)

土坑71号

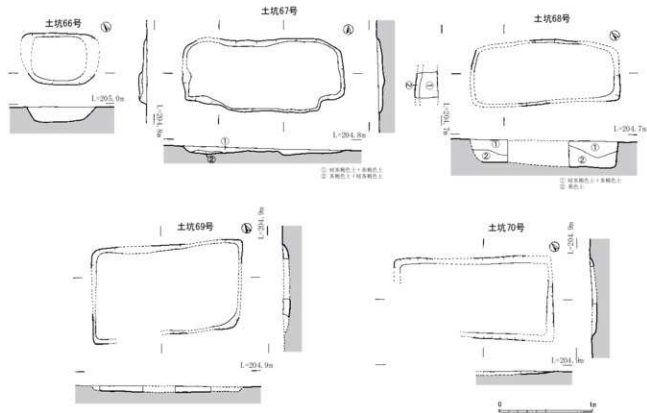
G-11区、Ⅳa層上面で北西側を土坑72号に、北東側をトレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸52cm、短軸14cm、底面までの深さは最深部で14cmを測る。断面形は、トレンチャーの影響を受け全体像は見えない。残存する箇所の埋土は、暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑72号

G-12区、Ⅳa層上面で南西側が調査区外、北東側をトレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸75cm、短軸20cm、底面までの深さは最深部で23cmを測る。断面形は台形状を呈する。残存する箇所の埋土は、茶褐色土が少量ブロック状に混ざる黒褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が1点出土したが、細片のため図化できなかった。

土坑73号

N-17区、Ⅳb層で東側が調査区外、さらに攪乱の影響を受ける形で検出された。規模は推定で長軸108cm、短軸24cm、底面までの深さは最深部で24cmを測る。断面形は台形状を呈する。残存する箇所の埋土は、黄色バミ



第82図 古代の土坑9 (Type 4)

スを含むにぶい黄褐色土(埋土①)、黄色バミスを少量含む暗褐色土(埋土②)、黄色バミスを少量含む黒褐色土(埋土③)が堆積していた。埋土中から遺物の出土はなかった。

土坑74号

N-18区、IVb層で南側を攪乱とピットに切られる形で検出された。規模は推定で長軸54cm、短軸47cm、底面までの深さは最深部で13cmを測る。断面形は台形状を呈する。残存する箇所の埋土は、黄色バミスを含む暗褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土はなかった。

土坑75号

N-16区、IVa層でピットと土坑45号に切られる形で検出された。規模は推定で長軸111cm、短軸67cm、底面までの深さは最深部で66cmを測る。断面形は舟形状を呈する。残存する箇所の埋土は、暗褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土はなかった。

土坑76号

K-10区、IVa層でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸67cm、短軸46cm、底面までの深さは最深部で8cmを測る。断面形は浅い楕円状を呈する。残存する箇所の埋土は、暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土はなかった。

土坑77号

L-9区、IVa層でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸59cm、短軸22cm、底面までの深さは最深部で13cmを測る。断面形は台形状を呈する。残存する箇所の埋土は、暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土はなかった。

土坑78号

N-16区、IVb層で東側が調査区外という形で検出された。規模は推定で長軸73cm、短軸30cm、底面までの深さは最深部で18cmを測る。断面形は楕円状を呈する。埋土は、黄色バミスを少量含む暗褐色土(埋土①)と黄色

バミスを含むにぶい黄褐色土(埋土②)が堆積していた。埋土中から遺物の出土はなかった。

土坑79号

L-9区、IVa層上面でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸73cm、短軸18cm、底面までの深さは最深部で9cmを測る。断面形は台形状を呈する。埋土は、暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土はなかった。

土坑80号

N-17・18区、IVb層で東側が調査区外という形で検出された。規模は推定で長軸118cm、短軸24cm、底面までの深さは最深部で24cmを測る。断面形は楕円状を呈する。埋土は、黄色バミスと炭化物を微量含む暗褐色土(埋土①)と黄色バミスと炭化物を微量含む暗褐色土(埋土②)が堆積していた。埋土中から遺物の出土はなかった。

土坑81号

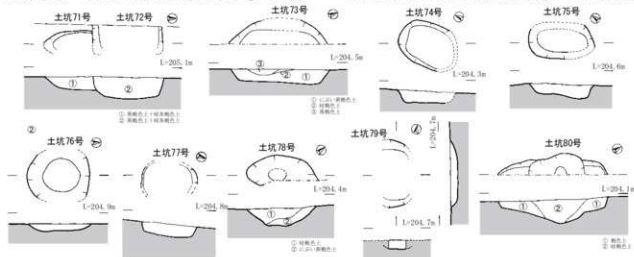
L-10区、IVa層でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸157cm、短軸11cm、底面までの深さは最深部で33cmを測る。断面形は楕円状を呈する。残存する埋土は、暗茶褐色土(埋土②)を主体とし、粘性が強い黒色土と茶褐色土の混土(埋土①)がレンズ状に堆積していた。埋土中から遺物の出土はなかった。

土坑82号

L-9・10区、IVa層でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸115cm、短軸74cm、底面までの深さは最深部で14cmを測る。断面形は楕円状を呈する。埋土は、2mm大の白バミスを少量含む暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土はなかった。

土坑83号

N-17区、IVb層で東側が大きく攪乱の影響を受ける形で検出された。規模は推定で長軸80cm、短軸53cm、底面までの深さは最深部で14cmを測る。断面形は楕円状を呈する。残存する箇所の埋土は、黄色バミスを含む暗褐色



第83図 古代の土坑10 (Type 5)

色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑84号

M-11区、IVb層でイモ穴の影響を受ける形で検出された。規模は推定で長軸63cm、短軸30cm、底面までの深さは最深部で16cmを測る。断面形は舟形状を呈する。残存する箇所の埋土は、1mm大の白と黄色のバミスが混ざり茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物4点が出土したが、細片のため図化できなかった。

土坑85号

K-9区、IVa層でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸75cm、短軸25cm、底面までの深さは最深部で14cmを測る。断面形は舟形状を呈する。埋土は暗茶褐色土の単一埋土で、埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑86号

L-9区、IVa層上面でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸70cm、短軸21cm、底面までの深さは最深部で9cmを測る。断面形は浅い台形を呈する。埋土は、暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が1点出土したが、細片のため図化できなかった。

土坑87号

L-9区、IVa層上面でトレンチャーに切られる形で

検出された。規模は推定で長軸138cm、短軸76cm、底面までの深さは最深部で17cmを測る。断面形は舟形状を呈する。埋土は、暗茶褐色土を中心に部分的に2cm大の黒色土のブロックが混ざり堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑88号

L-10区、IVa層でトレンチャーに切られる形で検出された。規模はトレンチャーの影響で全体像は見えず、長軸、短軸測定不可能である。底面までの深さは最深部で16cmを測る。断面形もトレンチャーの影響で全体像は見えない。残存する箇所の埋土は、暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物が1点出土したが、細片のため図化できなかった。

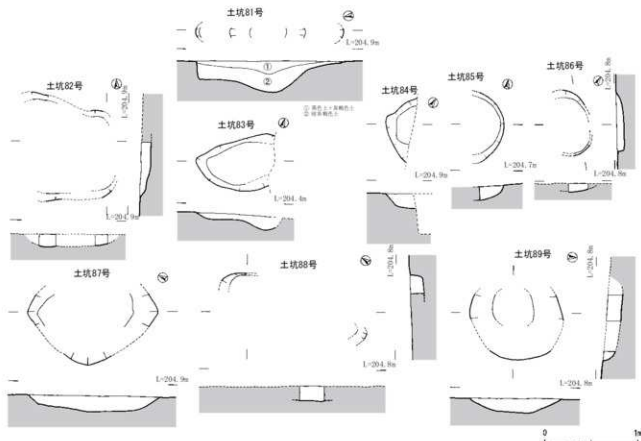
土坑89号

K-9・10区、IVa層でトレンチャーに切られる形で検出された。規模は推定で長軸99cm、短軸70cm、底面までの深さは最深部で15cmを測る。断面形は台形状を呈する。

残存する箇所の埋土は、暗茶褐色土が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

土坑90号

G-5区、IVa層において検出された。規模は長軸622

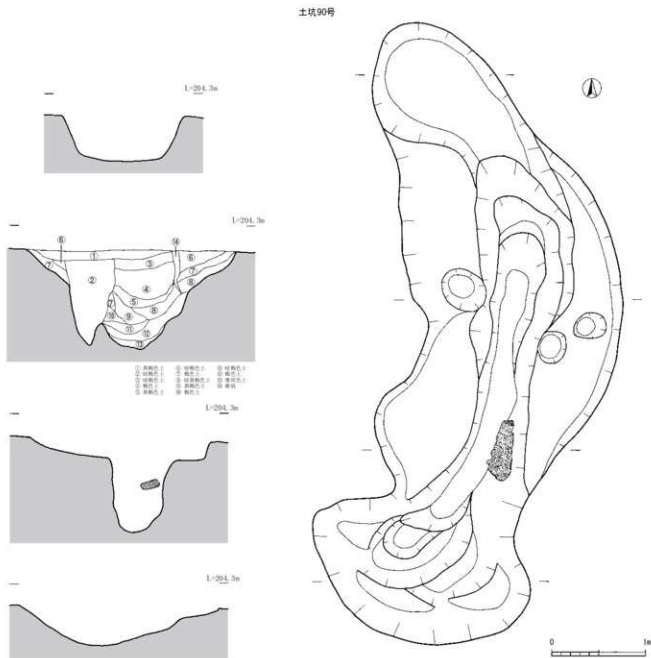


第84図 古代の土坑11 (Type 5)

cm、短軸330cm、底面までの深さは最深度で104cmを測る。断面形は最深度付近は楕円状を呈しているが、所々深く掘り込まれた部分もあるが、全体的にみて不定形な形状である。埋土は、黒褐色土(埋土①)、炭化物を含む暗褐色土(埋土②)、黄バミス少量・炭化物大量に含む暗褐色土(埋土③)、炭化物を含む褐色土(埋土④)、黄色バミス少量・褐色土ブロックが混ざる黄褐色土(埋土⑤)、黒褐色土ブロックが部分的に混ざる暗褐色土(埋土⑥)、白黄色バミスを少量含む褐色土(埋土⑦)、黄色バミスを少量含む暗黄褐色土(埋土⑧)、黄色バミスを少量含む黄褐色土(埋土⑨)、黄色バミスを少量含む黄褐色土ブロック状に混ざる褐色土(埋土⑩)、黄色バミスを少

量含む暗褐色土(埋土⑪)、褐色土(埋土⑫)、部分的に鉄分の付着した赤橙色の硬化土が見られる青灰色土(埋土⑬)が堆積していた。埋土中から遺物の出土は無かった。

連続的に拡張されたためか南北に細長く、三日月状に弧を描く形状で不定形な大型土坑である。この土坑90号の上部では、土坑11号・43号・50号・51号・60号の5基が確認されており、一部、土坑11号・50号に切られる形で検出された。



第85図 古代の土坑12(Type 5)

第27表 古代の土坑計測表

()内は欠損部分までの測定値

採国番号	形状 Type	掲載 番号	検出区	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	調査時 番号	備考	採国 番号	形状 Type	掲載 番号	検出区	長軸 (cm)	短軸 (cm)	深さ (cm)	調査時 番号	備考	
72	1	1号	K-9	52	(40)	5	63		77	46号	M-N-11	87	73	17	753			
		2号	J-9	58	53	11	184				47号	F-6	120	(114)	14	1057		
		3号	E-12	64	(55)	10	927-2				48号	I-9	140	112	13	183		
		4号	M-11	66	62	9	751			78	49号	K-9-10	167	94	8	73		
		5号	N-11	67	66	22	754				50号	G-5	180	93	60	1323		
		6号	J-6	64	50	36	1354				51号	G-5	224	103	61	1301		
		7号	E-8	68	62	7	1043				52号	J-9	110	75	19	80		
		8号	E-12	65	64	15	927-1			79	53号	J-9	(79)	(62)	8	81		
		9号	L-M-18	69	69	4	745				54号	J-9	137	86	18	82		
		10号	E-7	73	73	6	1046				55号	J-9	(102)	95	21	83		
		11号	G-5	56	48	85	1302				56号	J-9	(140)	53	16	84		
		12号	L-9	71	(70)	7	33				57号	J-9	(96)	90	25	85		
		13号	N-11	72	68	18	747				58号	J-9	147	118	20	86		
		14号	E-7	70	70	34	1276				59号	J-9	(53)	43	10	87		
		15号	N-18	68	(65)	37	809-1				60号	G-5	208	128	22	1322		
	16号	E-12	(95)	92	28	946		81	3		61号	N-9	(53)	51	49	317		
	17号	I-10	88	81	7	202					62号	N-18	55	(53)	67	848		
	18号	K-16	78	76	11	P2009				63号	M-14	70	38	14	919			
	19号	J-9	86	78	7	186			64号	M-14	134	110	27	798				
	20号	F-5	93	(80)	6	1303-1			65号	K-L-10	123	99	7	58				
	21号	D-18	100	90	8	1099			82	4	66号	G-H-11	(80)	55	16	139		
	22号	E-12	95	84	26	923					67号	M-17	172	79	8	721		
	23号	K-9-10	98	91	16	116					68号	M-N-9	158	70	28	315		
	24号	G-3	95	91	12	1308					69号	K-L-10	160	95	7	57-1		
	25号	M-11	94	85	18	749					70号	L-10	171	91	5	50		
	26号	E-7	92	90	21	1051		83			5	71号	G-11	(52)	(14)	14	143	
	27号	E-12	(96)	90	34	942						72号	G-12	75	(20)	23	142	
	28号	F-7	104	104	15	1045			73号	N-17		108	(24)	24	825			
	29号	K-16	97	96	8	P2008			74号	N-18		(54)	47	13	847			
	30号	E-12	99	98	39	924			75号	N-16		111	(67)	66	918			
	31号	K-9-10	137	131	22	56			76号	K-10		67	(46)	8	66			
	32号	K-10	144	131	25	70			77号	K-9		59	(22)	13	92			
33号	N-17	68	54	8	813		78号		N-16	73		(30)	18	833				
34号	N-16	66	53	7	835		79号		L-9	73		(18)	9	38				
35号	N-16	53	32	14	837		80号		N-17-18	118		(24)	24	811				
36号	H-11	74	(47)	19	136		81号	L-10	157	(11)	33	44						
37号	H-11	(81)	70	10	137		82号	L-9-10	(115)	(74)	14	37						
38号	L-9	94	75	19	35		83号	N-17	(80)	53	14	827						
39号	L-10	95	(45)	14	52		84号	M-11	(63)	(30)	16	750						
40号	M-N-11	101	(74)	21	752		85号	K-9	(75)	(25)	14	60						
41号	F-5	136	61	51	1306		86号	L-9	(70)	(21)	9	40						
42号	L-5	(89)	60	30	4		87号	L-9	138	(76)	17	42						
43号	G-5	114	95	32	1321		88号	L-10	測定不能	測定不能	16	115						
44号	L-9	114	89	14	41		89号	K-9-10	(99)	70	15	71						
45号	N-16	91	70	30	914		85	90号	G-5	622	330	104	1329					

(4) 古代のビット

古代該当のビットは660基検出された。このうち遺物が出土したビット32基について掲載・報告することとした。(第86図～第88図)

ビット1 (P1)

E-15区, IVb層で検出された。トレンチャーにより切られてはいるものの、円形を呈しているものと予想される(13cm×6cm)。深さは8cmを測り、埋土内から土器片が1点出土した。

ビット2 (P2)

F-7区, IVa層で検出された。長径21cm×短径20cmの円形を呈する(深さは測定不能)。埋土内から「カ」と刻まれた須恵器の小壺1点と土器片4点が出土し、須恵器の小壺1点と土器器片2点を図化した。

ビット3 (P3)

L-12区, IV層で検出された。長径24cm×短径24cmの円形を呈し、深さは62cmを測る。埋土内から土器片が1点出土した。

ビット4 (P4)

N-14区, IVb層で検出された。長径24cm×短径23cmの円形を呈し、深さは53cmを測る。埋土内から土器器片が1点、土器片が2点出土した。

ビット5 (P5)

E-8区, IVa層で検出された。長径24cm×短径20cmの円形を呈し、深さは37cmを測る。埋土内から土器器片が1点出土した。

ビット6 (P6)

M-14区, IVa層で検出された。長径25cm×短径24cmの円形を呈し、深さは10cmを測る。埋土内から土器器片(口縁部)が1点出土した。

ビット7 (P7)

F-7区, IVb層で検出された。長径25cm×短径25cmの円形を呈し、深さは46cmを測る。埋土内から土器器片が1点出土した。

ビット8 (P8)

M-14区, IVb層で検出された。長径28cm×短径18cmの楕円形を呈し、深さは26cmを測る。埋土内から土器器片が1点出土した。

ビット9 (P9)

I-21区, IVb層で検出された。長径28cm×短径25cmの円形を呈し、深さは35cmを測る。埋土内から土器器片が1点出土した。

ビット10 (P10)

N-14区, IVb層で検出された。長径30cm×短径28cmの円形を呈し、深さは41cmを測る。埋土内から土器器片が1点出土した。

ビット11 (P11)

N-14区, IVb層で検出された。長径31cm×短径30cmの円形を呈し、深さは16cmを測る。埋土内から土器器片が2点出土した。

ビット12 (P12)

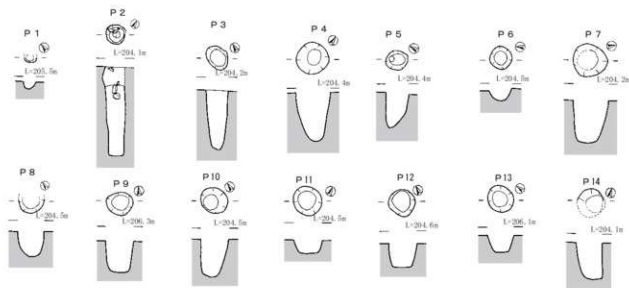
M-14区, IVa層で検出された。長径30cm×短径30cmの円形を呈し、深さは24cmを測る。埋土内から土器器片が1点出土した。

ビット13 (P13)

I-21区, IVb層で検出された。長径30cm×短径28cmの円形を呈し、深さは33cmを測る。埋土内から土器器片が1点出土した。

ビット14 (P14)

F-7区, IVa層で検出された。長径30cm×短径27cmの円形を呈するものとする。深さは40cmを測る。埋土内から土器器片が2点出土した。



第86図 古代のビット 1

ビット15 (P15)

N-14区, IVa層で検出された。長径31cm×短径31cmの円形を呈し、深さは36cmを測る。埋土内から土師器甕片が1点、土器片が1点出土した。

ビット16 (P16)

N-14区, IVb層で検出された。長径32cm×短径31cmの円形を呈し、深さは23cmを測る。埋土内から土器片が1点、黒曜石のチップが1点出土した。

ビット17 (P17)

M-12・13区, Va層で検出された。長径35cm×短径34cmの円形を呈し、深さは64cmを測る。埋土内から土器片が1点出土した。

ビット18 (P18)

N-16区, IVb層で検出された。長径35cm×短径31cmの円形を呈し、深さは70cmを測る。埋土内から土器片が2点出土した。

ビット19 (P19)

M-14区, IVa層で検出された。長径35cm×短径32cmの円形を呈し、深さは20cmを測る。埋土内から土器片が1点出土した。

ビット20 (P20)

F-7区, IVa層で検出された。長径35cm×短径24cmの楕円形を呈する(深さは測定不能)。埋土内から土器片が2点出土した。

ビット21 (P21)

H-22区, Va層で検出された。長径36cm×短径35cm

の円形を呈し、深さは28cmを測る。埋土内から土器片が2点出土した。

ビット22 (P22)

L-12区, IVa層で検出された。長径37cm×短径34cmの円形を呈し、深さは56cmを測る。埋土内から石皿が1点出土した。

ビット23 (P23)

N-14区, IVb層で検出された。長径37cm×短径35cmの円形を呈し、深さは47cmを測る。埋土内から土器片が1点出土した。

ビット24 (P24)

M-14区, IVa層で検出された。長径38cm×短径23cmの楕円形を呈し、深さは33cmを測る。埋土内から土器片が1点出土した。

ビット25 (P25)

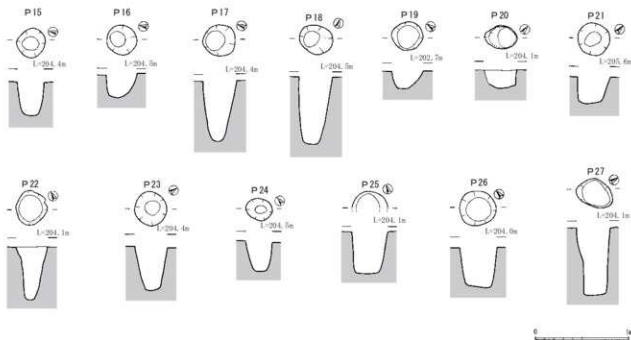
E-7区, IVb層で検出された。長径38cm×短径36cmの円形を呈するものとする。深さは46cm。埋土内から土器片が1点出土した。

ビット26 (P26)

G-3区, IVb層で検出された。長径40cm×短径36cmの円形を呈し、深さは43cmを測る。埋土内から土器片が1点出土した。

ビット27 (P27)

F-6区, IVa層で検出された。長径40cm×短径30cmの楕円形を呈し、深さは72cmを測る。埋土内から土師器甕片が2点出土した。



第87図 古代のビット 2

ビット28 (P28)

N-12区, IVa層で検出された。長径42cm×短径40cmの円形を呈し、深さは75cmを測る。埋土内から土師器残片が1点、土器片が2点、軽石が1点出土した。

ビット29 (P29)

N-12区, IVa層で検出された。長径43cm×短径37cmの楕円形を呈し、深さは71cmを測る。埋土内から土師器残片が1点出土した。

ビット30 (P30)

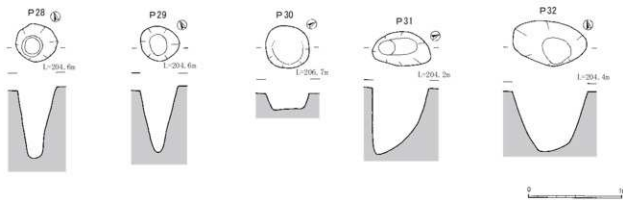
G-22区, IVb層で検出された。長径45cm×短径45cmの円形を呈し、深さは18cmを測る。埋土内から土器片が27点出土した。

ビット31 (P31)

F-7区, IVa層で検出された。長径60cm×短径35cm、深さは77cmを測る。形状から大きな柱穴と考えられるが、周辺で検出されたビットと掘立柱建物跡になるかどうか検討した結果、掘立柱建物跡にはならなかった。埋土内から土師器残片が1点出土した。

ビット32 (P32)

F-8区, IVa層で検出された。長径77cm×短径44cm、深さは65cmを測る。ビット31号と同様、形状から大きな柱穴と考えられるが、掘立柱建物跡にはならなかった。埋土内から土器片が1点出土した。



第88図 古代のビット3

第28表 古代のビット計測表

検出番号	掲載番号	検出区	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	調査時 番号	備考
86	1	E-15	(13)	(6)	8	540	
	2	F-7	21	20	-	184	
	3	L-12	24	24	62	607	
	4	N-14	24	23	53	352	
	5	E-8	24	20	37	596	
	6	M-14	25	24	10	370	
	7	F-7	25	25	46	190	
	8	M-14	28	(18)	26	359	
	9	I-21	28	25	35	447	
	10	N-14	30	28	41	342	
	11	N-14	31	30	16	356	
	12	M-14	30	30	24	372	
	13	I-21	30	28	33	451	
	14	F-7	(30)	27	40	187	
87	15	N-14	31	31	36	354	
	16	N-14	32	31	23	355	

()内は欠損部分までの測定値

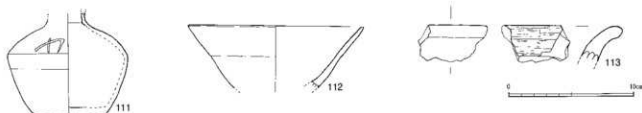
検出番号	掲載番号	検出区	長径 (cm)	短径 (cm)	深さ (cm)	調査時 番号	備考	
87	17	M-12-13	35	34	64	140		
	18	N-16	35	31	70	235		
	19	M-14	35	32	20	368		
	20	F-7	35	24	-	185		
	21	H-22	36	35	28	431		
	22	L-12	37	34	56	611		
	23	N-14	37	35	47	351		
	24	M-14	38	23	33	362		
	25	E-7	38	(36)	46	218		
	26	G-3	40	36	43	518		
	27	F-6	40	30	72	605		
	88	28	N-12	42	40	75	145	
		29	N-12	43	37	71	146	
		30	G-22	45	45	18	471	
		31	F-7	60	35	77	585	
		32	F-8	77	44	65	554	

ピット内出土遺物（第89図 111～113）

111は須恵器の小型の壺である。肩部が張り、屈曲部の稜線が明確である。全体的に丁寧なナデにより整形されており、肩部に「カ」あるいは「ヤ」のような文字が刻まれている。

112は土師器の坏である。口縁部が薄く、体部にはナデを施すが体部中央に段をつけている。

113は土師器甕である。口縁内外に強いナデを施し、土坑51号から出土した108よりも明確に玉縁状になる。



第89図 古代のピット内出土遺物

第29表 古代のピット内出土遺物観察表

検出番号	埋蔵番号	出土区	ピット番号	取上番号	種類	器種	部位	分類	色調		文様・調整		法量 (cm)			胎土			備考	
									外面	内面	外面	内面	口径	口径	器高	高台高	石英	長石		角閃石
89	111	F-7	2	H20-F104-1	須恵器	小壺	頸-肩部	-	灰色	灰色	ナデ	-	58	-	-	○				瀬音土器
	112	F-7	2	H20-F104-2	土師器	坏	口縁-体部	III	橙色	橙色	ナデ	ナデ	14	-	-	○				
	113	F-7	2	H20-F104-3	土師器	甕	口縁	IV	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	-	-	-	○				

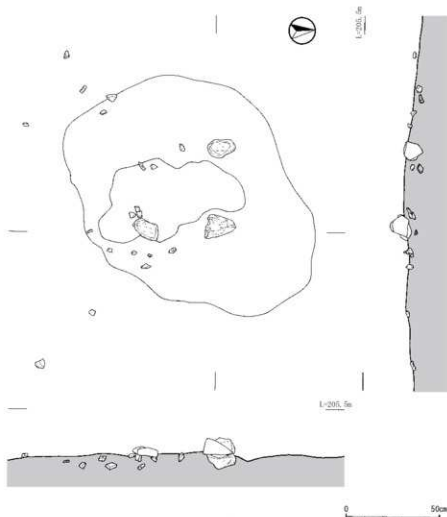
(5) 炉跡（第90図）

古代の炉跡は、J-15区、IV a層で1基検出された。

内側の焼土は、赤及び橙色が単一及び混ざった色調であったことから、被熱の割合が高く、火を使用した箇所であると考ええる。また、外側に比べて、数は少ないが、少し大きめバミスも観察できた。

外側の焼土は、内側より被熱の割合が低かったためか赤及び橙系の色調が時々見られるだけで、スズと地山の色調である暗茶褐色が混ざった色調が主であった。

炉跡内から、軽石8点、土師器片27点、土師器片以外の土器片12点、土壁の一部と考えられる粘土塊2点が出土した。そのうちの軽石3点を図化した。「第2節3-(2)石器（軽石加工品）」の項で報告している。



第90図 古代の炉跡

(6) 焼土跡 (第91図)

古代の焼土跡は、2基検出された。

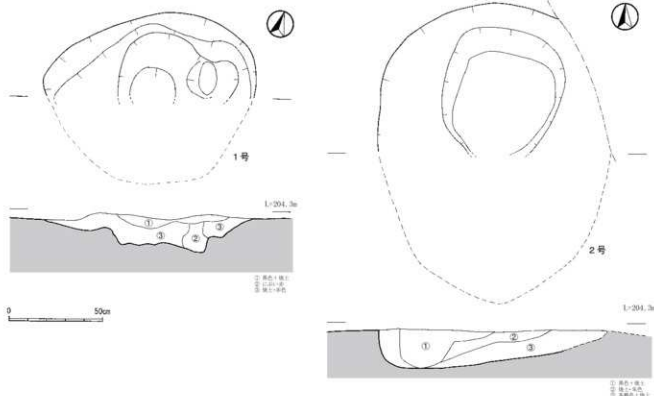
焼土跡1号はE・F-7区、IVa層で検出され、焼土跡2号はE-7区、IVa層で検出された。2基の焼土跡はわずか1m弱離れているだけである。

「黒の中の黒」で遺構を見つけようと慎重に調査を進めたが、2基とも南側を掘りすぎてしまい全体のプラン

は不明である。そのため推定で全体プランを示している。

2基の焼土跡が、周辺で検出された掘立柱建物跡や土坑等との関連性について明確にすることはできなかった。

残存している焼土跡1号内からは土師器片2点が、焼土跡2号内からは土師器片11点と土師器以外の土器片3点が出土したが、被熱の痕跡を残す遺物はなく、細片のため図化できなかった。



第91図 古代の焼土跡(1・2号)

(7) 土器集中

土器集中箇所を2か所検出した。集石遺構と同様に「遺物の集中」という観点から、遺構として報告する。

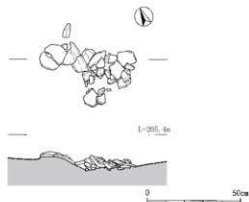
土器集中1号 (第92図)

J-15区、IVa層で検出された。51cm×45cmの範囲内で検出された。土師器を主として22点の遺物が確認された。わずかに落ち込みが確認できるが明確な掘り込みは確認できなかった。直近には炬跡、周辺に土坑18号、29号があるが、どのような関連があるか不明である。

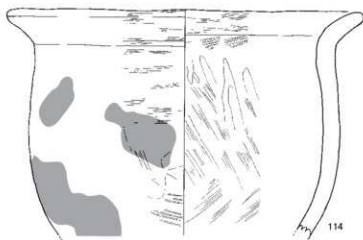
出土した土師器片を接合したところ胴部の一部と底部を除き、ほぼ完形に近い形で復元することができた。

出土遺物 (第93図 114)

114は土師器甕である。口縁部は「く」の字状に大きく外反している。口縁部が胴部下まで直線的におさまるものである。外面は縦方向の丁寧なハケメ調整がみられる。



第92図 古代の土器集中1号



第93図 古代の土器集中1号内出土遺物

第30表 土器集中1号内出土遺物観察表

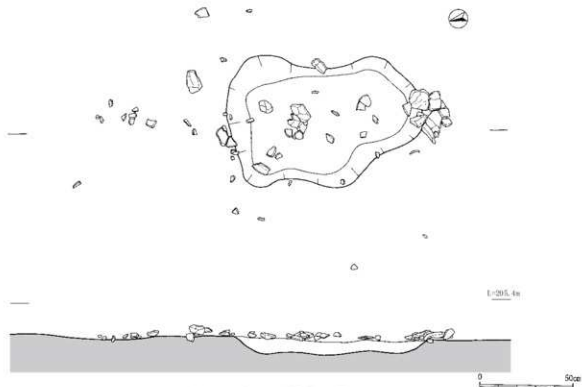
採掘番号	掲載番号	出土区	取上番号	種類	器種	部位	分類	色調		文様・調整		法量 (cm)			胎土			備考		
								外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石		角閃石	雲母
93	114	J-15	-	土師器	甕	口縁~胴部	Ⅲa	橙色	浅黄橙色	ハケメ	ヘラケズリ	28.6	-	-	-	○			スズ付着	

土器集中2号 (第94図)

K-15区, IV a層で検出された。土器の集中部と散在部があるが、200cm×140cmの範囲内で検出された。土師器を主として54点の遺物が確認された。

遺物の直下には掘り込みのような不定形をした深さ約

10cmの土坑も検出されたが、土坑内からは遺物の出土はなく、かつ、埋土の堆積状況等の情報がなため土器集中との関連については不明である。また、土器集中1号と同じく土坑18号、29号が周辺にあるがこれらの遺構との関連も不明である。



第94図 古代の土器集中2号

出土遺物 (第95図 115~117)

115は土師器甕である。口縁部がやや短く、外反している。胴部下まで器壁の厚みが一定しており重心が下にある安定した器形である。外面は横方向のハケメ調整を施し、内面も下から上にヘラケズリ調整が施されている。

116は131と同様に精製された褐色の胎土だが、摩耗している。外面はナデによりやや凹凸がつき、内面はミガキが施されている。

117は体部外面にナデを施し、底部端には円盤状底部の名残があるが、見込みを押圧するため中央にかけて器壁が薄くなる。底部はヘラ切り後ナデを施すため痕跡が残っていない。

3 遺物

(1) 土器

ここでは石器以外の包含層出土及び一括遺物を報告する。主な遺物としては土師器(埴、埴、甕)、黒書土器、黒色土器、赤色土器、須恵器、埴埴土器、刻書土器、紡錘車、土錘などがある。出土した遺物総数は2480点で、72点を図化した。

土師器

総点で2323点出土し、60点を図化した。埴については

底部外面の切り離し技法がヘラ切りのものを対象とした。

埴 (第99図 118~130)

高台のあるものを埴とし、13点を図化した。法量及び器形、調整技法から3類に分類した。

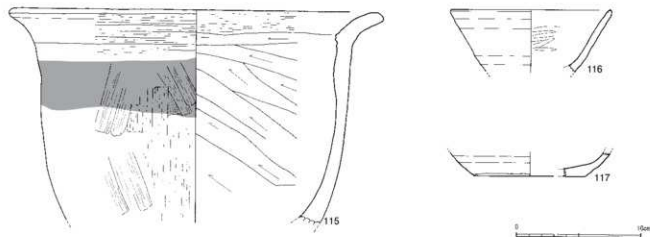
埴Ⅰ類 (第99図 118~121)

高台が低く、底部は水平になる。内外面に回転ナデが施され、底部外面には凹凸がみられるものをⅠ類とした。

118は高台高が0.4cmと低く、端部は丸味を帯びる。内外面は回転ナデが施され、底部外面には凹凸が明瞭に残る。119は118と同様に高台高が0.8cmと低く、端部は丸味を帯びる。胎土は埴116・131に類似する。底部外面にナデによる凹凸がわずかに残る。120は底径が8.6cmと大型だが、高台高は0.9cmと低い。119と同様に胎土は精製されているが摩耗している。外面は回転ナデが施されており、底部外面にはわずかに凹凸が残る。底部内面は磨きが施され、水平になる。121は高台高が0.8cmと低く、端部はほぼ平坦になる。内外面に回転ナデが施され、見込みはやや押圧される。高台内部には稜が明瞭に入り、工具痕が残る。胎土は精製された白褐色土を呈する。

埴Ⅱ類 (第99図 122~127)

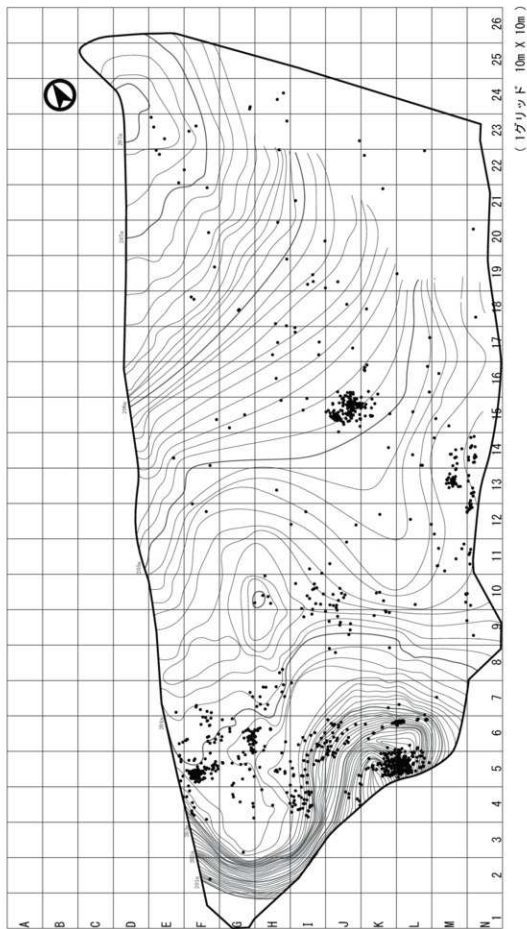
Ⅰ類に比べ高台がやや高いものをⅡ類とした。さらに、高台が開かないものをⅡa類、「ハ」の字状に開くものをⅡb類と分類した。



第95図 古代の土器集中2号内出土遺物

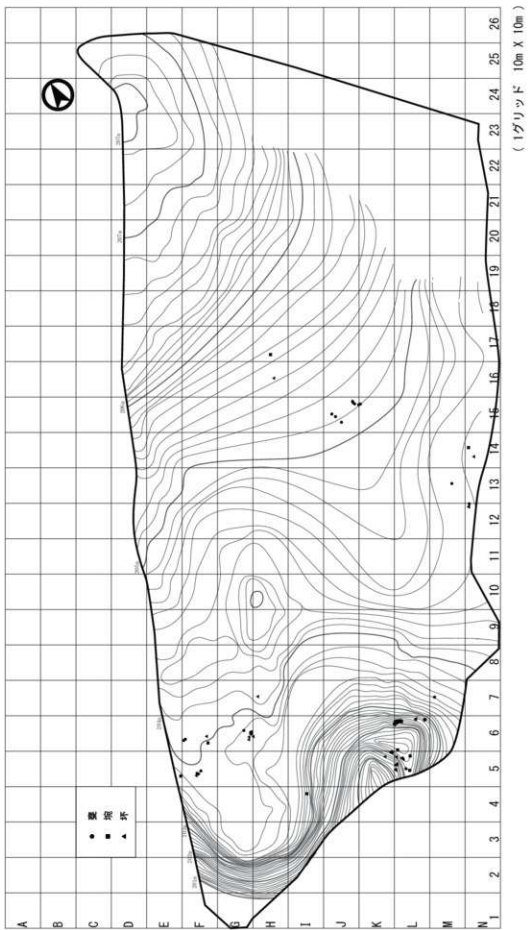
第31表 土器集中2号内出土遺物観察表

排列番号	掲載番号	出土区	取上番号	種類	器種	部位	分類	色調		文様・調整		法量 (cm)			胎土			備考		
								外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	高台高	石英	長石		角閃石	雲母
95	115	K-15	-	土師器	甕	口縁~胴部	Ⅲa	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ハケメ	ヘラケズリ	27.4	-	-	-	○	○	○	○	スズ付着
	116	K-15	39	土師器	埴	口縁~体部	Ⅳ	橙色	橙色	ナデ	ミガキ	12.8	-	-	-					摩耗
	117	K-15	15	土師器	埴	体~底部	Ⅴ	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ヘラ切り ナデ	ナデ	-	8.8	-	-			○		スズ付着

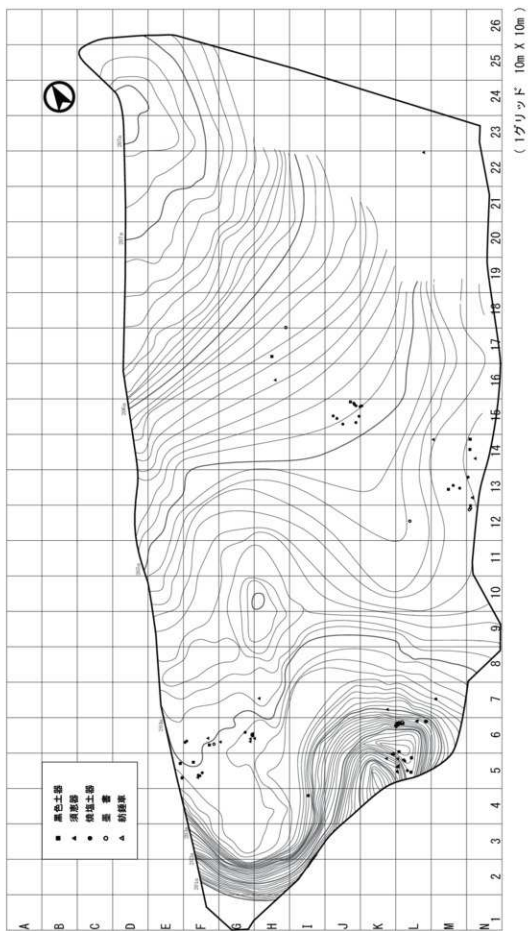


(1グリッド 10m X 10m)

第96図 古代の土器金出土分布図



第97図 古代の土師器出土分布図(掲載分)



(1グリッド 10m X 10m)

第98図 古代の壺書・黒色土器・須恵器・焼埴土器・紡錘車出土分布図

II a 類 (第99図 122・123)

122は高台高が1.2cmで、端部は丸く整形される。体部から底部まで内外面とも回転ナデが施され、底部外面はヘラ切り痕が残る。見込みを強く押圧し、高台内面に一部接合痕が残る。123は体部が直線的に立ち上がり、内外面は回転ナデが施される。底部はナデによる凹凸がわずかに残り、ヘラ切り痕が残る。見込みは強く押圧され、底部中央は器壁が薄くなる。

II b 類 (第99図 124~127)

124は高台が「ハ」の字状に開き、その角度から高台の高さは1cm以上と想定される。内外面にナデ調整を施し、見込みをやや押圧する。底部に高台接合時の凹凸が残る。125は高台高1.1cmで、端部は丸味を帯びる。高台内部には接合痕がみられる。内外面にナデを施し、底部内面はほぼ平坦になる。126は、高台が緩く「ハ」の字状に開き、高台内部に明瞭な稜がつく。底部から体部にかけてはやや内湾して立ち上がる。体部外面にナデを施し、底部内面にはミガキを施す。底部にはヘラ切り痕を残す。胎土が他の壺と比較してやや硬質な須恵質の土師器である。127は高台は緩く「ハ」の字状を呈し、端部は丸く整形される。底部はほぼ平坦になり、126と同様にミガキが施される。高台内面には明瞭な稜が入る。

壺Ⅲ類 (第99図 128~130)

高台高が1.5cm以上と高いものをⅢ類とした。

128は高台高1.8cmと高く、ほとんど開かない。端部は平坦でやや外反する。内外面にナデを施し、見込みは強く押圧するため中央部は器壁が薄くなる。高台内部には明瞭な稜が入り、接合痕が残る。129は底径が9.2cmと大きく、高台高も1.7cmと高い。高台は緩く「ハ」の字状を呈し、端部は丸く整形される。底部から体部にかけて

やや内湾し、内外面ともにナデが施される。底部外面には高台貼り付け後のナデによる凹凸が残る。130は底部から口縁部にかけてやや内湾しながら立ち上がり、口縁部は薄く、やや外反する。内外面ともナデを施し、体部下面に高台の接合痕を残す。

坏 (第100図 131~146)

法量及び器形、調整技法から3類に分類し、16点を図化した。ただし、口縁部のみ残存しているものについては、壺との判別が困難なため坏として掲載することにした。器形では底部の形状と体部から口縁部の形態に、調整技法では底部外面から体部の調整に特に注目した。

坏Ⅰ類 (第100図 131~133)

口径が大きく、外面にナデによる凹凸が多いものをⅠ類とした。

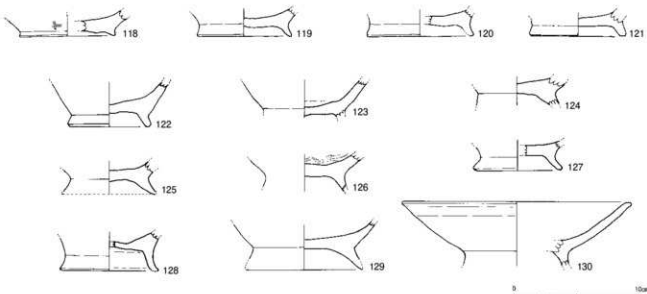
131は精製された褐色の胎土を呈しているが、やや摩耗している。口径は16.8cmを計り、口縁部から体部外面はナデにより凹凸を残す。132は口径15.6cmを計り、体部から口縁部まで直線的に外傾する。内外面ともに回転ナデによる凹凸が明瞭に残る。133は体部から直線的に外傾し、口縁部はやや外反する。外面は回転ナデによる凹凸が明瞭に残る。

坏Ⅱ類 (第100図 134~140)

口径がⅠ類に比べ小さいものをⅡ類とした。さらに、器形が内湾するものをⅡa類、直線的に立ち上がるものをⅡb類とした。

II a 類 (第100図 134~136)

134は口縁部に丸味をもち、やや外反する。体部は若干内湾し、外面はナデによる凹凸を残す。やや硬質の須恵質の土師器である。底部はヘラ切り後ナデ調整を行っ



第99図 古代の土師器 1 (壺)

ている。135は体部外面に強めのナデによる凹凸がある。底部外面はヘラ切り後ナデ調整を行っているが、一部ヘラ切り痕が残る。内面は見込みを押圧し、中央にかけて器壁が薄くなっている。136は底部から体部に稜線がなく、丸味をもつ。底部はヘラ切り後ナデ調整を行っている。

Ⅱ b 類 (第100図 137~140)

137は体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。外面は回転ナデによる凹凸がややみられる。138は137と同様に体部から口縁部にかけて直線的に外傾する。外面は回転ナデの痕跡を残すが、凹凸はない。139は口縁部にかけて直線的に外傾し、器壁が薄くなる。外面はナデにより凹凸がつく。140は口縁部がやや外反し、体部外面は強いナデにより明確な凹凸がつく。底部端には稜はつかず、ヘラ切り後ナデを施す。見込みは一部押圧される。

Ⅲ a 類 (第100図 141~146)

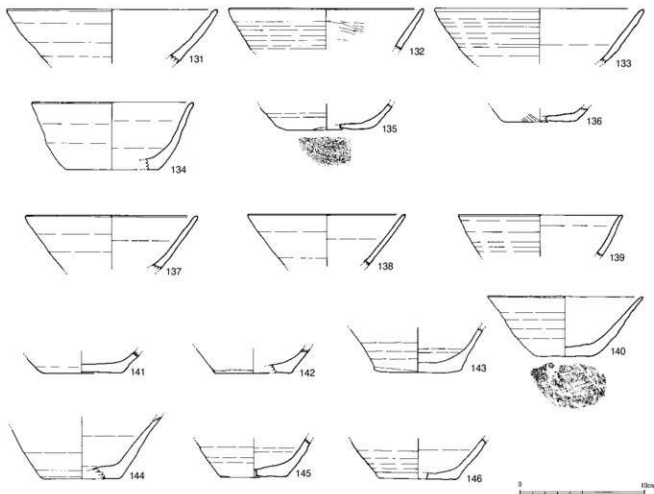
底部の形態が円盤状を呈するものをⅢ a 類とした。さらに、明らかに円盤状を呈するものをⅢ b 類、円盤状の名残があるものをⅢ c 類とした。

Ⅲ a 類 (第100図 141~143)

141は円盤状底部を有する。底部はヘラ切り後ナデを施し、一部にススが付着している。142は精製された白褐色の胎土だが、やや摩耗した円盤状の底部である。143は円盤状の底部を有し、ヘラ切り後ナデを施すが、やや痕を残す。他の坯と比べて器壁がやや薄い。内面はナデを施し、底部は見込みをやや押圧している。

Ⅲ b 類 (第100図 144~146)

144は外面はナデによりやや凹凸がつき、体部から口縁部にかけて器壁が薄くなる。底部端に円盤状底部の名残を残すが、見込みを押圧するため底部中央の器壁はやや薄くなる。145は体部外面にナデによる凹凸が残る。底部端には円盤状底部の名残がある。底部はヘラ切り後ナデを施している。内面は底部までナデを施しており、見込みをやや押圧する。146は体部外面にナデによる凹凸がやや残り、底部端は円盤状底部を有する。底部はヘラ切り後丁寧なナデを施し、見込みを押圧することによって中央の器壁が薄くなっている。



第100図 古代の土師器 2 (坏)

壺 (第101図 147~155 第102図 156~163)

1504点出土し、17点を図化した。特にF-5区とL-5区、またJ-15区で集中して出土している。口縁部形態と胴部の器形を中心にI~IV類に細分した。

壺I類 (第101図 147~155 第102図 156)

口縁が長いものをI類とした。さらに、胴部が張るものをI a類、直線の器形を呈するものをI b類とした。

I a類 (第101図 147~151)

147は横方向に粗いケズリが施されている。口縁部と胴部の境に指頭圧痕があり、稜がはっきりしている。148は口縁部が大きく外反し、口縁部から胴部の器壁に厚みがある。口縁にナデを施し、胴部外面にハケメ、内面に左方向へのケズリを施す。149は胴部がやや張り出す。口縁にはナデが施され、胴部内面には斜位へ丁寧なケズリが施される。150は口縁と胴部の境界と、その上に稜線が入り、間には強いナデが施される。内面はケズリの上端の一部揃わないところがある。151は口縁端部は丸味を帯び、胴部がやや張る。胴部から口縁部下にかけて左上へのケズリが施されている。

I b類 (第101図 152~155 第102図 156)

152は口縁部が「く」の字状に外反し、胴部下にかけて器壁が薄くなっている。外面は口縁から胴部上半にかけてナデが施される。胴部にはタキ痕がみられ、一部をナデで擦り消している。内面は口縁にナデが施され、横方向の丁寧なヘラケズリが施されている。タキ痕を施しているものはこの1点のみである。153は口縁にナデ、胴部内面のケズリは左方向へ丁寧に施されている。154は口縁部が大きく外反し、口縁部から胴部の器壁に厚みがある。外面には縦方向のハケメ調整が施されている。155は口縁が「く」の字状に外反し、稜によって口縁と胴部の境が明確になっている。口縁にはナデ調整を施し、胴部内面のケズリは胴部から口縁部に向かって縦方向へ丁寧に施されている。

156は細分はできなかったがI類に属するものである。口縁が長く外反し、端部に稜が入る。内外にナデを施し、口縁下胴部には右上に向かってケズリが施されている。

壺II類 (第102図 157~158)

口縁が短いものをII類とした。さらに、胴部が張るものをII a類、直線状のものをII b類とした。

II a類 (第102図 157)

157は口縁部が外反しているが、内面は左上方向のヘラケズリ調整により胴部の器壁の厚みが不安定である。外面は丁寧な横方向のハケメ調整が施されており、一部ミガキ調整もみられる。

II b類 (第102図 158)

158は斜位に粗いヘラケズリが施されている。器壁の厚みが目立つものである。

壺III類 (第102図 159・160)

I・II類に比べ、口径が小さいものをIII類とした。

159は口縁がやや立ち上がり、口縁部にはミガキが施される。内面は、稜により口縁部と胴部の境が明確になっており、胴部には左方向のケズリが施される。160は口縁部が短く内面の稜も明瞭に残る。内面調整は比較的粗く、胴部下のヘラケズリも目立っている。外面は一部ハケメによる調整がみられる。

壺IV類 (第102図 161~163)

器形は壺というよりも鍋に近い器形を呈し、外面にススが付着しており、煮炊具として判断されるものをIV類とした。

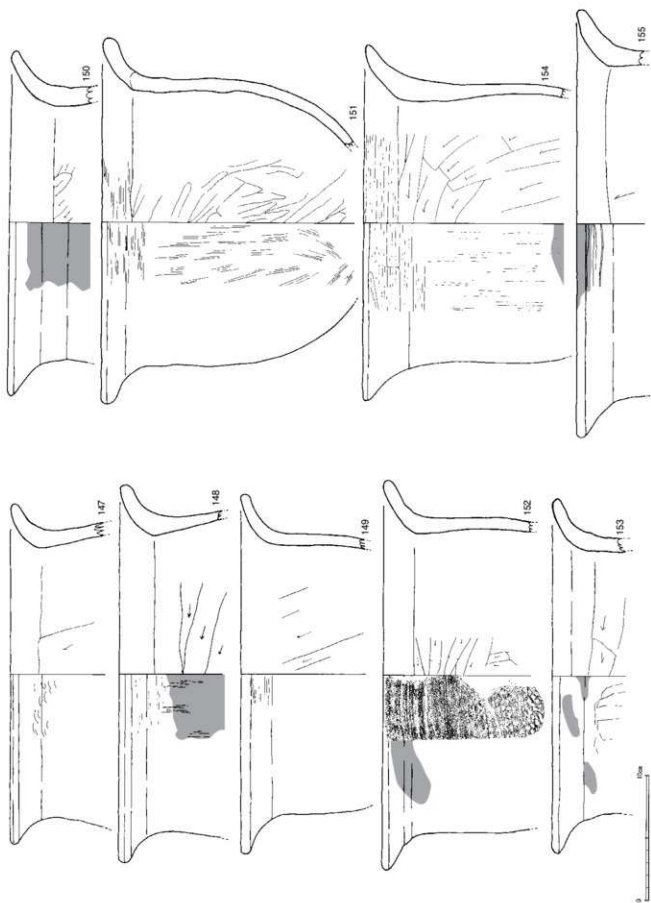
161は口縁部先端の器壁が薄く、胴部からやや内湾し口縁部が外反する。口縁部下の胴部にススが付着している。内面は口縁部と胴部の境に明瞭な稜線がみられ、胴部に横方向のヘラケズリが施されている。162は口縁部先端の厚みが薄く、内面の稜はほとんど目立たない。口縁部はナデが施され、胴部には縦方向の丁寧なヘラケズリが施されている。163は胴部と口縁部の境の内面に明瞭な稜線があり、口縁部は胴部より外反して開く。胴部内面は丁寧な横方向のヘラケズリが施される。口縁部下胴部外面には、一部ケズリがみられる。口縁部はススが付着している。

墨書土器 (第103図 164 第104図 165~172)

9点を図化した。164はやや円盤状底部の名残をもち、口縁までやや内湾して立ち上がる。底部にはヘラ切り痕が残る。内外面は回転ナデを施し、見込みは中心部が盛り上がる。内面のみ墨書が描かれており、十字を太くした記号のようなものの中に、「鬼」「正」と判読できるような文字が書かれている。その他にも色々描かれているが、判読には至らなかった。165は坏の体部外面に「十」の墨書が確認できる。円盤状底部の名残があり、底部はヘラ切り痕が残る。内面はナデを施し、見込みは押圧され凹む。坏V a類である。166~172は土師器の坏または塊の体部に墨書が確認できる。いずれも文字の判別には至らなかった。170は黒色土師器の体部外面に墨書が認められる。「円」のような墨書が確認できる。

黒色土器 (第105図 173~177)

総点で59点出土し、5点図化した。いずれも内面が黒色を呈する。173~176は坏である。いずれも内面はミガキによる光沢をもち、外面はナデにより凹凸がついたため土師器の坏II b類に属する。177は塊である。高台は緩くハの字状に開き、端部は丸く整形される。外面はナデが施され、一部高台貼り付け時の痕跡が残る。内面はミガキが施される。土師器の塊III類に相当する。



第101図 古代の土器器3 (続)

須恵器 (第105図 178~183)

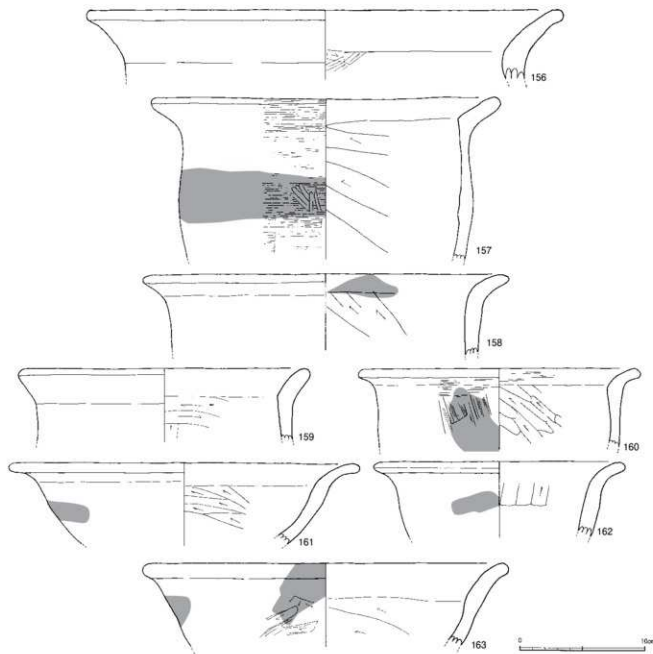
総点で50点出土し、6点を図化した。178、179は坏である。2点とも内外面がナデにより整形され、178は体部下の内面に、179は口縁部下に一部凹凸が残る。180は坏である。底部にかけて器壁が厚くなる。181~183は甕である。181は外面に平行タタキが施される。内面はいずれも青海波の当具痕が見られる。182は口縁がやや開き、外面には格子目タタキが施される。183は181・182と胎土が異なる。外面は同心円状のタタキが施され、内面は輪積み痕が残り、一部ナデ消している。また、図化には至らなかったが、東播系須恵器と思われる羽状タ

タキの須恵器も出土している。ただし、時期は古代もしくは中世の可能性がある。

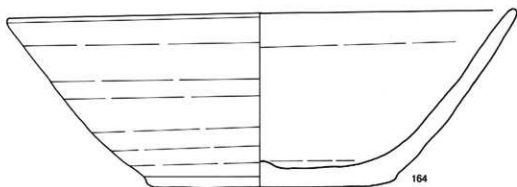
焼埴土器 (第105図 184~188)

総点で34点出土し、5点を図化した。いずれも胎土に小石を含む砂粒が混ざり、外面に指圧痕が残る。器壁が凹凸しており粗雑なつくりである。色調は赤橙色を呈する。内面は細かい目をもつ布圧痕が残っている。

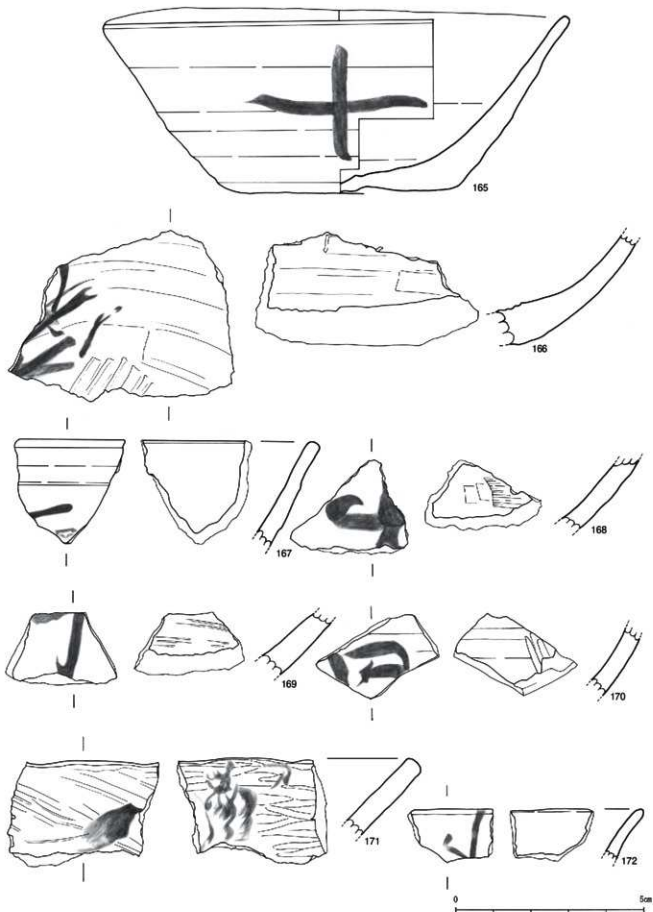
184・185は器壁が厚く、外面から内傾した口縁部を呈している。器形は胴部からやや内湾して立ち上がりを見せている。186は口縁部先端が先細りになる部分があり、外面整形時の指圧痕やナデ調整による凹凸が目立つ。胴



第102図 古代の土師器4(壺)



第103図 古代の墨書土器 1



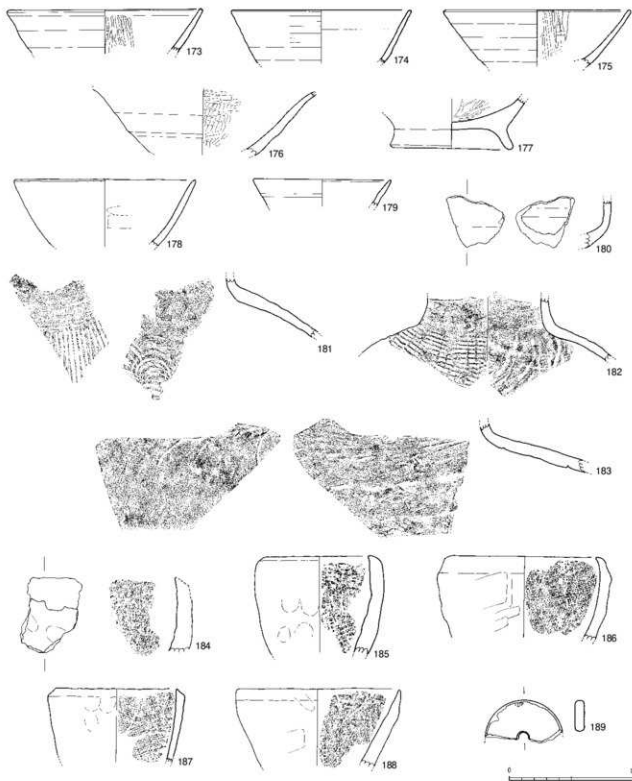
第104図 古代の墨書土器 2

部に丸みを帯びるものである。187も同様に口縁部先端が先細りになっているが、器壁が薄く、胴部から口縁部にかけて直線的に立ち上がるものである。内面の布圧痕も明瞭に残っており、他のものと比較してゆがみがなく丁寧なつくりである。188は器壁が厚く、口縁部先端の尖りが目立つものである。胴部下にかけて器壁の厚みが

大きくなっている。

紡錘車 (第105図 189)

環状で、中心部分が穿孔される。土師質であるが、両面ともほぼ水平に作られているため、土師器の坏を転用した可能性は低いと考えられる。



第105図 古代の黒色土器・須恵器・焼塩土器・紡錘車

第32表 古代の土師器観察表 1

標記番号	陶製番号	出土区	層位	標記番号	種類	器種	部位	分期	色調		文様・調整		法長 (cm)				胎土		備考	
									外面	内面	外面	内面	口径	底径	器高	高台長	口径(高台)	底径(高台)		
99	118	J-15	Ⅴa	イ460	土師器	碗	底部	I	褐色	褐色	ヘラ切り, ナデ	ナデ	-	7.5	-	0.4	○			
	119	J-15	Ⅴb	-	土師器	碗	底部	I	褐色	褐色	ヘラ切り, ナデ	ナデ	-	7.6	-	0.8	○		摩耗	
	120	N-14	Ⅴb	71646	土師器	碗	底部	I	褐色	褐色	ヘラ切り, ナデ	ミガキ	-	8.6	-	0.9	○		摩耗	
	121	L-5	Ⅴb	1881	土師器	碗	底部	I	浅黄褐色	浅黄褐色	ヘラ切り, ナデ	ナデ, 押圧(底部)	-	7.5	-	0.8	○			
	122	L-6	Ⅴa	110013	土師器	碗	体部 ~ 底部	Ⅱa	褐色	褐色	ナデ, ヘラ切り, ナデ(高台)	ナデ, 押圧(底部)	-	6.1	-	1.2	○			
	123	M-15	Ⅴa	観立25 PI	-	土師器	碗	体部 ~ 底部	Ⅱa	褐色	褐色	ヘラ切り, ナデ(底部)	ナデ, 押圧(底部)	-	-	-	-	○		
	124	H-19	Ⅴb	5T, 73	土師器	碗	底部	Ⅱb	褐色	褐色	ケズリ, ヘラ切り(底部), ナデ(高台)	ナデ	-	-	-	-	○			
	125	J-15	Ⅴb	-	土師器	碗	底部	Ⅱb	明赤褐色	褐色	ナデ, ヘラ切り(底部), ナデ(高台)	ナデ	-	7.5	-	1.1	○			
	126	I-4	Ⅴb	143462	土師器	碗	底部	Ⅱb	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ, ヘラ切り(底部), ナデ(高台)	ミガキ	-	-	-	-	○			
	127	F-6	Ⅴa	87427	土師器	碗	底部	Ⅱb	にぶい黄褐色	灰黄褐色	ヘラ切り, ナデ(底部), ナデ(高台)	ミガキ	-	6.7	-	1.1	○			
	128	E-5	Ⅴa	83102	土師器	碗	底部	Ⅲ	褐色	褐色	ケズリ, ヘラ切り(底部), ナデ(高台)	ナデ, 押圧	-	7.8	-	1.8	○			
	129	L-5	L-6	Ⅴa	1841 1650	土師器	碗	底部	Ⅲ	褐色	にぶい褐色	ナデ, ヘラ切り(底部), ナデ(高台)	ナデ	-	9.2	-	1.7	○		
	130	J-15	Ⅴa	-	土師器	碗	口縁 ~ 底部	Ⅲ	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ	ナデ	1.8	-	-	-	○			
	100	131	J-15	Ⅴb	-	土師器	環	口縁	I	褐色	褐色	ナデ	ナデ	16.8	-	-	-	○		摩耗
		132	L-5	Ⅴb	1638	土師器	環	口縁	I	明黄褐色	褐色	ナデ	ナデ	15.6	-	-	-	○		
133		K-5	Ⅴb	1616	土師器	環	体部	I	明黄褐色	褐色	ナデ	ナデ	16.6	-	-	-	○			
134		N-12	Ⅴa	47816 49247	土師器	環	口縁 ~ 底部	Ⅱa	浅黄褐色	浅黄褐色	ヘラ切り ナデ	ナデ	13	7.4	-	-	○			
135		F-5	Ⅴa	87476	土師器	環	底部	Ⅱa	褐色	褐色	ヘラ切り, ナデ	ナデ	-	6.2	-	-	○			
136		F-6	Ⅴa	87424	土師器	環	底部	Ⅱa	褐色	褐色	ヘラ切り, ナデ	ナデ	-	6	-	-	○			
137		L-6	Ⅴa	110510	土師器	環	口縁	Ⅱb	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ	ナデ	13.5	-	-	-	○			
138		L-6	Ⅴa	110511	土師器	環	口縁	Ⅱb	にぶい褐色	浅黄褐色	ナデ	ナデ	12	-	-	-	○			
139		L-6	Ⅴb	111788	土師器	環	口縁	Ⅱb	褐色	褐色	ナデ	ナデ	13	-	-	-	○			
140		L-5	K-5	Ⅴa	1704 観12点	土師器	環	口縁 ~ 底部	Ⅱb	褐色	褐色	ヘラ切り ナデ	ナデ	12.4	4.5	-	-	○		
141		L-5	Ⅴb	2486	土師器	環	底部	Ⅱa	褐色	褐色	ヘラ切り, ナデ	ナデ	-	6.4	-	-	○		スス付着	
142		N-15	Ⅴa	47700	土師器	環	底部	Ⅱa	浅黄褐色	浅黄褐色	ナデ	ナデ	-	6.1	-	-	○			
143		L-6	Ⅴa	110043 110044	土師器	環	底部	Ⅱa	褐色	浅黄褐色	ヘラ切り, ナデ	ナデ	-	6.95	-	-	○			
144		N-14	Ⅴa	観立43	-	土師器	環	口縁 ~ 底部	Ⅲ	褐色	褐色	ヘラ切り ナデ	ナデ	-	6.4	-	-	○		
145		H-7	Ⅴa	87595	土師器	環	体部 ~ 底部	Ⅲ	褐色	褐色	ヘラ切り ナデ	ナデ	-	5.2	-	-	○			
146	L-6	Ⅴa	110036	土師器	環	体部 ~ 底部	Ⅲ	褐色	褐色	ヘラ切り ナデ	ナデ	-	6	-	-	○				
101	147	L-6	Ⅴa	110050 観3点	土師器	環	口縁	Ia	にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ ヘラケズリ	2.6	-	-	-	○			
	148	L-5	Ⅴb	1896 2108	土師器	環	口縁	Ia	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ	ナデ ヘラケズリ	2.94	-	-	-	○		スス付着	
	149	J-15	Ⅴb	観立27 観3点	土師器	環	口縁	Ia	褐色	褐色	ナデ	ナデ ヘラケズリ	2.82	-	-	-	○		スス付着	
	150	J-15	Ⅴb	5023 観2点	土師器	環	口縁	Ia	褐色	褐色	ナデ	ナデ ヘラケズリ	2.6	-	-	-	○		スス付着	
	151	J-15	Ⅴa	5229 観2点	土師器	環	口縁 ~ 底部	Ia	褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ ヘラケズリ	2.92	-	-	-	○			
	152	F-5	Ⅴa	83208 観3点	土師器	環	口縁	1b	褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ ヘラケズリ	3.0	-	-	-	○		スス付着	
	153	L-6	Ⅴa	110024	土師器	環	口縁	1b	にぶい褐色	明赤褐色	ナデ, ハケメ	ナデ ヘラケズリ	2.76	-	-	-	○		スス付着	
	154	L-5	Ⅴb	2090 2079	土師器	環	口縁 ~ 底部	1b	にぶい赤褐色	にぶい褐色	ナデ	ヘラケズリ	2.82	-	-	-	○		スス付着	
	155	N-12	Ⅴa	49243	土師器	環	口縁	1b	にぶい褐色	明黄褐色	ナデ	ナデ ヘラケズリ	3.3	-	-	-	○		スス付着	

第33表 古代の土師器観察表 2

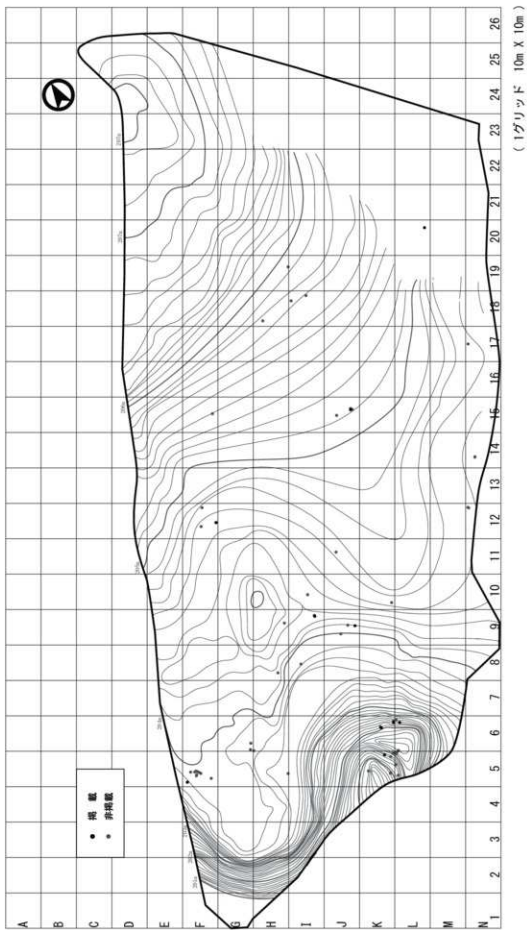
採回番号	陶製番号	出土区	層位	取上番号	種類	器種	部位	分類	色調		文様・調整		法量 (cm)				胎土		備考	
									外面	内面	外面	内面	口徑	底徑	器高	高台高	石目高	長石目		胎石
102	156	F-6	Ⅲa	87406	土師器	甕	口縁	I b	にぶい褐色	にぶい褐色	ナデ	ナデ	37	-	-	-	-	-	○	
	157	L-6	Ⅲa Ⅲa	110033 8683	土師器	甕	口縁 - 側部	II a	明赤褐色	褐色	ハケメ	ナデ	27.3	-	-	-	○	○	スス付	
	158	K-6 L-6	Ⅲa	110006 8665	土師器	甕	口縁	II b	にぶい褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ヘラケズリ	28	-	-	-	○	○	スス付	
	159	K-5	Ⅲb	1646 8635	土師器	甕	口縁	Ⅲ	褐色	褐色	ナデ	ヘラケズリ	22	-	-	-	○			
	160	J-15	Ⅲb	5132	土師器	甕	口縁	Ⅲ	褐色	にぶい黄褐色	ハケメ、ナデ	ヘラケズリ	21.8	-	-	-	○	○	スス付	
	161	J-15	Ⅲb	5078	土師器	甕	口縁	Ⅳ	にぶい赤褐色	褐色	ナデ	ヘラケズリ	27	-	-	-	-	-	○	スス付
	162	J-16	Ⅲb	6587	土師器	甕	口縁	Ⅳ	褐色	にぶい赤褐色	ナデ	ヘラケズリ	19	-	-	-	-	○	○	スス付
	163	M-13	Ⅲc	18226	土師器	甕	口縁	Ⅳ	褐色	褐色	ナデ	ヘラケズリ	28	-	-	-	-	○	○	スス付

第34表 古代の墨書土器観察表

採回番号	陶製番号	出土区	層位	取上番号	種類	器種	部位	分類	色調		文様・調整		法量 (cm)				備考		
									外面	内面	外面	内面	文字	口徑	底徑	器高		高台高	
103	164	L-12	Ⅲa	4355	土師器	坏	定形		褐色	褐色	ナデ	ナデ	東・正	13.7	6	4.7			
	165	L-6	V a	110500	土師器	坏	口縁- 底部		褐色	褐色	ナデ、ヘラケズリ (底部)	ナデ	ナ	12.2	6.4	5			
104	166	N-13	Ⅲb	562	土師器	(坏・埴)	体部		褐色	褐色	ナデ	ナデ	-	-	-	-			
	167	F-6	Ⅲa	142339	土師器	(坏・埴)	口縁		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	-	-	-	-			
	168	J-15	Ⅲb	5132	土師器	(坏・埴)	体部		褐色	にぶい褐色	ナデ	ナデ	-	-	-	-			
	169	J-K- 14-15	Ⅲa	一括	土師器	(坏・埴)	体部		浅黄褐色	浅黄褐色	ナデ	ナデ	-	-	-	-			
	170	N-13	Ⅲa	一括	黒色土器	(坏・埴)	体部		にぶい黄褐色	黒褐色	ナデ	ナデ	ミガキ	円	-	-	-		
	171	H-17	Ⅳ	30704	土師器	(坏・埴)	口縁		褐色	褐色	ハケメ、ナデ	ナデ	ナデ	ナ	ミガキ	-	-	-	
	172	N-12	Ⅲb	47818	土師器	(坏・埴)	口縁		褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	ナデ	ナ	-	-	-		

第35表 古代の黒色土器・須恵器・焼埴土器・紡錘車観察表

採回番号	陶製番号	出土区	層位	取上番号	種類	器種	部位	分類	色調		文様・調整		法量 (cm)				胎土		備考
									外面	内面	外面	内面	口徑	底徑	器高	高台高	石目高	長石目	
105	173	M-13	Ⅲb	10397	黒色土器	坏	口縁	II b	にぶい黄褐色	黒色	ナデ	ナデ	ミガキ	15.4	-	-	-	○	
	174	F-5	Ⅲa	87485	黒色土器	坏	口縁	II b	褐色	黒色	ナデ	ナデ	ミガキ	14.2	-	-	-	○	
	175	M-14	Ⅲa	71402	黒色土器	坏	口縁	II b	にぶい黄褐色	黒色	ナデ	ナデ	ミガキ	14.6	-	-	-	○	
	176	J-15	Ⅲb	4987	黒色土器	坏	口縁	II b	浅黄褐色	暗灰色	ナデ	ナデ	ミガキ	-	-	-	-	○	
	177	E-5	Ⅲa	87489	黒色土器	坏	底部		褐色	暗灰色	ナデ	ナデ	ミガキ	-	9.5	-	1.5	○	○
	178	G-6	Ⅲa	87429	須恵器	坏	口縁- 体部		灰白色	灰白色	ナデ	ナデ	14.4	-	-	-	-		
	179	M-14	Ⅲa	6931	須恵器	坏	口縁		にぶい黄褐色	にぶい黄褐色	ナデ	ナデ	11	-	-	-	-		
	180	K-7	Ⅲa	110066	須恵器	坏	体部		灰色	灰色	ナデ	ナデ	-	-	-	-	-		
	181	F-7	一括	-	須恵器	甕	口縁- 側部		灰色	灰色	平行タタキ ナデ	青海波当具 ナデ	-	-	-	-	-		
	182	L-22	Ⅲa	42695	須恵器	甕	口縁- 側部		黄灰色	灰色	格子目タタキ ナデ	青海波当具 ナデ	-	-	-	-	-		
	183	1-7 1-8	Ⅲa	溝・古 道52	須恵器	甕	口縁- 側部		浅黄褐色	にぶい黄褐色	同心円タタキ ナデ	ナデ 指押さ	-	-	-	-	○		
	184	N-13	Ⅲa	49353	焼埴土器	鉢	口縁		褐色	褐色	指押さ	布目瓦直	-	-	-	-	○		
	185	J-15 K-16	Ⅲb	6573 5900	焼埴土器	鉢	口縁- 側部		褐色	褐色	指押さ	布目瓦直	8.6	-	-	-	-		
	186	L-6	Ⅲa	110519 110528	焼埴土器	鉢	口縁- 側部		褐色	褐色	指押さ ナデ	布目瓦直	11.2	-	-	-	-		
	187	M-N- 13	Ⅲa	49104 49157	焼埴土器	鉢	口縁- 側部		明赤褐色	褐色	指押さ	布目瓦直	9.6	-	-	-	-	○	
	188	L-6	Ⅲa	110032	焼埴土器	鉢	口縁- 側部		褐色	褐色	指押さ ナデ	布目瓦直	13	-	-	-	-	○	
	189	N-13	Ⅲb	47781	紡錘車	-	-		浅黄褐色	浅黄褐色	-	-	0.9	6.2	-	0.8	-	-	



第106図 緑石加工品出土分布図

(2) 石器(軽石加工品, 第107図～第111図 190～211)

軽石加工品は、Ⅲ・Ⅳ層検出の遺構内及びⅢ・Ⅳ層から41点出土した。このうち、特に、残存状態がよく、明らかに人為的な加工が見られる22点を図化した。

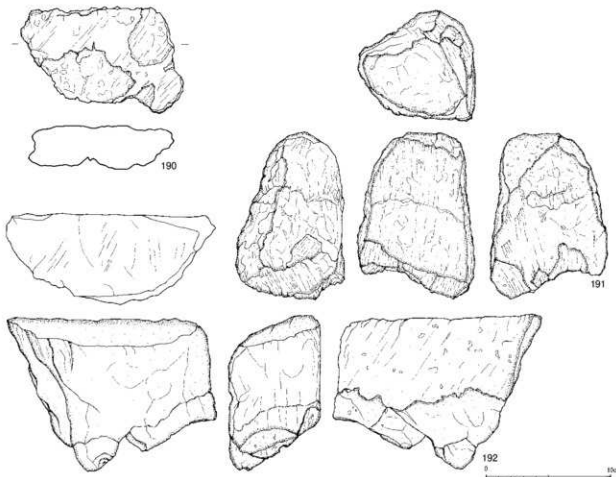
軽石加工品以外の石器については、第1節3-(2)「Ⅲ・Ⅳ層の石器」で報告している。

190～192は炉跡から出土し、比較的大型の軽石加工品である。被熱痕だけでなく、わずかな調整痕が観察でき器具の固定や炉本体に使われたのではないかと考える。

190は191・192に比べ小型であるものの、全体に被熱痕がみられ、ケズリによって表面を平らに調整されている。191も同様に全体に被熱痕が見られるものの、所々に摩耗や被熱などの跡が残る。192は190・191に比べ、大型で半円の柱型に加工されている。一部、側面はケズリやスリ等で鋭く加工されているが用途は不明である。

193～199は土坑及びピットから出土した。193は表面部を平らに加工してあることから台石・石皿と思われるが、裏面上部に挟りが施されているため、煮炊きの際の固定具として使われた可能性も考えられる。194は上部

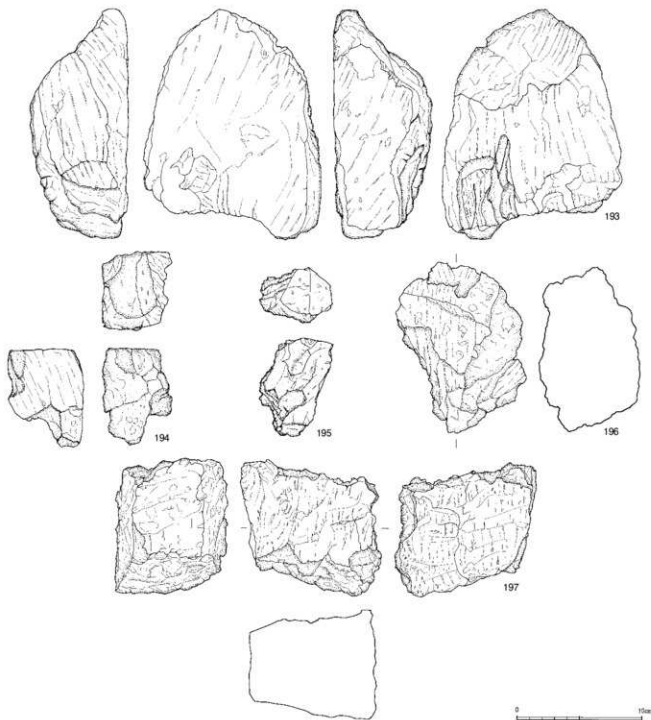
と側面が平らに成形されており、一部、使用痕も見られる。石皿が台石の破片と考えられる。195は台石の破片と思われる。上部と下部に平らに加工した痕が見られ、特に上部にはケズリによる調整がされている。196は明確な形状は不明であるものの、軽量の軽石に一部階段状の挟りが施されている。用途は不明である。197・198は同一のピットから出土した。197は表面と裏面・側面の三面にケズリによる調整が細かく施されている。調整に切り合いが見られることから目的の形状へと加工したと考えられる。198は大きな挟りが特徴的である。全体の欠損が大きいため実際の形状は不明であるが197と同様にケズリによる細かい調整が見られ、挟りは土器や道具などを固定した際に調整して加工したものと考えられる。どちらも被熱痕があるため調理施設や土器等を製作する際に使われたとも考えられるが用途の詳細は不明である。199は破損部が多く数個の破片を接合している。周辺を丸く加工しており、下部にかけて安定させるように平らにしている。一部に黒い焦げが観察できる以外は被熱を受けていない。用途は不明である。



第107図 軽石加工品 1

200～211はⅢ・Ⅳ層から出土した軽石加工品である。200は円筒形で、欠損部分が多いが、残存部の形状から円形に整えられていたと想定できる。一部、被熱の痕が見られ、破損部が鋭角になっている。そのため軽石加工品を使用した後の再加加工品と考えられるが用途は不明である。201は全体的に丸く滑らかに調整され、中心部に溝状の加工が見られる。202は上下・側面にかけて平らに加工されており、全体に被熱痕が観察できる。一部、穿孔のような溝が観察できるが目的・用途等については

不明である。203は表面のみ平坦になっており、角が丸くなっている。表面に特別な加工はされていない。用途は不明である。204は側面部が丸く裏面に平らな面をもつ。被熱痕が観察できるが用途は不明である。205は表面に平らなケズリが見られ全体に被熱痕が観察できる。台石の破片と考えられる。206は擦痕が全体的に、被熱痕が所々に観察できる。先端が鋭角に加工され、各面が平坦に調整されている。火を使用した際に道具の固定や使用した後に再加加工されたと考えられる。207は表面が

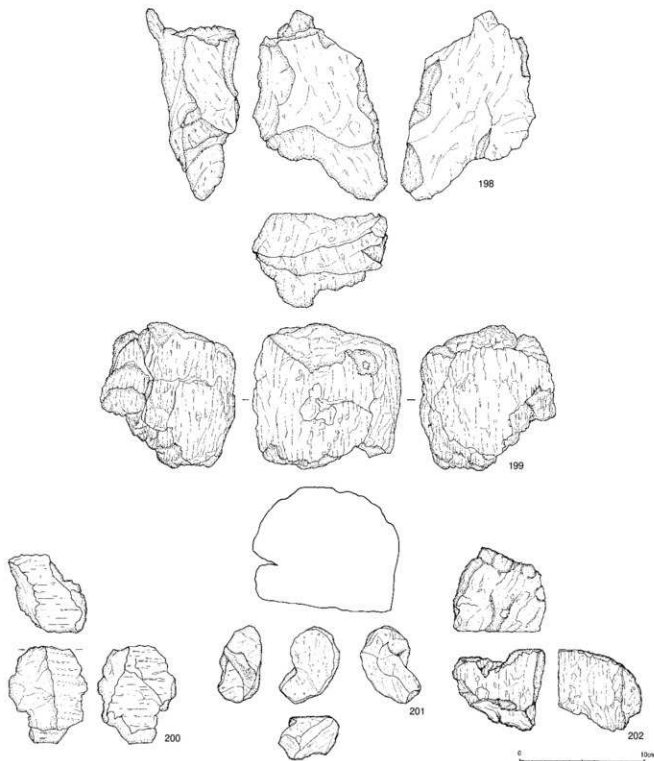


第108図 軽石加工品2

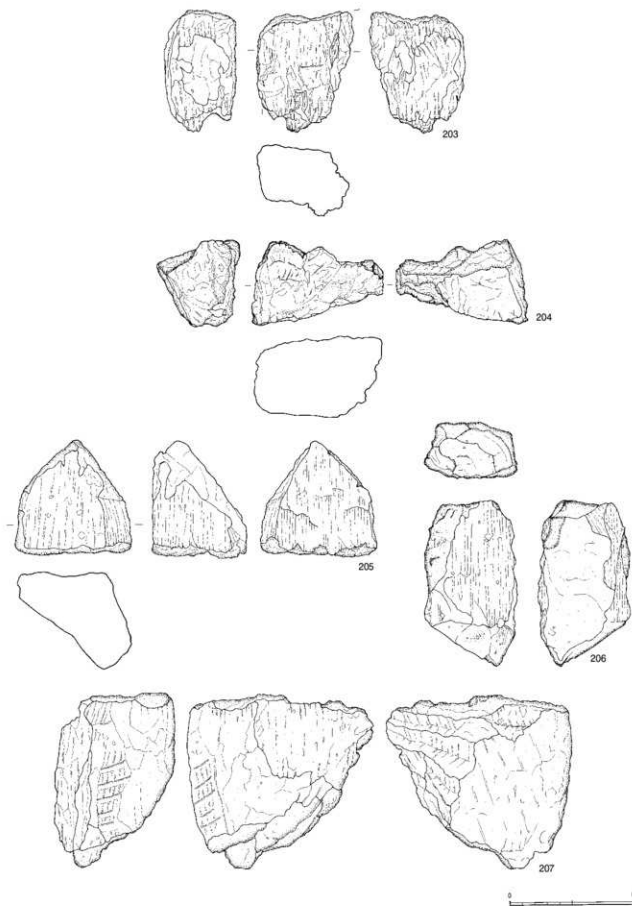
平らに削られており、被熱痕はないものの一部、節理が見られる。節理面を剥ぐようにケズリが見られるため、軽石部分のみを使用するために加工されたと考えるが、詳細は不明である。208は表面に使用痕と思われる擦痕が見られ、側面部に階段状のケズリによる調整が見られる。欠損により全体の形状を把握できないが残存状態から物や道具をのせて使用した石皿が台石と考えられる。

209は明瞭な被熱痕が観察できない。表面は平らで、裏面は鋭角な挟りが観察できることから石皿や台石の破片と考えられる。

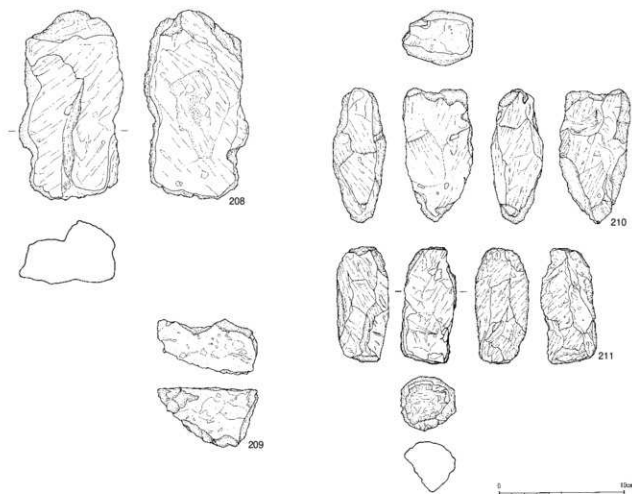
210・211は同一地点で出土した。大きさにわずかな違いがあるが、いずれも被熱痕は観察できず、面取りをされた椎状に加工されている。用途は不明である。



第109図 軽石加工品3



第110図 軽石加工品4



第111図 軽石加工品5

第36表 軽石加工品観察表

標本 番号	掲載 番号	器種	出土区	層	最大長	最大幅	最大厚	重量 (g)	取上番号	備考
					(cm)	(cm)	(cm)			
107	190	軽石加工品	J-15	Ⅳa	8.5	129	3.6	76.0	-	伊勢
	191	軽石加工品	J-15	Ⅳa	13.3	9.3	8.8	286.0	-	伊勢
	192	軽石加工品	J-15	Ⅳa	16.6	12.3	7.3	537.0	-	伊勢
108	193	軽石加工品	-	-	18.4	14.2	7.9	372.0	-	土坑
	194	軽石加工品	-	-	7.7	5.5	6.0	104.0	-	土坑
	195	軽石加工品	G-5	Ⅳa	4.4	5.8	7.9	68.0	-	土坑
	196	軽石加工品	-	Ⅲa	13.5	10.2	6.4	335.0	掘27号P15	ピット
	197	軽石加工品	-	Ⅳa	10.8	11.3	8.8	505.0	H25-P86-1	ピット
109	198	軽石加工品	F-6	Ⅳa	15.7	10.7	7.5	284.5	H25-P86-2	ピット
	199	軽石加工品	H-8	Ⅳa	11.5	11.7	10.0	324.0	H24-P257	ピット
	200	軽石加工品	J-9	Ⅲb	7.8	6.2	6.3	80.0	2520	
	201	軽石加工品	K-5	Ⅲb	6.1	4.8	3.5	20.0	2011	
	202	軽石加工品	J-15	Ⅲb	6.5	7.2	6.7	95.0	5042	
110	203	軽石加工品	I-9	Ⅲb	9.6	7.5	5.6	138.0	2515	
	204	軽石加工品	F-5	Ⅲa	6.7	10.5	6.4	150.0	83104	
	205	軽石加工品	K-6	Ⅲa	9.2	9.3	7.5	145.0	109992	
	206	軽石加工品	L-20	Ⅲb	13.0	7.1	4.4	209.0	72806	
	207	軽石加工品	G-5	Ⅲa	13.9	14.8	9.6	563.5	87441	
111	208	軽石加工品	L-6	Ⅲa	15.0	8.3	5.0	195.0	110029	
	209	軽石加工品	K-6	Ⅲa	4.4	8.0	4.8	47.7	110002	
	210	軽石加工品	F-12	Ⅲa	10.7	5.6	4.3	74.7	75303-1	
	211	軽石加工品	F-12	Ⅲa	9.2	4.4	4.2	54.0	75303-2	

第3節 中世の調査成果

1 調査の概要

中世の遺構・遺物は、出土点数も多く土坑墓など貴重な発見も多いことから、本遺跡の中心となる時代のひとつである。調査は遺物包含層であるⅢa層を中心に行ったが、近世～現代にかけての掘削整備等により残存状況や堆積状況に違いがある。遺跡の北側から南西方向の大部分は削平を受けており遺構調査が中心となった。対して遺跡南東部については、一部耕作による攪乱も含まれるが、包含層が良好に残存しており、遺構・遺物ともに多くの調査成果が得られた。

検出遺構は、土坑墓、掘立柱建物跡、溝・古道、鍛冶遺構、土坑、ピットなどであり、遺跡全体に広がっている。出土遺物は、黒色土器、土師器、瓦器、須恵器、青磁、白磁、中国陶器などで、攪乱による一括品やⅢb層出土品も含まれる。遺跡南部からのものが中心であるが、出土量が多く、遺跡全体で約1645点出土している。

2 遺構

中世の遺構は、土坑墓8基、掘立柱建物跡49棟、溝・古道66条、鍛冶関連遺構1基、土坑114基、ピット765基である。いずれも遺物包含層であるⅢa層下面から検出されたものであるが、残存状況によりⅢb～Ⅴ層まで検出面が異なるものも含まれる。

遺構内からは多くの遺物が出土しており、土坑墓内からは青磁、白磁、和鏡、和鉄など多様な副葬品が出土した。土坑墓内の副葬品や、包含層からの流れ込みなどを含めた遺構内遺物総数は510点である。

(1) 土坑墓(第112図)

中世の土坑墓と思われるものは、遺跡全体で8基検出された。すべて検出面はⅣ層で、埋土はⅢa層を主体とする黒色土である。2m弱の方形もしくは隅丸方形を呈するのが主流である。主軸はいずれも略南北方向で、遺跡中央のG～N-12～16区で検出されている。時代的には12世紀後半から13世紀前半のもので、甕を伴う主屋を核とする建物群がA～Eの5群に分けられることから、台地全体に集落が広がり、多少時期差が見られるが土坑墓のすべてがいわゆる屋敷墓と考えられる。

土坑墓1号(第113～第114図)

J-12区、Ⅳa層上面で検出されたもので、長辺2.09m、短辺1.14m、深さ0.53mを測り、平面形は方形を呈する。坑壁は直線的に立ち上がり、底面はほぼ平坦であるが中央部に浅い凹みが確認される。この凹みの存在と木棺等の痕跡が見られないことから、土坑墓と考えられる。

現代の耕作による攪乱が埋土深く残るが、奇跡的に主体部まで達しておらず、副葬品の残存状況は良好であっ

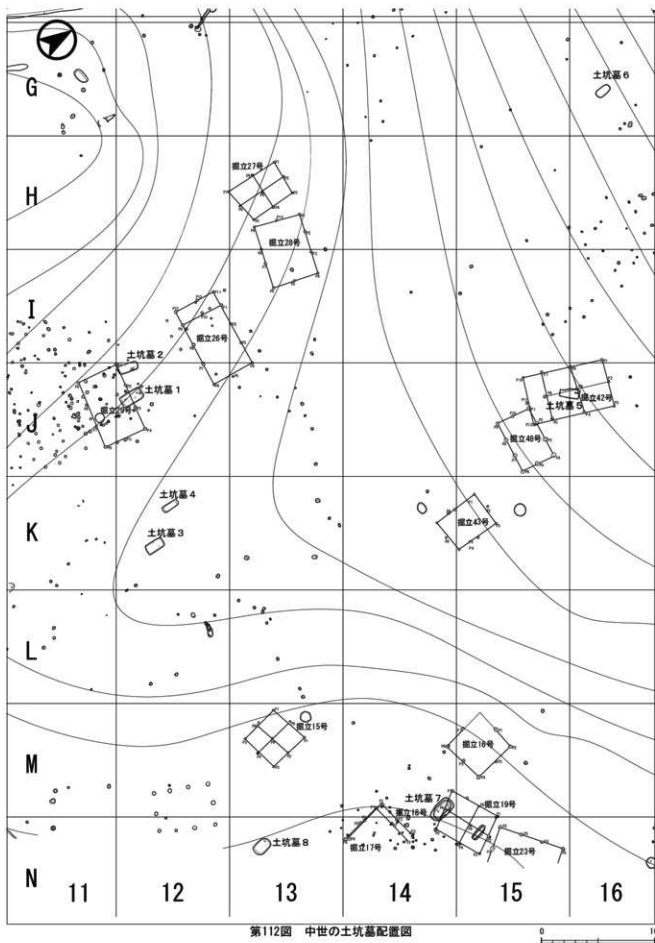
た。土坑の北側では、青磁碗2点、白磁皿5点が東西方向に整然と並べられた状態で出土した。両端より中央がやや沈み気味で、全体的に南側に傾いていた。床面から約10cm上方に並べられており、北側に位置することから、頭位の上を板状のもので塞ぎ、その板の上に高価な青磁などを供えたと推測される。

南側からは完形の滑石製石鍋が、大小1個ずつ入れ子状に出土した。胴部下位に大量のススが付着しており、直前まで使用していたと思われる。また、その約25cm南からは、鉄製の紡錘車も出土している。これらの出土位置は北側の青磁類とほぼ同じことから、遺体上位に置かれたものと思われる。また、南側の両隅からは土師器の鍋の土器片が出土している。これと同一個体の土器片は、北側の青磁なども出土しており、埋葬後意図的に割られた土器片を土坑墓の四隅に置いたと思われ、祭祀的な意味をもっていたと考えられる。

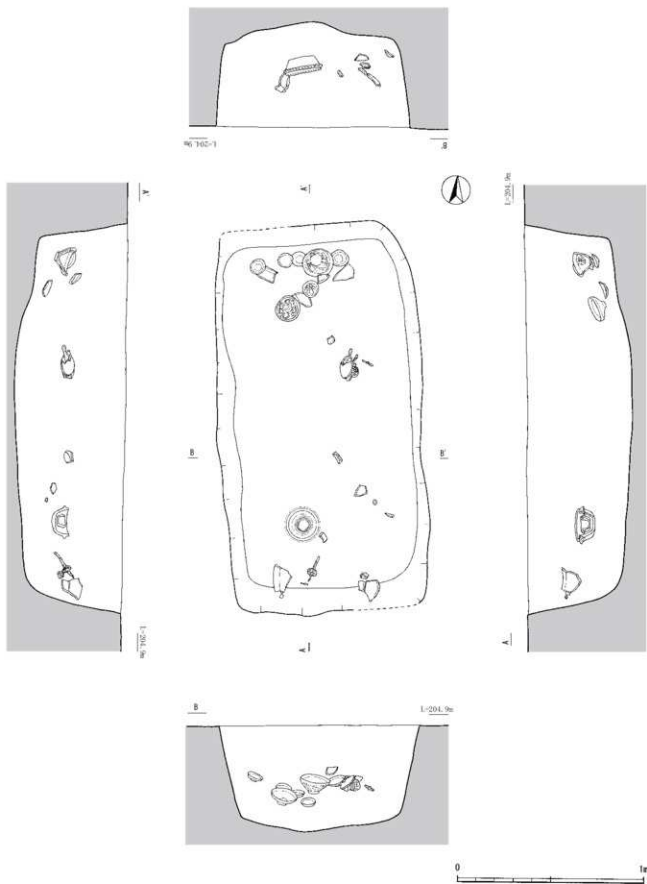
中央部からは、和鏡、青白磁の蓋付小壺、古銭、鉄製の和鉄、毛抜きが出土した。これらは密集して土坑墓中央のやや東寄り位置し、全体が中心部へ向かって倒れるように傾いていた。和鏡の両面には黒漆塗りの木片がわずかに貼り付いており、木箱に取められていたと思われる。小壺と木片はほぼ密着しており、古銭は木片の外側に1枚貼り付いていた。古銭の表裏両面には織状のものも付着し、布状のもので大事に包まれて供えられていたことが分かる。鉄製の和鉄や毛抜きは和鏡や小壺の直下に位置していた。これらの折り重なるような出土状況から、全てを箱状のものに整然と収納したと考えるべく、袋状のものに詰めていたのではないかと想定される。また、検出面が床面から約23cmと近く、他の副葬品と比べて一段低いことから、遺体の胸部付近に置かれていたと推測される。

これらの検出状況から、断定は出来ないが、南北を主軸とする方形の土坑を掘り、床面を浅く凹ませ遺体を安置し、生前使用していた和鏡や小壺、和鉄など身近なものを傍らに置いた後で副板を置いて蓋をした。その後、埋葬のために青磁碗や白磁皿を頭上に並べ、足元には日常使用していた滑石製石鍋や鉄製紡錘車を供え、呪術的な意味合いの土師器片を四隅に配置し埋めたと推測することもできる。

1号墓の副葬品は多様であり、経済力豊かで屋敷墓を造営できうるだけの権力者の存在が想定される。当時(12世紀後半～13世紀前半)大崎町一帯は、日向国教仁郡の北辺に位置し、入植者の開拓により大隅半島南部では唯一の島津一円荘が存在していた。また、大隅の南北各地を結ぶ交通の要衝でもあり、この野方地方を治める権力者が大きな経済力を有していてもおかしくない。この土坑墓は、大隅地方の中世前期の集落様相を知るうえで大きな発見となった。



第112図 中世の土坑墓配置図



第113図 中世の土坑墓 1号①

遺物 (第115～第117図)

土坑墓1号の遺物は、青磁、白磁、土師器、滑石製石鍋、磨石、鉄製品、古銭、和鏡などである。副葬品と埋土中、耕作による攪乱部を含め出土した遺物総数32点中26点について図化した。

212～214は青磁碗である。212は同安窩系青磁碗で、大宰府分類同安窩系青磁碗I-1b類に比定されるものである。体部上位でわずかに屈曲し、黄色味を帯びた薄緑色の釉が外面胴部下位まで掛かる。発色が弱く、釉垂れも見られる。外面に細かい縦の櫛目文を施す。体部最下位から高台にかけて、回転ヘラ削りの跡が残る。内面には、ヘラ状工具による文様と櫛状工具によるジグザグの点描文を施す。213は212と同様に同安窩系青磁碗であり、I-1a類に比定されるものである。外面は無文で、茶色味を帯びた薄緑色の釉が体部下位まで掛かり、上げ底気味の高台は露体である。内面は、ヘラ状工具による文様と櫛状工具による点描文を施す。214は青磁碗であり、浅緑色の施釉で、内面無文、外面に粗めの櫛状文を施す。部分的出土のため型式は不明である。

215～220は白磁で、215は碗、216～220は皿である。215は胴部下位に膨らみをもち口縁部へ向かって延びるものである。口縁部がわずかに外反し、水平面をもち切るもので、大宰府編年白磁碗Ⅱ類に比定される。内外面とも無文で、透明釉が施される。

216～218は、直口する口縁をもち、底面がわずかに突き出し高台状に残るものである。大宰府編年白磁皿Ⅵ-1a類に比定されるものである。216は、灰白色の胎土に発色の弱い浅黄色の釉が掛かるもので、内面屈曲部に明瞭な段をもつ。外面施釉は、体部下位は無釉であるが、施釉の幅は不規則である。底面は、切り離し後削り調整を施す。217は、体部上位の屈曲部と口縁の間に、わずかな凹みをもつものである。内面の段は明瞭で、見込み付近に砂粒が附着している。外面下位は無釉で、高台切り離し後はナデ調整を施す。218は、体部の屈曲が弱く、直口するものである。灰白色の胎土に内面全面、外面底部近くまで銜色をした釉が掛かるが、外面の施釉は拭き取られ、改めて口縁部付近に施釉を施した痕跡が残る。全体の発色にムラがあり、釉垂れも見られる。口縁部の釉を掻き取られた口先げ皿である。

219は、やや膨らみをもちながら直口する体部をもち、底部が高台状に残るもので、大宰府編年Ⅵ-1b類に比定されるものである。浅黄色の釉が掛かり、内面に弱い屈曲をもち沈線状に巡る。底面に工具による切り離し痕が残る。218と同じく口縁部の釉を掻き取られた口先げ皿である。220は、体部が膨らみをもちながら立ち上がるもので、底面は平底である。大宰府編年Ⅷ-1b類に比定される。灰白色の釉が底面以外の全面に厚く施され、口縁部付近に釉垂れが見られる。内面に弱い屈曲をもち、

段が沈線状に巡る。見込みにヘラ状工具による草花文が描かれる。

221、222は、白色の胎土に青白色の釉が掛かる青白磁の小壺で、221は蓋部、222は身部である。発色の美しい釉は、蓋部の上面と身部の内面全面、外面下位まで施され、受け口部分は削り取られている。

221は、つまみがなく天井部が平坦で、底にかけてほぼ水平である。上面に花文が施され、身受け部の口唇は身部に合うように削り出しにより作られている。222は、削り出された浅い高台から丸みをもちながら立ち上がり、肩部で大きく内傾し、蓋部に合う受け口が形成される。外面には、4段の縞連文を施される。

223～228は、土師器である。223～227は、埋土内出土の小片であり、土坑墓への副葬品の可能性は低い。228も同じく破片であるが、意図的に割られたものを四隅に配置した副葬品と思われるものである。

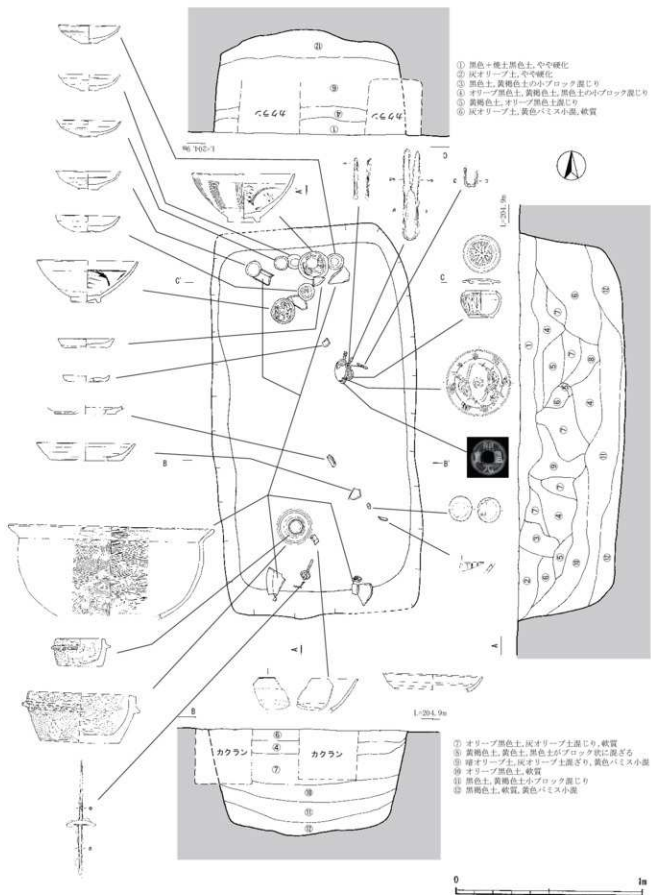
223～225は坏である。223は精製された胎土で、底面との境に明瞭な段をもつもので、底面にヘラ状工具による切り離し痕が残る。224は外面に黒斑が残り、横ナデ調整痕が凹みとなって巡っている。225は坏の底部で、充実気味の底部はわずかに張り出している。

226、227は、器高が1～1.5cm程度の皿である。226は、底面切り離し後ナデ調整を施す。全体に黒斑が見られ、灯明皿として使用された可能性がある。227は、内面のナデ調整痕が凹みとなって残り、全体的に歪んでいる。

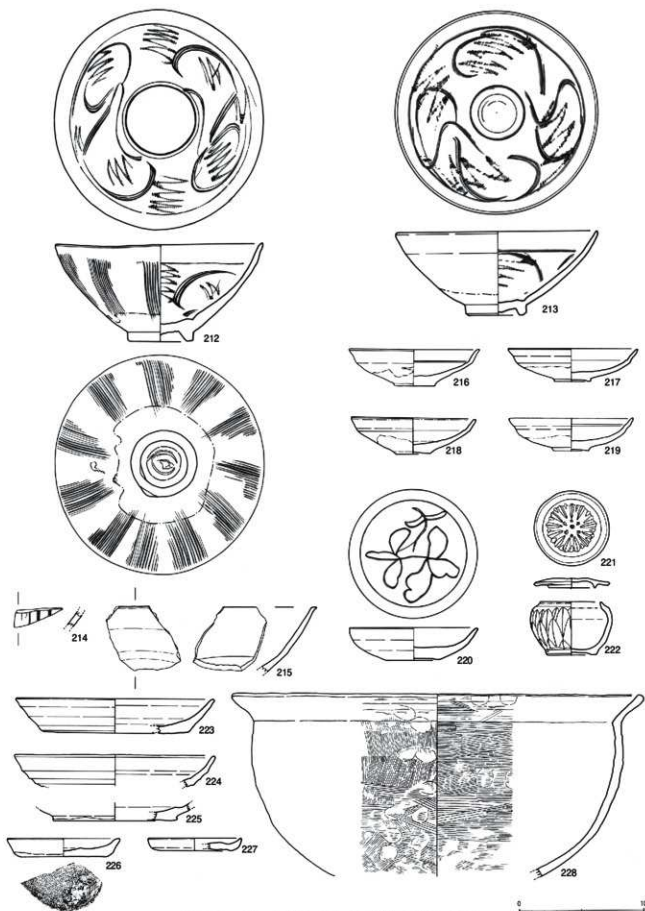
228は、膨らみをもつ胴部が内湾しながら立ち上がり、口縁部で「く」の字状に大きく外反する鍋である。口径32.4cm、底面は意図的に打ち欠いたと思われる形状は不明だが、残存部の器高が14.5cmと大型のもので、内面の屈曲部に明瞭な段をもつ。両面とも丁寧なハケ目調整が施され、一部に指頭圧痕が残る。煮炊き具として実際に使用されていたと思われ、外面に大量のススが附着しており、C¹⁴年代測定の結果は、860±30yrBPである。呪術目的に入れられたと推測されるため、部分的な土器片のみの出土である。

229、230は滑石製石鍋であり、入れ子状に出土した。墓に滑石製石鍋を供える例はあまりなく、大小いずれもほぼ完全な形で出土で、全国的にも珍しい貴重な資料である。いずれも平底で、やや内湾しながら直口し、断面形状が三角形に近いやや尖り気味の鍋が、体部上位に巡る形状は同じである。

229は口径17.4cm、底径12.6cm、器高7.9cm、器壁1.2cmを計る。内外面ともノミ状工具による工具痕が規則的に残り、傾向として、外面に縦位の、内面に横位の細かい工具痕が多数残る。平底の底面は若干水平でなく、盛りが良くない。外面鐫以下の全面に大量のススが附着しており、直前まで煮炊き具として使用されていたと思われる。C¹⁴年代測定の結果は、800±30yrBPである。



第114図 中世の土坑墓1号②(出土状況・断面図)



第115図 中世の土坑墓1号内出土遺物①(磁器・土器)

230は口径8.1cm、底径7.2cm、器高4.4cm、器壁0.9cmを測る小型の石鍋で、底面の内面中央は器壁が0.5cmとやや凹んでいる。器形は229とほぼ同じで、内外面にノミ状工具による工具痕が多く残るが、ミガキやナデによる調整を施し、丁寧な仕上がりである。外面に大きな黒斑が見られるが、ススの付着はほとんどなく、実用品としての可能性は低く、儀礼的な目的のため製作された可能性がある。

231は、最大長4.0cmの磨石である。小型のもので、両面に磨面が残る。流れ込みの可能性がある。

232～235は、副葬品の鉄製品である。

232, 233は、鉄製の和鋏である。232はほぼ完全な形で、233は部分的な出土である。

232は、頭部が「U」字状に折り返されており、握り部分から直線的に延びるものである。ほぼ完全な出土で、

全長14.8cm、全幅2.6cmである。刃部の全長は6.6cm、幅1.0cmで、断面三角形を呈した片刃である。わずかに聞き気味の刃部は「ハ」の字状に広がる。233は、「U」の字状に折り返された握り部で、和鋏として取り扱った。断面形状は四角形を呈する。

234は鉄製紡錘車である。直径4.7cmの紡輪の中心に、長さ18.5cmの紡茎が差し込まれた状態で出土した。紡茎の最大径は0.6cmで、先端に向かって傾きながら先細りとなり、先端には糸を掛けるための鈎が見られる。紡輪は最大径4.7cmの円盤状を呈し、わずかに中央が盛り上がっている。

235は毛抜きである。片側のみの出土で全体形状は不明であるが、長さ6.6cm、厚さ0.3cmの薄い鉄板を折り曲げて、挟めるように加工してある。



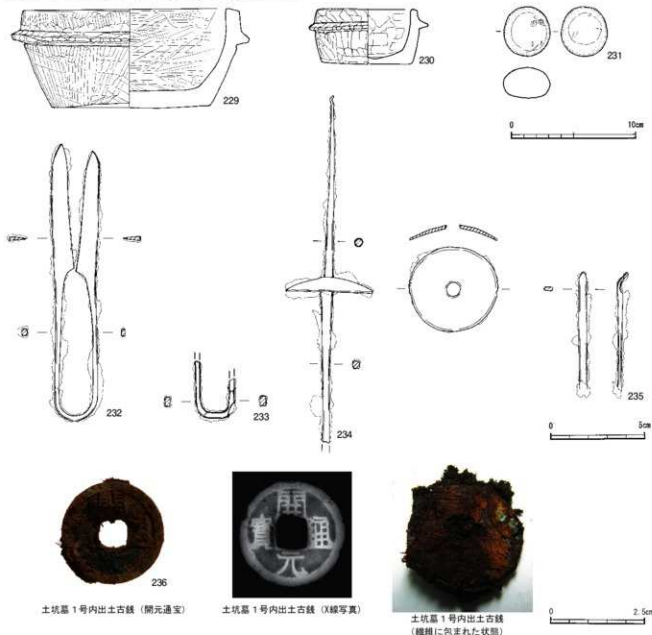
土坑墓1号内出土青磁碗

236は古銭である。和鏡の納められた黒漆塗りの木箱の木片に貼り付き、赤橙色の錆に覆われた状態で出土した。表裏両面に繊維質が付着しており、布状のものに包まれていたと思われる。銭貨名は「開元通寶」であり、初鑄は背面に鑄造地名がないことから南唐銭の可能性が高く、960年と思われる。「開元通寶」は、宋銭とともに中世に広く流通しており、何世代にも渡り受け継がれてきた伝世品の可能性が高い。

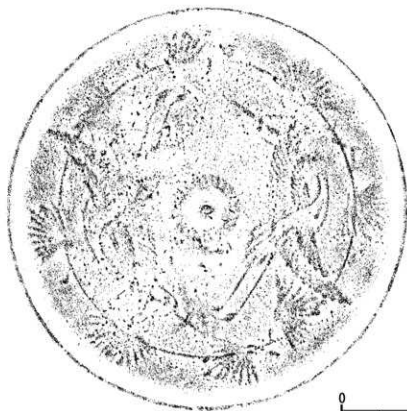
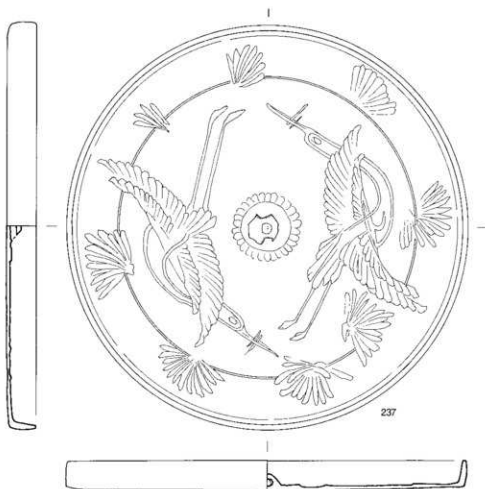
237は、黒漆塗りの木箱に納められていたと思われる和鏡である。出土時は、表裏ともに錆が付着しており、文様の判別が困難であったが、丁寧に除去作業を行った結果、鏡背面の縁に沿って配された2羽の鶴が、羽を広げ松の枝を喰（は）んでいる「松喰鶴鏡」であることが判明した。2羽の鶴は、ほぼ同じ体勢で反時計回りの回

旋構図を取っている。界圈状に配された8つの松葉には枝は付いておらず、枝をくわえた嘴は進行方向を向き首を伸ばしている。

和鏡の面径は、10.8cm、縁高は0.8cm、鏡胎は2mm、紐帯の高さは4mmである。縁は先端にごく狭い平坦面をもつ平縁で、ほぼ直角に立ち上がる。重量99gと軽く、界圈も細く、鏡胎も薄い。紐帯は縁の半分程度しかなく、文様の表出も少ないことから、非常に薄作りで、もち運びしやすい作りである。法量や文様などの特徴から、12c後半～13c初頭に京都で製作されたものと推測される。平安時代後期になると爆発的に鏡の生産が増加し、支配層の間では鏡は化粧道具として普及していたことから、本遺跡まで運ばれてきたと推測される。



第116図 中世の土坑墓1号内出土遺物②(石器・金属器)



第117図 中世の土坑墓1号内出土遺物③(和鏡)

土坑墓2号(第118図)

J-12区、土坑墓1号から西側約1.6m離れて検出された。規模は長辺1.81m、短辺0.74mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは約20cmである。1号墓よりもやや小さめであるが、この時期は膝を曲げ軽く立てて安置するのが普通であり、適当な大きさである。木棺をすえた形跡が見あたらないことから土坑墓と判断した。北側の床面近くに、副葬品と思われる白磁碗が2点並ぶように供えてあったが、土坑中央を貫くように、略南北方向に延びる幅65cm、深さ20cm程度の現代の攪乱の影響で、白磁碗は破壊され、底面の一部も消失している。

遺物(第118図)

土坑墓2号の遺物は、白磁、土師器、須恵器、石器などである。遺物総数10点中7点について図化した。

238、239は、並んで出土した白磁碗である。238は、幅広い玉縁状の口縁をもつもので、大宰府分類のIV-1a類に比定される。直線的に開く体部は口縁部付近でわずかに内湾し、外面下半は露胎である。239は、やや丸みをもつ体部が、口縁部で外反するもので、大宰府分類のV-4a類に比定される。外反する口縁部は上面に平坦面をもち吻状に突る。体部外面下位は無軸で、見込み付近に沈線状の段を有する。

240は浅めの土師器の皿で、底面にへう状工具による切り離し痕が残る。241は、玉縁状の口縁をもつ東播系須恵器である。灰褐色の胎土で全体的に黒色系を呈する。

242～244は、表面が火熱により赤化した台石の一部である。242は、凝灰岩で作られた平坦面をもつもので、着色が激しく、表面が摩滅している。全体像は不明である。243、244は軽石製の台石である。244は、表面に黒化も見られ、直接火熱を受けていたと思われる。

土坑墓3号(第119図)

K-12区、土坑墓1号から東側約12m離れ、土坑墓4号と並ぶようにして検出された。規模は長辺1.67m、短辺0.79mの方形を呈し、検出面からの深さは約17cmと浅く、上位は削平されたと思われる。現代の耕作による攪乱が激しく、床面の約半分は消失しているため、土坑墓の正確な規模や、副葬品など全体的な様相は不明の部分が多い。残存している床面付近に、副葬品の一部と思われる鉄製品の集まりが2ヶ所確認された。鉄鎌や腰刀などの武器が多数を占め、それらを研ぐための携帯用砥石も一緒に出土している。土坑墓内からの武器の出土はこの時代では珍しく、貴重な資料である。

遺物(第119図)

245は、体部下位に張りをもちながら直線的に立ち上がり、口縁部が少し反る白磁碗で、大宰府分類V-1類に比定される。全面施釉の内面には、体部と見込みの間に段をもち、上位に沈線が巡る。外面は高台付近は露胎であり、口縁部付近に段をもつ。工具ナデ調整痕が後

なり残り、高台形は欠損のため不明である。

246、247は、土師器の小皿である。246は、底面に糸切り離し痕が明瞭に残り、工具によるナデ調整後、さらに指ナデ調整により表面を丁寧に仕上げている。焼成が良く、やや硬質である。247は、黒灰色の胎土に黒斑が残るもので、糸切り底である。部分的な出土で摩耗しているが、灯明皿の可能性が高い。

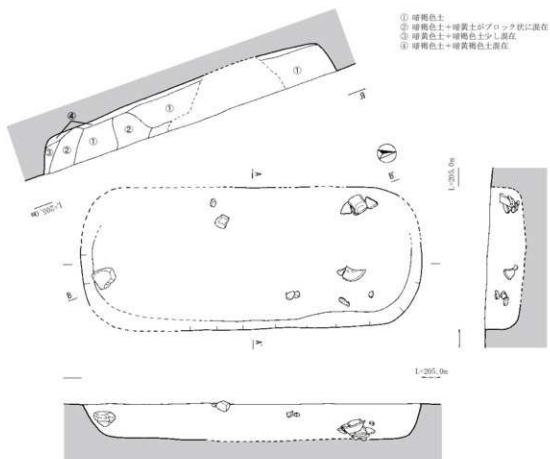
248は、薄い板状の粘板岩に穿孔が施された砥石である。穿孔には紐が通されたいと思われ、一部欠損しているが、全長10.4cm、幅4.2cm、厚さ0.9cmと大きさも手もちサイズであることから、常に携帯して利用されていた揚げ砥石と思われる。表裏両面に平坦な研磨面をもち、片側平坦面中央に溝状の凹み研磨面を有する。両面とも研磨使用による磨り減り痕が顕著であり、中央部が両端より薄くなっている。側面には携帯しやすく成型した跡が見られる。鉄鎌の上に置かれていた出土状況から、金属製品の研磨用に使われていたと推定される。

249～254は、鉄鎌またはその一部と思われるものである。249、250は古墳時代に多い「圭頭鎌」に類似するもので、身部が細長い菱形を呈している。先端部の両縁に刃部が形成され、断面は薄いレンズ形である。どちらも腐食が激しく、茎部と間に欠損が見られる。茎部は先細りしながら尖っており、断面形状は四角形を呈する。249の茎部の先端には矢柄と思われる木質が付着している。251は雁又鎌である。ほぼ完形で出土しており、幅広い身部内側に刃部があり、断面は薄い楔形を呈する。先細りしながら長く伸びた茎部の断面は四角形を呈する。252～254は、先細りしながら延びる棒状の鉄製品で、鉄鎌の茎の一部と思われるものである。254は薄い板状を呈し、途中から大きくS字状に湾曲している。屈曲の形状は錆に覆われ詳細は不明であるが、先端に矢柄と思われる木質が付着している。

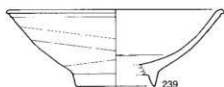
255は薄い板状の鉄製品で、残存状況が極めて悪く全体形は不明であるが、片刃で並んでいた出土状況から、刀子または腰刀の一部と思われる。金属部分の両面に木質の付着が見られ、鞘に納められていたと思われる。

256、257は和鉄である。256は刃部の片刃で、握り部の一部が欠損しているが、残存部から全長約13cmのものと推定される。握り部は「U」の字に折り曲げられており、断面は四角形である。刃部は片刃で、峰部分は直線的に延びているが、内側の刃はわずかに内湾している。257は握り部の折り返し部分で、毛抜きの可能性もあるが、「U」の字の大きさから、和鉄と判断した。刃部は欠損している。

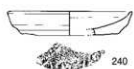
258は腰刀である。錆化が激しく、先端部、刃部、茎部先端と部分的な出土である。全長は不明であるが、約30cm程度のものではないかと推測される。刃部は片刃で、刀身はわずかに反っている。両面には鞘と思われる木質



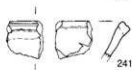
238



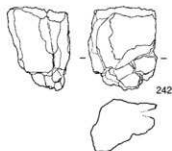
239



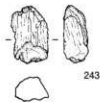
240



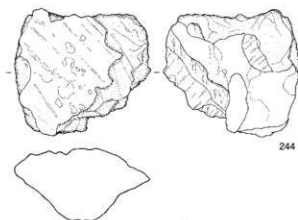
241



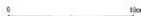
242



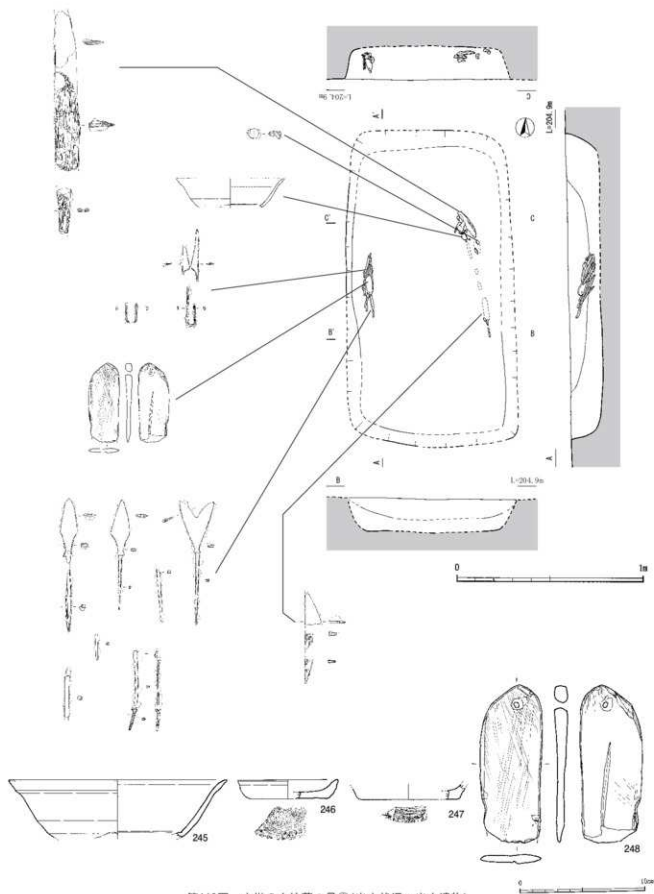
243



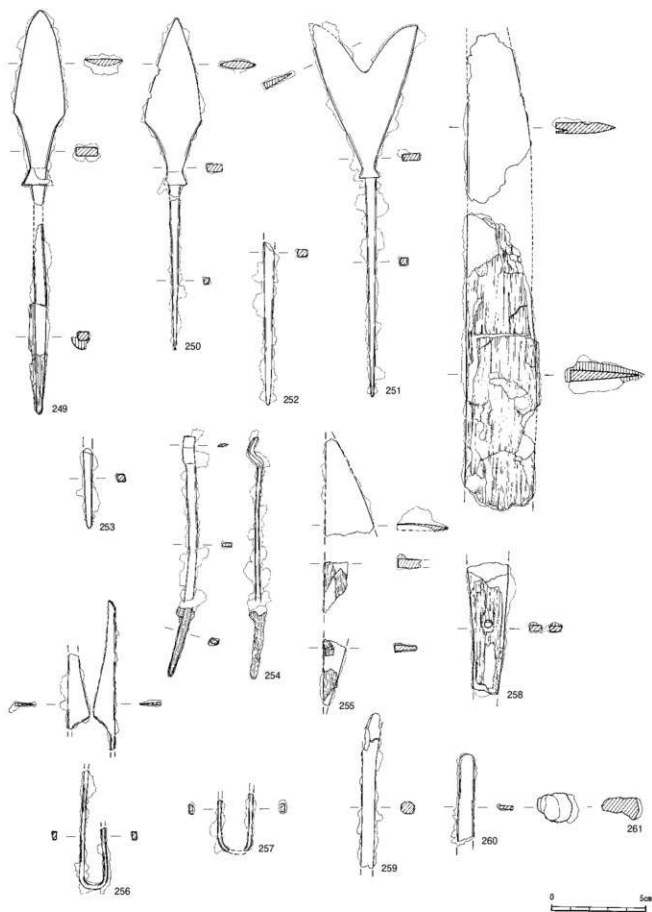
244



第118図 中世の土坑墓2号(出土状況・出土遺物)



第119図 中世の土坑墓3号①(出土状況・出土遺物)



第120図 中世の土坑墓3号②(出土遺物・鉄器)

が、ほぼ全体を覆いように残存している。茎部は茎尻へ向かって直線的に細くなる作りで、柄の一部と思われる木質が両面に貼り付いている。中央部には目釘穴が認められる。

259は棒状を呈したもので、鉄鎌の茎の可能性もある。260は平板状を呈したもので、先端は丸みをもち刃はもたず断面四角形である。261は、詳細不明の鉄製品である。複数の鉄塊が重なったようにも見える。

土坑墓4号(第121図)

K-12区、土坑墓3号から北西側約2m離れ、土坑墓3号と並ぶようにして検出された。規模は長辺1.54m、短辺0.64mの方形を呈し、検出面からの深さは約20cmであり、上位は削平されたと思われる。現代の耕作による攪乱が西側に大きく見られる。副葬品と思われる遺物の出土はなく、埋土中より262の鉄片が1点出土した。

土坑墓5号(第122図)

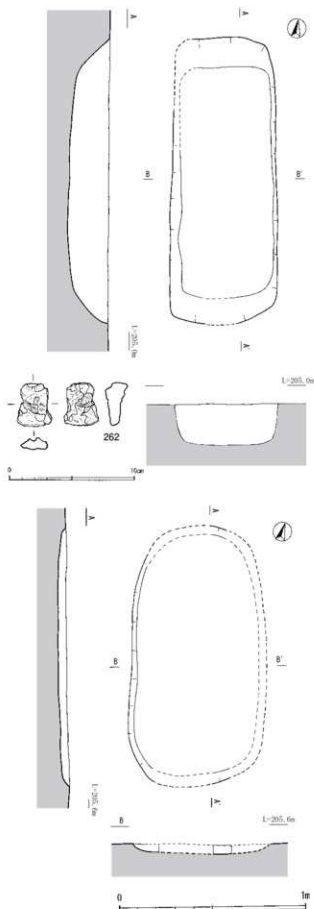
J-15・16区、土坑墓1号から北東方向へ約37m離れて検出された。規模は長辺1.75m、短辺0.9mの方形を呈し、検出面からの深さは約10cmである。鉄釘の出土や木棺の特徴もなく、床面がわずかに凹んでいることから、土坑墓と思われる。中央部を切るように樹痕があり、壁の西側や床面の一部に凸凹が認められる。検出面からの深さは浅いが、耕作による攪乱もなく良好な検出状態である。北側の床面近くに、副葬品と思われる青磁碗が2点南北方向に並ぶように供えてあった。釉薬に傷や摩滅が見られないことから、常用されたものではなく、葬送儀礼のため用意されたものと思われる。他の土坑墓と離れているが、周辺には掘立柱建物跡が数棟集中している。

遺物(第122図)

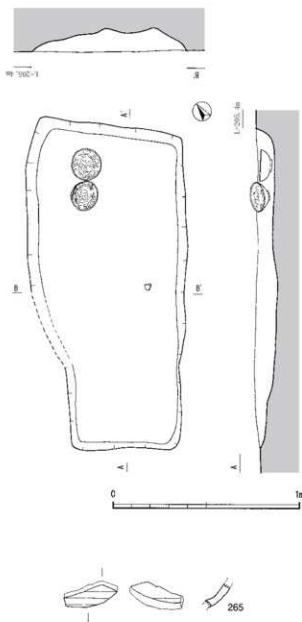
土坑墓5号の遺物は、青磁碗2点、土師器片である。263、264は、並んで出土した青磁碗である。どちらも胴部下位に強い張りもち、直線的に直口するもので口縁端部は丸く仕上げている。大宰府編年の龍泉窯系青磁碗I-2a類に比定される。底面は肉厚な作りであり、高台内面のみ露胎でほぼ全面施釉を施す。263は、外面にヘラ調整痕が浅く残り、施釉全体に貫入が見られる。外面は無文、内面に浅めの片影りで草花文を施す。264は、ヘラ調整後丁寧なナデ調整を施す。高台は丸みを帯び、外面は無文で、内面全体に片影蓮花文を施す。265は土師器の皿である。部分的な出土のため全体形は不明であるが、外面にナデ調整痕が明確に残る。

土坑墓6号(第121図)

G-16区、土坑墓1号から北へ約48m、土坑墓5号から北西へ約26m離れて検出された。規模は長辺1.4m、短辺0.7mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは約10cmと非常に浅い。北へ行くほど削平が大きく、掘り込み面は上位と思われる。遺物の出土はないが、形状、埋土、方位など総合的に見て、土坑墓と判断した。



第121図 中世の土坑墓4号(出土遺物)・6号



第122図 中世の土坑墓5号(出土状況・出土遺物)



土坑墓7号(第123図)

M-14区。土坑墓3号から東方向へ約33.5m離れて検出された。規模は長辺2.3m、短辺1.3mの隅丸方形を呈し、検出面からの深さは約25cmである。鉄釘の出土や木棺の特徴もなく、床面に凹みが認められることから、土坑墓と思われる。

北側中央に土師器の鍋片、その東側には近接して湖州鏡が出土した。湖州鏡の下面には板状の木質があり、その裏に古銭が貼り付いていた。同じく鏡下からは、布状の繊維質が付着した鉄製の和鉄も出土している。これらの副葬品と共に土器片の下から頭骨の骨粉、和鉄の周辺からは、一列に並んだ大臼歯や犬歯、緑色に変色し

た上顎の歯が認められたことから、頭位は北側で東側を向いており、土器片は祭祀的な意味で置かれた可能性が高い。また、湖州鏡や和鉄など身近なものは、頭位近くに供えられたと思われる。臼歯の咬痕から壮年と推定されるが、性別は不明である。中央付近からは、白磁碗が1個置かれた状態で出土し、周りに3個の土師器皿が配置されていた。いずれも使用した形跡があまり見られず、埋葬のために準備されたものと思われる。

これらの副葬品は、床面から浮いておりやや中央へ向かって傾いた状態で出土のため、遺体の上に板状もので蓋がされ、その上に配置された後、埋葬されたと考えられる。



土坑墓5号内出土青磁碗

遺物（第124～126図）

土坑墓7号の遺物は、白磁、土師器、鉄製品、古銭、湖州鏡などである。副葬品と、埋土中より出土した遺物総数19点中13点について図化した。

266は、直線的に立ち上がる体部が、口縁部で外反する白磁碗であり、大宰府分類のⅦ-3類に比定される。外反する口縁部は上面に平坦面をもち、嚙状に尖る。内外面施釉で、高台付近のみ無釉である。焼成が弱く全体に細かい気泡が見られる。見込み付近に沈線状の段を有する。

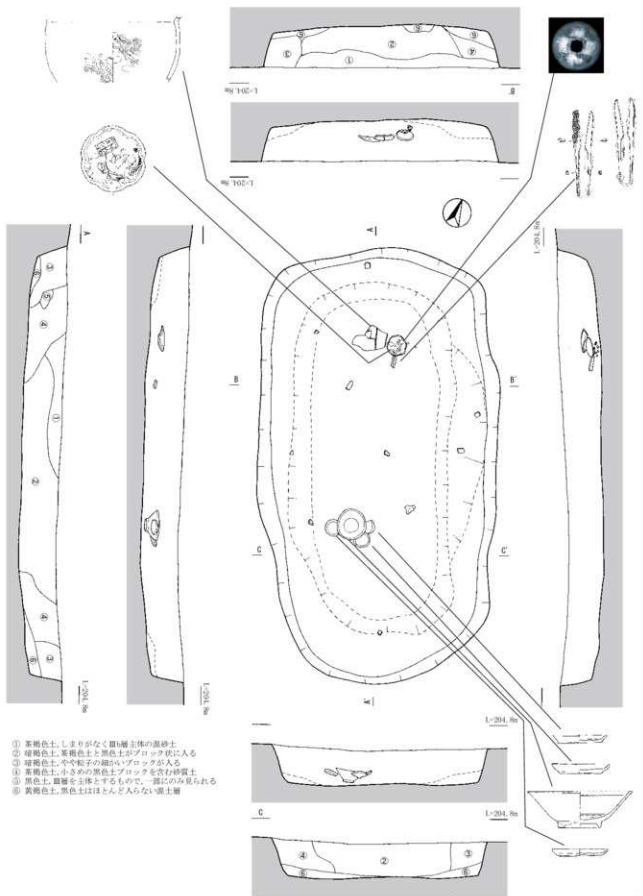
267～275は、土師器である。267～269は、土師器の皿である。3点ともほぼ完形で、口径が9cm前後、器高が1～1.5cmとはほぼ同じであり、土坑墓中央付近に並べるように置かれていた。直上に土師器碗が位置することから、副葬品の一部と推定される。内外面ともナデ調整が施され、丸みをもって短く立ち上がる。底面の切り離しはヘラ切りで、切り離し痕が残る。270～272は坏の口縁部であり、いずれも内外面ともナデ調整で仕上げている。270は直口、271、272はわずかに外反している。271、272については、断面形状や焼成が似ていることから同一個体の可能性がある。273、274は、坏の底部である。273は工具ナデ調整が施され、ヘラ切りの底面に段をもつ。底面の中央は凹んでいるため器壁が薄く、腰は肉厚

である。274は底面に切り離し痕が粗く残る。275は壳である。全体の四分の一程度の出土であり、口縁部、底部の形状は欠損のため不明である。内外面ともヘラ状工具によるナデ調整が施され、ハケ目が残る。その後、粗いナデ調整が施され、指ナデ痕や指頭圧痕が多数見られる。全体的に凸凹しており、胎土には小石や砂粒が多数含まれ空洞も認められる。外面は、火熱により黒ずんでいる。

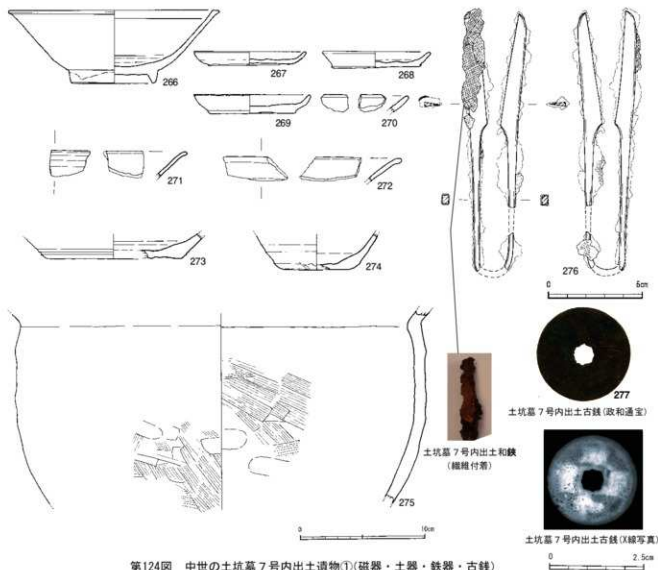
276は、鉄製の和鋏である。握り部から刃部先端へ向かって直線的に伸び、刃部との境目に僅かな反りが認められる。長さ6.0cmの刃部は、内側に刃をもつ片刃で、峰部に平坦面を有している。直線的な握り部は、折り返しが欠損しているが約7.8cmと推定され、断面は四角形である。厚く覆われた錆と共に、布目痕が表裏とも多く付着しており、布状のものに包まれていたと推測される。

277は古銭である。湖州鏡下面に木質が付着しており、木質の裏に貼り付くように出土した。表面を厚く錆が覆っているが、政和通寶（初鋳1111年）と判断した。

278は、湖州鏡である。木質が付着していたことから、木箱に納められていたと推察される。九州地方で一般的な六花鏡で、蒲鉾型の縁を呈する。鏡面はほぼ平坦で、縁周辺はやや反っている。紐帯が縁よりわずかに高く、鏡背は無文で、太めの界圍が巡る。銘帯は縦に二分され、「州」の字は判読できるが、摩滅が激しく判断できない。



第123図 中世の土坑墓7号①(出土状況・断面図)



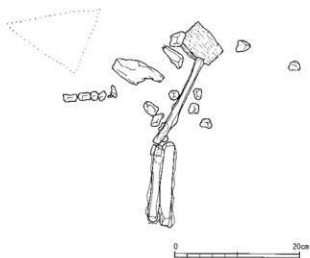
第124図 中世の土坑墓7号内出土遺物①(磁器・土器・鉄器・古銭)

土坑墓8号(第127図)

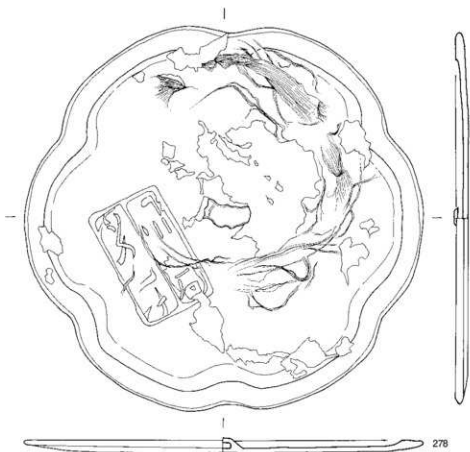
N-13区、土坑墓7号から南方向へ約14m離れて検出された。規模は長辺16m、短辺1.1mの楕円形を呈し、検出面からの深さは約18cmである。南西部分の多くは、現代の耕作による擾乱を受け、上位が消失している。検出面からの深さは浅いが、包含層と埋土が同色のため検出が難しく、掘り込み面はこれよりもまだ上位である。床面中央に凹みが認められ、鉄釘の出土や木棺の特徴もないことから、土坑墓と思われる。

北西側から土師器の皿が4枚重なるようにして出土した。土師器は、全体的に中央へ向かって傾斜しており、床面の直上からやや上位にあるため、故人を埋葬後、頭に当たる部分の傍らに板状のものを被せ、その上に供えられたものではないかと推察される。その後、中央部にできた空洞が埋まる過程で傾いたと思われる。

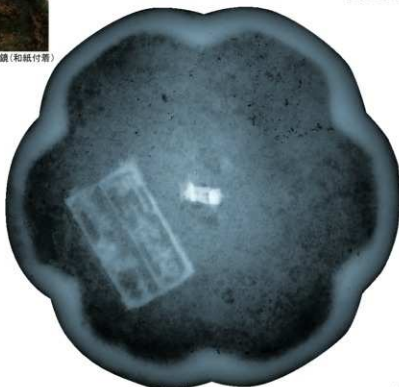
土坑墓7号に近い位置であるが、副葬品の様相からやや時間差があると思われ、7号墓よりも新しいと思われる。



第125図 中世の土坑墓7号内出土遺物②(掘出土状況)



土坑墓7号内出土湖州鏡(和紙付着)



土坑墓7号内出土湖州鏡(X線写真)



土坑墓7号内出土湖州鏡(紐状繊維付着)

第126図 中世の土坑墓7号内出土遺物③(湖州鏡)

埋土中から採取した炭化物のC14年代測定の結果は、 1250 ± 30 yrBPである。

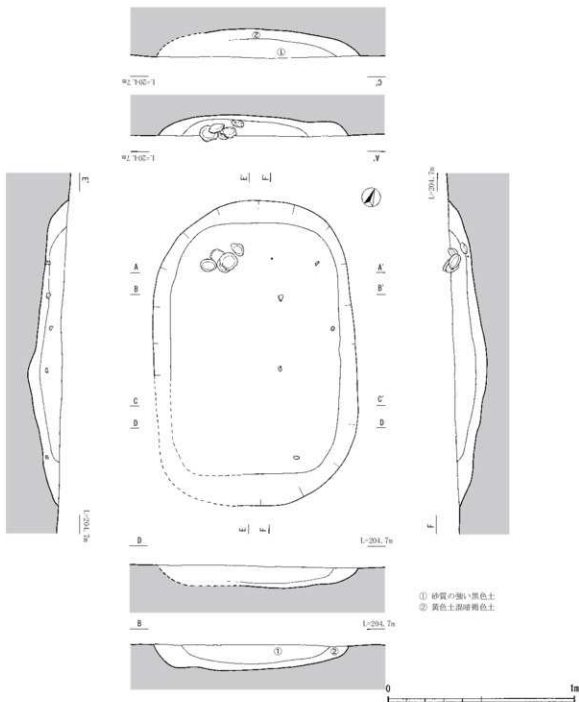
遺物 (第128図)

土坑墓8号の遺物は、土師器、粘土塊などである。流れ込みと思われるものも多く、埋土中より出土した遺物総数29点中6点について図化した。

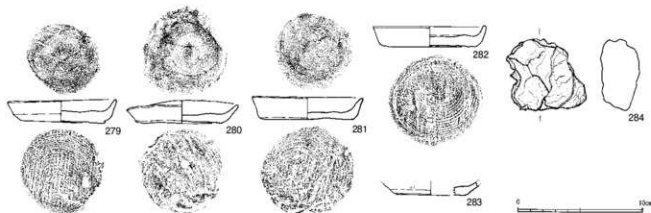
279～282は、土師器の皿である。いずれも精製した胎土で底面は糸切り離しで、底面から短く直線的に立ち上がるものである。279は、胴部が張り稜をもつ。内面にナデ調整による凹みが巡る。280は、糸切り離し痕が

粗く残り、小石の跡と思われる空洞が見られる。全体に歪んでおり、器高が一定でない。281は口縁部がわずかに反り気味で、先端を丸く仕上げている。282は、切り離し痕を丁寧なナデ調整で仕上げ、内面に調整による凹みが段となって巡る。283は土師器の坏であるが、部分的な出土のため、全体形は不明である。

284は、土師器の皿の下、床面近くから出土した粘土塊である。砂や小石などが胎土中に多く含まれ、表面が焼成により赤化している。



第127図 中世の土坑墓8号①



第128図 中世の土坑墓8号②(出土遺物)

第37表 土坑墓内出土遺物観察表1(磁器)

探出番号	図録番号	遺物名	種類	器種	部位	残存率	分類	胎土	釉(色)	露胎	境域	貫入	染色	法量 (cm)			備考	取上番号		
														口径	底径	器高				
115	土坑墓1号	212	青磁	碗	口一底	完形	I-1b	灰白(細粒砂泥)	浅緑	胴部 下位以下	やや良	無	無	16.7	5.0	7.8	同安楽系 外: 襷目文 内: 点描文	1号 2		
		213	青磁	碗	口一底	完形	I-1a	灰白(細粒泥)	浅緑	胴部 下位以下	良	無	有	15.9	4.2	6.7	同安楽系 内: 点描文 見込み砂粒繪貫	1号 1		
		214	青磁	碗	胴部	1/10	-	-	灰白	浅緑	-	良	無	有	-	-	-	襷文	13	
		215	白磁	碗	口一胴	1/6	V	V	浅灰白	透明	-	良	有	有	-	-	-	-	3	
		216	白磁	皿	口一底	完形	VI-1a	VI-1a	灰	緑黄	胴部下位	やや良	有	有	10.4	3.2	2.9	一部輪割痕	1号 6	
		217	白磁	皿	口一底	完形	VI-1a	VI-1a	明灰黄	浅黄	胴部下位	良	無	有	10.1	2.8	2.7	-	1号 7	
		218	白磁	皿	口一底	完形	VI-1a	VI-1a	灰白	緑黄	胴部下位	良	無	弱	9.7	2.8	3.0	口先が 輪割痕	1号 8	
		219	白磁	皿	口一底	完形	VI-1b	VI-1b	浅灰白	浅黄	胴部下位	良	無	弱	10.2	2.8	2.6	口先が	1号 9	
		220	白磁	皿	口一底	完形	Ⅶ-1b	Ⅶ-1b	灰白(黒粒砂泥)	灰白	底面	良	有	有	10.2	3.9	2.6	見込み草花文 輪割痕	1号 5	
		221	青白磁	小壺	蓋	完形	-	-	白	明青灰	裏面	良	無	有	-	-	-	0.8	開出花文	1号 3
		222	青白磁	小壺	口一底	完形	-	-	白	明青灰	外面高台部	良	無	有	4.7	3.9	4.3	輪連弁文	-	
118	土坑墓2号	228	白磁	碗	口一底	1/2	IV-1a	白	浅灰白	胴部下位	良	無	有	-	-	-	玉縁口縁	2号 10		
		229	白磁	碗	口一底	1/2	V-4a	灰白	浅灰白	胴部下位	良	無	有	17.0	6.4	6.1	襷反口縁	2号 9		
119	土坑墓3号	白磁	碗	口一胴	1/3	V-1	白	灰白	残存部 内面全輪軸	良	無	有	16.6	-	-	襷反口縁	3号 11			
122	土坑墓5号	263	青磁	碗	口一底	完形	I-2a	灰黄	浅黄緑	高台内	良	有	有	16.1	6.2	6.6	鹿島系 内: 草花文	5号 2		
		264	青磁	碗	口一底	完形	I-2a	灰白	明緑灰	高台内	良	無	有	16.0	6.2	6.5	鹿島系 内: 草花文	5号 1		
124	土坑墓7号	白磁	碗	口一底	完形	Ⅶ-3	灰黄	浅緑白	高台内	良	有	有	16.8	6.8	5.9	襷反口縁 蛇の目輪割	土坑 墓7 748-17			

第38表 土坑墓内出土遺物観察表2(石器)

探出番号	図録番号	遺物名	部	種	石	材	残存率	最大長 (cm)	最大幅 (cm)	最大厚 (cm)	重量 (g)	備考	取上番号
116	土坑墓1号	229	鍋	滑石	完形	完形	(口径) 17.4	12.6	7.9	1628.5	磨付き スス付着	-	1号-10
		230	鍋	滑石	完形	完形	(口径) 8.1	7.2	4.4	290.0	磨付き 黒澤有り	-	1号-11
		231	磨石	安山岩	完形	完形	4.0	3.7	2.5	57.4	-	-	3
118	土坑墓2号	242	台石	凝灰岩	小破片	破片	6.6	5.5	4.2	150.0	赤化有り	-	2号-5
		243	台石	軽石	破片	破片	4.6	2.9	1.9	6.0	赤化有り	-	2号-6
		244	台石	軽石	破片	破片	10.1	10.9	6.2	181.0	赤化有り、スス付着	-	2号-8
119	248	土坑墓3号	砥石	粘板岩	一部欠損	欠損	10.4	4.2	0.9	31.9	穿孔有り	-	-

第39表 土坑墓内出土遺物観察表3 (土器)

探検 番号	発掘 番号	遺構名	種類	器種	部位	残存率	口径 (cm)	底径 (cm)	器高 (cm)	調 整		備 考	取上番号	
										外面	内面			
115	223	土坑墓1号	土師器	坏	口~底	1/8	156	11.8	2.8	工具ナデ	工具ナデ		1号-18	
	224		土師器	坏	口~胴	1/4	160	-	-	工具ナデ	ナデ		1号-13	
	225		土師器	坏	底部	1/3	-	9.8	-	ナデ	ナデ	底面へう切り		1号-20
	226		土師器	皿	口~胴	1/3	8.8	7.9	1.5	ナデ	ナデ	底面へう切り		1号-22
	227		土師器	皿	口~胴	1/3	7.4	5.8	1.0	摩耗	ナデ	底面へう切り		1号-1
	228		土師器	罎	口~胴	1/3	32.4	-	14.5	ハケ目後ナデ	ハケ目後ナデ	指頭圧痕	注-1 2 21-4	2号-1, 4
118	240	土坑墓2号	土師器	皿	口~底	1/3	100	7.8	1.9	ナデ	ナデ	底面へう切り	2号-1, 4	
	241		須恵器	鉢	口縁部	1/8	-	-	-	工具ナデ	工具ナデ	葉掻き	2号埋土一括	
119	246	土坑墓3号	土師器	小皿	口~底	1/3	8.0	6.0	1.5	工具ナデ	工具ナデ→ナデ	底面糸切り	3号-13	
	247		土師器	小皿	胴~底	1/4	-	8.2	-	ナデ	ナデ	底面糸切り	3号-12	
122	265	土坑墓5号	土師器	皿	胴部	1/8	-	-	-	ナデ	ナデ		5号埋土一括	
124	267	土坑墓7号	土師器	皿	口~底	ほぼ完形	8.9	6.7	1.1	ナデ	ナデ	底面へう切り	土坑748-14	
	268		土師器	皿	口~底	ほぼ完形	8.6	7.1	1.3	ナデ	ナデ	底面へう切り	土坑748-16	
	269		土師器	皿	口~底	ほぼ完形	9.3	7.0	1.5	ナデ	ナデ	底面へう切り	土坑748-15	
	270		土師器	坏	口縁部	1/8	-	-	-	摩耗	ナデ		土坑748-6	
	271		土師器	坏	口~胴	1/6	-	-	-	工具ナデ	工具ナデ		土坑748-3	
	272		土師器	坏	口~胴	1/6	-	-	-	工具ナデ	工具ナデ		土坑748-2	
	273		土師器	坏	胴~底	1/4	-	10.8	-	ナデ	ナデ	回転へう切り	土坑748-4	
	274		土師器	坏	胴~底	1/3	-	5.0	-	工具ナデ	ナデ	回転へう切り	土坑748-1	
	275		土師器	甕	胴部	1/6	-	-	-	工具ナデ ナデ	ハケ目 ナデ	指頭圧痕	土坑748-17	
128	279	土坑墓8号	土師器	皿	口~底	ほぼ完形	8.8	6.7	2.0	ナデ	ナデ	底面糸切り	7号-11	
	280		土師器	皿	口~底	完形	8.8	6.8	1.9	ナデ	ナデ	底面糸切り	7号-12	
	281		土師器	皿	口~底	完形	9.0	7.4	1.6	ナデ	ナデ	底面糸切り	7号-13	
	282		土師器	皿	口~底	完形	8.8	7.2	1.8	ナデ	ナデ	底面糸切り	7号-14	
	283		土師器	坏	底部	1/8	-	6.0	0.8	ナデ	ナデ		7号埋土一括	
	284		粘土塊	コマドリ	-	-	-	5.7	6.2	3.1	-	-	形状あり、硬物圧痕	7号-15

第40表 土坑墓内出土遺物観察表4 (金属器)

探検 番号	発掘 番号	遺構名	器種	部位	全長 (cm)	刃部長 (cm)	茎長 (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重量 (g)	備考	取上番号		
116	232	土坑墓1号	和 鉄	完形	14.8	6.6	(持ち手) 8.2	(刃部) 1.0 (持ち手) 0.3	(刃部) 0.2 (持ち手) 0.3	23.8		1号-13		
	233		和 鉄	持手面曲部	3.0	-	-	0.3	0.6	3.3		刃部欠損	1号-20-2	
	234		紡錘車	ほぼ完形	18.5	-	-	(総幅) 4.7	(結葉) 0.7 (結葉) 0.6	31.1		結葉下部欠損	1号-14	
	235		毛織き	片方のみ	6.6	-	-	-	0.5	0.3	3.7		先端有り	1号埋土中
	236		古 鉄	完形	(直径) 2.5	-	-	-	-	-	2.0		開元通貨 織羅類付着	1号-4
117	237		鏡	完形	10.8	(総直径) 0.3	(総直径) 0.4	(総高) 0.8	0.2	99.0		松喰銅鏡 木質付着		
120	249	土坑墓3号	鉄 鍔	ほぼ完形	20.6	10.4	10.2	2.8	0.5	54.6		主頭鏝 木質付着	3号-23	
	250		鉄 鍔	ほぼ完形	17.4	9.5	7.9	3.3	0.6	36.2		主頭鏝	3号-26	
	251		鉄 鍔	ほぼ完形	19.9	-	-	5.6	0.4	48.5		釵又鏝	3号-25	
	252		鉄 鍔	矢柄	8.6	-	-	0.6	0.5	7.1			3号-36-1	
	253		鉄 鍔	矢柄	4.3	-	-	0.5	0.4	3.3			3号-36-3	
	254		鉄 鍔	矢柄	12.9	-	-	0.7	0.3	9.5			木質付着	3号-34
	255		刀子								22.3		木質付着	3号-32, 35
	256		和 鉄	刃部 持手一部		7.1	(持ち手) 6.3	(刃部) 1.1 (持ち手) 0.2	(刃部) 0.2 (持ち手) 0.4		10.9			3号-31
	257		和 鉄	持手面曲部	3.0	-	-	0.3	0.5	4.9			刃部欠損	3号-36
	258		磨 刀	一部欠損									木質付着	注-2 注-3 注-5
259	鉄製品	部分	8.2	-	-	0.8	0.6	10.3			棒状鉄製品の一部	3号-36-2		
260	鉄製品	部分	4.5	-	-	0.9	0.3	4.8			棒状鉄製品の一部	3号-43-ア		
261	鉄製品	部分	1.4	-	-	1.7	1.1	5.6			鉄塊	3号-43-イ		
121	262	土坑墓4号	鉄 滓	完形	-	-	-	-	-	-		小礫砂多く含む	4号-1	
124	276	土坑墓7号	和 鉄	ほぼ完形	13.8	6.0	(持ち手) 7.8	(刃部) 0.9 (持ち手) 0.3	(刃部) 0.2 (持ち手) 0.5	22.5		一部欠損 織羅類付着	-	
	277		古 鉄	完形	2.4	-	-	-	-	3.5		政和通貨	木質付着	-
126	278		鏡	完形	10.6	(総直径) 0.4	(総直径) 0.4	(総高) 0.3	0.1	87.0		湖州鏡 織伏織羅類付着 和紙付着	-	

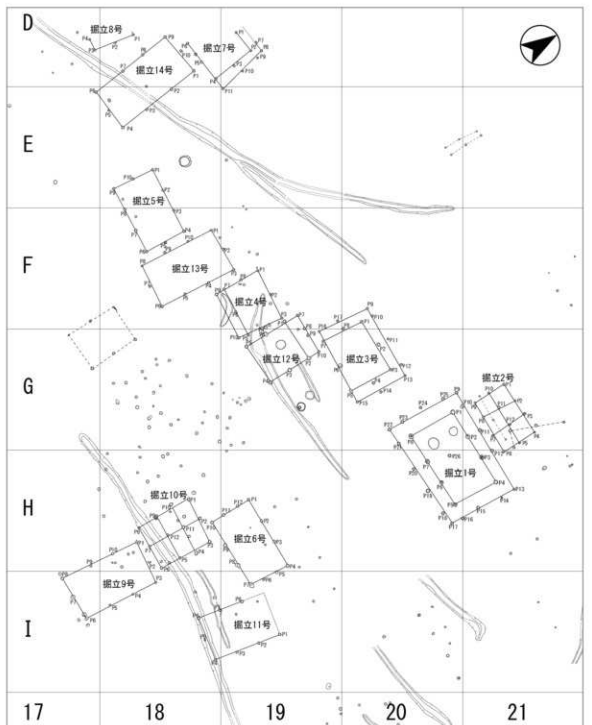
(2) 掘立柱建物跡

中世の掘立柱建物跡は49棟検出された。この49棟を主軸方位や建物跡のまわりなどからA～Eの5郡に分けた。また、どの郡にも属さない掘立柱建物群を「その他」として報告する

柱穴の埋土は、すべて黒色土系の土が堆積していた。

A群

D～I-17～21区で検出され、長軸が東西あるいは南北に沿う建物跡群である。さらに、長軸が東西に沿う建物跡群（A-1群）と南北に沿う建物跡群（A-2群）に分けた。柱穴の埋土状況等から時期差はほとんどない



第129図 中世の掘立柱建物跡配置図1 (A群)

と考える。

A-1群 (1~8号)

掘立柱建物跡1号 (第130図)

G・H-20・21区で検出された桁行3間、梁行2間の四面庇建物跡である。母屋の梁行2間の間の柱穴は検出されていない。検出面はⅣa層である。平面の規模は母屋が678cm×397cmで、庇を含めると931cm×631cmである。柱穴の深さは10～68cmである。

掘立柱建物跡2号 (第131図)

G・H-21区で検出された桁行3間、梁行2間の総柱の掘立柱建物跡である。1号掘立柱建物跡に付属する厨や倉庫などの役割が想定される。検出面はⅣa層である。平面の規模は471cm×300cmで、柱穴の深さは5～23cmである。

掘立柱建物跡3号 (第132図)

F・G-19・20区で検出された桁行2間、梁行2間の三面庇建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は母屋が470cm×372cmで、庇を含めると660cm×451cmである。柱穴の深さは7～39cmである。

掘立柱建物跡4号 (第133図)

F・G-18・19区で検出された桁行2間、梁行2間の母屋に庇が1面付く掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は母屋が440cm×318cmで、庇を含めると440cm×317cmである。柱穴の深さは10～58cmである。

掘立柱建物跡5号 (第133図)

E・F-18区で検出された桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は588cm×359cmで、柱穴の深さは18～58cmである。

掘立柱建物跡6号 (第134図)

H・I-18・19区で検出された桁行3間、梁行3間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は639cm×358cmで、柱穴の深さは7～52cmである。

掘立柱建物跡7号 (第134図)

D・E-18・19区で検出された桁行2間、梁行2間の母屋の2面に庇がつく掘立柱建物跡である。調査区境に位置しており、本来の間数や庇の数は多い可能性が考えられる。検出面はⅣa層である。平面の規模は母屋が374cm×370cmで、庇を含めると476cm×449cmである。柱穴の深さは10～46cmである。

掘立柱建物跡8号 (第135図)

D-17・18区で検出された。桁行は2間あり、梁間の間隔が狭いことから庇部分と考えられる。調査区境に位置しており、本来は調査区外に延びている部分の間数は多い可能性がある。検出面はⅣa層である。平面の規模は340cm×98cmで、柱穴の深さは11～20cmである。

A-2群 (9~14号)

掘立柱建物跡9号 (第135図)

H・I-17・18区で検出された桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は680cm×370cmで、柱穴の深さは7～93cmである。

掘立柱建物跡10号 (第136図)

H-18区で検出された桁行3間、梁行2間の総柱の掘立柱建物跡である。ただし、桁行よりも梁行の方が柱穴間距離が長く、2棟の掘立柱建物跡が重なっている可能性も考えられる。検出面はⅣa層である。平面の規模は390cm×473cmで、柱穴の深さは9～41cmである。

掘立柱建物跡11号 (第136図)

I-18・19区で検出された桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は574cm×372cmで、柱穴の深さは11～47cmである。

掘立柱建物跡12号 (第137図)

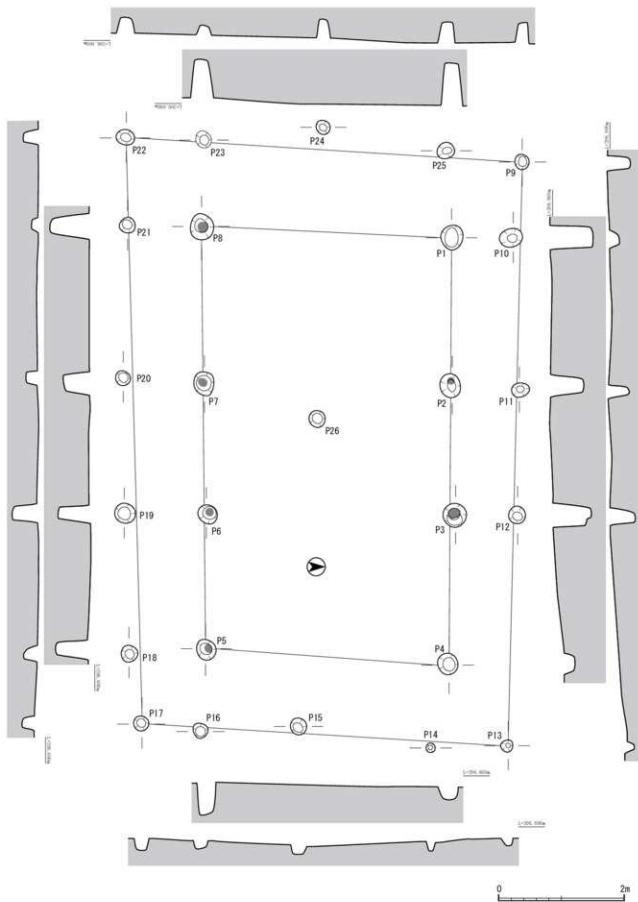
F・G-19区で検出された桁行2間、梁行1間の母屋の一面に庇が付く掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は母屋が378cm×367cmで、庇を含めると494cm×367cmである。柱穴の深さは8～42cmである。

掘立柱建物跡13号 (第137図)

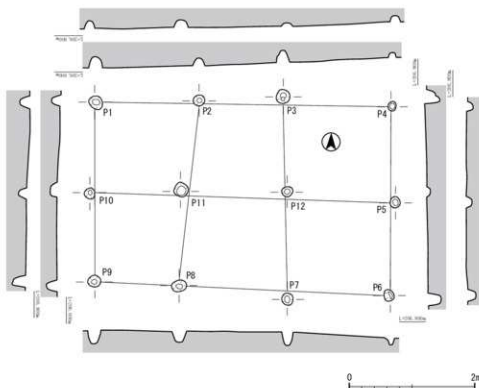
F-18・19区で検出された桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は667cm×376cmで、柱穴の深さは21～43cmである。

掘立柱建物跡14号 (第138図)

D・E-17・18区で検出された桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡である。検出面はⅣa層である。平面の規模は748cm×368cmで、柱穴の深さは9～48cmである。



第130図 中世の掘立柱建物跡1号



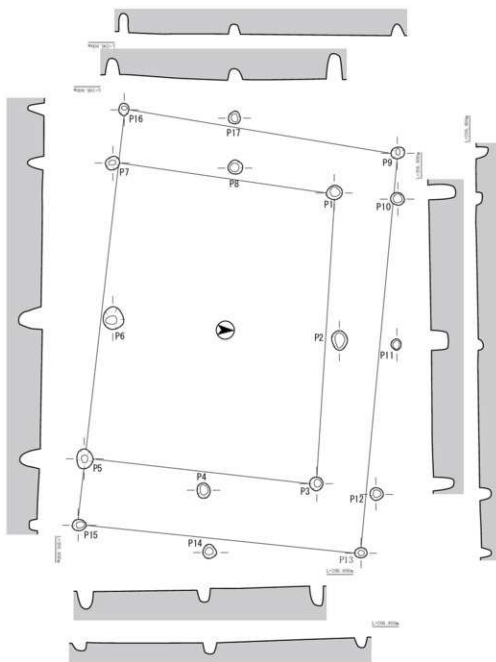
第131図 中世の掘立柱建物跡2号

第41表 掘立柱建物跡1号計測表

番号	柱式 (cm)			方向	柱次間距離	S88° W	
	長径	短径	高さ				
P1	40	35	68	縦行 (cm)	P1 - P4	678	
P2	38	34	54		P1 - P2	238	
P3	40	37	60		P2 - P3	305	
P4	37	31	19		P3 - P4	237	
P5	33	31	51		P8 - P5	673	
P6	32	29	50		P8 - P7	251	
P7	39	30	42		P7 - P6	207	
P8	40	40	63		P6 - P5	215	
P9	27	23	37		P9 - P13	927	
P10	37	30	17		P9 - P10	122	
P11	28	22	34		P10 - P11	243	
P12	28	26	43		P11 - P12	198	
P13	21	18	13		P12 - P13	366	
P14	15	15	15		P22 - P17	931	
P15	27	27	15		P22 - P21	139	
P16	26	24	13		P21 - P20	243	
P17	24	24	20	P20 - P19	216		
P18	29	25	22	P19 - P18	234		
P19	34	32	40	P18 - P17	112		
P20	25	22	17	縦行 (cm)	P1 - P8	397	
P21	24	24	10		P4 - P5	385	
P22	28	25	24		P9 - P22	631	
P23	26	26	14		P9 - P25	124	
P24	25	22	29		P25 - P24	199	
P25	30	27	38		P24 - P23	190	
P26	27	26	21		P23 - P22	123	
						P13 - P17	584
						P13 - P14	121
						P14 - P15	213
					P15 - P16	156	
					P16 - P17	97	

第42表 掘立柱建物跡2号計測表

番号	柱式 (cm)			方向	柱次間距離	S89° W	
	長径	短径	高さ				
P1	40	35	68	縦行 (cm)	P1 - P4	471	
P2	38	34	54		P1 - P2	163	
P3	40	37	60		P2 - P3	135	
P4	37	31	19		P3 - P4	174	
P5	33	31	51		P10 - P5	488	
P6	32	29	50		P10 - P11	146	
P7	39	30	42		P11 - P12	170	
P8	40	40	63		P12 - P5	174	
P9	27	23	37		P9 - P6	469	
P10	37	30	17		P9 - P8	135	
P11	28	22	34		P8 - P7	174	
P12	28	26	43		P7 - P6	161	
					縦行 (cm)	P1 - P9	283
						P1 - P10	144
						P10 - P9	139
						P2 - P8	296
				P2 - P11		145	
				P11 - P8		152	
				P3 - P7		322	
				P3 - P12		152	
					P12 - P7	171	
					P4 - P6	300	
					P4 - P5	152	
					P5 - P6	148	

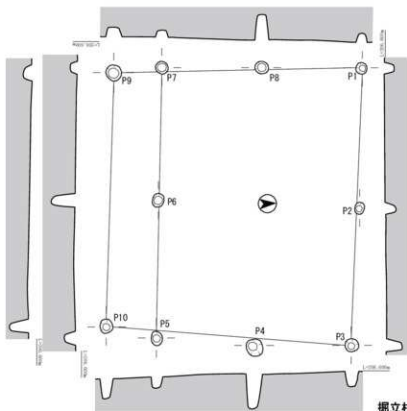


第43表 据立柱建物跡3号計測表

柱穴 (cm)			主 軸		NSC W		
番号	長径	短径	柱穴間距離	方向			
P1	26	24	39	P1 ~ P2	234	P1 ~ P7	306
P2	31	25	28	P1 ~ P2	234	P1 ~ P8	163
P3	23	21	31	P2 ~ P3	230	P8 ~ P7	196
P4	25	21	19	P7 ~ P5	470	P3 ~ P5	372
P5	31	26	29	P7 ~ P6	245	P3 ~ P4	181
P6	36	32	33	P6 ~ P5	227	P4 ~ P5	196
P7	24	21	25	P16 ~ P15	660	P9 ~ P16	442
P8	24	23	15	P16 ~ P7	86	P9 ~ P17	306
P9	22	19	18	P5 ~ P15	105	P17 ~ P16	127
P10	22	21	10	P9 ~ P13	635	P13 ~ P15	461
P11	18	18	7	P9 ~ P10	73	P13 ~ P14	241
P12	22	20	16	P10 ~ P11	231	P14 ~ P15	212
P13	20	16	16	P11 ~ P12	238		
P14	23	23	15	P12 ~ P13	97		
P15	23	18	13				
P16	20	16	27				
P17	20	19	15				

0 2m

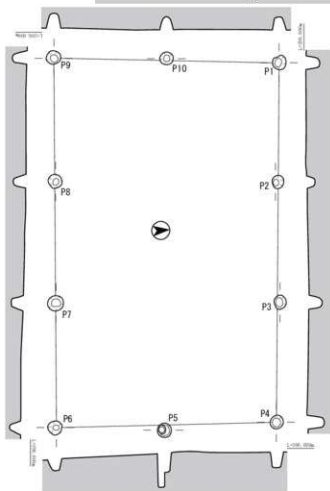
第132図 中世の据立柱建物跡3号



据立柱建物跡4号

第44表 据立柱建物跡4号計測表

柱穴 (cm)				主軸	S85° W
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離
P1	19	18	16	初行 (cm)	P1 - P2 440
P2	19	15	18		P1 - P2 222
P3	22	20	26		P2 - P3 217
P4	30	26	26		P7 - P5 430
P5	27	19	15		P7 - P6 211
P6	21	21	28		P6 - P5 219
P7	20	19	10		P9 - P10 404
P8	22	21	29		P1 - P7 317
P9	23	30	31		P1 - P8 159
P10	25	25	14		P8 - P7 158
				梁行 (cm)	P1 - P9 392
					P9 - P5 311
					P2 - P4 155
					P4 - P5 152
					P3 - P10 391
				P7 - P9 80	
				P5 - P10 81	



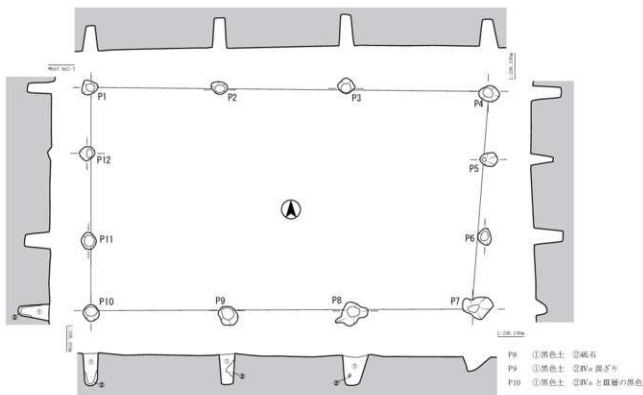
据立柱建物跡5号

第45表 据立柱建物跡5号計測表

柱穴 (cm)				主軸	S86° W
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離
P1	23	22	21	初行 (cm)	P1 - P4 571
P2	21	19	19		P1 - P2 190
P3	23	20	23		P2 - P3 190
P4	23	21	27		P3 - P4 191
P5	23	23	26		P9 - P6 588
P6	23	22	19		P9 - P8 194
P7	25	25	18		P8 - P7 194
P8	23	23	21		P7 - P6 198
P9	24	21	23		P1 - P9 309
P10	21	20	25		P1 - P10 180
				梁行 (cm)	P10 - P9 179
					P4 - P6 353
					P4 - P5 179
				P5 - P6 174	

第133図 中世の据立柱建物跡4・5号

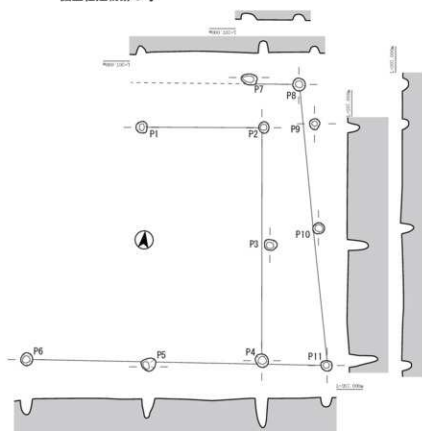




掘立柱建物跡 6号

第46表 掘立柱建物跡6号計測表

番号	長径 (cm)	短径 (cm)	高さ (cm)	方向	柱穴間距離 (cm)
P1	27	23	41	折行	P1 - P4 639
P2	27	19	49		P1 - P2 209
P3	27	25	47		P2 - P3 302
P4	34	26	47		P3 - P4 228
P5	28	22	37		P10 - P7 619
P6	26	20	47		P10 - P9 220
P7	48	36	22		P9 - P8 199
P8	52	34	47		P8 - P7 300
P9	34	28	49		P1 - P10 358
P10	27	26	32		P1 - P12 104
P11	27	24	39		P12 - P11 140
P12	24	22	7		P11 - P10 114
梁行 (cm)					P4 - P7 338
					P4 - P5 105
					P5 - P6 122
					P6 - P7 111



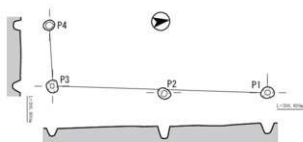
掘立柱建物跡 7号

第47表 掘立柱建物跡7号計測表

番号	長径 (cm)	短径 (cm)	高さ (cm)	方向	柱穴間距離 (cm)
P1	26	19	15	折行	P1 - P2 183
P2	19	18	20		P6 - P4 374
P3	20	18	34		P6 - P5 194
P4	24	20	46		P5 - P4 181
P5	22	20	30		P6 - P11 476
P6	10	10	25		P4 - P11 101
P7	25	17	11		P7 - P8 79
P8	30	20	10		P2 - P4 370
P9	17	16	10		P2 - P3 176
P10	19	17	22		P3 - P4 184
P11	20	17	15		P8 - P11 419
梁行 (cm)					P8 - P9 66
					P9 - P10 165
					P10 - P11 219

第134図 中世の掘立柱建物跡6・7号

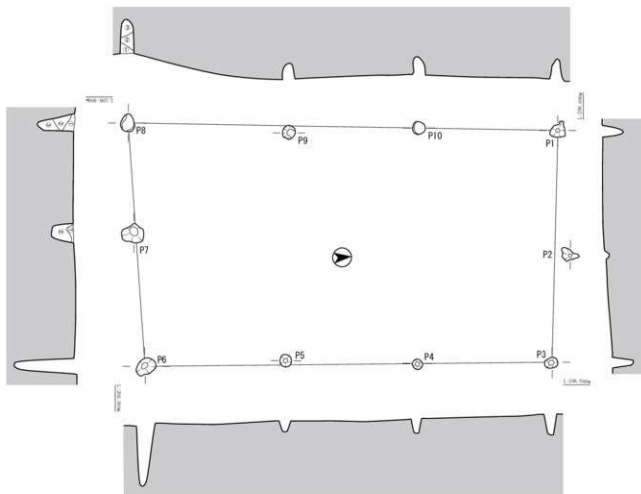




第48表 掘立柱建物跡8号計測表

番号	柱穴 (cm)			方向	手軸	ND° W
	長径	短径	深さ			
P1	21	18	16	南行	P1 ~ P3	340
P2	21	18	20			163
P3	22	20	12	南行	P2 ~ P4	177
P4	19	17	11			98

掘立柱建物跡8号



第49表 掘立柱建物跡9号計測表

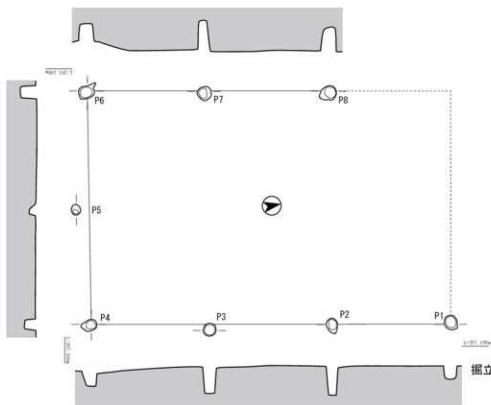
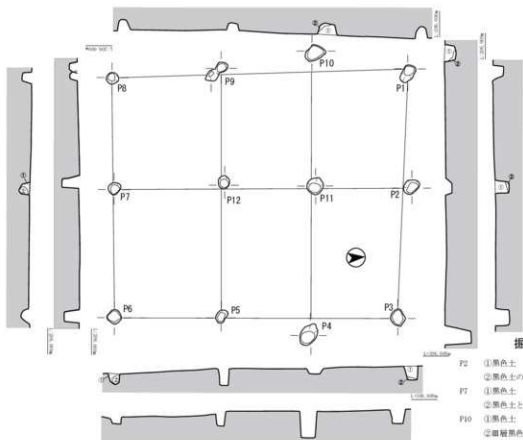
番号	柱穴 (cm)			方向	手軸	ND° E
	長径	短径	深さ			
P1	27	23	34	南行	P1 ~ P8	680
P2	26	19	7			230
P3	20	17	30	南行	P10 ~ P9	307
P4	16	16	22			256
P5	20	18	16	南行	P9 ~ P8	630
P6	28	30	93			212
P7	35	29	35	南行	P4 ~ P5	309
P8	27	20	39			228
P9	22	20	24	南行	P1 ~ P3	370
P10	30	19	30			195
				南行	P2 ~ P3	175
						369
						176
						192

掘立柱建物跡9号

P7 ①黒色土 ②暗茶褐色土
 P8 ①褐色 ②うすい褐色
 ③褐色

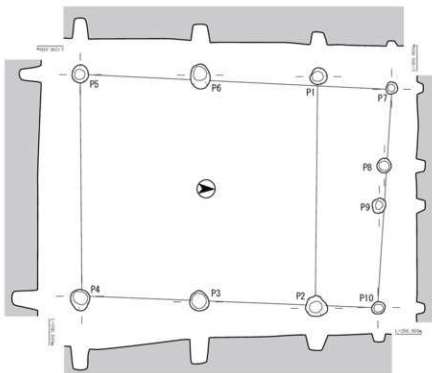


第135図 中世の掘立柱建物跡8・9号

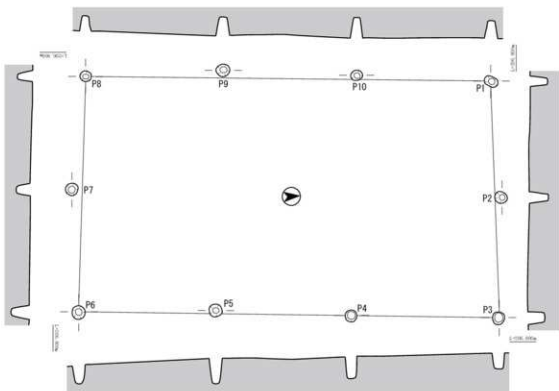


第136図 中世の据立柱建物跡10・11号





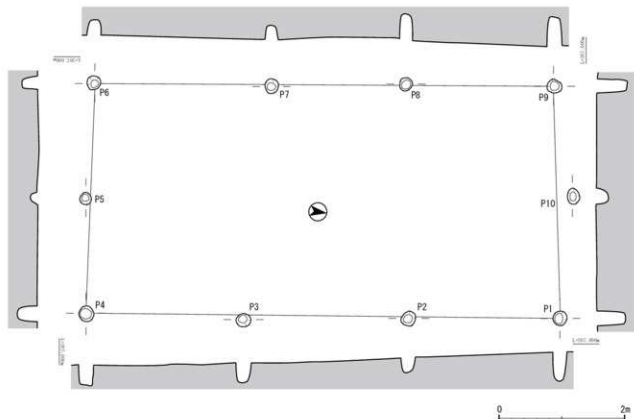
据立柱建物跡12号



据立柱建物跡13号



第137図 中世の据立柱建物跡12・13号



第138図 中世の掘立柱建物跡14号

第50表 掘立柱建物跡10号計測表

柱穴 (cm)		半軸		N' E	
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離
P1	31	21	18	桁行 (cm)	P1 ~ P8 473
P2	28	20	22		P1 ~ P10 153
P3	27	23	22		P9 ~ P9 169
P4	30	24	41		P9 ~ P8 159
P5	23	15	23		P2 ~ P7 478
P6	24	23	14		P2 ~ P11 155
P7	20	18	16		P11 ~ P12 148
P8	21	18	16		P12 ~ P7 175
P9	44	17	12		P9 ~ P6 454
P10	33	26	19		P9 ~ P4 146
P12	21	20	25	梁行 (cm)	P4 ~ P5 142
P11	29	25	9		P5 ~ P6 172
					P1 ~ P3 390
					P1 ~ P2 181
					P2 ~ P3 210
					P10 ~ P4 452
					P10 ~ P11 214
					P11 ~ P4 238
					P9 ~ P5 387
					P9 ~ P12 173
				P12 ~ P5 214	
				P8 ~ P6 381	
				P8 ~ P7 176	
				P7 ~ P6 205	

第51表 掘立柱建物跡11号計測表

柱穴 (cm)		半軸		N' E	
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離
P1	25	21	30	桁行 (cm)	P1 ~ P4 574
P2	26	17	45		P1 ~ P2 188
P3	21	20	42		P2 ~ P3 195
P4	25	18	24		P3 ~ P4 190
P5	17	15	11		P8 ~ P6 380
P6	35	21	26		P8 ~ P7 197
P7	23	22	47		P7 ~ P6 184
P8	29	23	36		P6 ~ P4 372
					P6 ~ P5 189
					P5 ~ P4 185

第53表 掘立柱建物跡13号計測表

柱穴 (cm)		半軸		N' E	
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離
P1	23	15	27	桁行 (cm)	P1 ~ P8 646
P2	20	19	33		P1 ~ P10 214
P3	22	20	26		P10 ~ P9 213
P4	20	18	35		P9 ~ P8 219
P5	21	20	43		P3 ~ P6 667
P6	22	21	30		P3 ~ P4 233
P7	20	20	21		P4 ~ P5 216
P8	18	18	24		P5 ~ P6 218
P9	21	21	30		P1 ~ P3 376
P10	18	17	33		P1 ~ P2 184
				梁行 (cm)	P2 ~ P3 192
					P8 ~ P6 375
					P8 ~ P7 182
					P7 ~ P6 195

第52表 掘立柱建物跡12号計測表

柱穴 (cm)		半軸		N' W	
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離
P1	28	27	19	桁行 (cm)	P1 ~ P5 378
P2	30	33	24		P1 ~ P6 188
P3	33	31	42		P6 ~ P5 190
P4	35	31	27		P7 ~ P5 494
P5	29	27	34		P7 ~ P1 118
P6	40	31	28		P2 ~ P4 374
P7	30	19	8		P2 ~ P3 186
P8	24	23	15		P3 ~ P4 188
P9	24	22	13		P10 ~ P4 473
P10	22	20	13		P10 ~ P2 99
				梁行 (cm)	P1 ~ P2 367
					P5 ~ P4 358
					P7 ~ P10 330
					P7 ~ P8 135
					P8 ~ P9 62
					P9 ~ P10 162

第54表 掘立柱建物跡14号計測表

柱穴 (cm)		半軸		N' W	
番号	長径	短径	深さ	方向	柱穴間距離
P1	24	23	46	桁行 (cm)	P1 ~ P4 731
P2	24	22	24		P1 ~ P2 240
P3	24	22	33		P2 ~ P3 262
P4	24	23	31		P3 ~ P4 250
P5	20	19	9		P9 ~ P6 732
P6	24	22	25		P9 ~ P8 236
P7	24	22	22		P8 ~ P7 213
P8	23	20	43		P7 ~ P6 283
P9	25	22	48		P1 ~ P9 368
P10	26	20	22		P1 ~ P10 195
				梁行 (cm)	P10 ~ P9 177
					P4 ~ P6 366
					P4 ~ P5 183
					P5 ~ P6 184

B群 (15～23号)

M・N-13～18区で検出された9棟の掘立柱建物跡群をB群とした。M・N-14区では土坑墓7号が検出されている。

掘立柱建物跡15号 (第140図)

M-13区で検出された桁行2間、梁行2間の総柱の掘立柱建物跡である。検出面はIVa層である。平面の規模は375cm×366cmで、柱穴の深さは10～31cmである。

掘立柱建物跡16号 (第140図)

M-14・15区で検出された桁行2間、梁行2間の掘立柱建物跡である。検出面はIVa層である。平面の規模は388cm×386cm、柱穴の深さは19～46cmである。

掘立柱建物跡17号 (第141図)

M・N-14区で検出された桁行2間、梁行2間の掘立柱建物跡である。検出面はIVa層である。平面の規模は392cm×390cm、柱穴の深さは4～56cmである。

掘立柱建物跡18号 (第141図)

M・N-14区で検出された桁行2間、梁行2間の掘立柱建物跡である。検出面はIVa層である。平面の規模は410cm×353cmで、柱穴の深さは31～74cmである。

掘立柱建物跡19号 (第142図)

M・N-14・15区で検出された桁行2間、梁行2間の総柱の掘立柱建物跡である。検出面はIVa層である。平面の規模は450cm×371cm、柱穴の深さは10～37cmである。

掘立柱建物跡20号 (第142図)

M・N-17・18区で検出された桁行2間、梁行2間の母屋の1面に庇がつく掘立柱建物跡である。一部調査区外に伸びている。検出面はIVa層である。平面の規模は母屋が470cm×368cm、庇を含めると475cm×489cmである。柱穴の深さは4～50cmである。

掘立柱建物跡21号 (第143図)

N-18区で検出された桁行2間、梁行は調査区外へ伸びているため不明な掘立柱建物跡である。検出面はIVa層である。柱穴の深さは19～38cmである。

掘立柱建物跡22号 (第143図)

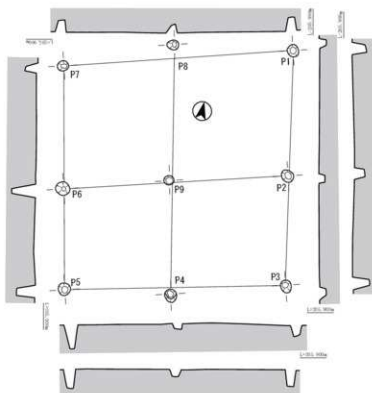
N-16・17区で検出された桁行2間、梁行1間の掘立柱建物跡である。検出面はIVa層である。平面の規模は367cm×175cmで、柱穴の深さは13～37cmである。

掘立柱建物跡23号 (第143図)

N-15区で検出された桁行3間、梁行2間の掘立柱建物跡である。検出面はIVa層である。平面の規模は590cm×200cmで、柱穴の深さは54～64cmである。



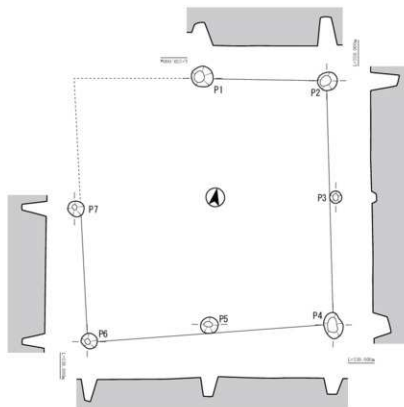
第139図 中世の掘立柱建物跡配置図2 (B群)



掘立柱建物跡15号

第55表 掘立柱建物跡15号計測表

番号	柱穴 (cm)			方向	主軸	N14° W		
	長径	短径	深さ					
P1	30	18	24	桁行 (cm)	P1 ~ P3	375		
P2	30	18	18		P1 ~ P2	300		
P3	30	17	28		P2 ~ P3	175		
P4	21	18	14		P7 ~ P5	352		
P5	30	19	31		P7 ~ P6	194		
P6	22	21	29		P6 ~ P5	157		
P7	19	16	23		P8 ~ P4	395		
P8	18	15	15		P8 ~ P9	214		
P9	17	15	10		P9 ~ P4	182		
梁行 (cm)							P1 ~ P7	366
							P1 ~ P8	190
							P8 ~ P7	178
							P3 ~ P5	350
							P3 ~ P4	181
							P4 ~ P5	168
							P2 ~ P6	335
P2 ~ P9	188							
P9 ~ P6	170							



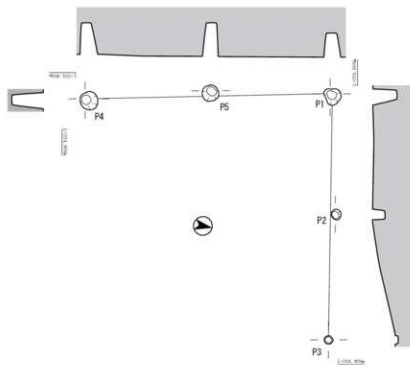
掘立柱建物跡16号

第56表 掘立柱建物跡16号計測表

番号	柱穴 (cm)			方向	主軸	N13° W		
	長径	短径	深さ					
P1	36	34	36	桁行 (cm)	P2 ~ P1	388		
P2	33	28	46		P2 ~ P3	184		
P3	20	19	19		P3 ~ P4	204		
P4	42	30	30		P7 ~ P6	238		
P5	28	36	31		P4 ~ P6	366		
P6	26	24	34		P4 ~ P5	195		
P7	35	24	39		P5 ~ P6	191		
梁行 (cm)							P1 ~ P2	199



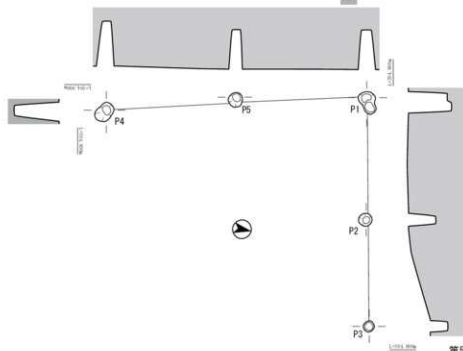
第140図 中世の掘立柱建物跡15・16号



据立柱建物跡17号

第57表 据立柱建物跡17号計測表

番号	柱穴 (cm)			方向	柱穴間距離
	長径	短径	深さ		
P1	28	25	40	南行 (cm)	P1 - P4 302
P2	16	16	20		P1 - P5 196
P3	16	14	4		P5 - P4 196
P4	30	28	50	東行 (cm)	P1 - P3 300
P5	27	25	56		P1 - P2 188
					P2 - P3 200



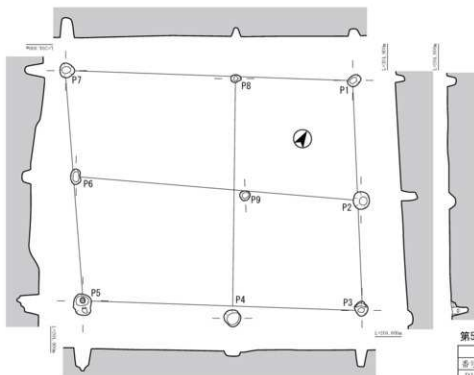
据立柱建物跡18号

第58表 据立柱建物跡18号計測表

番号	柱穴 (cm)			方向	柱穴間距離
	長径	短径	深さ		
P1	28	25	66	南行 (cm)	P1 - P4 410
P2	30	30	46		P1 - P5 218
P3	18	18	31		P5 - P4 303
P4	33	22	74	東行 (cm)	P1 - P3 353
P5	24	22	67		P1 - P2 185
					P2 - P3 168

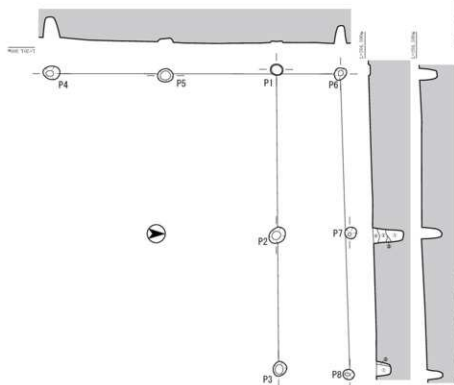


第141図 中世の据立柱建物跡17・18号



据立柱建物跡19号

P3 ①黒色土 ②黒色土



据立柱建物跡20号

P2 ①茶褐色土 ②茶褐色土

③黒色土 ④黒褐色

P3 ①茶褐色土 ②暗褐色土

第59表 据立柱建物跡19号計測表

番号	柱穴 (cm)			方向	柱穴間距離	
	長径	短径	深さ			
P1	21	20	17	桁行 (cm)	P1 - P7	
P2	27	25	25		P1 - P8	
P3	5	22	27		P8 - P7	
P4	27	26	10		P2 - P6	
P5	35	27	37		P2 - P9	
P6	25	15	15		P9 - P6	
P7	25	24	34		P3 - P5	
P8	17	12	15		P3 - P4	
P9	17	16	26		P4 - P5	
梁行 (cm)	P1 - P3					345
	P1 - P2					174
	P2 - P3					171
	P8 - P4					378
	P8 - P9					185
	P9 - P4					194
	P7 - P5					371
	P7 - P6					168
P6 - P5					303	

第60表 据立柱建物跡20号計測表

番号	柱穴 (cm)			方向	柱穴間距離	
	長径	短径	深さ			
P1	30	18	4	桁行 (cm)	P1 - P3	
P2	28	23	50		P1 - P2	
P3	23	30	24		P2 - P3	
P4	36	30	36		P6 - P8	
P5	28	24	5		P6 - P7	
P6	21	19	29		P7 - P8	
P7	30	30	44		P1 - P4	
P8	19	18	24		P1 - P5	
梁行 (cm)	P5 - P4					180
	P6 - P4					489
	P6 - P1					91



第142図 中世の据立柱建物跡19・20号